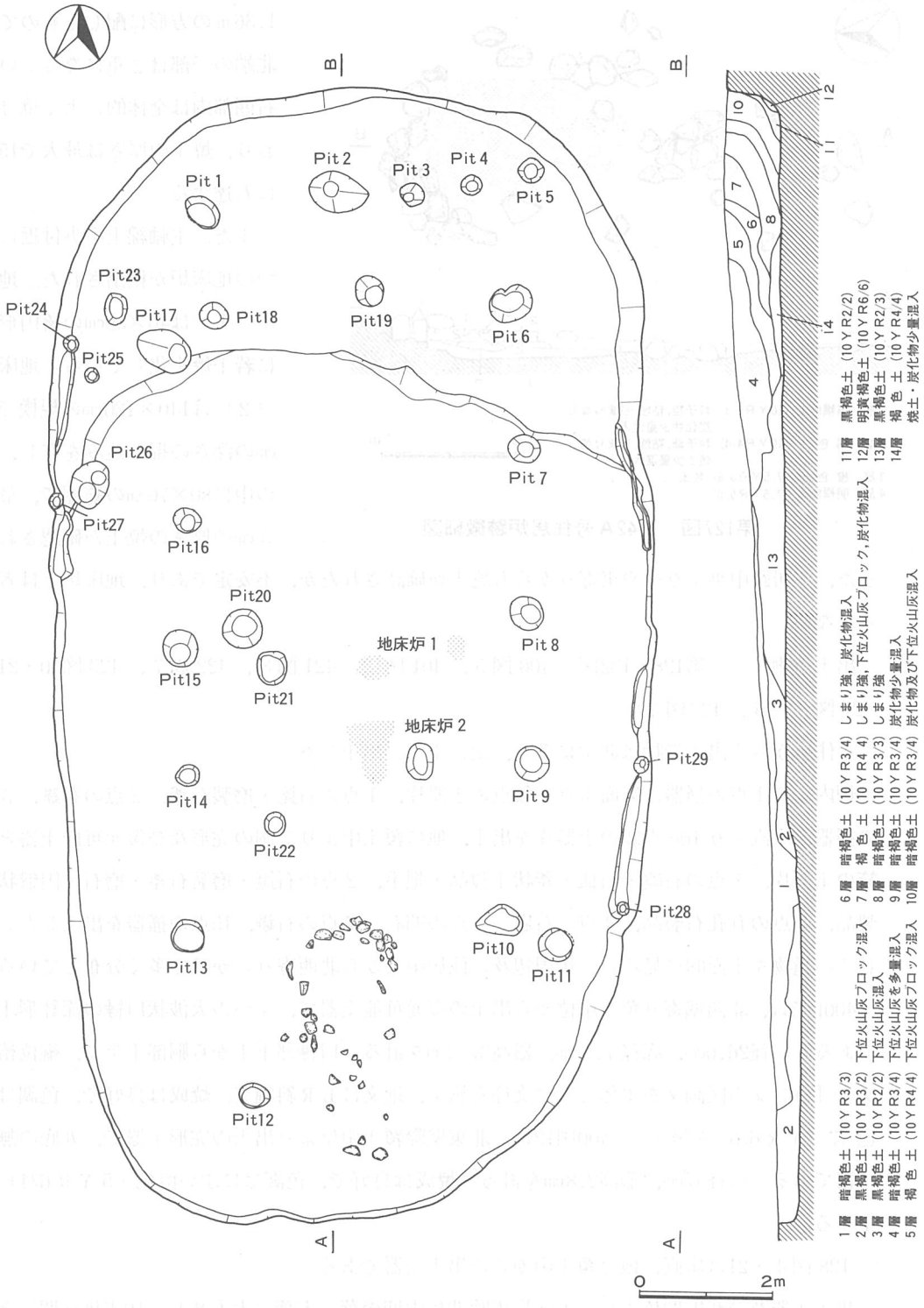
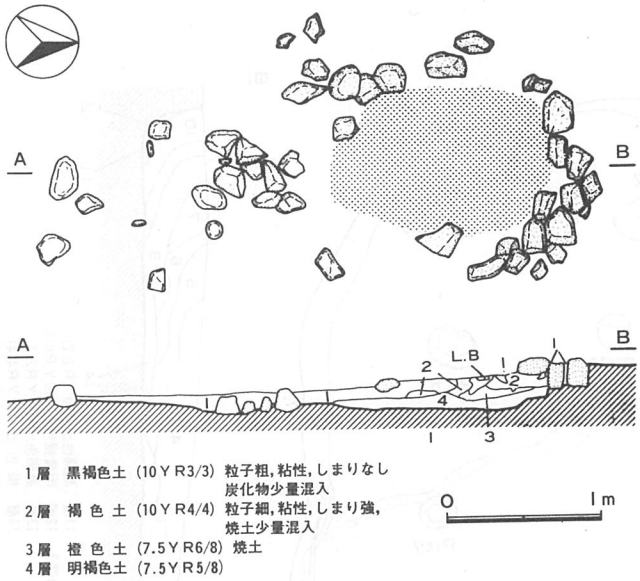


第126図　第42A号竪穴住居跡実測図



第127図　第42A号住居炉跡微細図

1.36mの方形に配したもので，北端の一部は2重になっている。石囲部内は全体的によく焼けており，焼土の厚さは最大で15cmにも達する。

また，主軸線上中央付近に2つの地床炉が検出された。地床炉（1）は40×50cmの楕円形状に若干焼土化している。地床炉（2）は140×120cmの規模で35cmの深さの掘り込みを有し，その中に80×70cmの範囲で，最大5cmの厚さの焼土が確認された。また，住居跡中央よりやや東寄りからも焼土が確認されたが，不安定であり，地床炉とは考えられない。

〈出土遺物〉　（第128～132図，400図5，401図12，421図8，422図7，423図20・21，427図3・6，428図4）

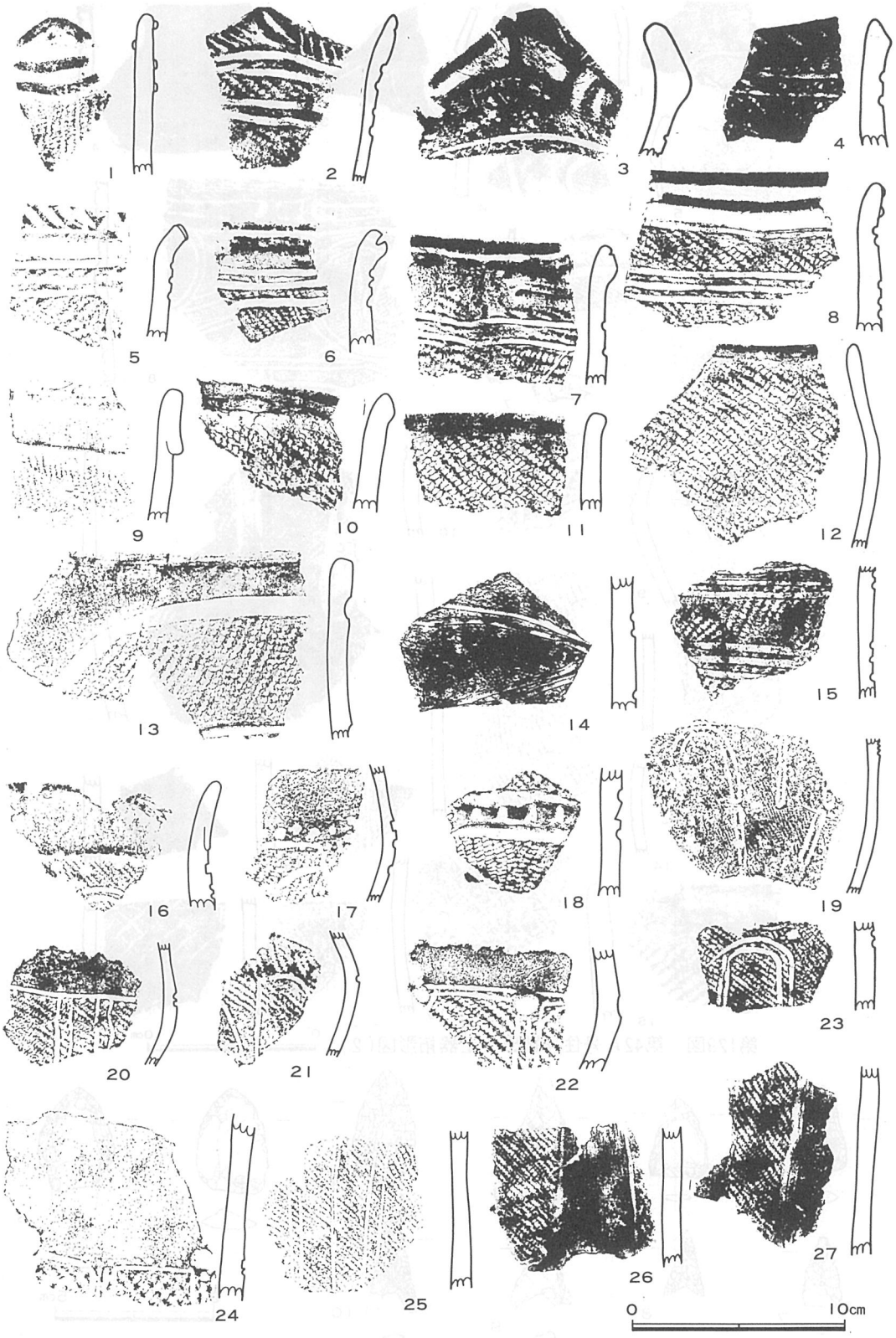
本住居からの出土遺物は非常に多く，次のように出土した。

炉内より1点の掻器，床面より20数点の土器片，1点の石箆・磨製石斧，2点の石鏃，3点の掻器，床直より100点弱の土器片を出土，他に覆土中より7個の完形及び復元可能土器と4箱の土器片，1点の石錘・石皿・斧状土製品・把手，2点の石箆・磨製石斧・磨石・円盤状土製品，3点の有孔石製品，4点の石匙，5点の凹石，7点の石鏃，15点の掻器を出土した。これらの遺物を平面的に見ると，炉周辺及び住居中央から北西寄りにかけて多く分布している。

400図5は，北西壁寄り覆土中位から出土の復元可能土器で，4つの大波状口縁の深鉢形土器である。口径26.0cm，底径7.5cm，器高37.5cmを計る。口縁部下半から胴部下半に，縦位楕円文＋「∩」文の区画文を主体として文様を施文，地文はLR斜縄文，焼成は良好で，色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。400図12は，北東壁際覆土中位より出土の完形土器で，丸底の無文土器である。口径6cm，器高2.8cmを計る。焼成は良好で，色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。

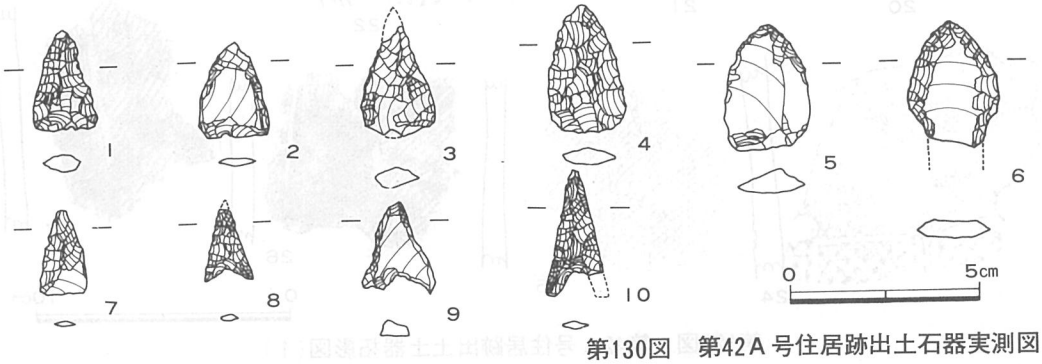
128図4・21は床直，他は覆土中からの出土土器である。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉～末葉（大木8b～10式併行期）と考えられる。

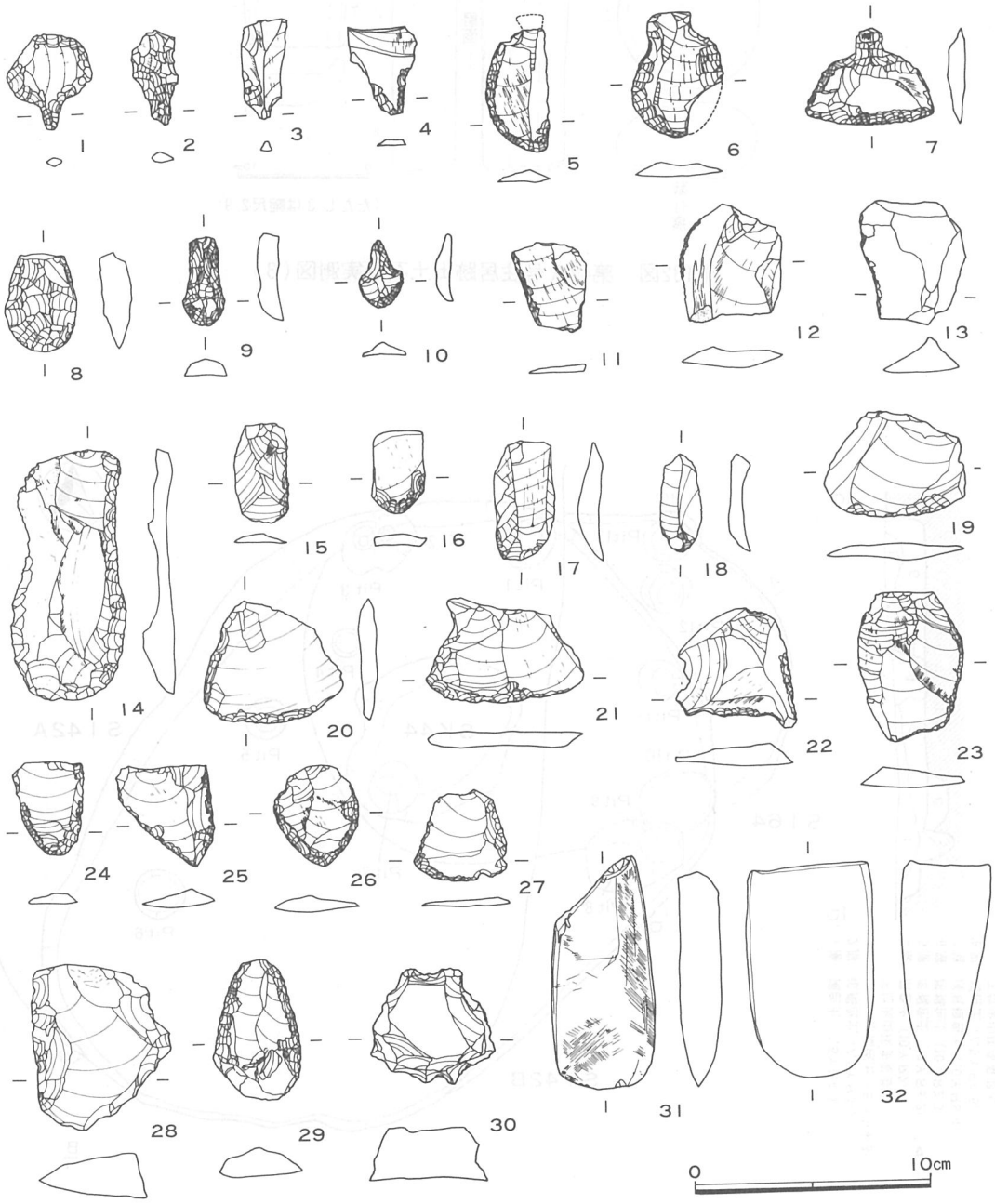


第128図　第42A号住居跡出土土器拓影図(1)

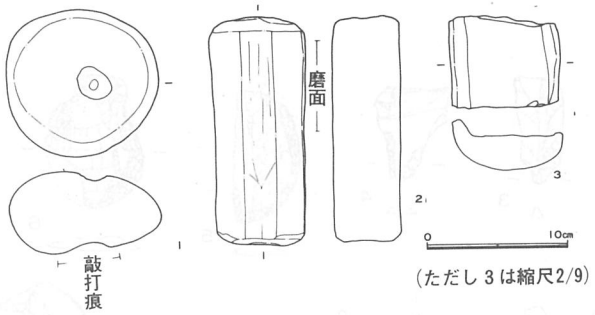
第129図　第42A号住居跡出土土器拓影図(2)



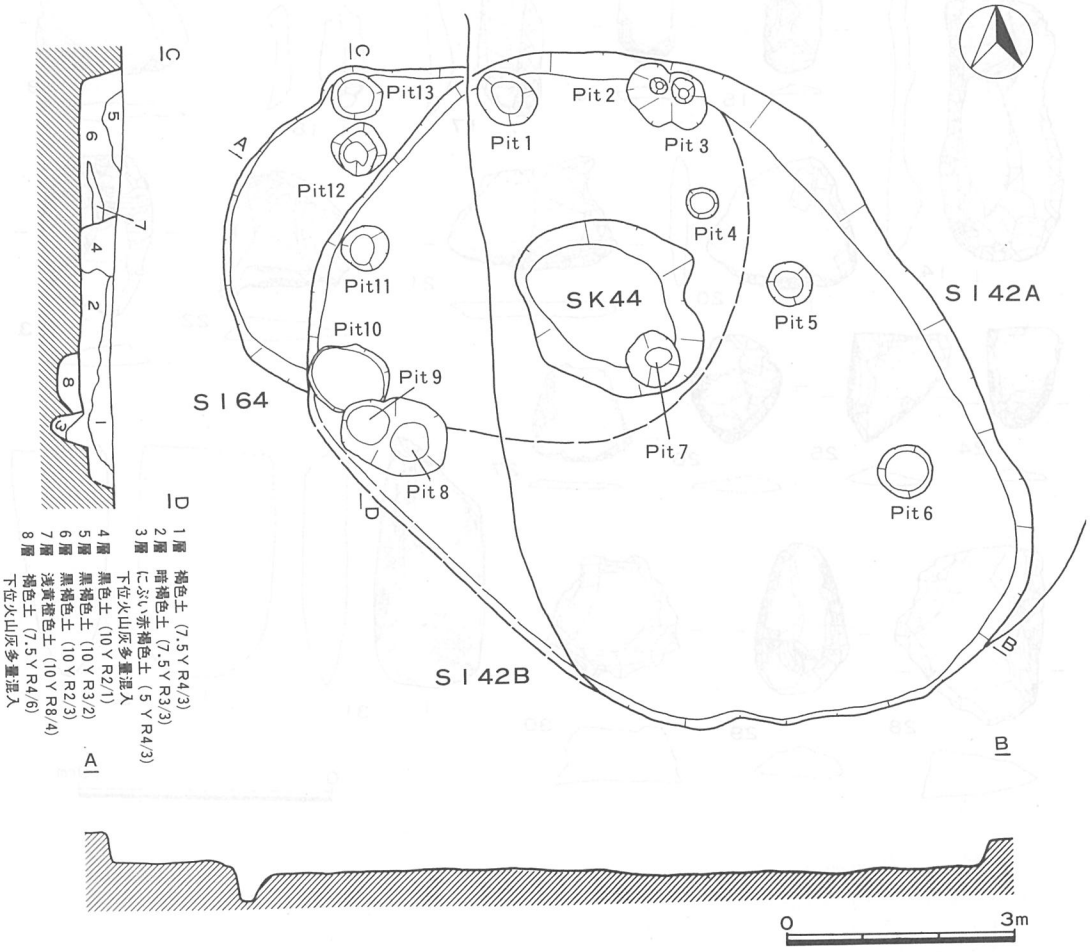
第130図　第42A号住居跡出土石器実測図(1)



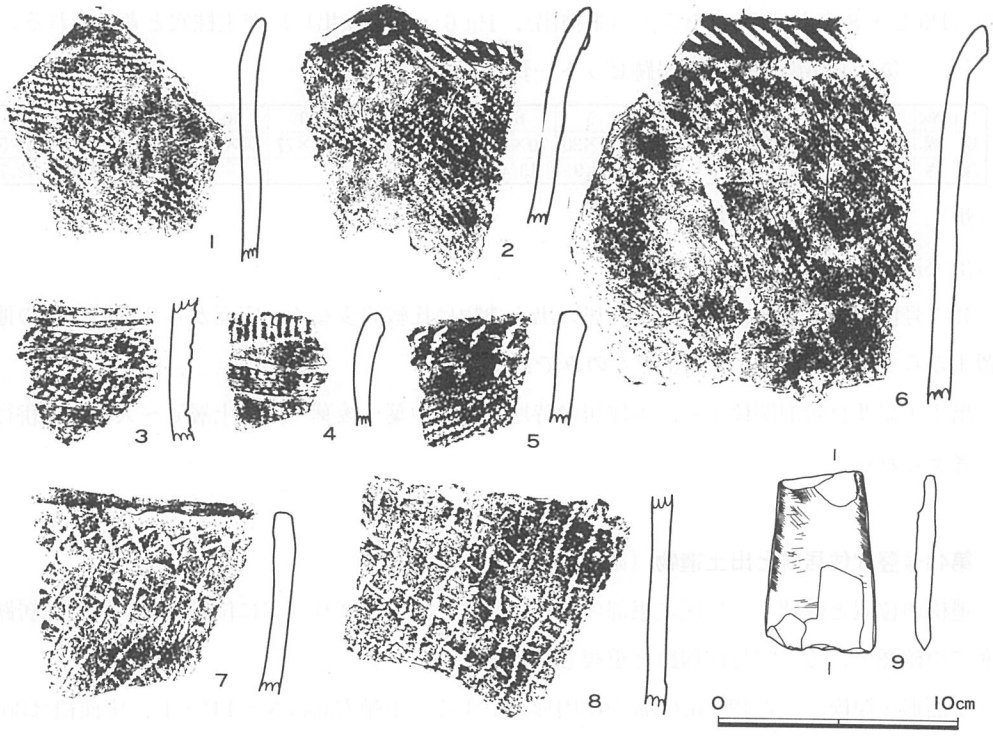
第131図　第42A号住居跡出土石器拓影図(2)



第132図　第42A号住居跡出土石器実測図(3)



第133図　第42B・64号竪穴住居跡実測図



第134図　第64号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

第42B号竪穴住居跡と出土遺物（第133図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北東部の緩斜面ＺＢ・ＺＡ－19・20・21グリッドに位置する。南東壁から西壁中央までⅢ層中位，北西壁は64号住居跡覆土上面，北東壁は42Ａ号住居跡床面での確認である。42Ａ・64号住居跡，44・47号土壙と重複，本住居跡は64号住居跡より新しい。また，42Ａ号住居跡より古いと考えられる。

〈平面形・規模〉　10.10×（7.30）ｍの楕円形を呈する。主軸方向はＮ－44°－Ｗ，床面積は（53.89）㎡を計る。

〈堆積土〉　３層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　北側がⅣ層，南側がⅢ層を掘り込んで床面としている。北西壁際から南東壁際へ若干の傾斜があり，しまりは弱い。北西壁は64号住居跡覆土，南西側はⅢ層から成り，北東壁は42Ａ号住居構築によりその大部分を消失している。壁高は北西壁35.5㎝，南東壁29.9㎝，42Ａ号住居跡床面までの北東壁高は13.8㎝を計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　42Ｂ・64号住居跡より計13個のピットが検出された。このうち軸線に対称な３対６

個（Pit 2・8または9，Pit 5・（未検出），Pit 6・（未検出））が主柱穴と考えられる。

第42B・64号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	96×70	60×60	70×50	20×18	20×20	70×68	72×70	110×100	93×77	107×90	64×62	73×73	68×58
深　さ	19.1	45.2	102.7	42.5	22.9	13.4	53.4				41.1	44.0	42.7

〈炉〉　検出されなかった。

〈出土遺物〉

42A号住居との重複により，本住居の出土遺物は比較的少なく，床面から2点の掻器の他，覆土から1/2箱の土器片を出土したのみである。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉～後葉（円筒上層e～大木9式併行期）と考えられる。

第43号竪穴住居跡と出土遺物（第135～137・400・426図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北東部のZG・ZF－22・23グリッドに位置する。25号住居跡床面での確認である。25号住居跡と重複し，本遺構が古い。

〈平面形・規模〉　7.42×6.00mの楕円形を呈する。主軸方向はN－14°－E，床面積は30.44㎡を計る。

〈堆積土〉　6層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　V層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，しまりは弱い。壁はⅣ・V層から成っていたと思われるが，25号住居構築によりV層部分の壁しか残存しない。25号住居跡床面までの壁高は，東壁32.1cm，西壁30.1cm，南壁17.6cm，北壁35.9cmを計る。

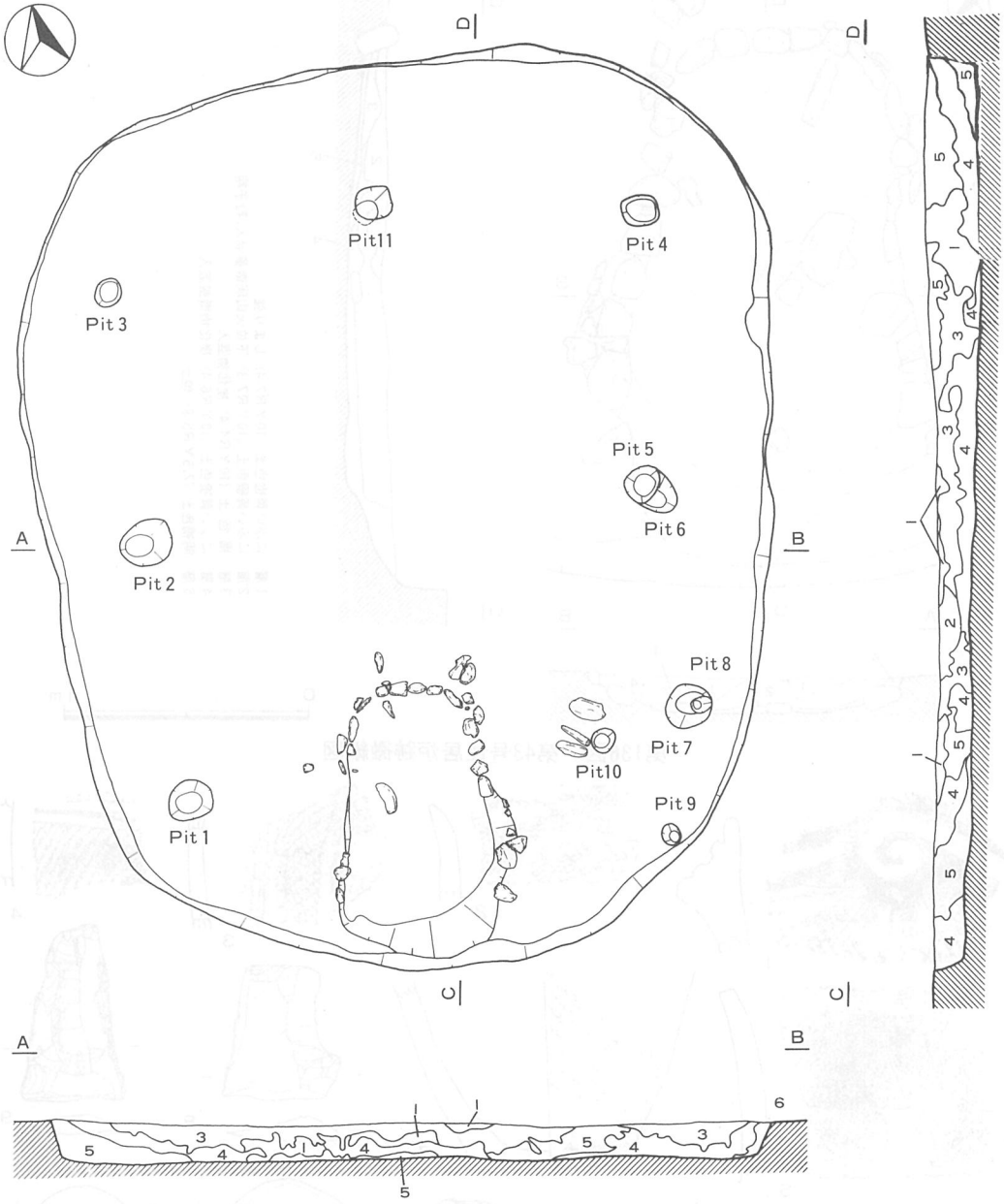
〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より11個のピットが検出された。このうちPit 1～5・8・11を主柱穴とし，主軸線上のPit 11と，軸線に対称な3対6個（Pit 1・8，Pit 2・5，Pit 3・4）の計7個を基本とする柱配置と考えられる。

第43号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

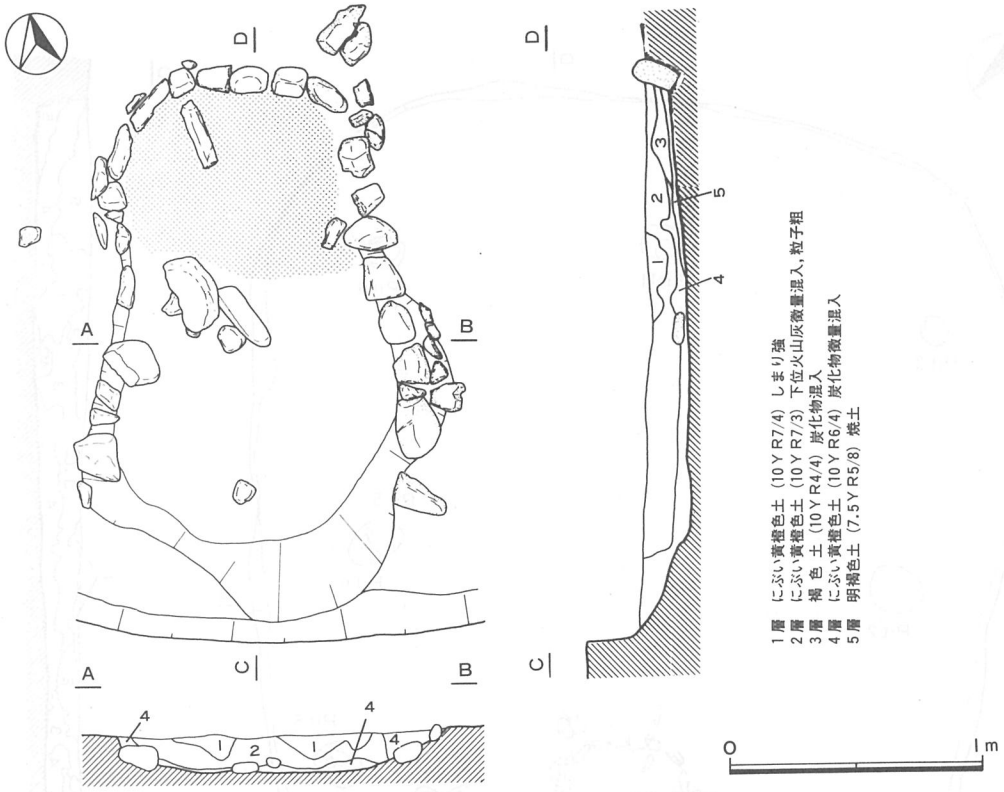
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	40×32	44×36	22×22	29×26	31×25	36×30	38×35	18×14	19×16	22×19	28×27
深　さ	53.2	49.9	56.4	47.0	67.4	19.2	12.4	28.5	8.4	49.1	68.5

〈炉〉　住居跡南壁に接する。若干壊われているが，石囲部十掘り込み部から成る218×147cmの規模の石囲複式炉と考えられる。石囲部は，7～31cm大の自然石を115×95cmの横長の楕円形に配し，炉内全体が2～3cmの厚さで明褐色に焼土化している。掘り込み部は120×155cmの台形に近い形状を呈し，その両側縁に8～24cm大の自然石を配したもので，二重になっている部分もある。全体として「⊕」形に炉石を配したものと考えられる。

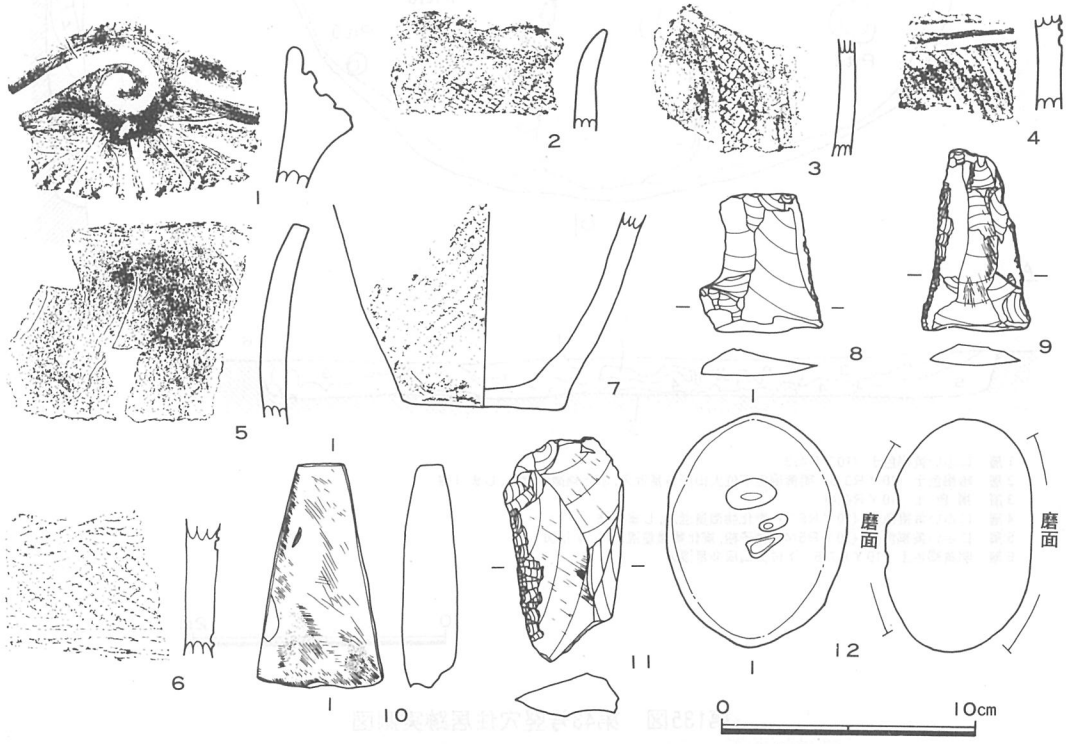


1 層　にぶい黄褐色土（10ＹR4/3）
2 層　暗褐色土（10ＹR3/3）明黄褐色下位火山灰多量混入，炭化物微量混入，しまり強
3 層　褐 色 土（10ＹR4/4）
4 層　にぶい黄橙色土（10ＹR6/4）炭化物微量混入，しまり強
5 層　にぶい黄褐色土（10ＹR5/4）粒子粗，炭化物微量混入，しまり弱
6 層　明黄褐色土（10ＹR7/6）下位火山灰多量混入

第135図　第43号竪穴住居跡実測図



第136図　第43号住居炉跡微細図



第137図　第43号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

〈出土遺物〉　（第137図，400図10，426図７）

本住居は大型住居である割に，出土遺物は少ない。炉内より，敷きつめたような状態で１個体の土器，炉西側付近の床直より１個の復元可能土器を出土した。この他に床面より10数点，床直より20数点，覆土中より若干の土器片を出土，石器は覆土中より１点の磨製石斧・凹石・有孔石製品，３点の掻器を出土した。

400図10は，その土器片を炉内に敷きつめたような状態で出土した，口縁部が内傾する壺形土器で，胴上部に４つの把手を有する。口径15cm，底径８cm，器高42cmを計り，口縁部は無文，胴部にＲＬ斜縄文が施文，焼成は不良で，色調は明赤褐色（2.5ＹＲ5/6）を呈する。

137図３は床面，５～７は床直上，他は覆土中の土器である。

出土遺物及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第44号竪穴住居跡と出土遺物（第138，139，395図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＦ－20・21グリッドに位置する。Ⅴ層上面において確認された遺構である。40・45号住居跡と重複，本遺構がいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉　（3.44）×3.03ｍの円形を呈すると推定できる。床面積は約7.48㎡を計る。

〈堆積土〉　黒褐色土の単一層である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。壁はⅤ層より成るが，南・北壁は，40・45号住居構築により消失している。東・西壁は緩やかな立ち上がりを呈し，壁高は東壁18cm，西壁９cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡に伴なうと考えられるピットは，５個検出された。Ｐit １または２・３・４・５の４個を主柱穴とする柱配置と考えられる。

第44号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

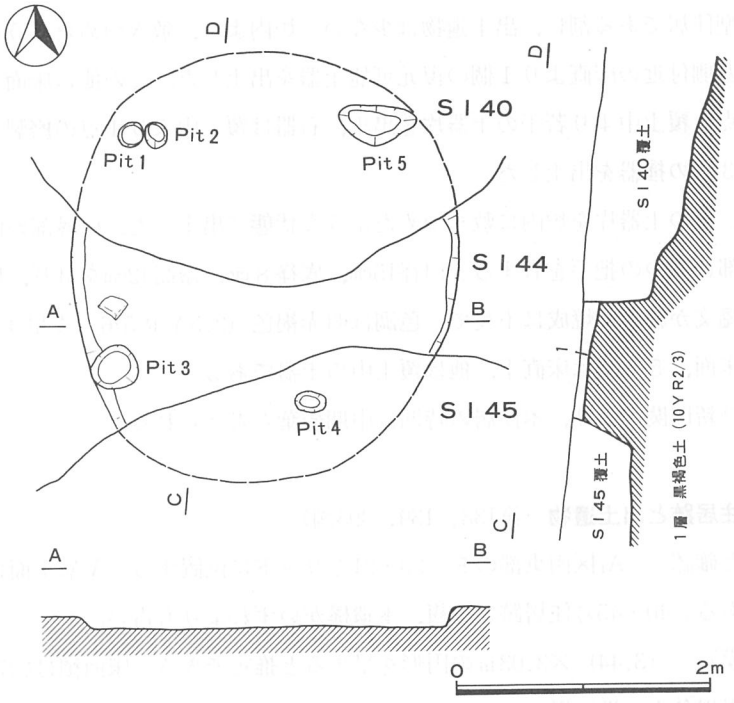
Pit No.	1	2	3	4	5
規　模	19×18	21×17	40×36	26×17	62×32
深　さ	17	21	70		9.3

〈炉〉　検出されなかった。

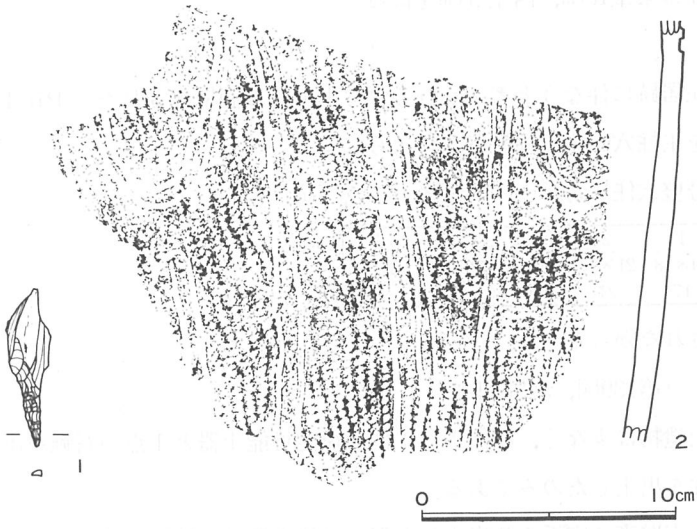
〈出土遺物〉　（第139図，395図５）

本住居の出土遺物は少なく，床面より１個の復元可能土器と１点の石錐を出土，他に覆土より若干の土器片を出土したのみである。

395図５は，南壁寄り床面より出土した復元可能土器で，鉢形を呈し，口径11.3cmを計る。口縁部中位の横位沈線文と刺突文により区画され，口縁部上半は無文，胴部には「∩」文が施文，地文にはＬＲ斜縄文，焼成はやや良好，色調はにぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）を呈する。



第138図　第44号竪穴住居跡実測図



第139図　第44号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

139図2は床面からの出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第45号竪穴住居跡と出土遺物（第140～144，399，402，403，406，423図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のF・G・H－20・21・22グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。

44・48・49・54号住居跡，101号土壙，4・5号屋外炉と重複，本遺構は44・48・54号住居跡，101号土壙より新しく，49号住居跡，4・5号屋外炉より古い。また，柱列及び周溝の精査により，本住居跡は2回の増改築が行なわれていることが確認された。

便宜的に最終プランをA，以下B・Cとして各項目ごとに記述する。

〈平面形・規模〉　Aプラン（最終プラン）：11.36×8.65mの楕円形を呈し，主軸方向はN－62°－W，床面積は79.76㎡を計る。

Bプラン：柱列及び周溝から，南西壁及び北西壁をAプランと同一とし，南東壁及び北東壁は，Aプラン両壁下の内側の周溝に接するものと考えられる。この場合，Bプランの規模は，10.36×7.40mとなり，楕円形を呈する。

Cプラン：内在する周溝とPit 7・41を結ぶラインと考えられる。この場合，Cプランの規模は7.6×7.4mとなり，楕円形を呈する。

以上のように1回目の増築（C→B）は，長軸方向両壁側への増築，2回目（B→A）は，短軸方向両壁側への増築と考えられる。

〈堆積土〉　13層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　101号土壙覆土及びⅤ層を掘り込んで床面としている。住居中央部，すなわち，主柱穴配置内のしまりが強い。壁はⅣ・Ⅴ層から成るが，南壁西側の一部は49号住居構築により消失している。壁はやや急な立ち上がりを呈し，壁高は，東壁44cm，西壁49cm，南壁75cm，北壁48cmを計る。

〈周溝〉　最終プランの北西壁を除く壁下に，不連続な幅8～20cm，深さ3～18cmの周溝が一巡する。また，B・Cプランの北東壁・南東壁下と想定される位置から，幅7～20cm，深さ5～10cmの不連続な周溝が検出された。なお，北東壁際の周溝は，一部が二重になっている。

〈柱穴〉　本住居跡より68個以上のピットが検出された。各プランでの柱配置は，次のように考えられる。

Aプラン：Pit 1・5・16・23・27・37・43・49・55または56・65を主柱穴とし，主軸線に対称な5対10個（Pit 1・65，Pit 5・27，Pit16・43，Pit23・49，Pit37・55または56）の柱配置。

Bプラン：Pit 1・7・16・22・36・41・44・50・53または54・65を主柱穴とし，主軸線に対

称な５対10個（Pit１・65，Pit７・41，Pit16・44，Pit22・49，Pit36・54または55）の柱配置。

Ｃプラン：Pit12・21・35・48・64を主柱穴とし，３対６個（Pit12・（未検出），Pit21・48，Pit35・64）の柱配置。

第45号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	80×58	24×23	23×16	13×11	32×32	17×15	37×31	12×12	21×20	27×24	20×18	45×31
深　さ	84	30	27	26	51	37	72	29	9	53	31	28
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規　模	36×33	17×17	18×17	57×49	24×23	26×23	41×25	21×21	45×43	52×40	60×47	14×10
深　さ	52	22	47	57	15	15	43	26	50	93	55	9
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
規　模	40×29	28×24	35×33	37×23	45×31	50×42	30×25	37×29	30×30	37×32	60×54	56×41
深　さ	36	36	24	51	29	39	104	36	18	38	20	49
Pit No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
規　模	41×37	32×22	15×15	18×15	75×55	欠　番	52×40	52×35	15×14	22×15	25×13	71×47
深　さ	55	25	20	21	67		52	53	37	33	23	54
Pit No.	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
規　模	53×45	35×45	33×31	20×19	35×31	50×33	40×35	30×21	40×30	17×15	23×14	23×25
深　さ	68	26	63	10	63	42	30	32	16	26	29	8
Pit No.	61	62	63	64	65	66	67	68				
規　模	30×22	35×30	40×30	60×59	68×66	欠　番	17×17	52×52				
深　さ	31	15	15	33	80		52	8				

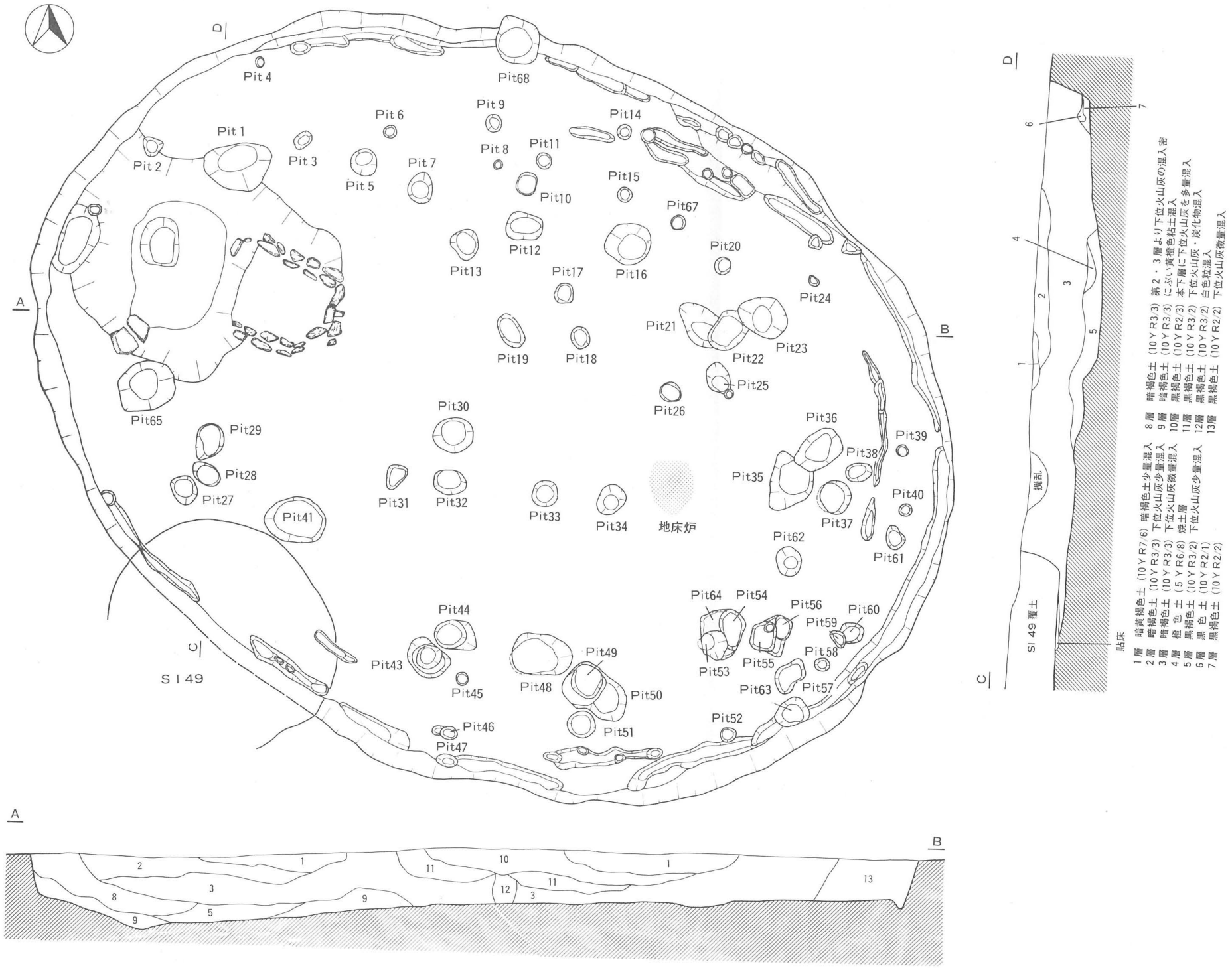
〈炉〉　住居跡主軸線上北西壁に接して石囲複式炉，中央より南東寄りに地床炉が確認された。石囲複式炉は石囲部＋掘り込み部から成り，規模は334×240cmである。石囲部は12～30cm大の自然石を152×124cmの「∪」状に二重に配列したもので，炉内底面がわずかに赤変（焼土化）し，少量の灰が堆積している。掘り込み部は，195×240cmの隅丸方形である。地床炉は64×50cmの規模で，厚さ２cm弱の焼土が確認された。石囲複式炉はＢプランより，地床炉はＣプランより継続して使用されていた可能性がある。

〈出土遺物〉　（第142～144図，399図５，402図15，403図12，406図２，423図22）

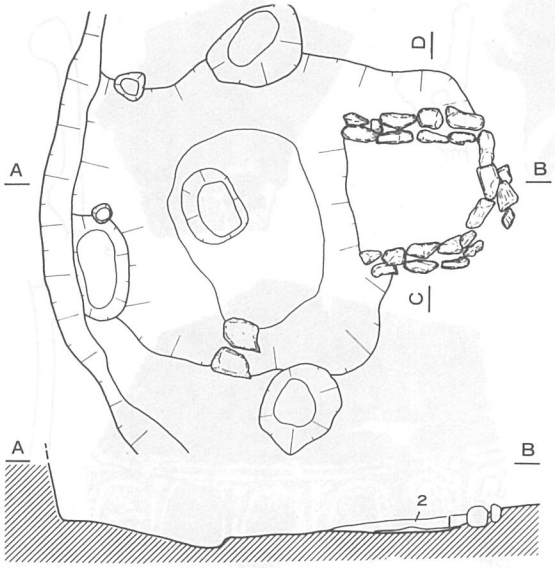
本住居からの出土遺物は多く，次のようである。

ピット内より１個の復元可能土器と１点の石匙，周溝より１点の掻器，床面より１個の復元可能土器，10数点の土器片，１点の石錐・掻器，床直より30数点の土器片と１点の掻器・石皿を出土，他に覆土より７個の復元可能土器，1・1/2箱の土器片，１点の石鏃・打製石斧・磨石・凹石・円盤状土製品，２点の石篦，５点の石匙・掻器を出土した。また，周溝内より多数のフレークを出土，本住居出土の多量の石器との関連性が注目される。

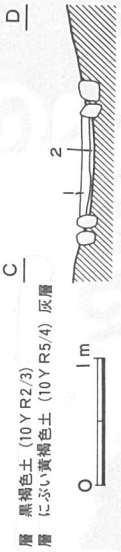
399図5は，北西壁寄りPit１内出土の深鉢形土器で，口径27.4cm，底径8.1cm，器高28.4cmを計る。口縁部は無文，口頸部に横位連続刺突文，その直下に平行沈線による弧状文を施文，この弧状文より懸垂文が胴部下半に延びる。地文はＲＬ斜縄文，色調は灰褐色（7.5ＹＲ4/2）を呈する。402図15は，南壁寄り覆土中位出土の広口壺形土器で，底径4.6cm，器高17.5cmを計る。口縁部は無文，胴部にはＲＬ斜縄文を施文，焼成はやや良好，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/3）

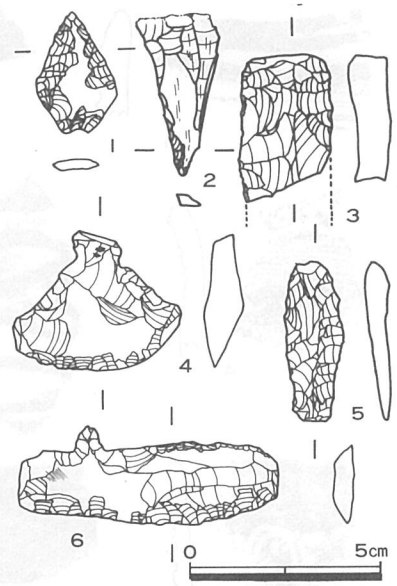


第140図　第45号竪穴住居跡実測図

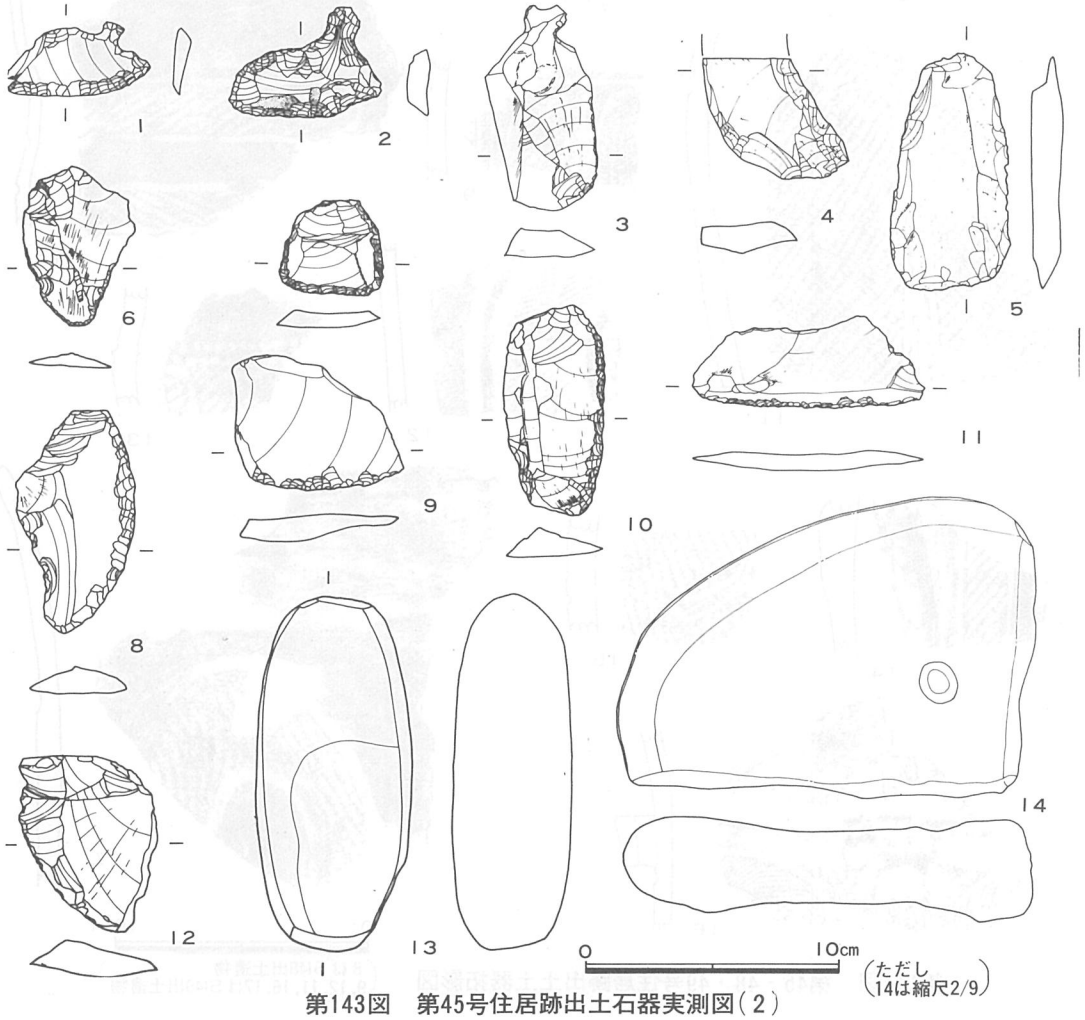


第141図　第45号住居炉跡微細図

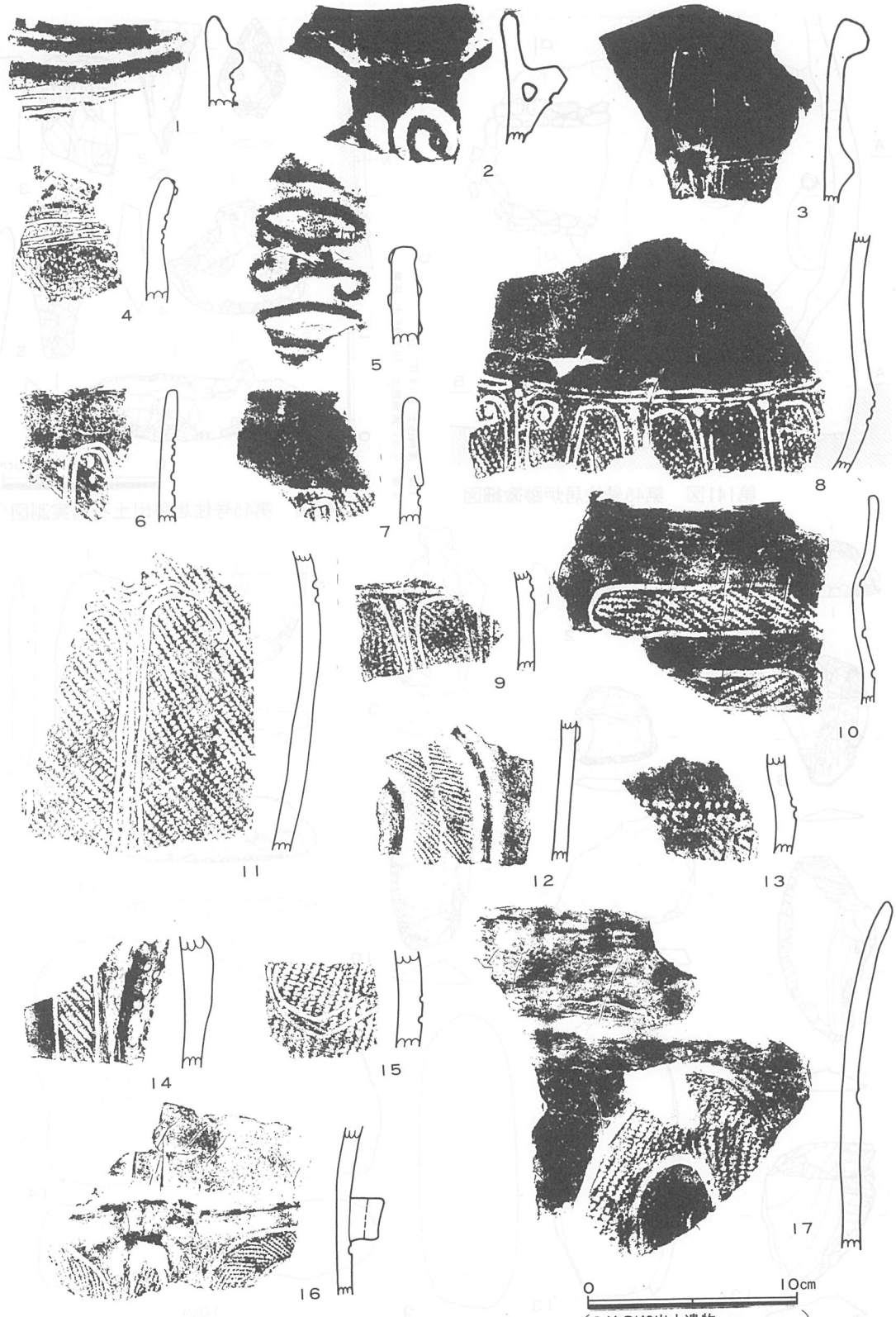




第142図　第45号住居跡出土石器実測図（1）



第143図　第45号住居跡出土石器実測図（2）



第144図　第45・48・49号住居跡出土土器拓影図

（8はS148出土遺物
9, 12, 11, 16, 17はS149出土遺物）

を呈する。403図12は，北東壁寄り覆土中位出土の深鉢形土器で，口径15.3cm，底径5.0cm，器高20.6cmを計る。器面にはＲＬ斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調は黒褐色（7.5ＹＲ3/2）を呈する。391図2は，南壁寄り床面出土の深鉢形土器で，口径24.8cmを計る。口縁部下半より胴部にＲＬの縦位及び斜位縄文を施文，焼成はやや不良，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）を呈する。

144図６は床面，他は覆土中からの出土土器である。

ピット内，床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第46号竪穴住居跡と出土遺物（第145～147，403図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＦ・Ｇ－25グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡の北側に２号住居跡（歴史時代）・２号溝，南西側に41・55・56号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉　3.19×3.12ｍの円形を呈する。主軸方向はＮ－15°－Ｅ，床面積は6.68㎡を計る。

〈堆積土〉　４層に区分でき，自然堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。南東壁際から北西壁際へ若干の傾斜があり，中央部，炉周辺のしまりが特に強い。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，やや急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁56.1cm，北西壁52.5cm，南東壁47.0cm，南西壁61.7cmを計る。

〈周溝〉　南東壁下に幅約13cm，深さ4.8cm，長さ85cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡より８個のピットが検出された。Pit １～４の４個を主柱穴とする柱配置と，Pit １・２・４・５・６または７の５個を主柱穴とする柱配置とが考えられる。

第46号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	29×23	26×23	30×20	22×21	25×18	27×20	20×12	33×10

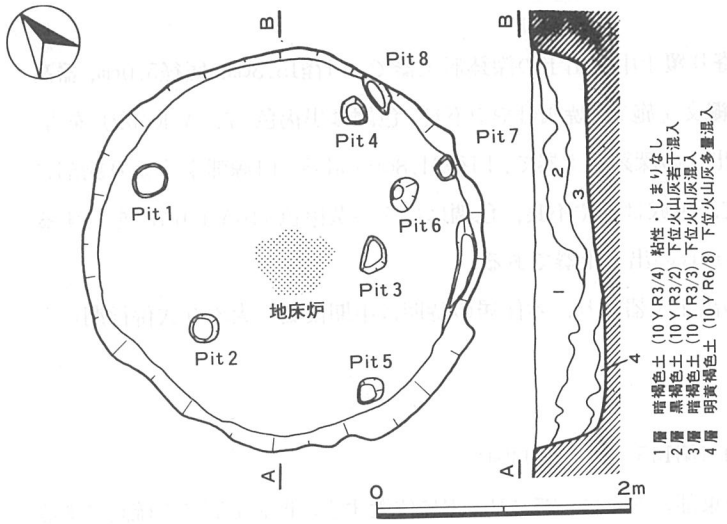
〈炉〉　住居跡のほぼ中央に位置する。地床炉で，60.0×50.5cmの範囲に焼土が確認された。

〈出土遺物〉　（第146，147図，403図５）

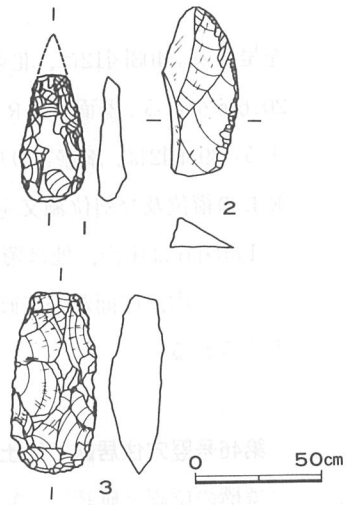
床面からは６点の土器片と１点の石槍，床直からは10数点の土器片を出土した。また，この他に覆土中より，２個の復元可能土器，2/3箱の土器片，石箆，掻器それぞれ１点を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央の炉周辺からの出土が多い。

403図５は，覆土中位出土の鉢形土器で口径10.6cm，底径6.2cm，器高11.8cmを計る。ＬＲの原体を口縁部では横位に，胴部では縦位に回転して斜縄文を施文，焼成はやや良好，色調は黒褐色（7.5ＹＲ3/2）を呈する。

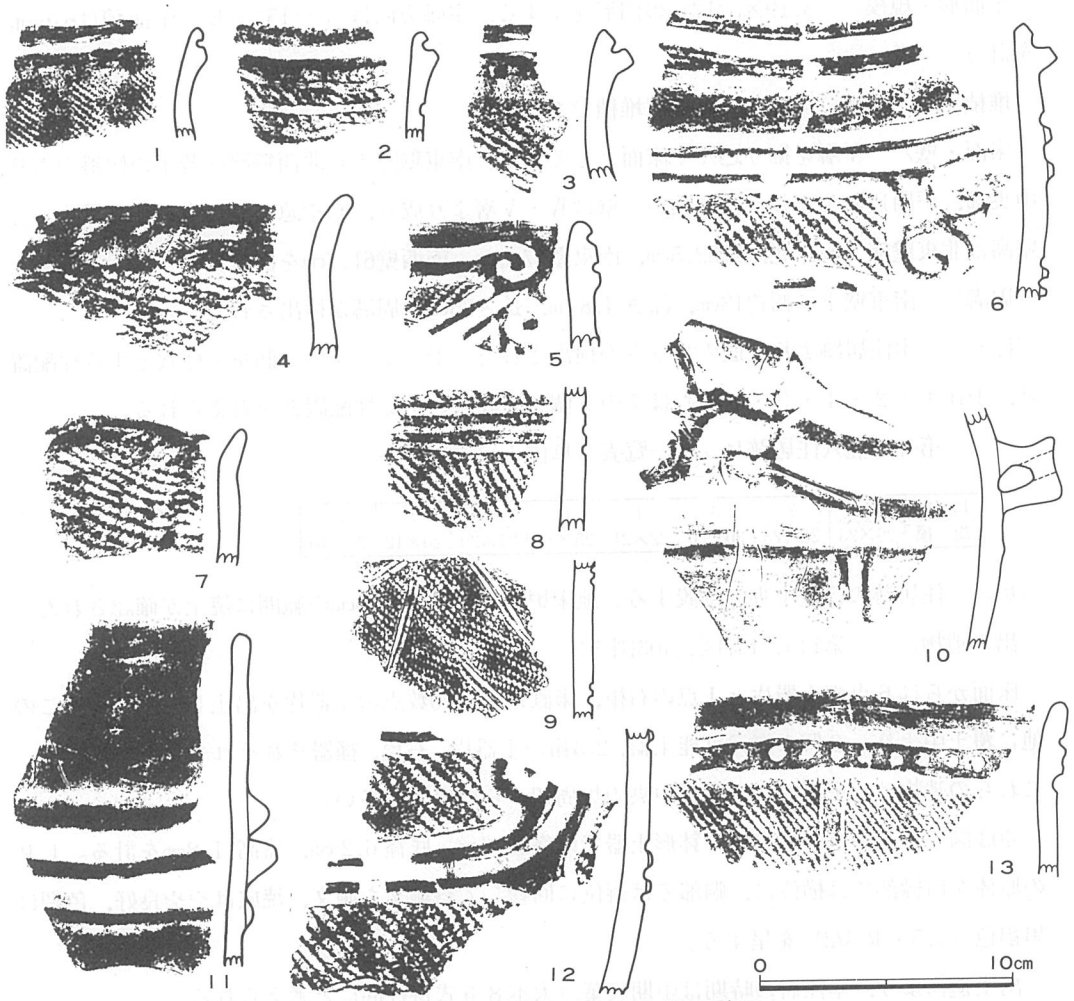
出土遺物より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。



第145図　第46号竪穴住居跡実測図



第146図　第46号住居跡出土石器実測図



第147図　第46号住居跡出土土器拓影図

第47号竪穴住居跡と出土遺物（第148～150，394図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＤ・Ｅ－23・24グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡の東側に57号住居跡，南東側に２号住居跡（歴史時代），南側に２号溝，南西側に62Ａ号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉　5.96×4.24ｍの不整楕円形を呈する。主軸方向はＮ－０°－Ｗ，床面積は18.64㎡を計る。

〈堆積土〉　５層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，しまりが弱い。東・西・南壁はⅣ・Ⅴ層より，北壁はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層より成り，やや急な立ち上がりを呈する。壁高は，東壁50.9cm，西壁44.4cm，南壁53.0cm，北壁34.1cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より11個のピットが検出された。Ｐｉｔ１～６の６個を主柱穴とし，主軸線上のＰｉｔ３と軸線に対称な３対６個（Ｐｉｔ１・６，Ｐｉｔ７・５または（未検出），Ｐｉｔ２または８・４または（未検出））を基本とする柱配置と考えられる。

第47号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	36×30	29×24	30×24	31×28	35×35	27×24	25×21	34×32	21×19	20×18	25×19
深　さ	42.2	57.3	57.3	64.4	45.5	20.3	46.5	41.7	20.1	36.9	15.9

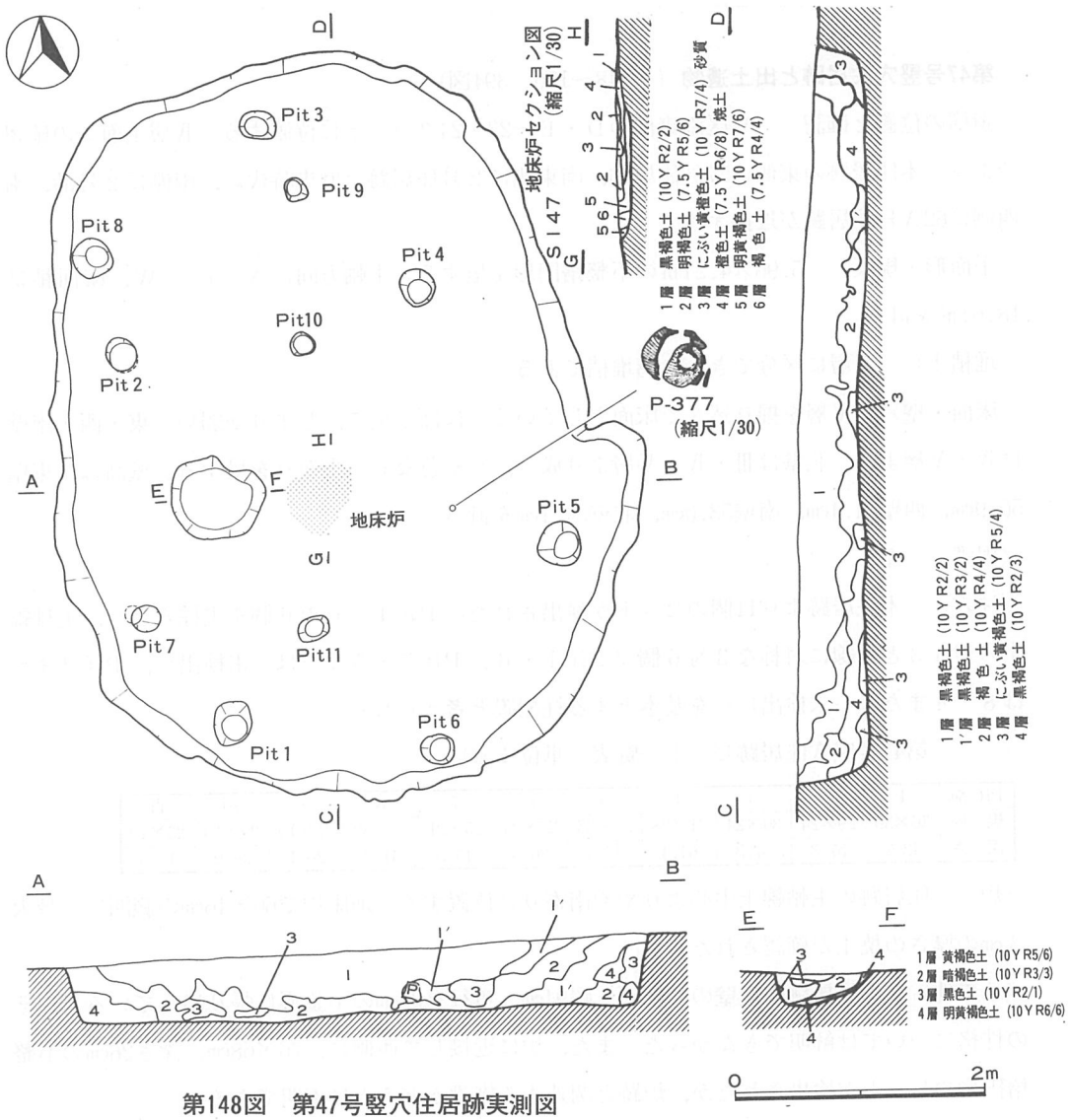
〈炉〉　住居跡の主軸線上中心よりやや南寄りに位置する。地床炉で60×46cmの範囲に，最大３cmの厚さの焼土が確認された。

〈その他〉　本住居跡南東壁の一部が，幅94cm，奥行き25cmの不整形に張り出しているが，その性格については解明できなかった。また，炉に近接して西側に，76×68cm，深さ26cmの不整楕円形のピットが検出されたが，炉跡と関連する施設かどうかは不明である。

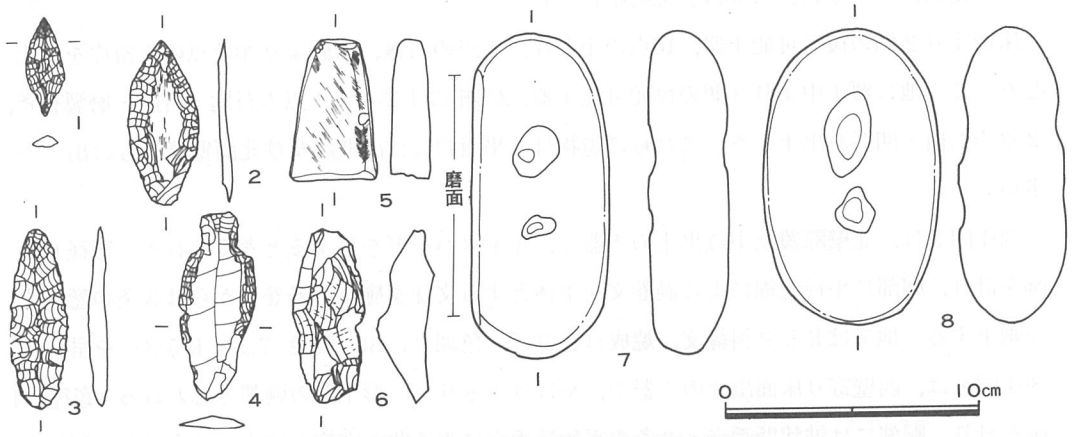
〈出土遺物〉　（第149・150図，394図５・８）

床面より２個の復元可能土器，16点の土器片，１点の石鏃，床直より30数点の土器片を出土した。この他に覆土中より３個の復元可能土器，2/3箱の土器片，１点の石匙・石箆・磨製石斧，２点の石槍・凹石を出土した。これらの遺物は，平面的には南壁際及び北西壁際からの出土が多い。

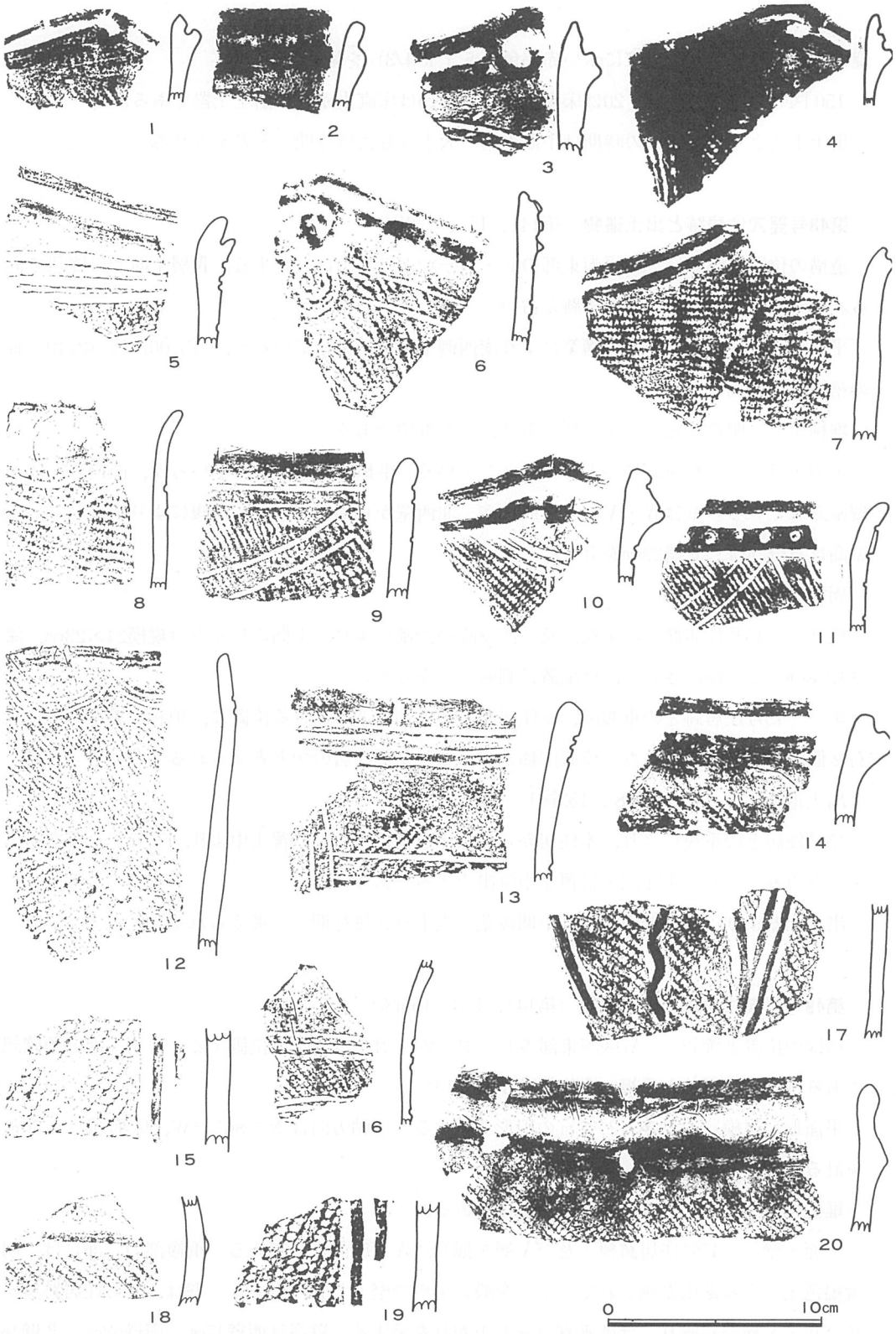
394図５は，北壁際覆土中位出土の土器で，キャリパー形を呈すると考えられる。底径6.6cmを計り，胴部に平行沈線による渦巻文を主体とする文様を施文，渦巻文からは３条の懸垂文が垂下する。地文はＲＬＲ斜縄文，焼成は良好で，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ5/3）を呈する。394図８は，西壁寄り床面出土の土器で，やはりキャリパー形土器の胴部と思われる。底径7.4cmを計り，胴部には波状懸垂文，３条の平行懸垂文による曲線文等を施文，地文はＬＲ斜縄文，



第148図　第47号竪穴住居跡実測図



第149図　第47号住居跡出土石器実測図



第150図　第47号住居跡出土土器拓影図

焼成はやや良好で，色調はにぶい赤褐色（５ＹＲ4/3）を呈する。

150図３・５・13・17・20は床面，２・12・19は床直上からの出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第48号竪穴住居跡と出土遺物（第144，151，152図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＦ・Ｇ－22グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。45号住居跡と重複，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　45号住居構築により南西側半分を消失しているが，（3.06）×（2.40）ｍの楕円形と推測される。

〈堆積土〉　明黄褐色土の単一層であり，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。平坦で堅くしまっているが，西側の一部が攪乱されている。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，北西壁から南壁にかけ，重複により消失している。壁高は東壁24cm，北壁23cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　45号住居跡との重複，及び西壁際の攪乱により，１個のピット（規模24×23cm，深さ12.8cm）しか検出されず，柱配置は判明しなかった。

〈炉〉　45号住居跡との重複際，本住居跡の中央部分と思われる位置に，炉石と見られる自然石２個と焼土が確認された。位置関係から，これが本住居の炉と考えられる。

〈出土遺物〉　（第144図８，152図）

45号住居との重複により，本住居からの出土遺物は少ない。覆土中より，1/4箱の土器片が出土したのみである。144図８は覆土中位出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

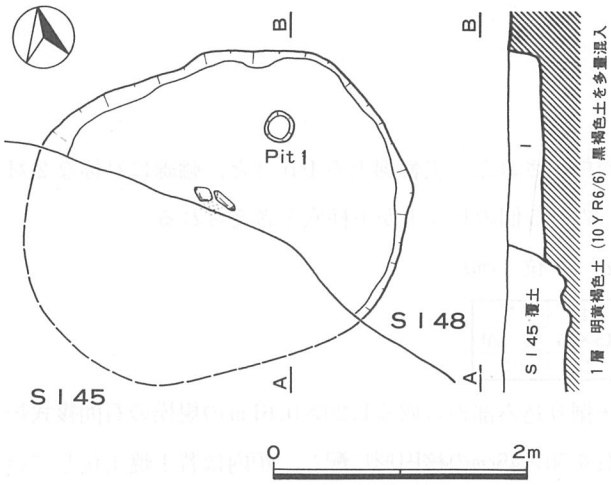
第49号竪穴住居跡と出土遺物（第144，153～155図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＧ・Ｈ－20・21グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。45号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

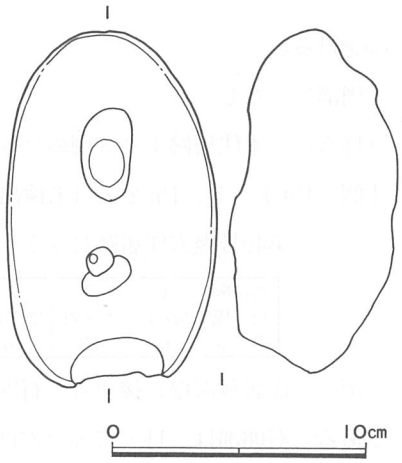
〈平面形・規模〉　2.76×2.72ｍの円形を呈する。主軸方向はＮ－86°－Ｗ，床面積は4.76㎡を計る。

〈堆積土〉　３層に区分でき，自然堆積である。

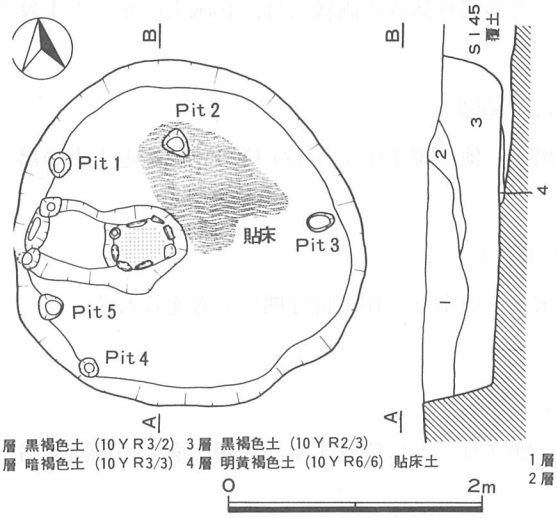
〈床面・壁〉　45号住居跡覆土及びⅤ層を掘り込んで床面としている。重複部の一部には，明黄褐色土による貼床が施されている。全般に平坦で堅くしまりがある。壁は，45号住居跡覆土及びⅣ・Ⅴ層から成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は西壁47cm，南壁52cm，北壁46



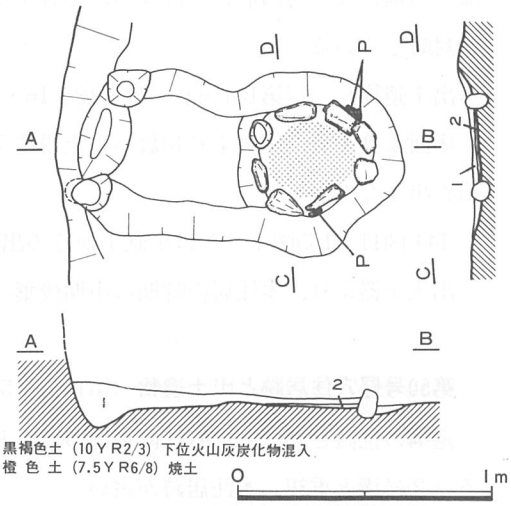
第151図　第48号竪穴住居跡実測図



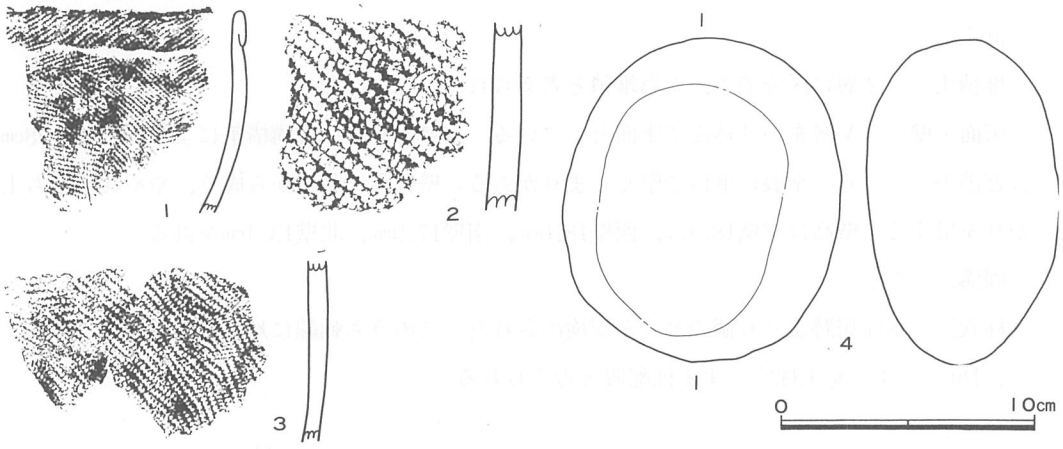
第152図　第48号住居跡出土石器実測図



第153図　第49号竪穴住居跡実測図



第154図　第49号住居炉跡微細図



第155図　第49号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より５個のピットが検出された。主軸線上のPit３と，軸線に対称な２対４個（Pit１・５，Pit２・（未検出））の計５個のピットが主柱穴と考えられる。

第49号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5
規　模	20×17	23×21	20×15	15×15	21×20
深　さ	6	33	16	23	15

〈炉〉　住居跡西壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る1.29×0.61ｍの規模の石囲複式炉である。石囲部は，11～17cm大の自然石を50×45cmの楕円形に配し，炉内は若干焼土化している。掘り込み部は，68×67cmの方形に近い形で，壁際にはさらに41×21cmの規模，９cmほどの深さの横に長い楕円形状の掘り込みを有する。この掘り込みの両縁には，16cm大のピット１対が対峙している。

〈出土遺物〉　（第144図９・11・12・16・17，155図）

床面より１点，床直より10数点の土器片を出土，他に覆土中より1/4箱の土器片と１点の磨石を出土した。

144図11，155図１～３は床直上からの出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉～末葉（大木９～10式併行期）と考えられる。

第50号竪穴住居跡と出土遺物（第156，157，402図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＥ・Ｆ－26グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。２号溝と重複，本住居跡が古い。

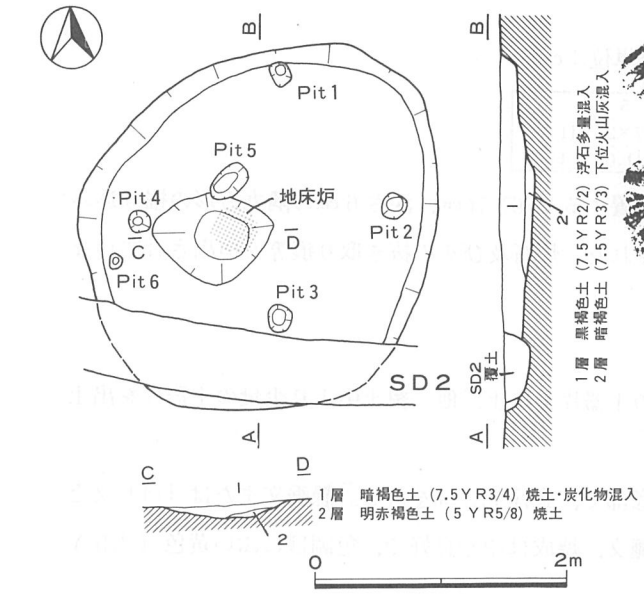
〈平面形・規模〉　3.12×2.68ｍの楕円形を呈する。主軸方向Ｎ－45°－Ｅ，床面積は5.60㎡を計る。

〈堆積土〉　２層に区分でき，人為堆積と考えられる。

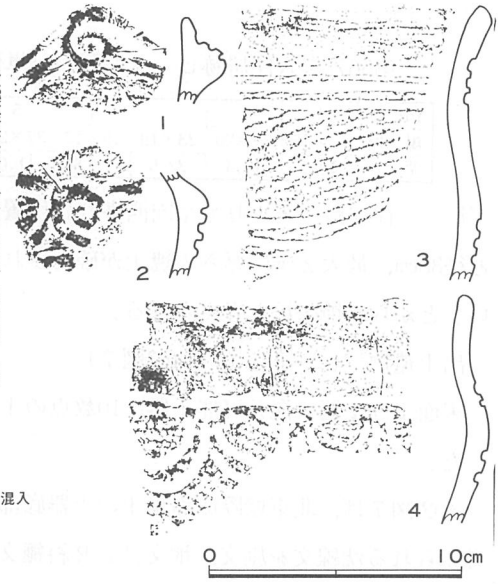
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。南壁寄りが２号溝構築により，幅54～58cmほど消失している。全般に平坦で堅くしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，やや緩い立ち上がりを呈する。壁高は東壁18.4cm，西壁18.0cm，南壁17.9cm，北壁13.4cmを計る。

〈周溝〉　なし

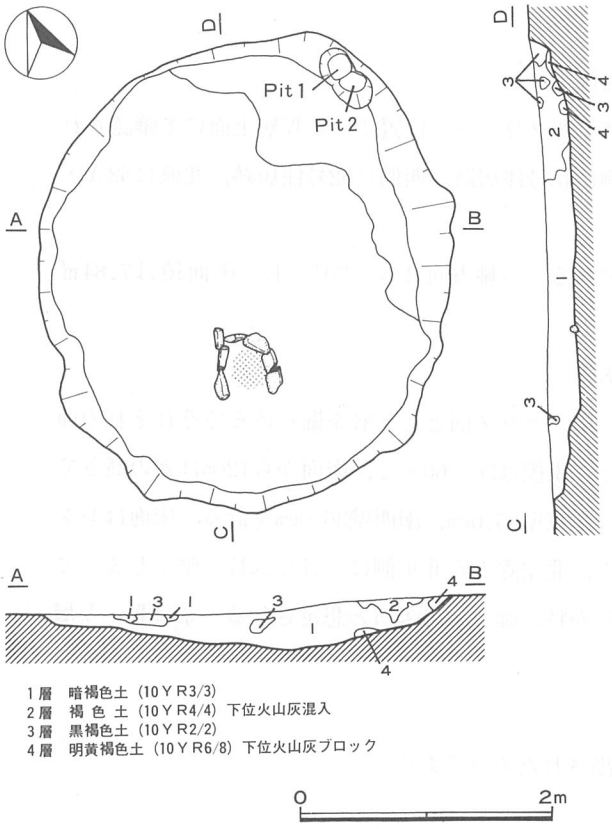
〈柱穴〉　本住居跡より６個のピットが検出された。このうち軸線に対称な２対４個（Pit1・2，Pit３・４）を主柱穴とする柱配置と考えられる。



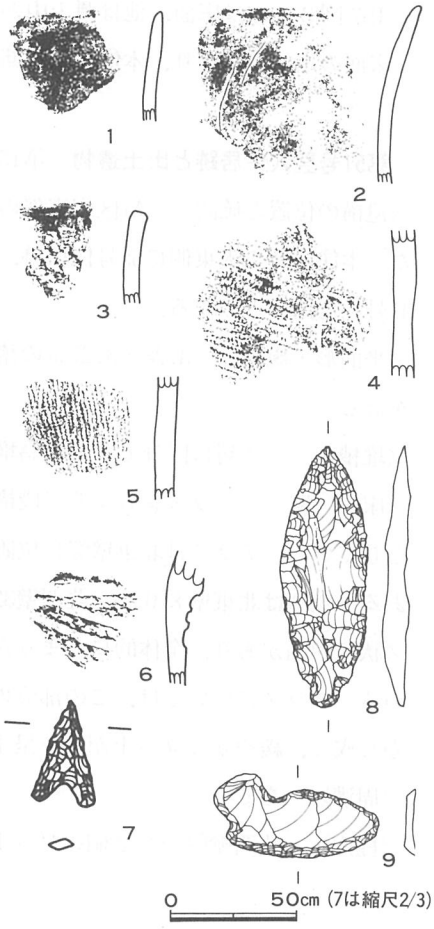
第156図　第50号竪穴住居跡実測図



第157図　第50号住居跡出土土器拓影図



第158図　第51号竪穴住居跡実測図



第159図　第51号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

第50号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6
規　模	17×15	20×20	23×19	18×17	37×21	11×9
深　さ	12.4	16.4	22.6	13.8	11.0	14.0

〈炉〉　住居跡中央よりやや南西寄りに位置する。76×76cm，深さ6cmの隅丸方形の掘り込みと径38cm，最大2cmの厚さの焼土が確認された。炉石及びその抜き取り痕等が検出されていないことから，地床炉と考えられる。

〈出土遺物〉　（第157図，402図7）

床面より1個の復元可能土器，10数点の土器片を出土，他に覆土中より少量の土器片を出土した。

402図7は，北東壁際床面出土の土器底部で，底径7.3cmを計る。懸垂文または「∩」文と考えられる沈線文を施文，地文はLR斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄色（2.5Y 6/3）を呈する。

157図3・4は床面，他は覆土中からの出土土器である。

床面の出土遺物より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第51号竪穴住居跡と出土遺物（第158，159図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のF－22・23グリッドに位置する。Ⅳ層上面にて確認された。本住居跡の南東側に55号住居跡，南西側に48号住居跡，西側に52号住居跡，北側に62A・B号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉　3.78×3.27mの楕円形である。主軸方向はN－20°－E，床面積は7.84㎡を計る。

〈堆積土〉　4層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともⅤ層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは北東壁際に位置し，その規模は26～60cmで，床面から12cmほどの高さである。壁高は北東壁8.0cm，北西壁32.4cm，南東壁35.0cm，南西壁36.9cmを計る。床面はレンズ状で凹凸があり，全体的にしまりがあるが，北壁際から北東側にかけては特に堅くしまっている。テラスについては，この部分のしまりが特に強く，出入口と想定される。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，緩やかな立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　北西壁際から2個のピットが検出されたのみである。

第51号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2
規　模	26×26	27×27
深　さ	30.1	40.6

〈炉〉　住居跡主軸上中心よりやや南寄りに位置する。18～24cm大の自然石を50×48cmの「コ」字状に配した石囲炉である。炉内32×28cmの範囲で焼土が確認された。

〈出土遺物〉　（第159図）

本住居からの出土遺物は少なく，床面，床直及び覆土より若干の土器片を，また，床面より1点の石鏃，覆土中位より石匙，石槍それぞれ1点を出土したのみである。これらの遺物は，平面的には住居中央部に多く分布する。

159図3・5は床面，6は床直上からの出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。

第52号竪穴住居跡と出土遺物（第160，161，406，428図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のE・F－21・22グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡の東側に51号住居跡，南側に45・48号住居跡，西側に40・44号住居跡，北側に62B～C号住居跡が隣接する。

〈平面形・規模〉　3.54×3.52mの円形を呈する。床面積は8.56㎡を計る。

〈堆積土〉　4層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があるが，全体的にしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は北東壁16.0cm，北西壁21.3cm，南東壁21.6cm，南西壁24.4cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より11個のピットが検出された。このうち，Pit 1・2・3・4または未検出のピットの4個を主柱穴とする柱配置，またはPit 1～3・9・11の5個を主柱穴とする柱配置と考えられる。

第52号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	38×23	58×40	58×56	38×32	43×33	29×21	44×29	26×16	29×22	25×12	21×19
深　さ	47.0	39.0	40.0	47.0	76.0	46.0	38.0	10.0	19.0	21.0	30.0

〈炉〉　住居跡中央よりやや西寄りに位置する。一部の炉石の移動及び欠落があるが，15～25cm大の自然石を60×50cmの楕円形に配した石囲炉と考えられる。焼土は非常に薄く，炉中心よりやや南東寄りに偏在している。

〈出土遺物〉　（第161図，406図4，428図12）

床面より１点の土器片と掻器，床直より数点の土器片と１点の磨製石製品を出土，他に覆土中より１個の復元可能土器，少量の土器片，１点の石皿を出土した。これらの遺物は，平面的には北西壁寄りに多く分布している。

406図４は，南西壁寄り覆土上位出土の復元可能土器で，深鉢形を呈し，底径8.4cmを計る。器面にはＲＬ斜縄文を施文，胎土には小礫・砂粒を混入，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）を呈する。

161図６は床面，２・４は床直上，他は覆土中からの出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第53号竪穴住居跡と出土遺物（第162～164，400図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南部のＤ・Ｅ－18・19グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡は，東壁で105号土壙と，西壁で９号住居跡と接する。

〈平面形・規模〉　3.70×3.13ｍの楕円形を呈する。主軸方向はＮ－63°－Ｗ，床面積は7.16㎡を計る。

〈堆積土〉　６層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面とし，南壁際から北壁際への緩やかな傾斜がある。若干の凹凸があり，堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，やや急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁43.8cm，西壁41.0cm，南壁40.2cm，北壁43.6cmを計る。

〈周溝〉　なし

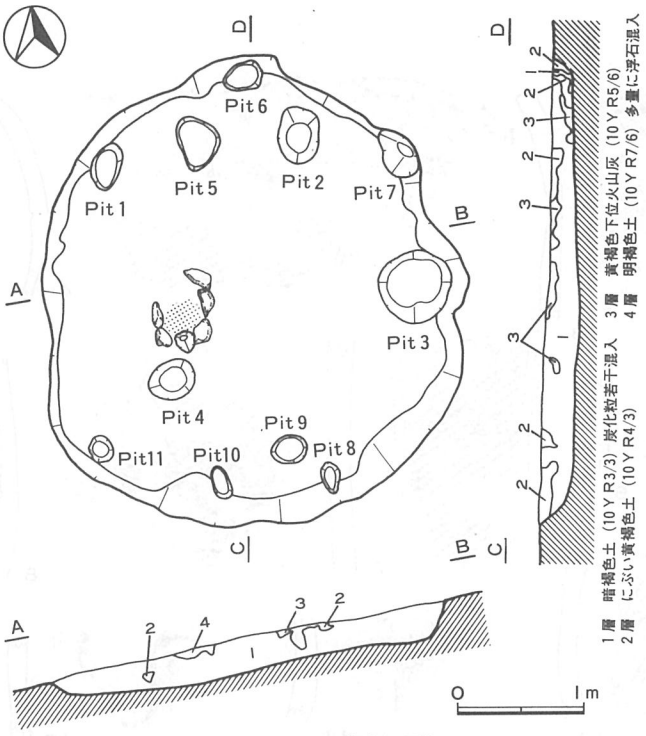
〈柱穴〉　本住居跡より８個のピットが検出された。このうちPit１・３・５・６・８を主柱穴とし，主軸上のPit１と軸線に対称な３対６個（Pit３・（未検出），Pit５・６，Pit８・（未検出））の計７個を基本とする柱配置が考えられる。また，Pit１・３・５・８の４個を主柱穴とする柱配置も考えられるが，主軸を考慮すると，未検出の柱穴があるとしても，前者の柱配置である可能性が強いと思われる。

第53号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

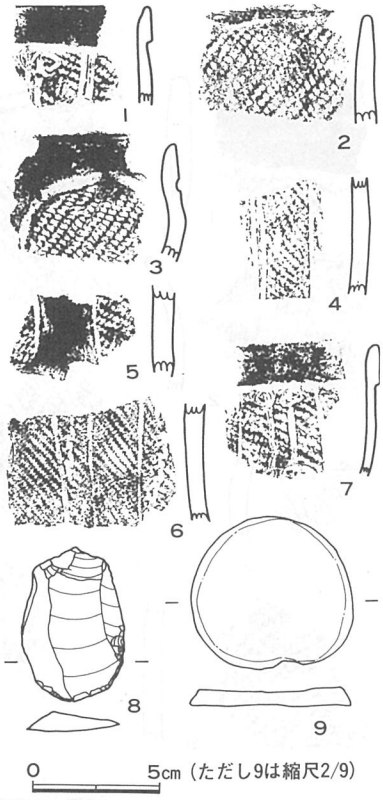
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	28×18	19×19	25×20	26×22	25×15	34×29	29×17	24×16
深　さ	19.7	50.5	22.6	29.3	30.0	25.3	20.0	20.0

〈炉〉　住居跡中心よりやや東寄りに位置する。半壊しているが，石囲部＋掘り込み部から成る1.08×0.90ｍの規模の石囲複式炉と考えられる。石囲部は，10～25cm大の自然石を50×41cmの横に長い楕円形に配し，炉内全域に最大1.2cmの厚さの橙色の焼土が確認された。掘り込み部は44×46cmの隅丸方形で，最下層に若干の炭化粒が混入している。

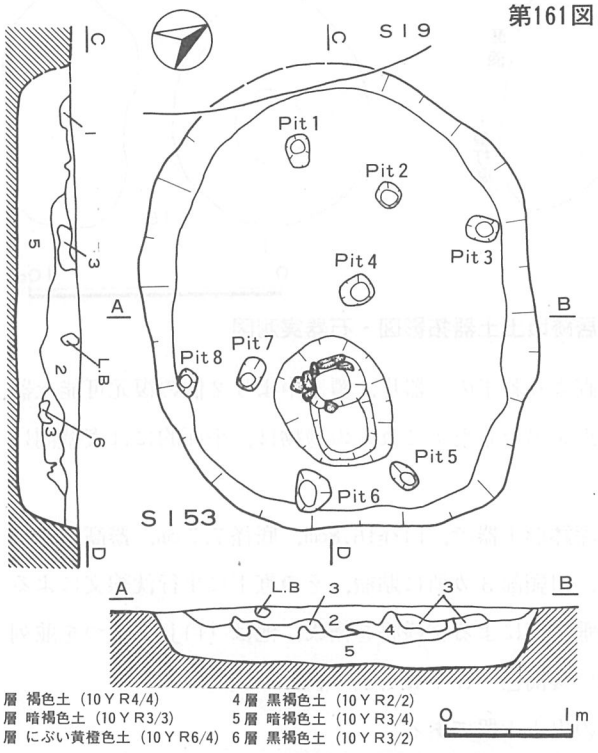
〈出土遺物〉　（第164図，400図４）



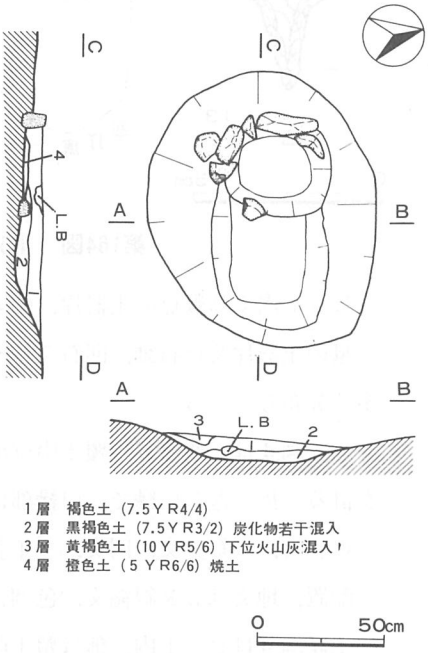
第160図　第52号竪穴住居跡実測図



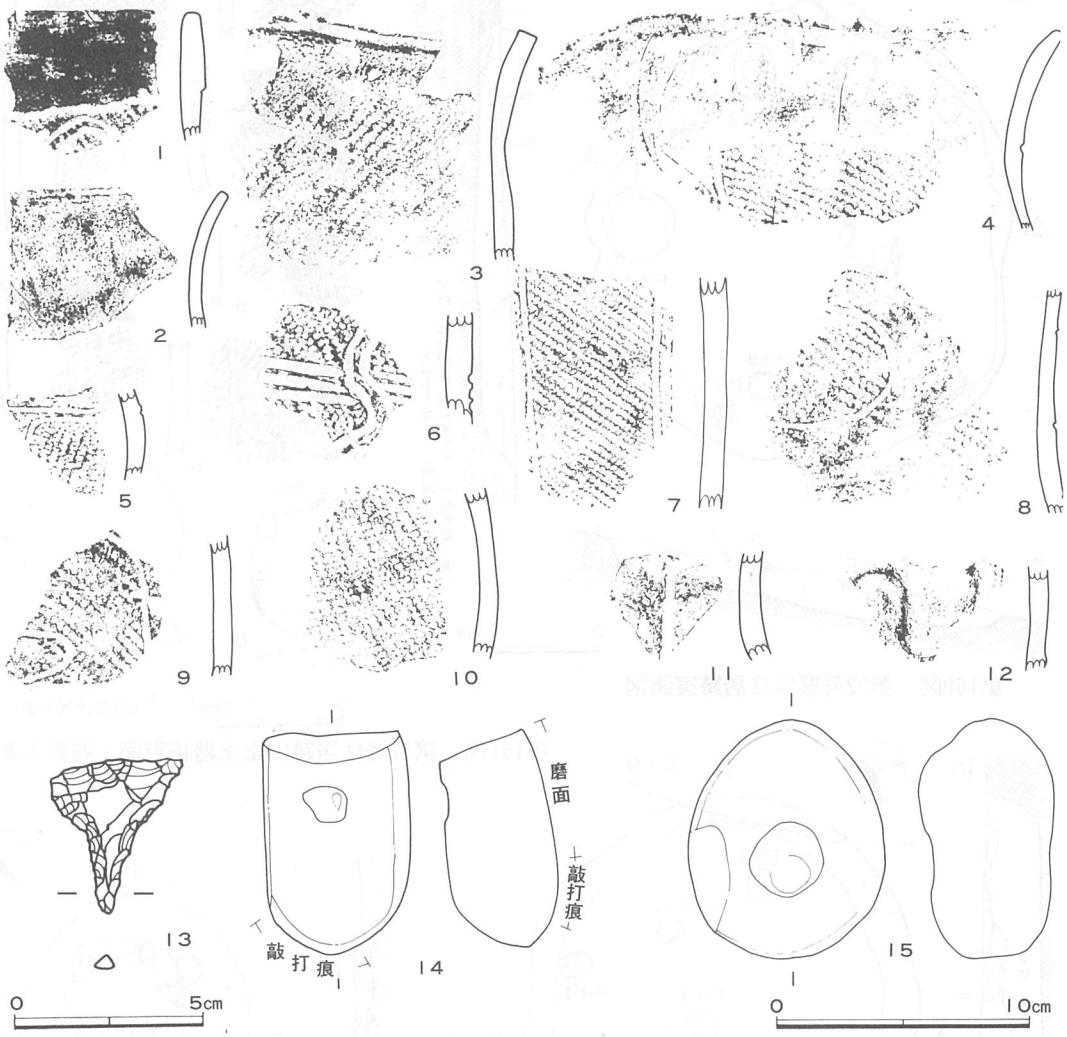
第161図　第52号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第162図　第53号竪穴住居跡実測図



第163図　第53号住居炉跡微細図



第164図　第53号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

ピット内より数点の土器片，床面，床直より若干の土器片，覆土中より２個の復元可能土器，少量の土器片及び石錐，凹石それぞれ１点を出土した。これらの遺物は，平面的には東壁側に多く分布している。

400図４は，北壁寄り覆土中位出土の深鉢形土器で，口径16.8cm，底径7.7cm，器高28.1cmを計る。折り返し口縁で，口縁部は無文，口頸部３カ所に貼瘤，その直下に平行沈線文による「U」文，「C」文，円文，「丫」状懸垂文等による文様帯を構成，他は「∩」文５つを並列に配置，地文はＬＲ斜縄文，色調はにぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）を呈する。

164図９はピット内，他は覆土中からの出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉～末葉（大木９～10式併行期）と考えられる。

第54号竪穴住居跡と出土遺物（第165～168図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のH－22・23グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。45号住居跡と重複，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　4.36×4.26ｍの円形を呈する。主軸方向はN－84°－E，床面積は11.92㎡である。

〈堆積土〉　3層に区分できる。1層を除き，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。床面全体が平坦で堅くしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層から成るが，北西壁が45号住居構築により消失している。東・南壁はほぼ垂直な，北・西壁はやや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁28cm，南壁36cm，北壁28cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より14個のピットが検出された。このうち，Pit 1または2・5・8・13・14を主柱穴とし，主軸線上のPit14と軸線に対称な2対4個（Pit 1または2・13，Pit 5・8）の計5個を基本とする柱配置と考えられる。

第54号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

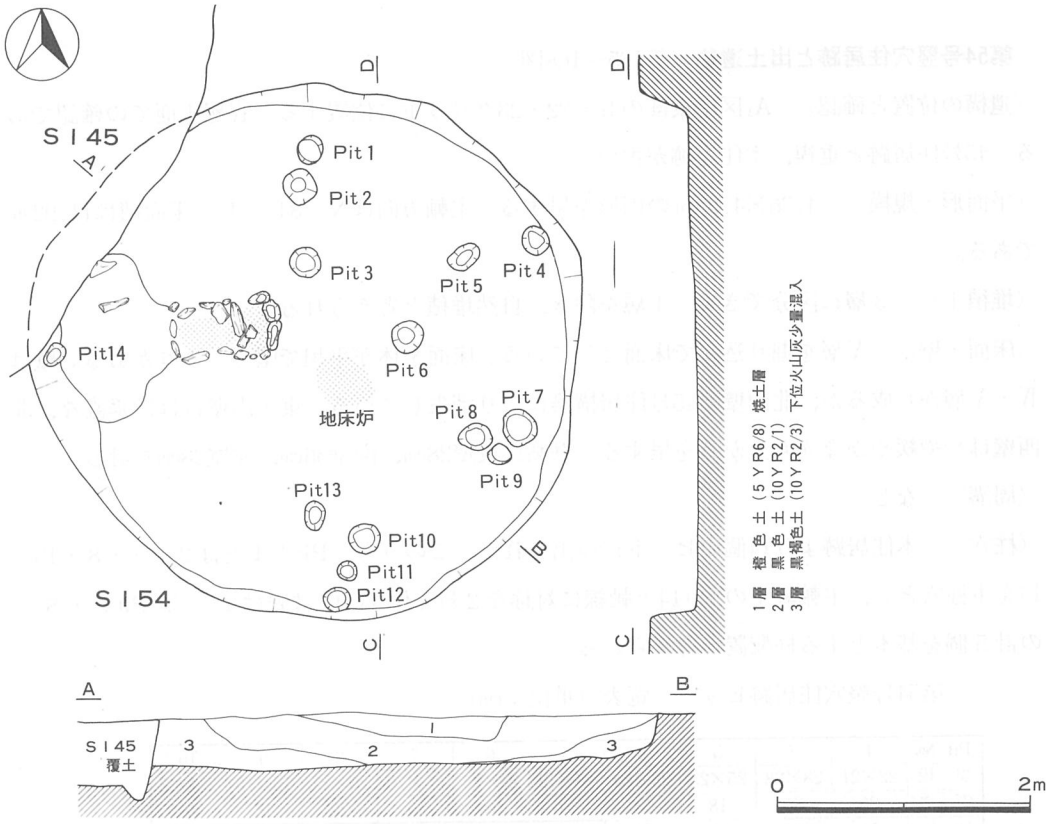
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	22×21	28×28	25×23	22×20	26×18	28×25	30×26	25×24	19×16	25×22
深　さ	20	36	18	34	31	9	14	29	15	10
Pit No.	11	12	13	14						
規　模	16×16	21×19	22×15	20×14						
深　さ	6	4	30	30						

〈炉〉　住居跡西壁に接する石囲複式炉と，ほぼ中央に位置する地床炉が確認された。石囲複式炉は，石囲部（Ⅰ）＋石囲部（Ⅱ）＋掘り込み部から成り，160×123cmの規模である。石囲部（Ⅰ）のほとんどの炉石は消失しているが，その掘り方から，6～25cm大の石を30×58cmの横に長い方形に配したもので，炉内一面が2～4cmの深さで焼土化している。石囲部（Ⅱ）は，8～31cm大の自然石を62×55cmの縦長の隅丸方形に配しており，石囲部（Ⅰ）と同様に，炉内一面が2～3cmの厚さで焼土化している。掘り込み部は，75×123cmの台形に近い形を呈する。また地床炉は，52×41cmの範囲で若干赤変（焼土化）している程度である。

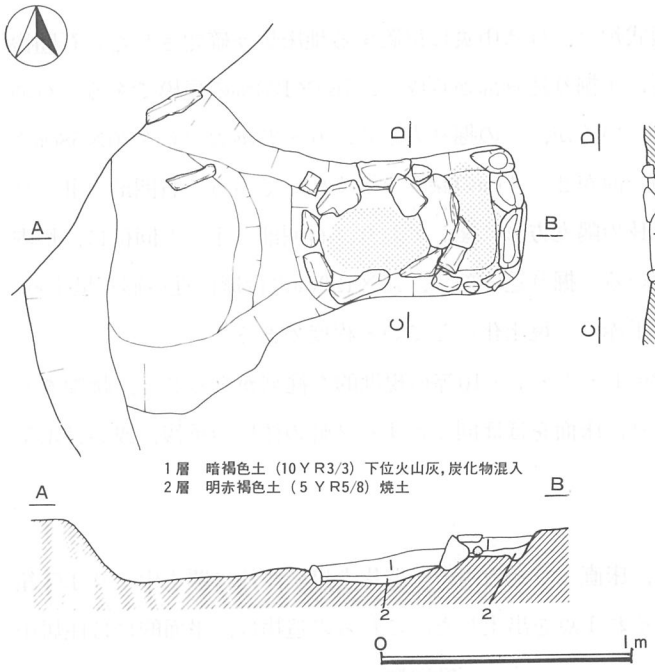
〈その他〉　前述の柱列の他に，Pit 1・4・7・10等の規則的な柱列があること，軸線を異にする2つの炉が存在すること等より，床面をほぼ同一とする2軒の住居の重複，或いは増築等が考えられる。

〈出土遺物〉　（第167，168図）

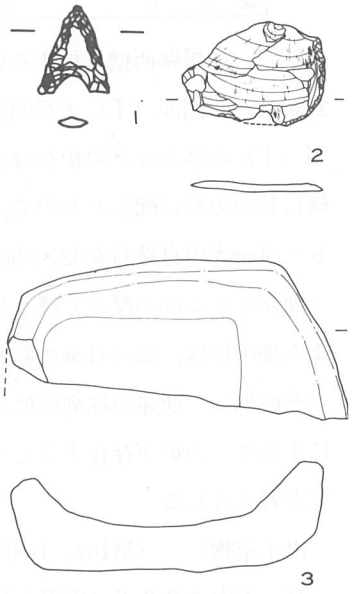
ピット内より3点，床面より5点，床直より10数点の土器片を出土，他に覆土中より1/2箱の土器片と，石鏃・掻器・石皿それぞれ1点を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央から東壁寄りに多く分布している。



第165図　第54号竪穴住居跡実測図

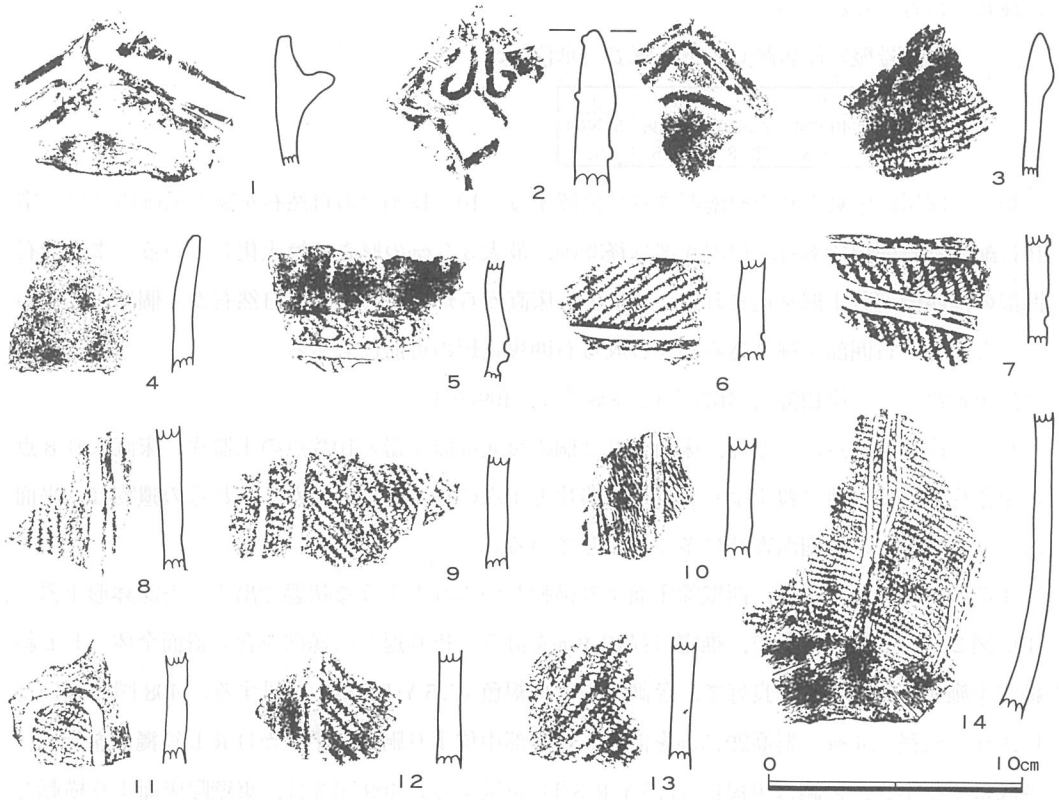


第166図　第54号住居炉跡微細図



第167図　第54号住居跡出土石器実測図

1の縮尺は1/2
2の縮尺は1/3
3の縮尺は2/9



第168図　第54号住居跡出土土器拓影図

168図13はピット内，4・10・12は床面，8は床直上からの出土土器である。

床面及び床直の出土土器から，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第55号竪穴住居跡と出土遺物（第123，125，407～409図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のF・G－23・24グリッドに位置する。Ⅴ層上面での確認である。南壁の一部で41号住居跡と重複する。平面プランで新旧関係はつかめず，また，セクションの設定が悪く，断面図からも判断できなかった。

〈平面形・規模〉　2.88×2.61mの円形を呈する。床面積は4.84㎡である。

〈堆積土〉　2層に区分でき，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。壁はⅤ層より成り，やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁21.9cm，西壁31.5cm，南壁24.8cm，北壁27.2cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より4個のピットが検出されたが，遺構の周辺に攪乱が多く，Pit 7・9

は柱穴とは考えられない。

第55号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	6	7	8	9
規　模	40×34	52×50	48×36	58×60
深　さ	43.8	22.8	22.5	15.3

〈炉〉　住居跡中央よりやや南西寄りに位置する。10～18cm大の自然石を58×54cmの「U」字状に配した石囲炉である。炉内底部は径38cm，最大3.5cmの厚さで焼土化している。また，石囲部の南西側が若干掘り込まれていること，床直から炉石と思われる自然石が4個出土していることから，石囲部＋掘り込み部から成る石囲複式炉の可能性もある。

〈出土遺物〉　（第125図，407図9，408図2，409図3）

ピット内より5点の土器片，床面より3個の復元可能土器と10数点の土器片，床直より8点の土器片を出土，他に覆土より少量の土器片と1点の掻器を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央から南西寄りに多く分布している。

407図9，408図2は，西壁際床面より横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で，407図2は折り返し口縁で，推定口径19.9cmを計る。折り返し口縁部を含む器面全体にRL斜縄文を施文，焼成はやや良好で，色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。408図2は口径19.9cm，底径7.4cm，器高29.5cmを計る。口縁部中位より胴部下半にかけRL斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。409図3は，東壁際床面より横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で，口径21.3cm，底径6.5cm，器高27.8cmを計る。器面にはLR斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。

125図4は床面，他は覆土中からの出土土器である。

床面からの出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第56号竪穴住居跡と出土遺物（第169，170図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のG・H－24グリッドに位置する。Ⅳ層上面で遺構の存在を確認したが，Ⅳ層にまで攪乱が及んでおり，プラン確認にはⅤ層上面まで下げた。

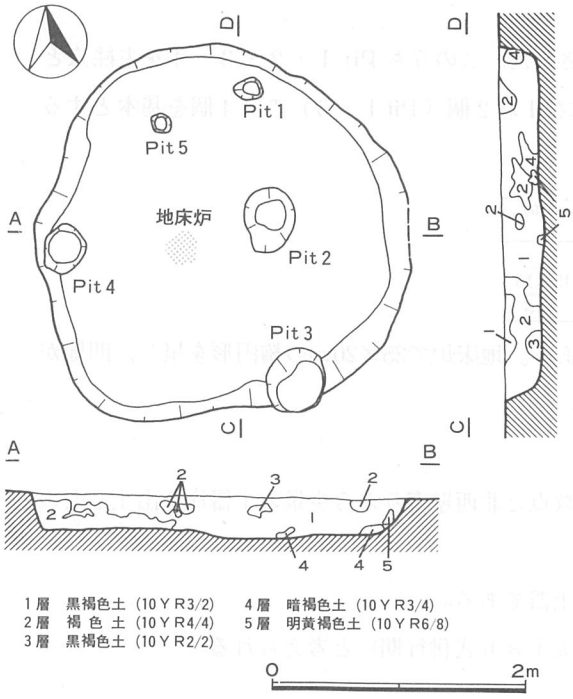
本住居跡の北西側に41号住居跡，西側に54号住居跡が存在する。

〈平面形・規模〉　2.88×2.81mの不整円形を呈する。床面積は5.60㎡を計る。

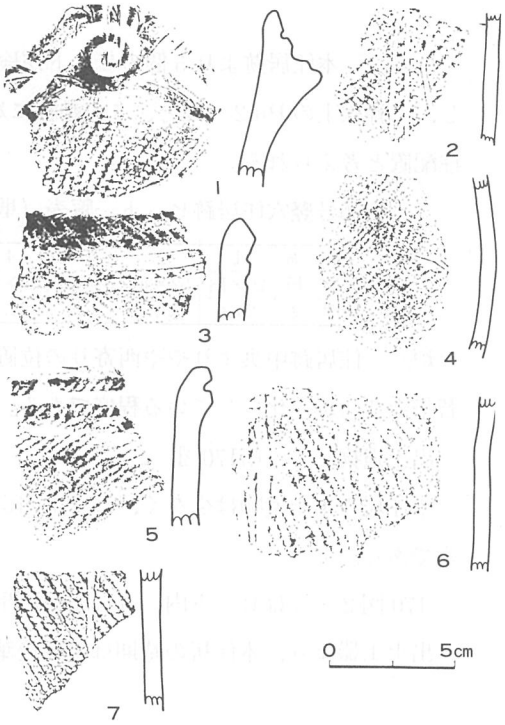
〈堆積土〉　5層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，地床炉の周辺の床が特に堅く，しまりがある。南西壁がやや緩い立ち上がりを，他の壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は，北東壁28.9cm，北西壁29.6cm，南西壁29.0cm，南東壁32.9cmを計る。

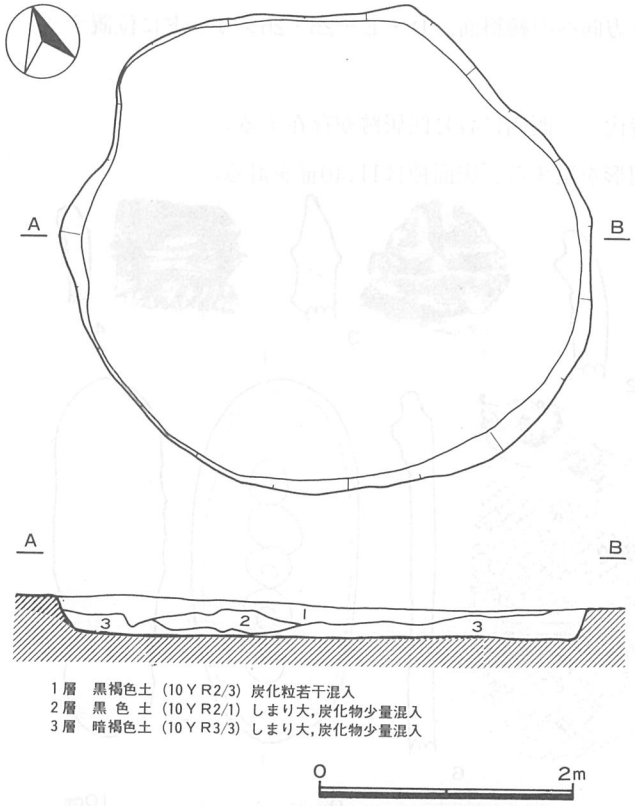
〈周溝〉　なし



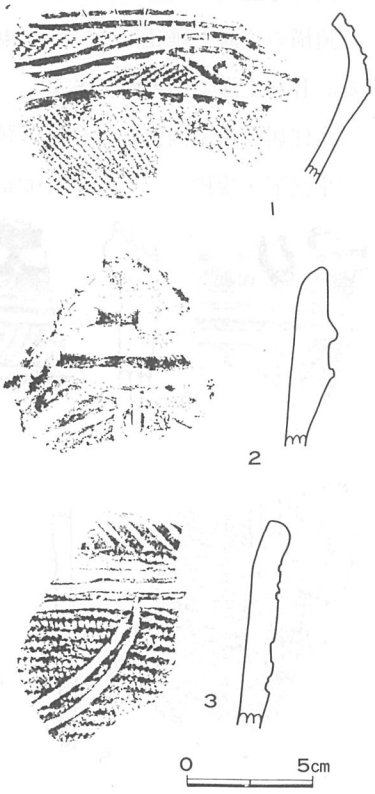
第169図　第56号竪穴住居跡実測図



第170図　第56号住居跡出土土器拓影図



第171図　第57号竪穴住居跡実測図



第172図　第57号住居跡出土土器拓影図（1）

〈柱穴〉　本住居跡より５個のピットが検出された。このうちPit１・２・３・４を主柱穴とし，主軸線上のPit２・４と，この軸線に対称な１対２個（Pit１・３）の計４個を基本とする柱配置と考えられる。

第56号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5
規　模	20×18	52×40	54×49	40×34	15×15
深　さ	29.4	35.2	26.5	24.7	16.0

〈炉〉　住居跡中央よりやや西寄りの位置にある。地床炉で25×20cmの楕円形を呈し，凹地が若干赤変（焼土化）している程度である。

〈出土遺物〉　（第170図）

本住居の出土遺物は少なく，ピット内より数点と北西壁寄りから少量の土器片を出土したのみである。

170図２・４はピット内，６は床面の出土土器である。

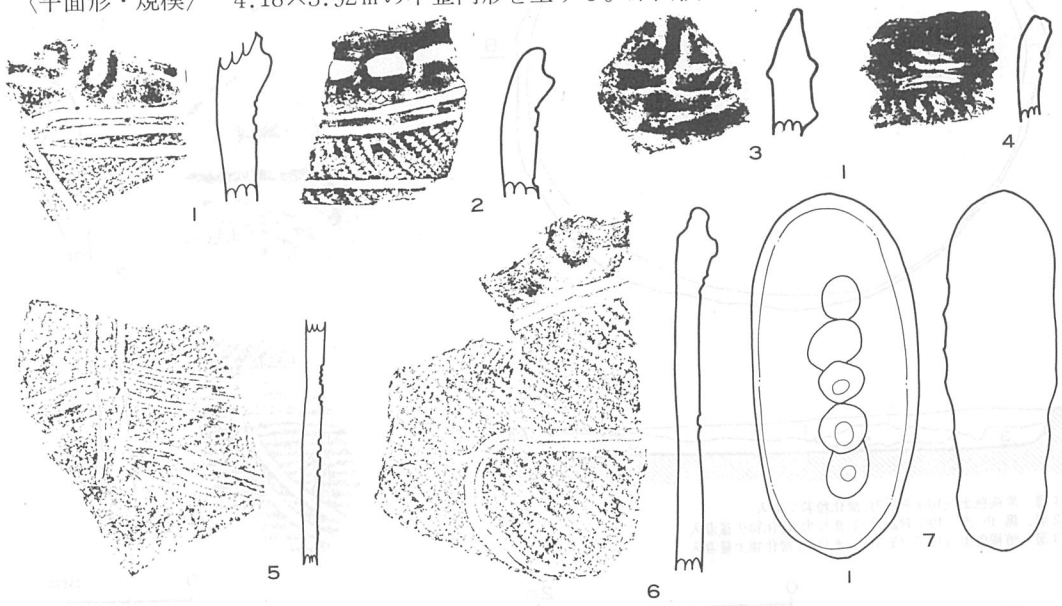
出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第57号竪穴住居跡と出土遺物（第171～173図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部の北東方向への緩斜面，Ｄ・Ｅ―25・26グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。

本住居跡の南西側に２号住居跡（歴史時代），西側に47号住居跡が存在する。

〈平面形・規模〉　4.18×3.92ｍの不整円形を呈する。床面積は11.40㎡を計る。



第173図　第57号住居跡出土土器拓影図（２）・石器実測図

〈堆積土〉　3層に区分でき，自然堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまりがある。北壁はⅢ層，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。壁高は東壁16.6cm，西壁29.9cm，南壁28.9cm，北壁17.1cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　確認できなかった。

〈炉〉　検出できなかった。

〈出土遺物〉　（第172，173図）

床面より1個の復元可能土器，数点の土器片，1点の凹石，床直より1個の復元可能土器と数点の土器片を出土，他に覆土より少量の土器片を出土した。

172図1・3，173図1・5・6は床面，172図2，173図4は床直上の出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層e式併行期）と考えられる。

第58号竪穴住居跡と出土遺物（第174～178，401，402，404，408，421，423，427図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南部のE・F・G－18・19・20グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。9・84・102号住居跡，51～55・126号土壙と重複する。本住居跡は9号住居跡より古く，84・102号住居跡，51・52・54・55・126号土壙より新しいと考えられる。また53号土壙との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉　12.48×8.00mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN－75°－W，床面積は，79.84㎡を計る。

〈堆積土〉　7層に区分でき，自然堆積と考えられる。

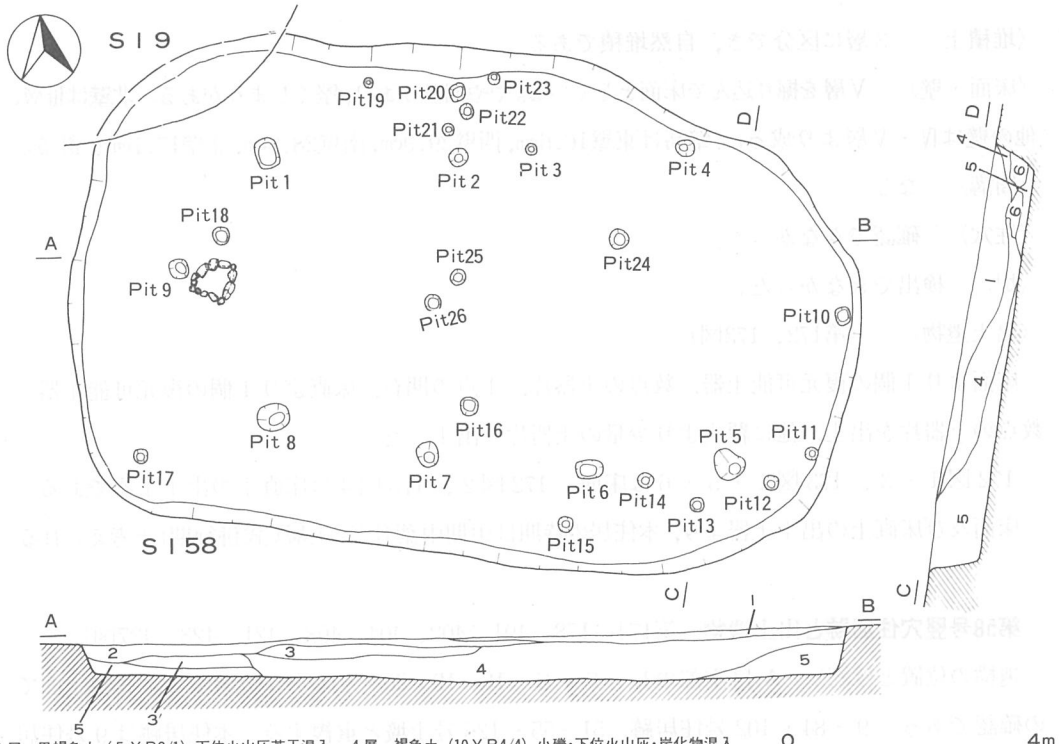
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，ややしまりがある。南壁の一部は84号住居跡覆土，他の壁はⅣ・Ⅴ層から成る。北壁の一部は，9号住居構築により消失している。壁高は東壁71.8cm，西壁46.8cm，南壁68.9cm，北壁46.7cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より26個のピットが検出された。このうちPit 1・2・5～8を主柱穴とし，主軸線に対称な4対8個（Pit 1・8，Pit 2・7，Pit 5・（未検出），Pit 6・（未検出））を基本とする柱配置と考えられる。また，西壁を除く3壁より壁柱穴と考えられるピット（Pit 4・10～13・15・17・19・23）が検出された。

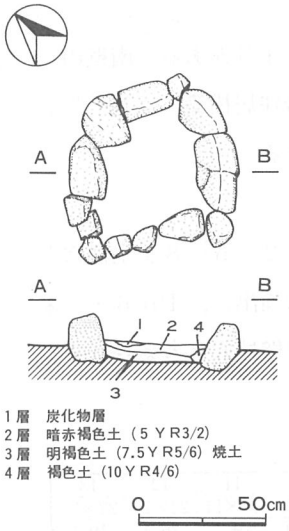
第58号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	50×36	27×26	16×15	25×20	46×40	41×30	38×35	51×42	29×29	27×19	16×14	22×20	22×22
深　さ	79.8	22.6	28.6	32.9	49.8	45.5	54.6	43.8	47.3	16.9	29.7	26.4	19.1
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
規　模	24×22	45×43	32×25	21×20	25×24	13×11	25×22	16×14	23×16	16×14	27×26	24×21	25×21
深　さ	38.0	49.5	50.9	35.9	19.1	32.5	35.0	32.5	21.0	29.7	23.7	45.7	37.7



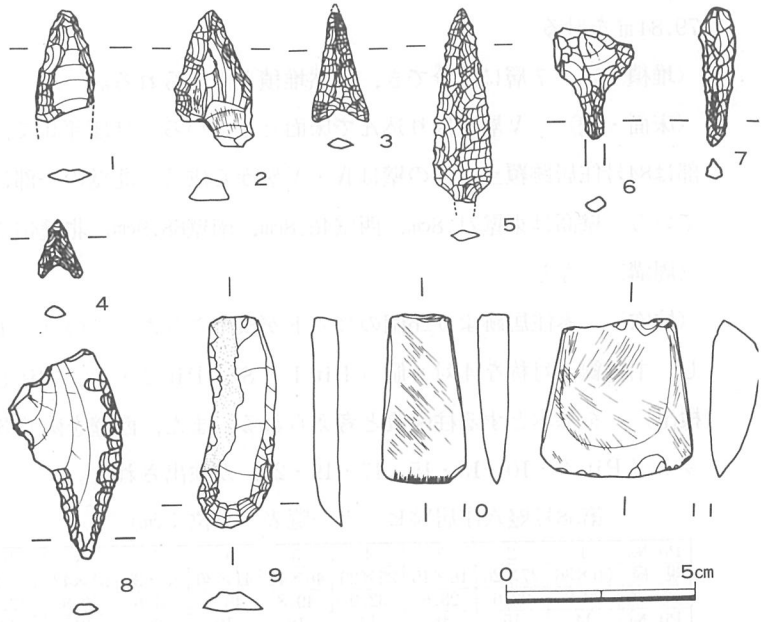
1層　黒褐色土（5 Y R2/1）下位火山灰若干混入
2層　黒褐色土（7.5Y R 3/2）下位火山灰少量混入
3層　褐色土（7.5Y R4/4）炭化物若干混入
3′層　にぶい黄橙色土（10Y R6/4）
4層　褐色土（10Y R4/4）小礫・下位火山灰・炭化物混入
5層　暗褐色土（10Y R3/3）下位火山灰・炭化物若干混入
6層　黄褐色土（10Y R5/8）下位火山灰

第174図　第58号竪穴住居跡実測図

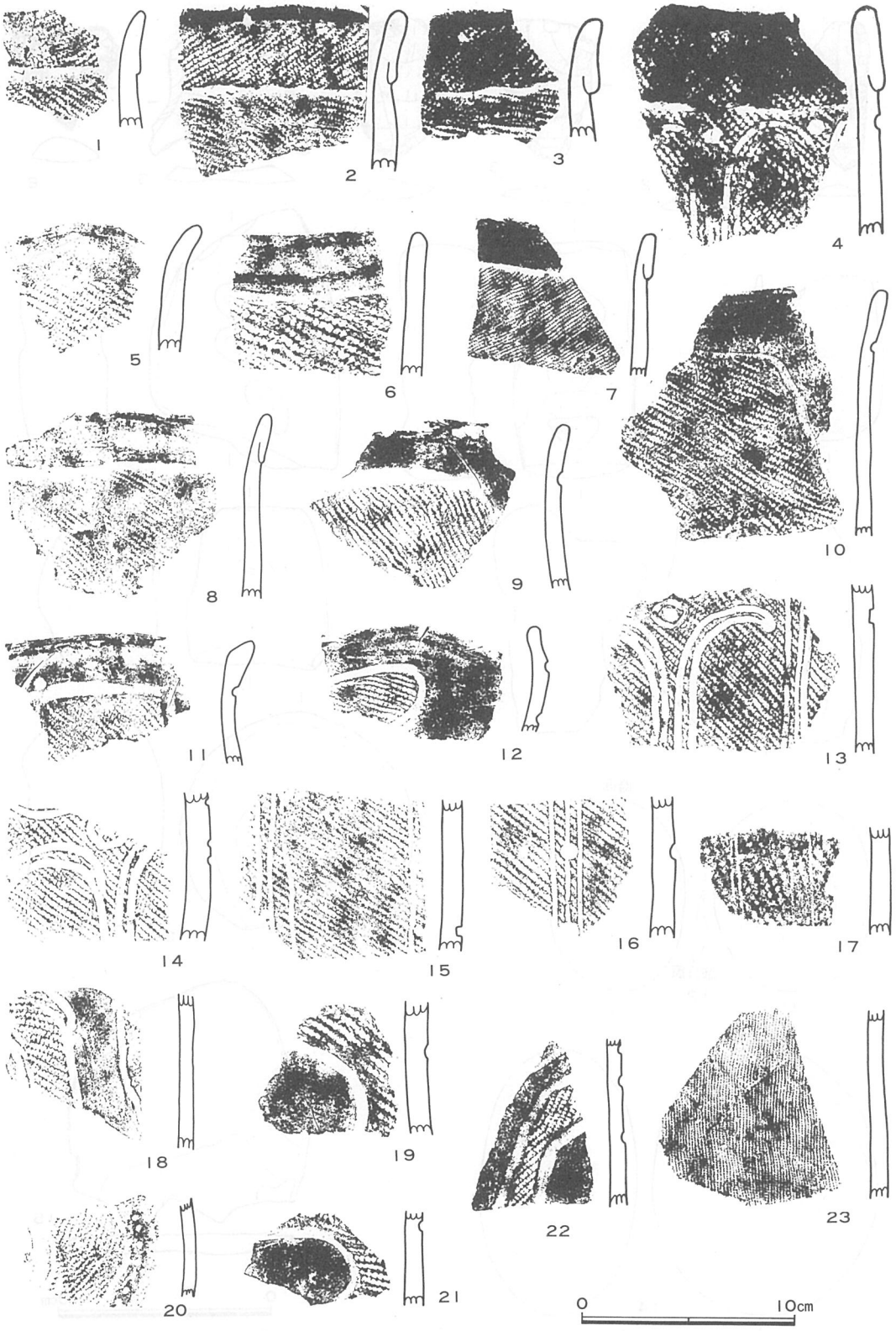


1層　炭化物層
2層　暗赤褐色土（5 Y R3/2）
3層　明褐色土（7.5Y R5/6）焼土
4層　褐色土（10Y R4/6）

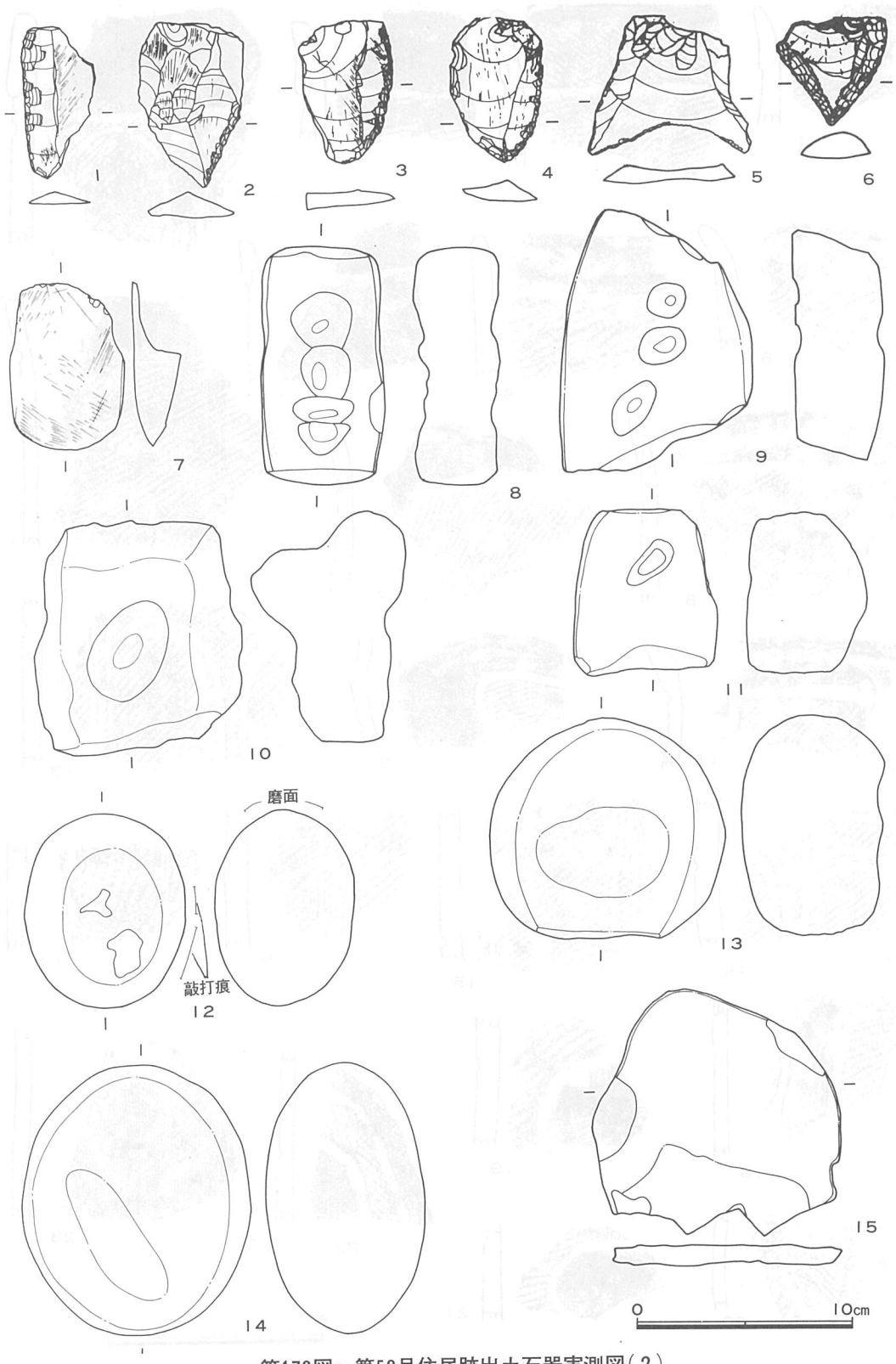
第175図　第58号住居炉跡微細図



第176図　第58号住居跡出土石器実測図（1）



第177図　第58号住居跡出土土器拓影図



第178図　第58号住居跡出土石器実測図(2)

〈炉〉　住居跡主軸線上西壁際に位置する。7～31cm大の自然石を68×67cmの方形に配した石囲炉である。炉内ほぼ全域に3～4cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉　（第176～178図，401図2・7・24，402図11，404図11，408図5，421図10，423図23，427図7）

床面より75点の土器片と1点の掻器・磨製石斧・有孔石製品，床直より3個の完形及び復元可能土器，65点の土器片，1点の石箆・磨製石斧・凹石，3点の磨石を出土した。他に覆土中より5個の復元可能土器，3箱の土器片，1点の石皿・ペンダント・円盤状土製品，2点の磨石・凹石，3点の石錐，5点の石鏃，6点の掻器を出土した。

401図2は，南壁際床直出土の小型鉢形土器または深鉢形土器と思われる土器の胴下半部で，底径4cmを計る。無文の土器で，焼成は良好，色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。386図7は住居中央床直出土の完形土器で，無頸の壺または内傾する鉢とも言える無文のミニチュア土器である。口径2.5cm，底径4.5cm，器高3.5cmを計る。焼成は良好で，色調は橙色（7.5YR7/6）を呈する。401図24は，東壁際覆土中位出土の完形土器で，小型壺に近い形態を呈し，口径5.0cm，底径4.5cm，器高8.0cmを計る。器面全体にLR斜縄文を施文，焼成は良好で，色調は橙色（5YR6/6）を呈する。

402図11は，住居中央部覆土中位出土の，4つの波状口縁の広口壺に近い土器で，口径12.3cm，底径6.4cm，器高10.4cmを計る。口縁部は無文，胴部にはRL斜縄文を施文，焼成はやや良好，色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。404図11は，南東壁際床直上出土の小型深鉢形土器で，底径4.8cmを計る。器面にはLR斜縄文を施文し，焼成は良好で，色調は灰白色（10YR8/1）を呈する。408図5は，覆土中位出土の深鉢形土器で，口径23.7cm，底径10.3cm，器高44.6cmを計る。器面にはLR斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。

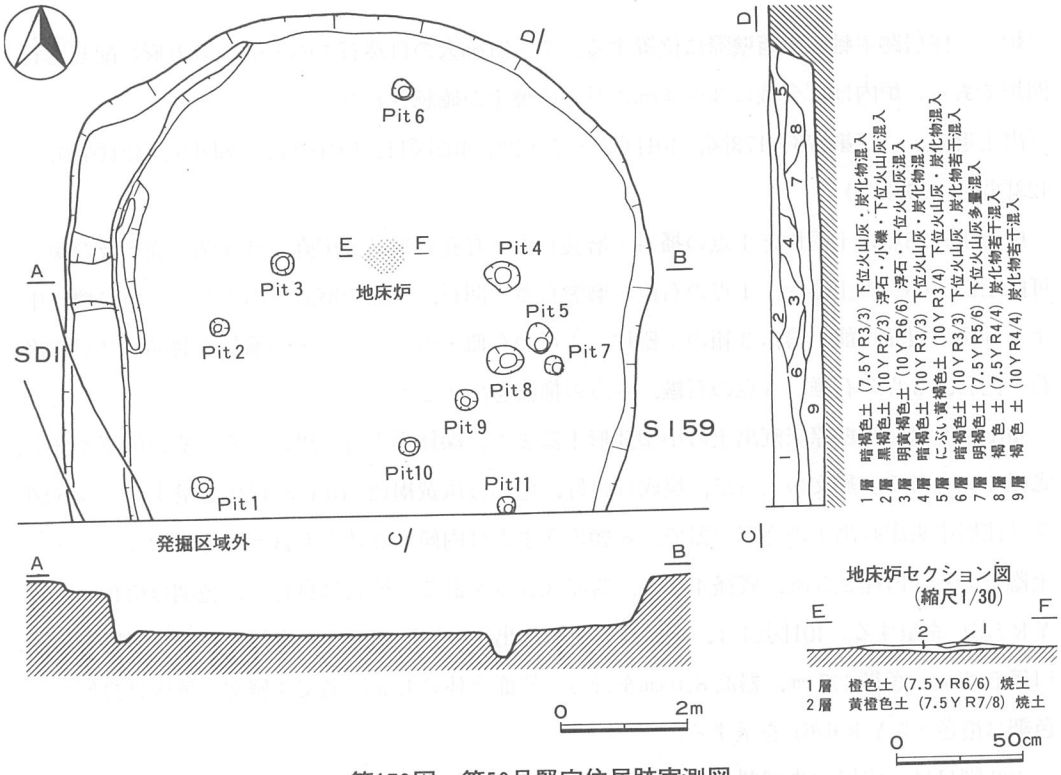
177図1・2・11・14・17・19・21は床面，177図5・7・8・10・12・13・16・18・20・22・23は床直の出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉～末葉（大木9～10式併行期）と考えられる。

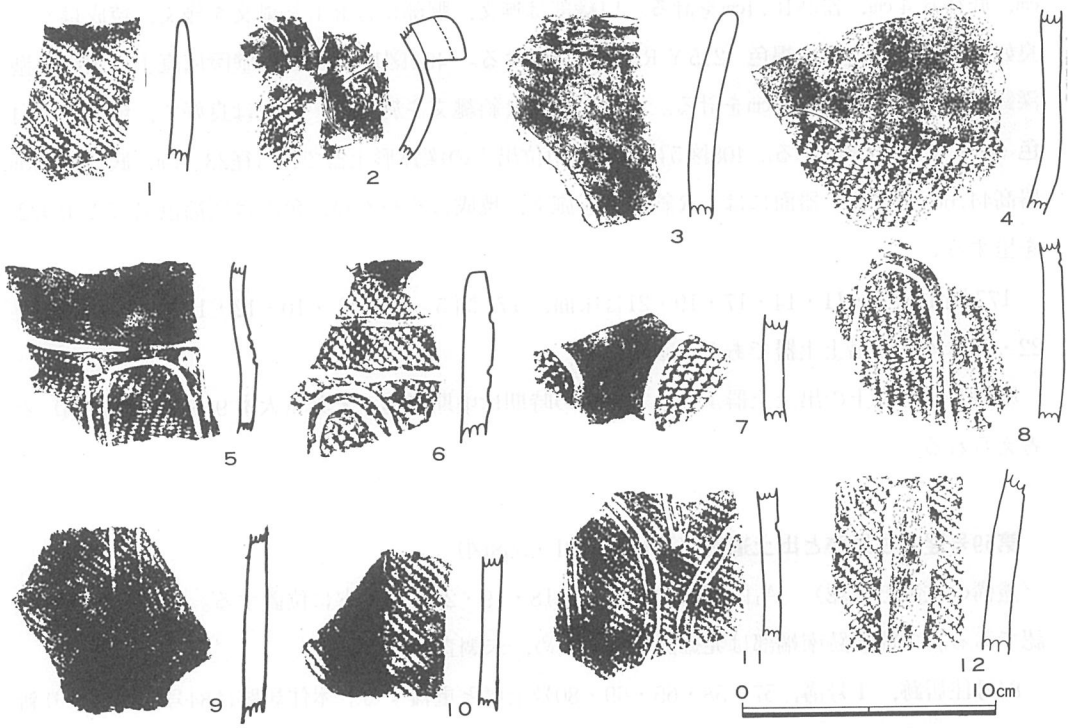
第59号竪穴住居跡と出土遺物（第179～181・398図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南部のG・H－18・19・20グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡南端部は発掘区域外のため，未調査である。

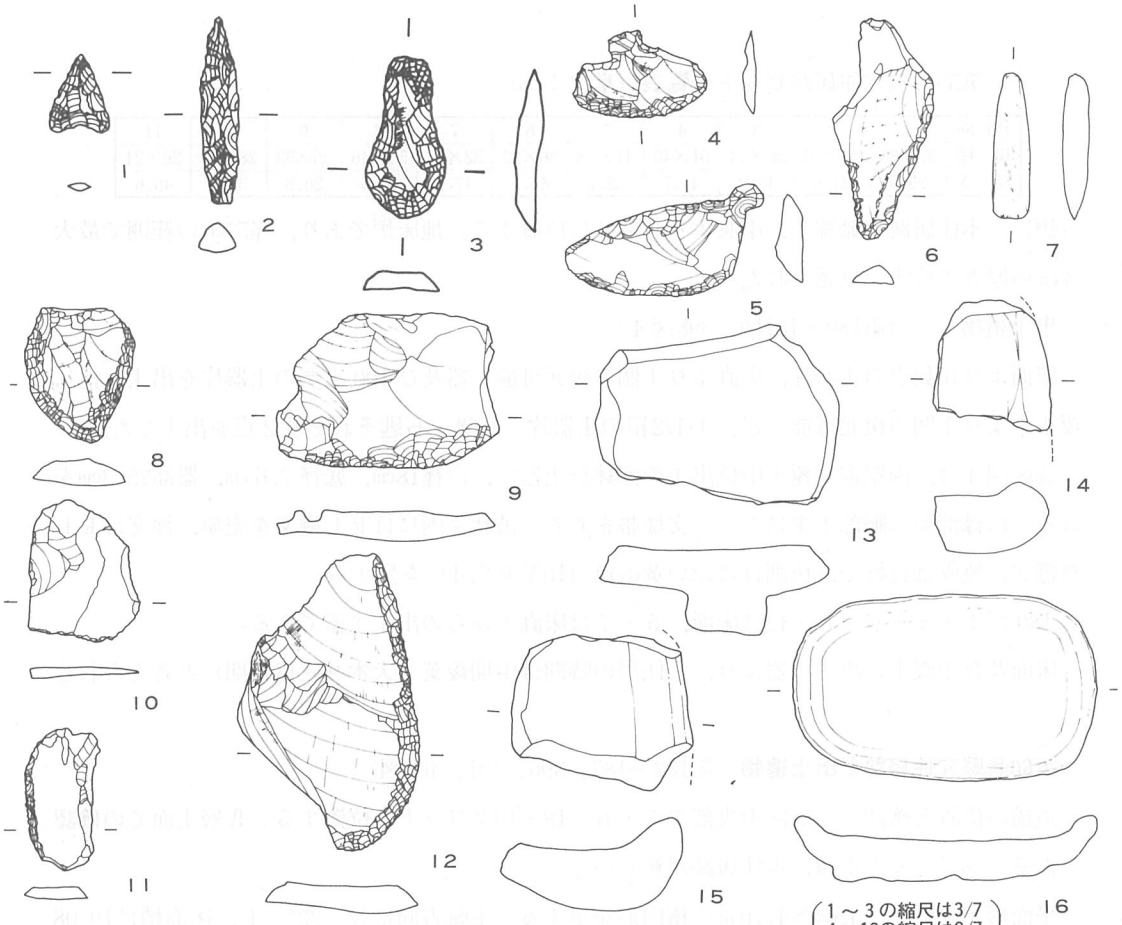
84号住居跡，1号溝，57・58・65・69・80号土壙と重複する。本住居跡は84号住居跡より新しく，1号溝より古い。また，57・65・69号土壙より新しいと考えられる。



第179図　第59号竪穴住居跡実測図



第180図　第59号住居跡出土土器拓影図



1～3の縮尺は3/7
4～12の縮尺は2/7
13～16の縮尺は4/21

第181図　第59号住居跡出土石器実測図

〈平面形・規模〉　短軸を9.28mとする円形または楕円形を呈すると考えられ，主軸方向はN－3°－Eである。

〈堆積土〉　9層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは西壁際に位置し，その規模は60～80cmの幅で，床面から35～45cmの高さにあるが，一部がさらに一段高く，60cmの幅で，床面から55～60cmを計る。このテラス面から西壁の確認面までの高さは24cm，他の壁の壁高は東壁82.4cm，北壁72cmを計る。北壁の重複部分は84号住居跡覆土及びV層，他の壁はⅣ・V層より成り，やや急な立ち上がりを呈する。床面はほぼ平坦で，しまりは弱い。

〈周溝〉　前述の西壁際に位置する上段テラス下に幅28cm，深さ13～45cm，長さ272cmの周溝が検出された。上段テラスとの関連が考えられる。

〈柱穴〉　11個のピットが検出された。全掘に至らず推測の域を出ないが，Pit 1～6・11を主柱穴とし，主軸線に対称な3～4対の6～8個を基本とする柱配置と考えられる。

第59号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	32×30	26×26	36×34	51×40	44×38	36×32	32×26	56×46	35×33	28×26	26×24
深　さ	25.8	23.8	43.2	41.7	52.7	43.4	47.7	53.6	26.8	36.3	40.6

〈炉〉　本住居跡主軸線上，中央より北寄りに位置する。地床炉であり，径57cmの範囲で最大3cmの厚さで焼土が確認された。

〈出土遺物〉　（第180・181図，398図4）

床面より10数点の土器片，床直より1個の復元可能土器及び100点弱の土器片を出土，他に覆土中より1個の復元可能土器，1·1/2箱の土器片と石鏃・石匙それぞれ2点を出土した。

398図4は，南壁寄り覆土中位出土の深鉢形土器で，口径18cm，底径7.6cm，器高25.3cmを計る。口縁部から胴部上半にかけて文様帯をもち，波状文内にはＲＬ縄文を充塡，地文はＲＬ斜縄文，焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）を呈する。

180図1・4・6・8・12は床面，5・7は床直上からの出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第60号竪穴住居跡と出土遺物（第182～185，396，401，402図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区中央部のＡ・Ｂ－18・19グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。38号土壙と重複，本住居跡が新しい。

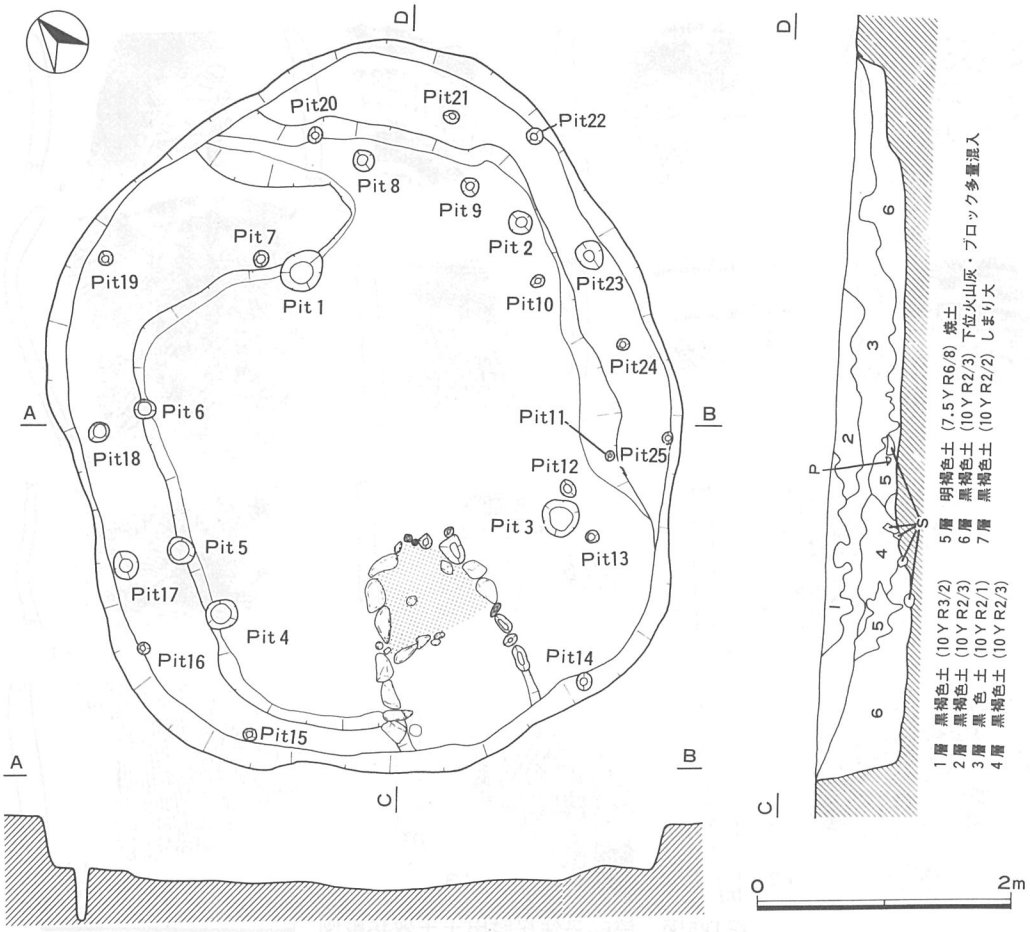
〈平面形・規模〉　5.64×4.70ｍの楕円形を呈する。主軸方向はＮ－22°－Ｅ，床面積は19.08㎡を計る。

〈堆積土〉　7層に区分でき，自然堆積と考えられる。

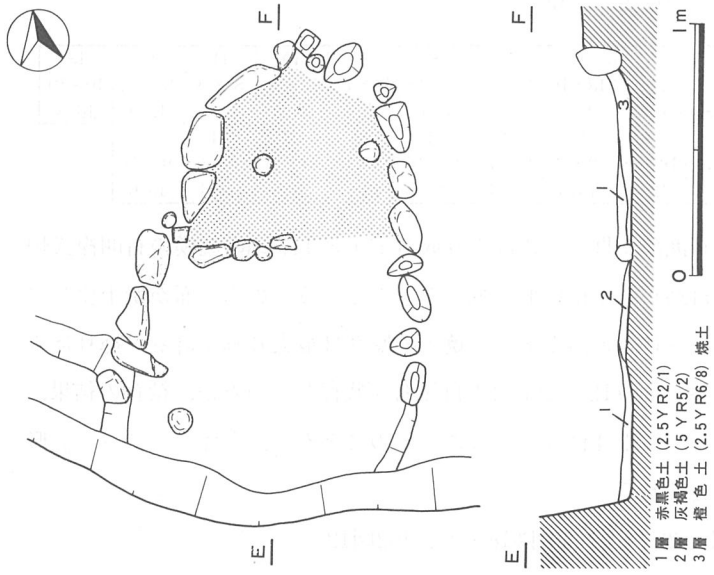
〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともⅤ層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは，炉跡部及び南壁東側を除きほぼ一巡し，30～98cmの幅で，床面から約8～15cmの高さにある。壁高は東壁37.8cm，西壁58.9cm，南壁50.9cm，北壁31.0cmを計る。床面はほぼ平坦で堅くしまっているが，テラス面は，床面ほど堅くはない。テラスと床との境界にはピットが一巡するが，Pit 13をこれらのピットと同様のものと考えるならば，南東壁際のテラス部分を掘り過ぎたとも考えられる。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，急な立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　なし

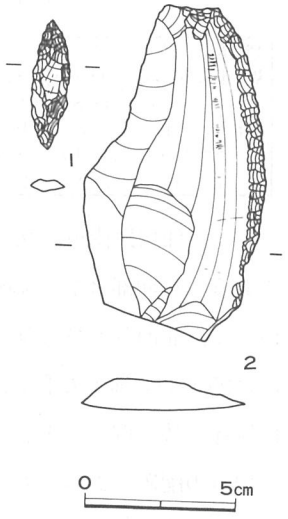
〈柱穴〉　本住居跡より25個のピットが検出された。このうちPit 1・2・3・4・6を主柱穴とし，主軸線上のPit 1と，軸線に対称な2対4個（Pit 2・6，Pit 3・4）の計5個を基本とする柱配置と考えられる。北東壁が若干掘り過ぎの傾向があり，Pit 14～25が壁柱穴と考えられる。また，主柱穴の他Pit 5・7・9～11等が，炉跡を除き壁際にほぼ一巡するテラスとの境界に位置することから，間仕切りが想定される。



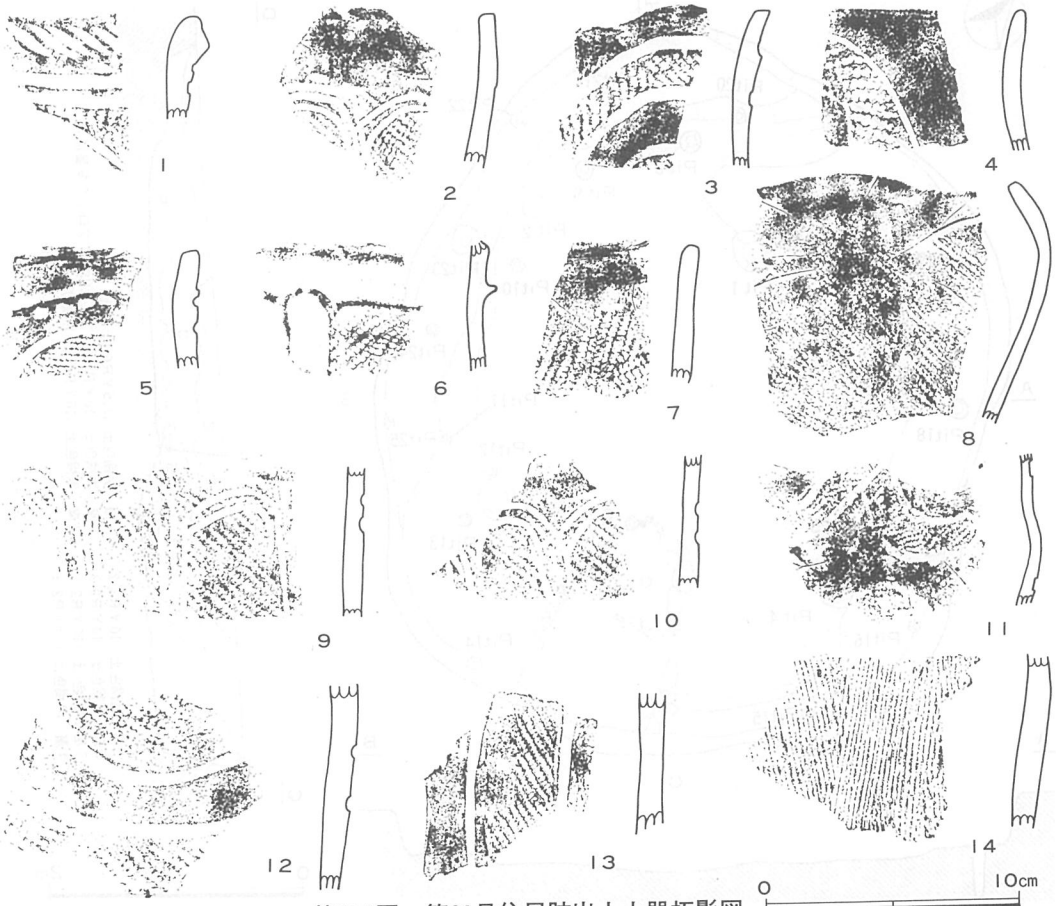
第182図　第60号竪穴住居跡実測図



第183図　第60号住居炉跡微細図



第184図　第60号住居跡出土石器実測図



第185図　第60号住居跡出土土器拓影図

第60号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	36×30	19×19	30×29	26×24	24×21	18×16	14×13	19×18	14×14	12×10	8×8	16×12	10×10
深　さ	57.6	18.8	43.5	29.8	12.2	21.0	14.0	14.6	20.4	24.8	12.2	19.9	16.5
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
規　模	14×13	11×10	10×10	23×21	18×16	12×12	12×12	12×10	13×13	24×21	10×9	9×9	
深　さ	16.6	23.9	12.3	24.5	42.8	16.3	17.4	9.3	13.2	26.5	8.3	13.6	

〈炉〉　住居跡南壁に接する。石囲部＋掘り込み部より成る174×117cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は7～33cm大の自然石を半楕円形に配したものである。炉内一面が焼土化しているが，北西部が特に強く火熱を受けた痕跡がある。焼土の厚さは最大6cmを計る。掘り込み部は95×117cmの方形で，片側縁にのみ12～22cm大の自然石が残存していたが，精査の結果，他側縁に抜き取り痕と思われるピットが4個検出された。このことから，全体として「A」形の炉石の配置であったものと考えられる。

〈出土遺物〉　（第184・185図，396図4，401図16・27，402図12）

床面より3個の完形及び復元可能土器，11点の土器片，1点の掻器，床直より20数点の土器

片を出土，他に覆土中より２個の復元可能土器，2/3箱の土器片，１点の石鏃を出土した。

396図４は，住居中央床面出土の，３つの波状口縁，頸部をもつ深鉢形土器で，口径11.7cm底径5.0cm，器高15.5cmを計る。口縁部から胴部上半に文様帯をもち，口縁部の形状と一致するように横位沈線文，連続刺突文，波状文を，頂部下の口頸部及び胴部上半には「L」状文を施文し，地文は無方向のＬＲ縄文，焼成はやや良好で，色調は灰黄褐色（10ＹＲ4/2）を呈する。401図16は，覆土中位出土の小型鉢形土器で口径５cm，底径1.7cm，器高4.2cmを計る。器面にはＲＬ斜縄文を施文，胎土には小礫を混入，焼成は良好，色調は褐灰色（10ＹＲ5/1）を呈する。401図27は，北西壁寄り床面出土の小型壺形土器で，底径6.3cmを計る。器面にはＬＲ斜縄文を施文，焼成は良好で，色調は淡黄色（2.5Ｙ 8/4）を呈する。402図12は，住居中央付近床面出土の，広口壺に近い鉢形土器で，底径4.4cmを計る。口縁部は無文，胴部にはＲＬ斜縄文を施文，焼成はやや良好で，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ5/4）を呈する。

185図３・７・９～12は，床直上からの出土土器である。

床面の出土土器より，本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

第61号竪穴住居跡と出土遺物（第186～188，401図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区中央部のＣ・Ｄ－19・20グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。１号溝と重複，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　4.68×4.44ｍの円形を呈する。主軸方向はＮ－78°－Ｗ，床面積は11.88㎡を計る。

〈堆積土〉　５層に区分でき，人為堆積と考えられる。６・７・８層は貼床土である。

〈床面・壁〉　凹凸のあるレンズ状の掘り方の底部に土を入れ，踏み固めて貼床としている。貼床は西壁際から東側の炉跡周辺に施されるが，ほぼ平坦で堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁48.3cm，西壁78.4cm，南壁77.7cm，北壁61.7cmを計る。

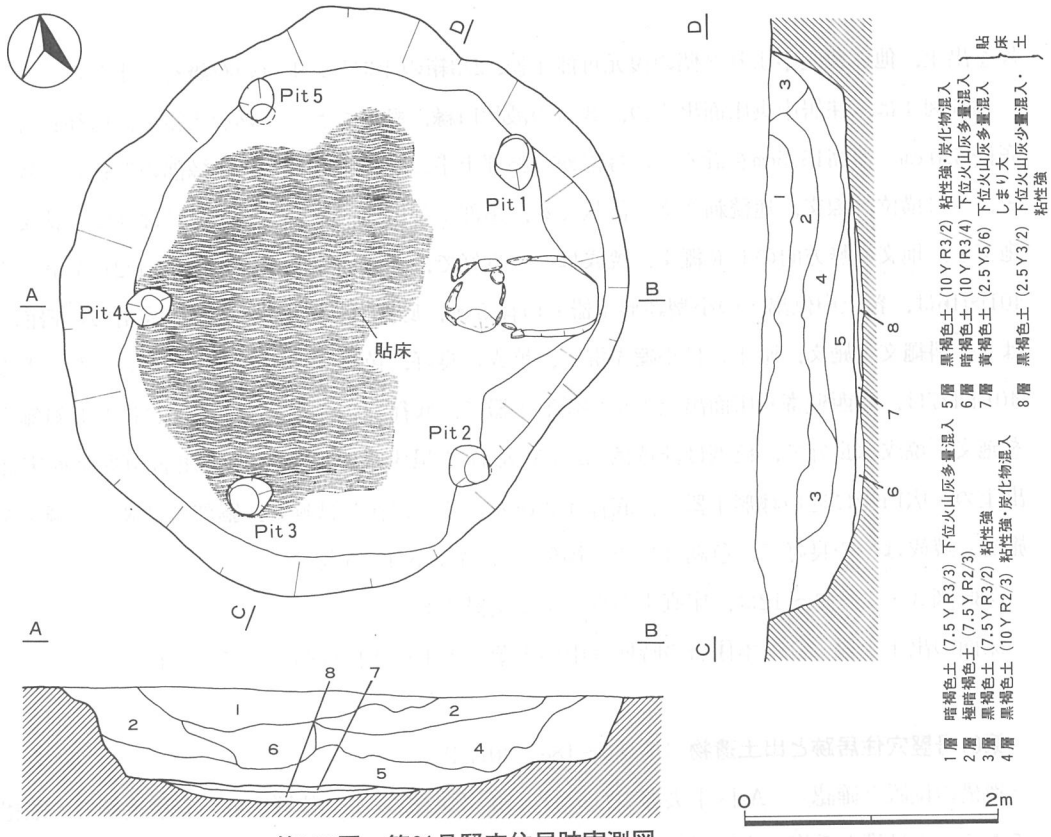
〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡から５個のピットが検出された。規模・深さ及び配置から，これらの５個を主柱穴とし，主軸線上のＰit４，軸線に対称な２対４個（Pit１・２，Pit３・５）という柱配置と考えられる。いずれも壁際で，ほぼ等間隔の五角形状の配列である。

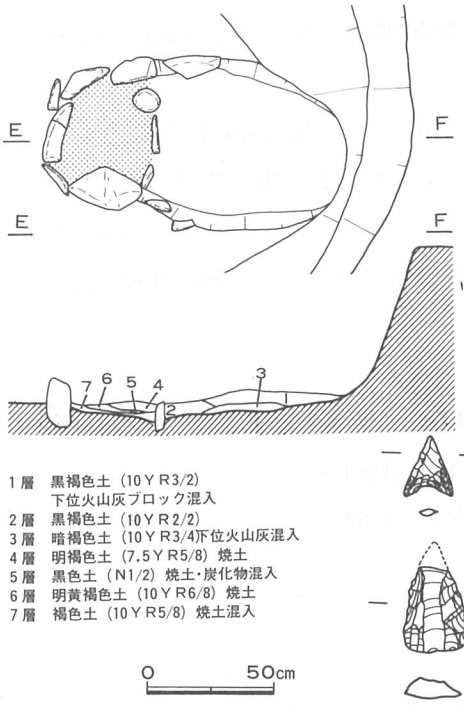
第61号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5
規　模	44×34	31×30	34×30	34×29	34×28
深　さ	62.4	49.7	58.0	68.8	71.0

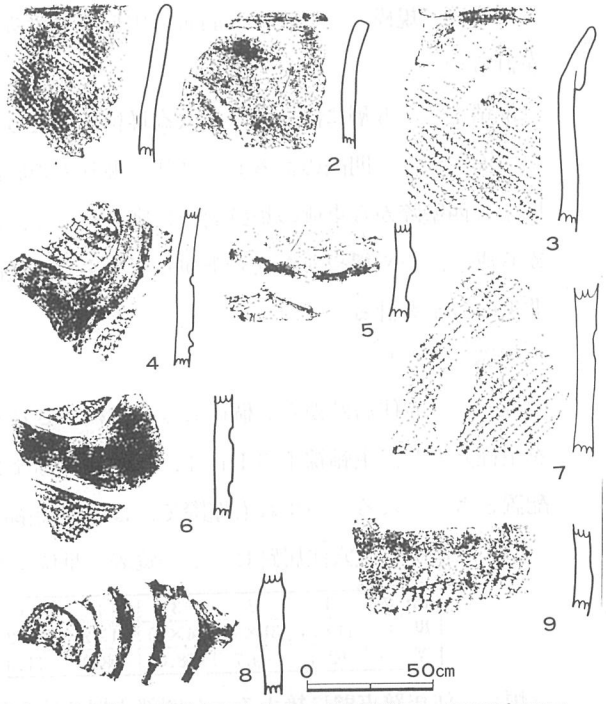
〈炉〉　住居跡東壁に接する。石囲部＋掘り込み部とからなるもので1.16×0.62ｍの規模の石



第186図　第61号竪穴住居跡実測図



第187図　第61号住居炉跡微細図



第188図　第61号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

囲複式炉である。石囲部は10～29cm大の自然石を45×58cmの横長の楕円形に配し，その内部全域に最大６cmの厚さの焼土が確認された。掘り込み部は75×68cmの楕円形の掘り込みで，両側縁に，石囲部に連続して11～22cm大の自然石３個が確認された。

〈出土遺物〉　（第188図，401図23）

床面より18点の土器片，床直より20数点の土器片と１点の石鏃を出土，他に覆土中より１個の復元可能土器，2/3箱の土器片及び１点の石鏃を出土した。

401図23は，住居中央覆土上位出土の小型深鉢形土器で，口径10.5cm，底径2.4cm，器高7.2cmを計る。口頸部より胴部下半まで縦位方向の結節回転文を施文，焼成は良好，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）を呈する。

出土土器より，本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

第62ＡＢ号竪穴住居跡と出土遺物（第189～192・200・395・401図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＤ－22・23・24，Ｅ－21・22・23・24グリッドに位置する。Ⅳ層上面で数軒の重複する住居跡の１つとして確認された。

この重複の最東部の横に長い楕円形プランの遺構精査を行なったところ，東壁から１ｍの所で段状となり，２つの住居跡の重複と判断，この段状の部分を62Ａ号住居跡，他の部分を62Ｂ号住居跡とした。しかしながら，土層断面図，柱列及び炉跡の確認等から２つの遺構の重複とは考えられず，この段状の部分は62Ｂ号住居跡の付属施設，または拡張部分と判断し，以下一括して62ＡＢ号住居跡として記述する。

本住居跡は62Ｃ号住居跡と重複，本住居跡が古い。

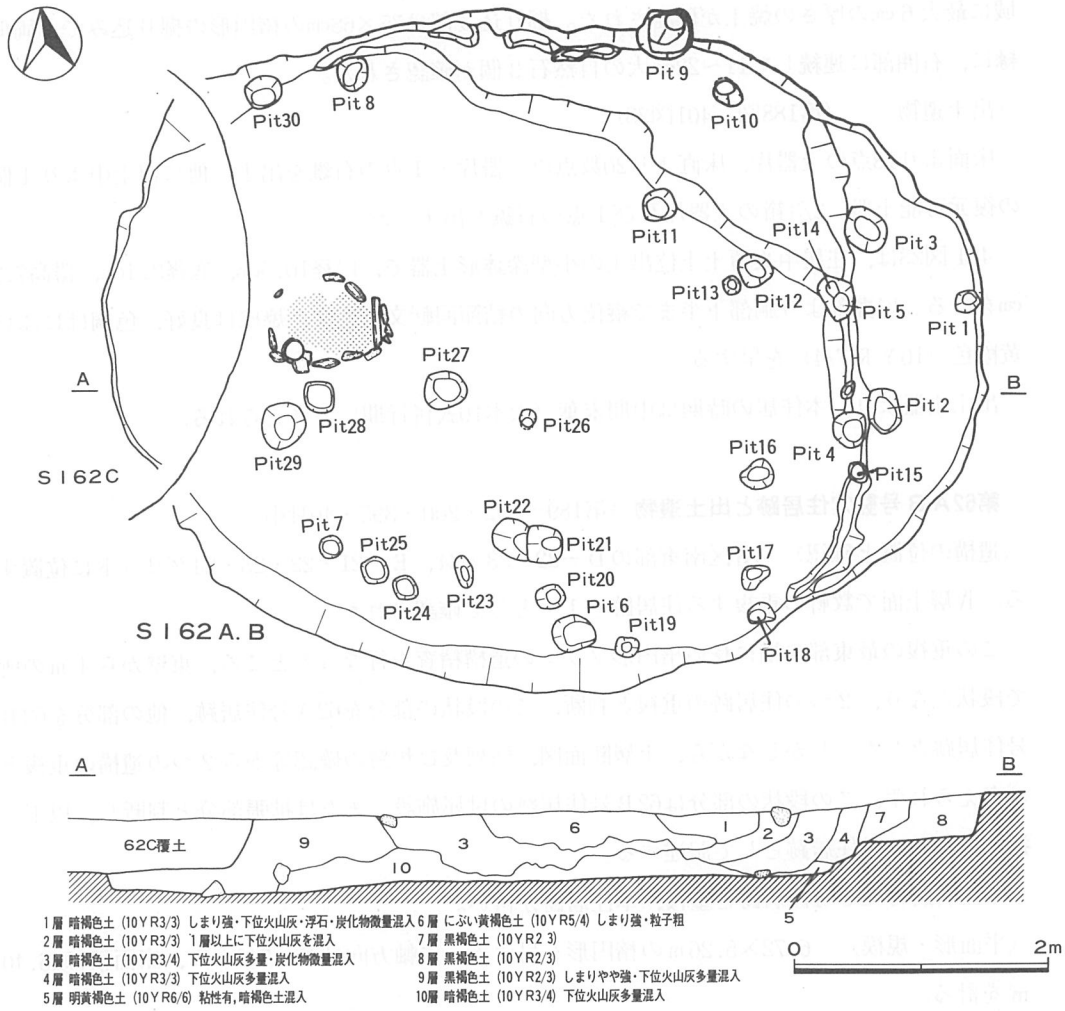
〈平面形・規模〉　6.72×5.26ｍの楕円形を呈する。主軸方向はＮ－74°－Ｗ，床面積は26.40㎡を計る。

〈堆積土〉　10層に区分でき，人為堆積と考えられる。

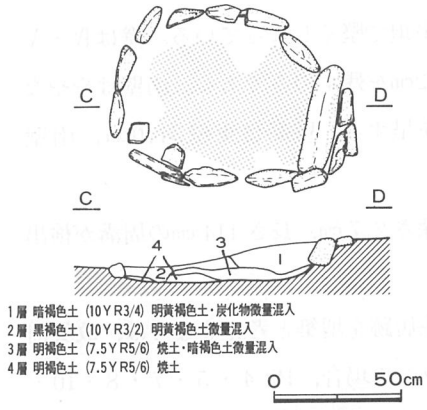
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，西壁は62Ｃ号住居構築により，床面より12cmを残すのみである。南壁はややなだらかな立ち上がりを，他の壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁34.0cm，南壁46.8cm，北壁30.3cmを計る。

〈周溝〉　東壁際に位置するテラス直下に，幅約20cm，深さ2.7cm，長さ114cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡から30個の柱穴が検出されたが，本住居跡を増築と考えるならば，改築前のプランが二通り考えられる。東壁際のテラスを除くプランの場合，Pit４・５・７・８・10・17を主柱穴とし，主軸線に対称な３対６個（Pit４・５，Pit７・８，Pit10・17）を基本とする

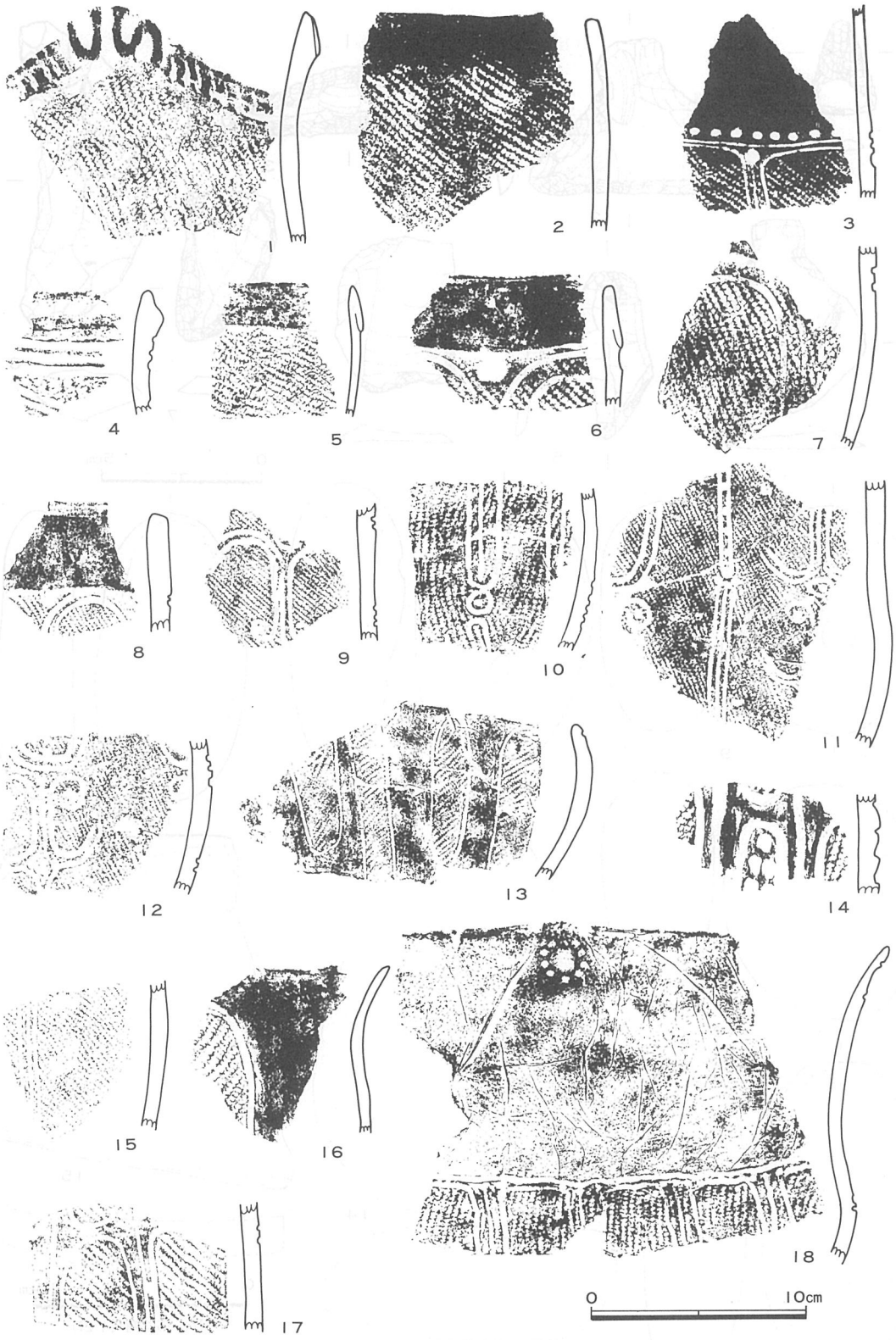


第189図　第62ＡＢ号竪穴住居跡実測図

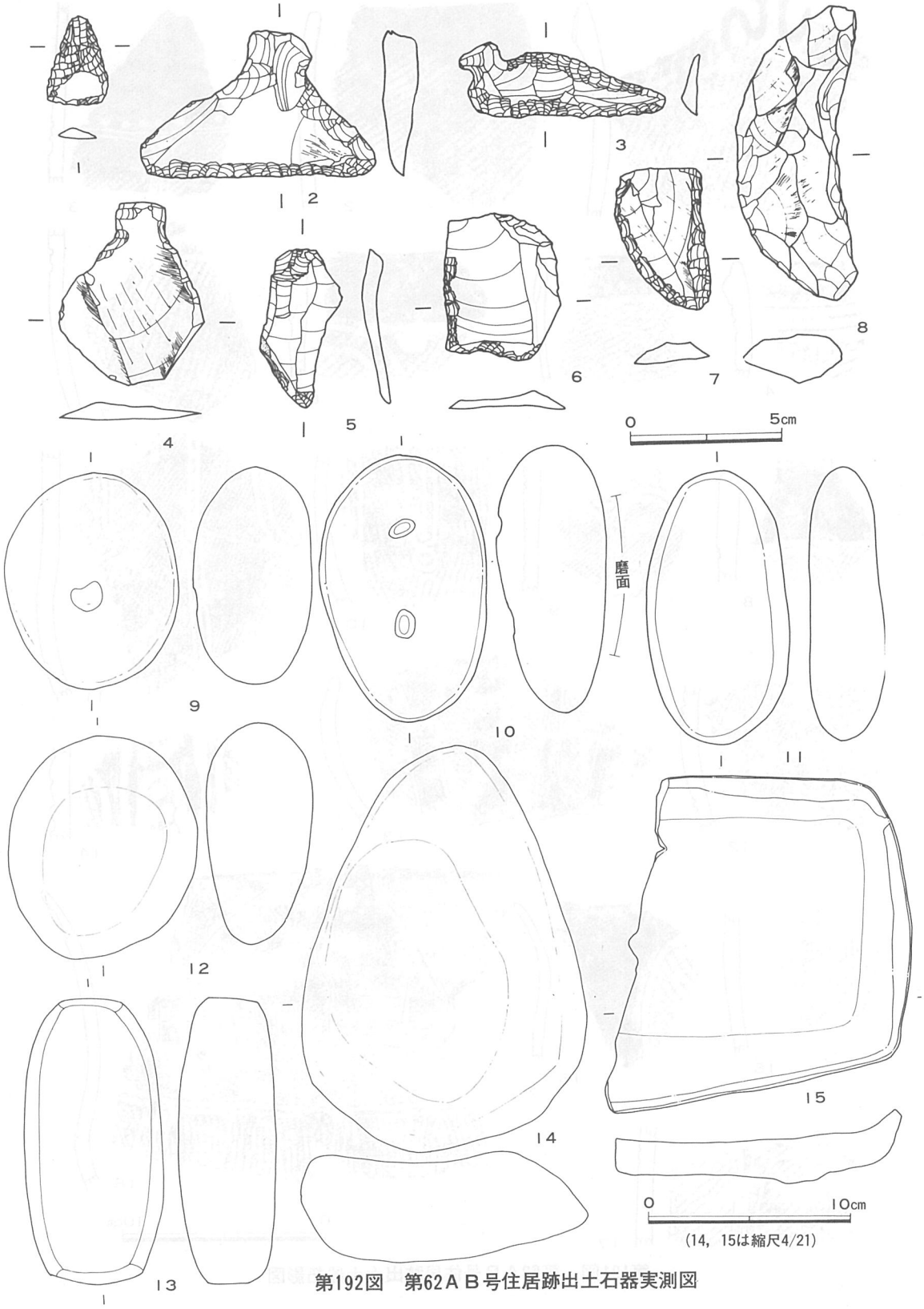


第190図　第62ＡＢ号住居跡微細図

柱配置が考えられる。また，北東壁際の段差を壁とするプランの場合，Pit 4・5・8・11・18・21・29を主柱穴とし，主軸線上のPit 4と，軸線に対称な3対6個（Pit 5・18，Pit 8・29，Pit 11・21）の計7個を基本とする柱配置が考えられる。増築後はPit 1～3・7・8・10・17・21を主柱穴とし，主軸線上のPit 1と，軸線に対称な4対8個（Pit 2・3，Pit 7・8，Pit 10・17，Pit 21・（未検出））の計9個を基本とする柱配置と考えられる。



第191図　第62ＡＢ号住居跡出土土器拓影図



第192図　第62ＡＢ号住居跡出土石器実測図

第62ＡＢ号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	22×18	36×26	37×32	27×27	26×22	34×28	18×18	27×26	44×40	24×18
深　さ	17.4	10.3	32.2	16.4	22.0	35.3	17.8	22.0	21.1	23.8
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	26×24	27×26	15×13	22×20	20×14	26×24	24×18	20×18	20×17	23×19
深　さ	9.8	17.7	9.6	15.8	21.5	12.1	16.2	27.4	6.0	22.4
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
規　模	30×29	40×30	26×14	20×18	21×20	15×13	34×29	24×24	39×34	29×19
深　さ	55.8	31.9		6.8	10.2	9.7	16.8	8.7	30.5	53.4

〈炉〉　住居跡主軸線上中央よりやや西寄りに位置する。７～43cm大の自然石を94×74cmの楕円形に配した石囲炉で，東側は２重に石が配されている。炉内ほぼ全域に最大６cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉　（第191・192・200図，395図13，401図10・19）

炉より１個の完形土器，ピット内より１点の掻器，床面より１個の復元可能土器，13点の土器片，２点の石匙，１点の掻器・磨石，床直より20数点の土器片，１点の石箆・石皿を出土した。他に覆土より，10個の復元可能土器，１箱の土器片，１点の石錐・石匙・凹石・磨石，２点の石鏃・磨石，６点の掻器を出土した。

395図13は，本住居炉内南西隅に正立の状態で出土した完形の広口壺形土器で，口縁部は無文，口頸部に横位の平行刺突文，胴部に沈線による「∩」文を施文，外側を磨消している。地文はＬＲ斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）を呈する。401図10は，南西壁際床面出土のほぼ完形に近い土器で，口縁部が内彎する小型の浅鉢形を呈する。無文の土器で，口縁部に横位連続刺突文を施文，焼成は良好で，色調は明黄褐色（10ＹＲ7/6）を呈する。401図19は，南寄り覆土上位出土の小型鉢形土器の胴部下半で，底径３cmを計る。器面にはＲＬ斜縄文を施文，焼成は良好で，色調はにぶい赤褐色（2.5ＹＲ5/3）を呈する。

また，本住居やや北壁寄りの覆土中位より，炭化物（くり）を出土した。

炉内及び床面の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第62Ｃ号竪穴住居跡と出土遺物（第193～195・200・402・426図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＤ・Ｅ―21・22グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。62ＡＢ・62Ｄ号住居跡と重複，本住居跡がいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉　3.11×3.00ｍの円形を呈する。床面積は6.20㎡を計る。

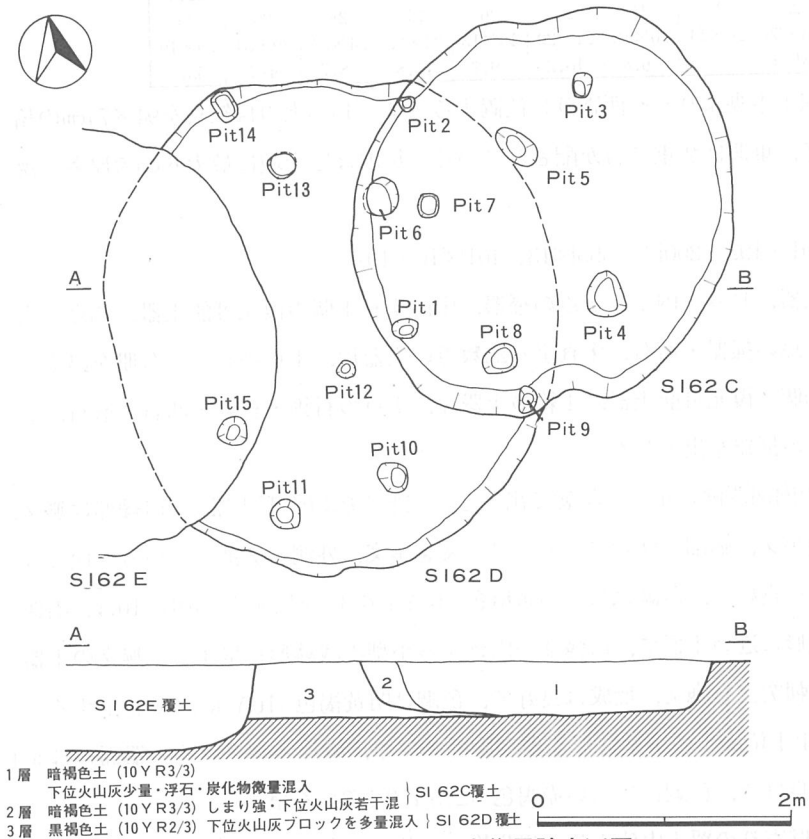
〈堆積土〉　２層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　東及び西側の重複部分はそれぞれ，62ＡＢ・62Ｄ号住居跡覆土を，その他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。全般にほぼ平坦で，堅くしまりがある。壁は，62ＡＢ・62Ｄ号住居跡覆土及びⅣ・Ⅴ層より成り，やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁38.5

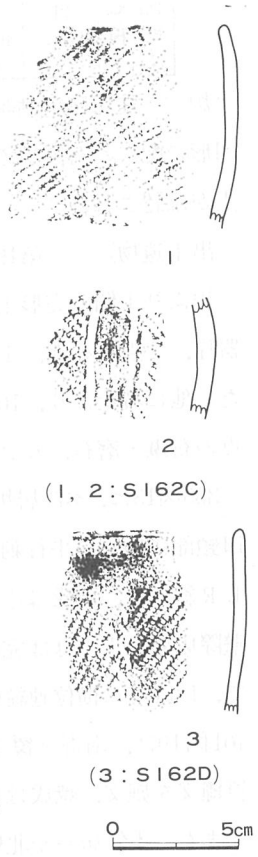
cm，西壁32.0cm，南壁29.4cm，北壁21.8cmを計る。

〈周溝〉　なし

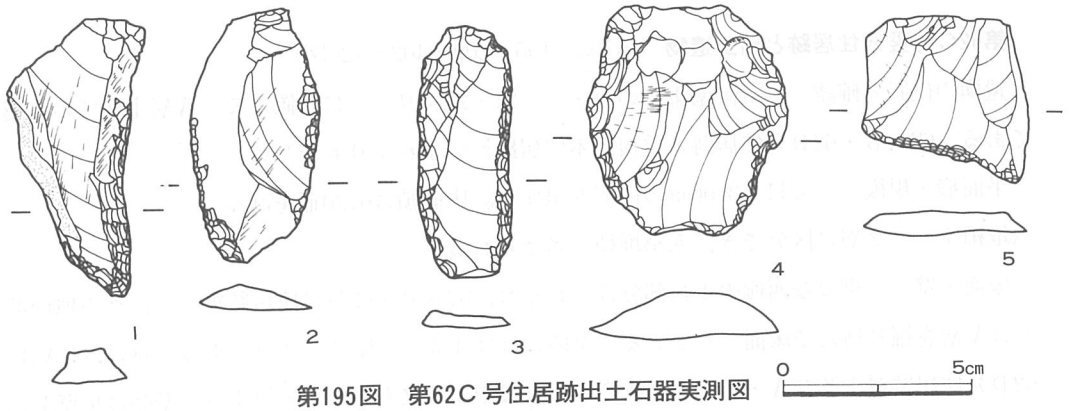
〈柱穴〉　62C・62D号住居跡より計15個のピットが検出された。このうちPit 1～4が本住居跡の主柱穴と考えられる。



第193図　第62C・62D号竪穴住居跡実測図



第194図　第62C・62D号住居跡出土土器拓影図



第195図　第62C号住居跡出土石器実測図

第62C・62D号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	22×15	13×12	20×14	36×31	39×22	31×25	19×16	29×22	24×14	26×23
深　さ	27.9	8.8	16.0	16.8	22.1	34.8	17.4	11.3	13.7	46.9
Pit No.	11	12	13	14	15					
規　模	24×24	14×13	22×19	28×18	24×24					
深　さ	14.9	13.9	36.4	10.6	14.5					

〈炉〉　検出されなかった。

〈出土遺物〉　（第194・195・200図，402図10，426図５）

床面より２点の土器片，１点の掻器・有孔石製品，床直より１個の復元可能土器と数点の土器片，覆土中より１個の復元可能土器，少量の土器片，２点の掻器を出土した。

387図10は，南東寄り覆土上位出土の深鉢形土器で，折り返し口縁部は無文，胴部にはＬＲ斜縄文を施文，焼成はやや良好，色調は黒褐色（10ＹＲ3/1）を呈する。

出土土器及び重複関係より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第62Ｄ号竪穴住居跡と出土遺物（第193，194，200，407図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のＤ・Ｅ－21グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。62Ｃ・62Ｅ号住居跡と重複，本住居跡がいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉　3.92×（3.52）ｍの楕円形を呈すると推測できる。

〈堆積土〉　下位火山灰ブロックを混入する黒褐色土の単一層で，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としており，平坦で堅くしまっている。床面の中央部は攪乱を受けている。壁はⅣ・Ⅴ層から成るが，62Ｃ・62Ｅ号住居跡との重複により，東・西壁は存在しない。残存壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は南壁30.6cm，北壁19.0cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　Pit７・８・10・13・15を主柱穴とし，主軸線に対称な３対６個（Pit７・８，10・13，15・（未検出））を基本とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は62Ｃ号住居跡に付す）

〈炉〉　検出されなかった。床面中央部に攪乱を受けており，その部分に炉があったと考えられる。

〈出土遺物〉　（第194，200図，407図２）

床面より１個の復元可能土器と３点の土器片，覆土中より若干の土器片を出土した。

407図12は，西寄り床面から出土した深鉢形土器で，口径21.2cm，底径5.3cm，器高23.0cmを計る。器面にはＬ斜縄文を施文，焼成はやや良好で，色調は褐色（7.5ＹＲ4/3）を呈する。

194図３は，床面の出土土器である。

出土土器及び新旧関係から，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第62E号竪穴住居跡と出土遺物（第196，199，200，403，407，409図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南東部のD・E－20・21グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。62D・62F号住居跡と重複，本住居跡は62D号住居跡より新しく，62F号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉　3.82×3.54mの円形を呈する。床面積は8.96㎡を計る。

〈堆積土〉　5層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床，テラス面ともⅤ層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは東・西壁際の一部を除き，ほぼ一巡するように位置している。テラスの幅は8～62cm，床面との比高は25cmを計る。床面はレンズ状で凹凸があり，堅くしまっている。東壁は62D号住居跡覆土，西・南壁はⅣ・Ⅴ層から成る。北壁は，62F号住居構築により床面から16cmを残すのみである。やや急な立ち上がりを呈し，壁高は東壁42.5cm，西壁63.5cm，南壁68.0cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　62E・62F号住居跡より計12個のピットが検出された。このうちPit 4～12が本住居に伴うピットで，壁下及びテラス上に位置するPit 4・5・7・10・11等が柱穴と考えられる。

第62E・62F号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

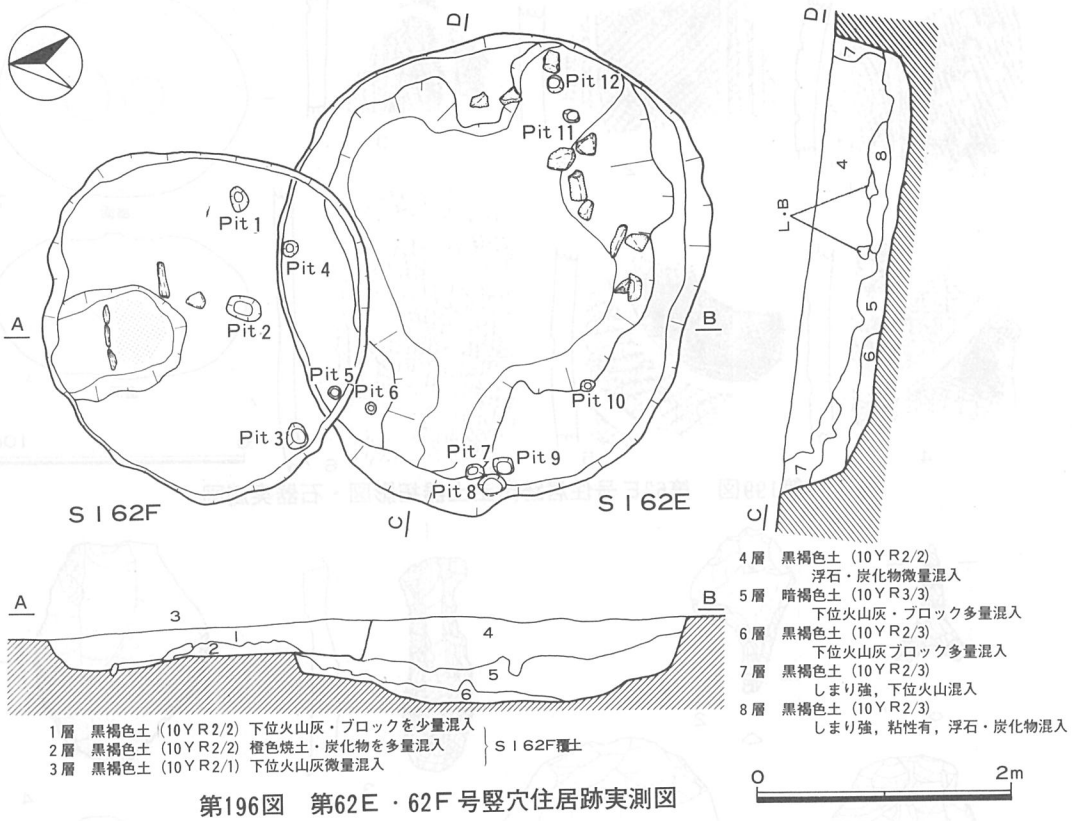
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	19×14	29×19	21×16	14×11	8×7	7×6	14×11	22×16	16×13	10×10	14×10	14×13
深　さ	17.3	12.8	11.0	21.9	16.5	7.5	19.8	7.3	8.8	6.6	33.0	13.9

〈炉〉　検出されなかったが，東壁際から南壁際にかけ床面及び床直上に炉石と思われる自然石が散在していたことから，東壁際に石囲炉または石囲複式炉が存在していたものと考えられる。

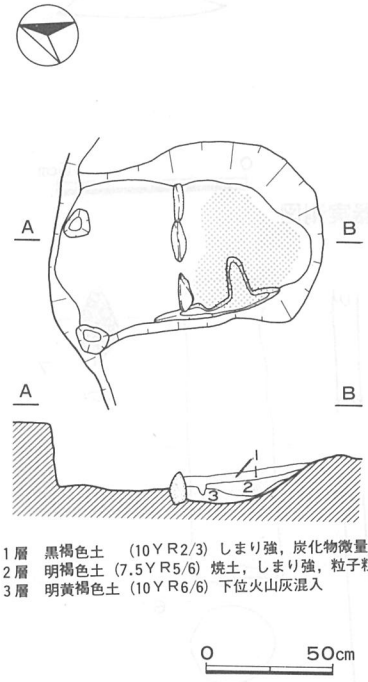
〈出土遺物〉　（第199，200図，403図18，407図3，409図5）

床面より8点の土器片と1点の凹石，床直より数点の土器片，覆土中より3個の復元可能土器，1/2箱の土器片，2点の掻器を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央から南壁にかけて多く分布している。

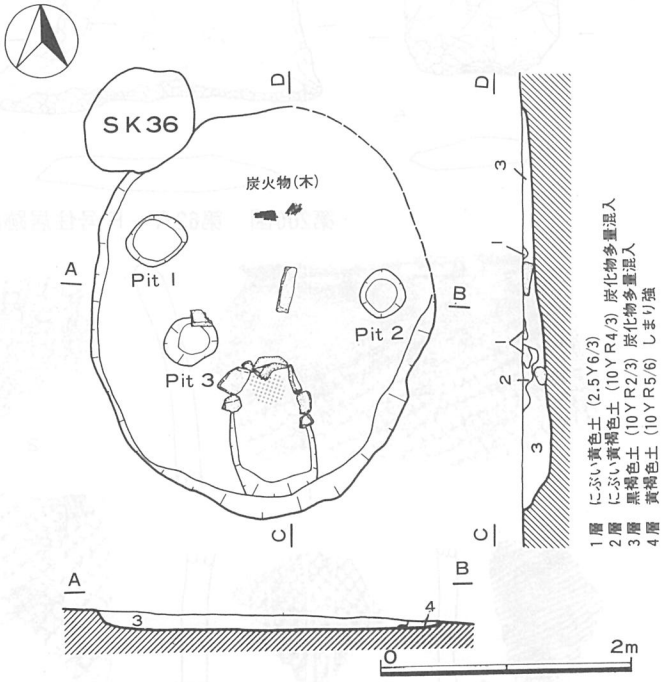
403図18は，覆土中位出土の深鉢形土器で，口径12.6cm，底径6.0cm，器高16.5cmを計る。器面にはLR斜縄文を施文，焼成はやや良好，色調はにぶい赤褐色（5YR 5/4）を呈する。407図3は，南壁際覆土中位出土の広口壺に近い土器で，底径9.2cmを計る。口頸部には横位沈線文と連続刺突文，その直下から胴部にRL斜縄文を施文，色調はにぶい褐色（7.5YR 5/3）を呈する。409図5は，住居中央覆土中位出土の深鉢形土器で，口径18.1cm，底径5.6cm，器高23.0cmを計る。口縁部中位から胴部下半に縦位の条痕文を施文し，焼成はやや不良，色調は灰褐色



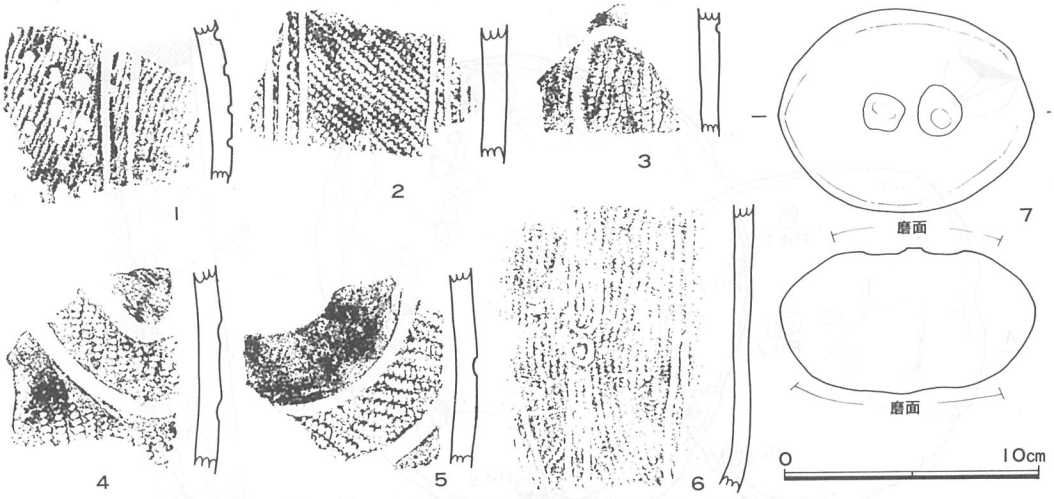
第196図　第62E・62F号竪穴住居跡実測図



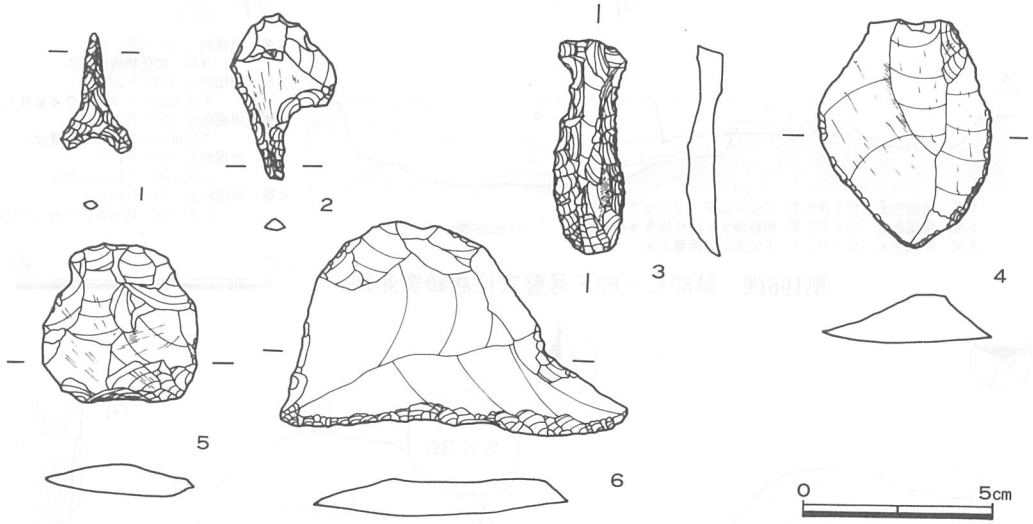
第197図　第62F号住居炉跡微細図



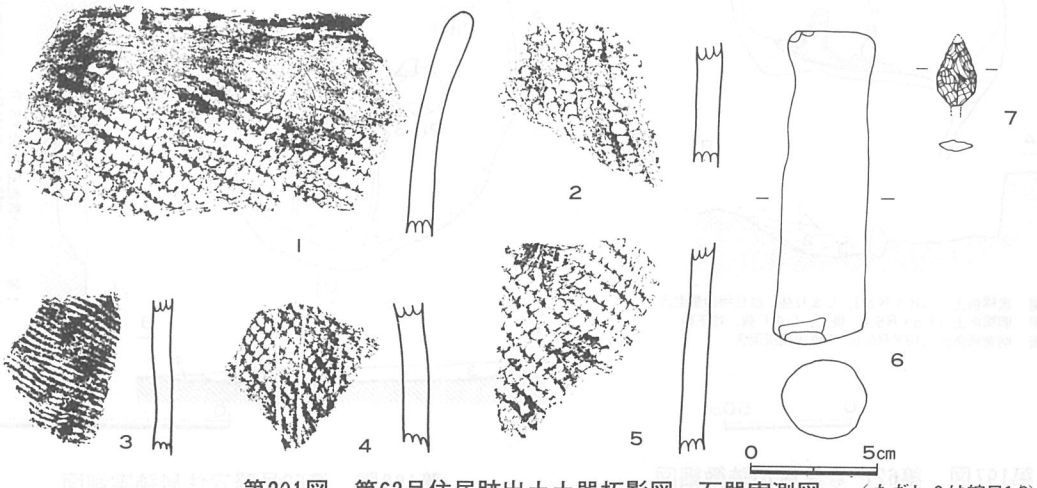
第198図　第63号竪穴住居跡実測図



第199図　第62E号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第200図　第62A～F号住居跡出土石器実測図



第201図　第63号住居跡出土土器拓影図・石器実測図　（ただし6は縮尺1/9　7は縮尺1/2）

(7.5YR 4/2) を呈する。

199図2・5・6は，床直の出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第62F号竪穴住居跡と出土遺物（第196，200図）

〈遺構の位置と確認〉 A_1区南東部のD・E－20・21グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。62E号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 2.88×2.60mの楕円形を呈する。主軸方向はN－11°－W，床面積は5.16㎡を計る。

〈堆積土〉 3層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉 南側の重複部分は62E号住居跡覆土を，他はⅤ層を掘り込んで床面としている。凹凸があり，堅くしまっている。南壁は62E号住居跡覆土より，他はⅣ・Ⅴ層より成る。緩やかな立ち上がりを呈し，壁高は東壁16.6cm，西壁19.8cm，南壁26.0cm，北壁10.8cmを計る。

〈周溝〉 なし

〈柱穴〉 本住居跡ほぼ中央にPit 2，主軸線に対称な1対2個(Pit1・3)の計3個が検出された。規模・深さ・位置関係より，いずれも主柱穴と考えられる。（ピット一覧は，62E号住居跡に付す）

〈炉〉 住居跡北壁に接する。1.05×0.71mの楕円形の掘り込みと，16～20cm大の自然石3個がその掘り込みを二分するように配置されている。床中央側の掘り込みには，ほぼ全域に火熱を受けた痕跡がある。またこの掘り込み周辺から，炉石と思われる数個の石が，床面及び床直上から検出されており，本炉は石囲部＋掘り込み部から成る石囲複式炉と考えられる。また，壁側掘り込み部側縁に，1対のピットが検出された。

〈出土遺物〉（第200図）

本住居の出土遺物は少なく，床直より数点の土器片，覆土より少量の土器片を出土したのみである。

出土遺物より，本住居の時期は中期後葉～末葉（大木9～10式併行期）と考えられる。

第63号竪穴住居跡と出土遺物（第198，201，408図）

〈遺構の位置と確認〉 A_1区中央部のZA—18グリットに位置する。Ⅴ層上面での確認である。北東方向への緩斜面のため，北東壁側が不明確であった。36号土壙と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 3.16×2.70mの楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN—3°—W，床面積は（6.00）㎡を計る。

〈堆積土〉　4層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅳ・Ⅴ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまっている。南西側の壁がⅣ・Ⅴ層より，北東側の壁がⅢ・Ⅳより成る。なお，北東壁はよく確認できず，床面等から推測せざるを得なかった。壁高は東壁3.0cm，西壁9.7cm，南壁10.6cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より3個のピットが検出された。北東壁際がⅣ層を床面とするため，ピットの検出ができなかったが，この周辺の1個を加えた4個を主柱穴とする柱配置と考えられる。

第63号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	46×38	36×35	43×38
床　面	25.3	24.9	54.7

〈炉〉　住居跡南壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る112×68cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は，10～28cm大の自然石を「U」状に配しており，炉内の北側に28×26cmの範囲で焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第201，408図1）

床面より2点の土器片と1点の石棒，床直より10点程の土器片，覆土より1個の復元可能土器，少量の土器片及び1点の石鏃を出土した。

408図1は，覆土中位出土の深鉢形土器で，口径16.8cm，底径 7.6cm，器高24.4cmを計る。口頸部より胴下半に縦位方向の結節回転文（L原体）を施文，焼成はやや良好で，色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。

201図3・5は，床面出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第64号竪穴住居跡と出土遺物（第133，134，402図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北東部のZB・ZA—19・20・21グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。42A・42B号住居跡，44号土壙と重複，本住居跡はいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉　本住居跡の大部分は重複しており破壊されているが，残存部からの推測及び柱列より，(6.9)×(4.8)mの楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN—89°—W，床面積は(25.88)㎡を計る。

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅳ・Ⅴ層を掘り込んで床面としている。重複によりそのほとんどを消失しているが，残存部は，平坦で堅くしまっている。北壁はⅣ・Ⅴ層より，西壁はⅣ層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は西壁24.1cm，北壁50.0cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　Pit 3・7・10・13の4個を主柱穴とする柱配置と考えられる。また，これらの柱穴間に位置するPit 1・4・11の3個が副柱穴と考えられる。（ピット一覧は，42B号住居跡に付す）

〈炉〉　検出されなかった。他の遺構との重複により消失したものと考えられる。

〈出土遺物〉（第134図，402図1）

住居中央より北寄りから少量の遺物が出土しており，覆土からは1個の復元可能土器，少量の土器片，及び掻器と磨製石斧が各1点出土した。

402図1は，住居中央覆土中位出土の2つの山形突起をもつ深鉢形土器で，口径15.0cm，底径6.4cm，器高20.3cmを計る。突起部には「L」状粘土紐貼付文，口唇部には斜方向の沈線(刻み目文)，器面にはRL斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。

出土遺物及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層e式併行期）と考えられる。

第65号竪穴住居跡と出土遺物（第202～205，423図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北東部のZE・ZD・ZC—12・13グリッドに位置する。微高地であるためV層まで攪乱が及び，V層まで確認面を下げざるを得なかった。本住居跡の南西側に100号土壙が近接する。

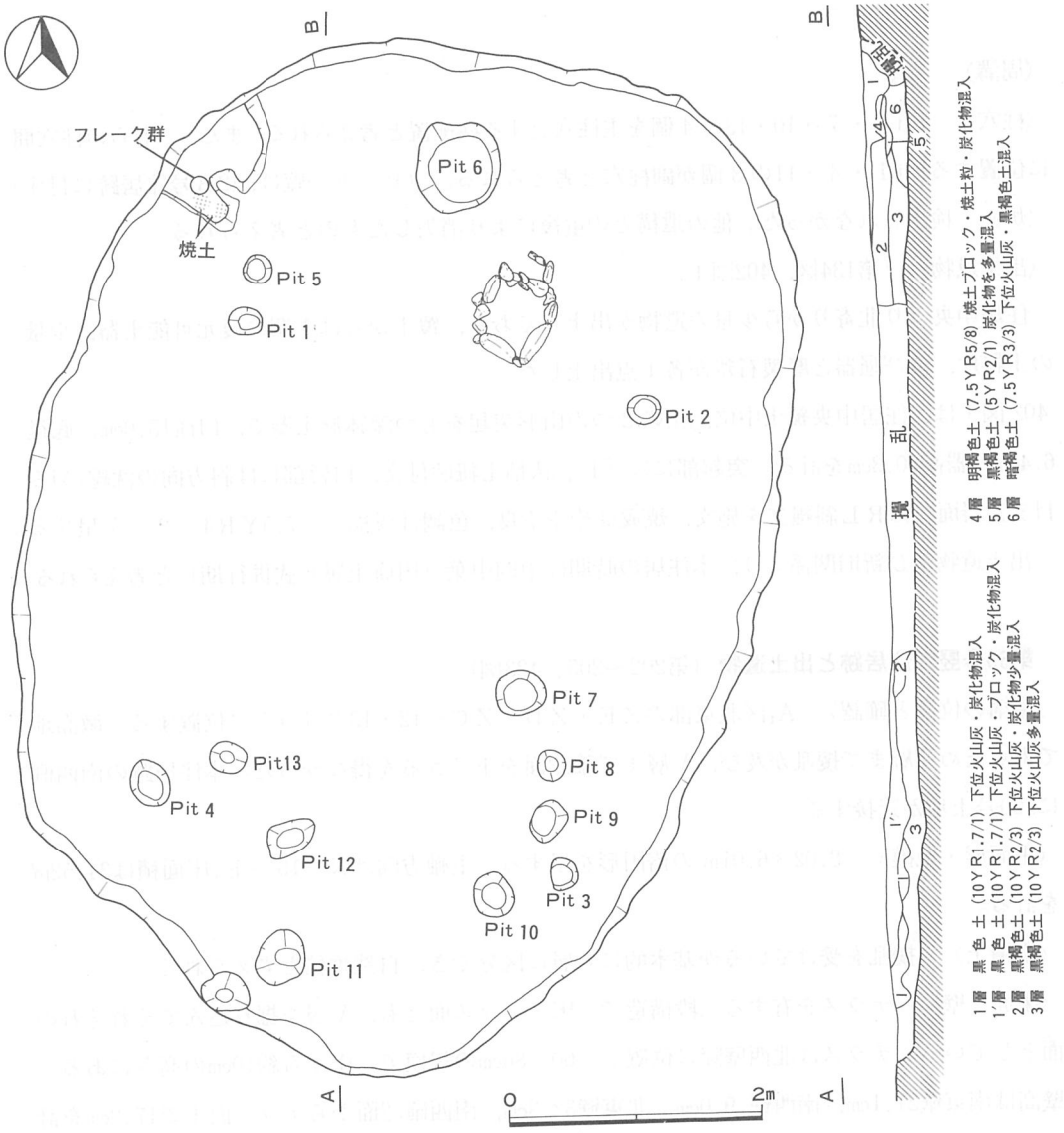
〈平面形・規模〉　8.02×6.01mの楕円形を呈する。主軸方向はN—15°—E，床面積は34.52㎡を計る。

〈堆積土〉　攪乱を受けているが基本的に6層に区分でき，自然堆積と考えられる。

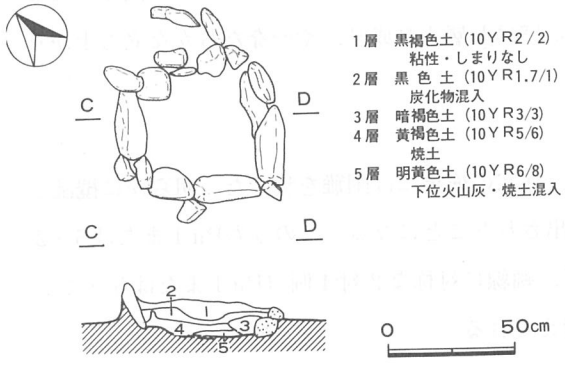
〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面とも，V層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは北西壁際に位置し，60×86cmの規模で，床から約10cmの高さにある。壁高は南東壁21.1cm，南西壁 9.0cm，北東壁32.3cm，南西確認面からテラス面まで17.2cmを計る。床面は，中央部が攪乱を受け，やや凹凸があるが，堅くしまっている。テラス面は，床面ほど堅くない。テラス面の南側より焼土が，ほぼ中央部から197個のフレークが検出されたことより，石器加工のための施設と考えられる。壁はV層より成り，ややなだらかな立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　なし

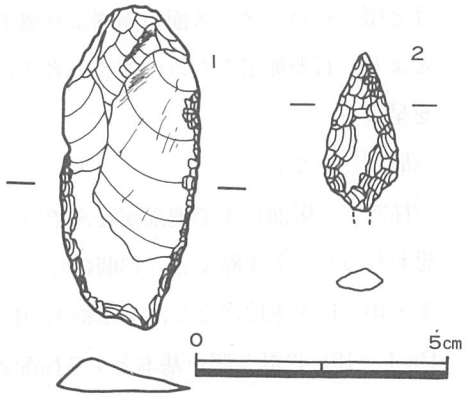
〈柱穴〉　床面にまで攪乱が及んでいるため，柱穴の検出には困難を喫した。明らかに攪乱と思われるピットを除くと，13個のピットが検出されたことになる。このうちPit 1または5・24・10・11を主柱穴とし，主軸線上のPit11と，軸線に対称な2対4個（Pit 1または5・2，Pit 4・10）の計5個を基本とする柱配置と考えられる。



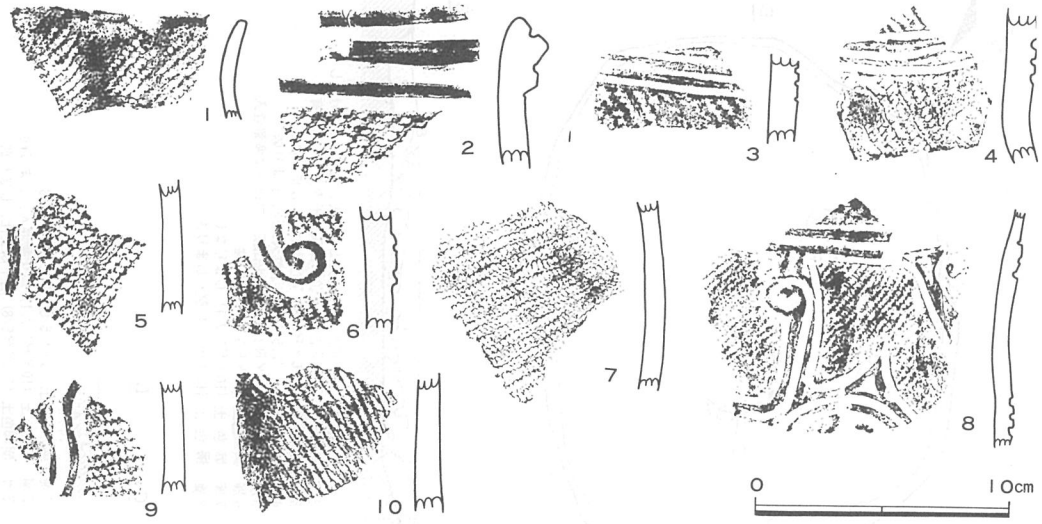
第202図　第65号竪穴住居跡実測図



第203図　第65号住居炉跡微細図



第204図　第65号住居跡出土石器実測図



第205図　第65号住居跡出土土器拓影図

第65号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	28×22	26×22	25×20	36×31	24×23	73×68	40×34	25×22	62×42	36×31	45×41	43×26	30×24
深　さ	22.7	32.7		15.2	36.0	53.8	26.5	50.0	82.0		39.8	30.4	52.9

〈炉〉　住居跡軸線上に中央よりやや北寄りに位置する。9～31cm大の自然石を63×67cmの方形に配した石囲炉である。炉内全体に5～6cmの厚さの焼土が確認された。本炉の北側に2個の自然石が「コ」字状に隣接しているが，複式炉とは断定できなかった。

〈出土遺物〉（第204，205，423図24）

ピット内より1点の掻器，床面より1点の石鏃，床直より10点弱の土器片，覆土より少量の土器片と1点の円盤状土製品を出土した。

205図3は床面より，205図2・9は床直より出土した土器である。

床面及び床直の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。

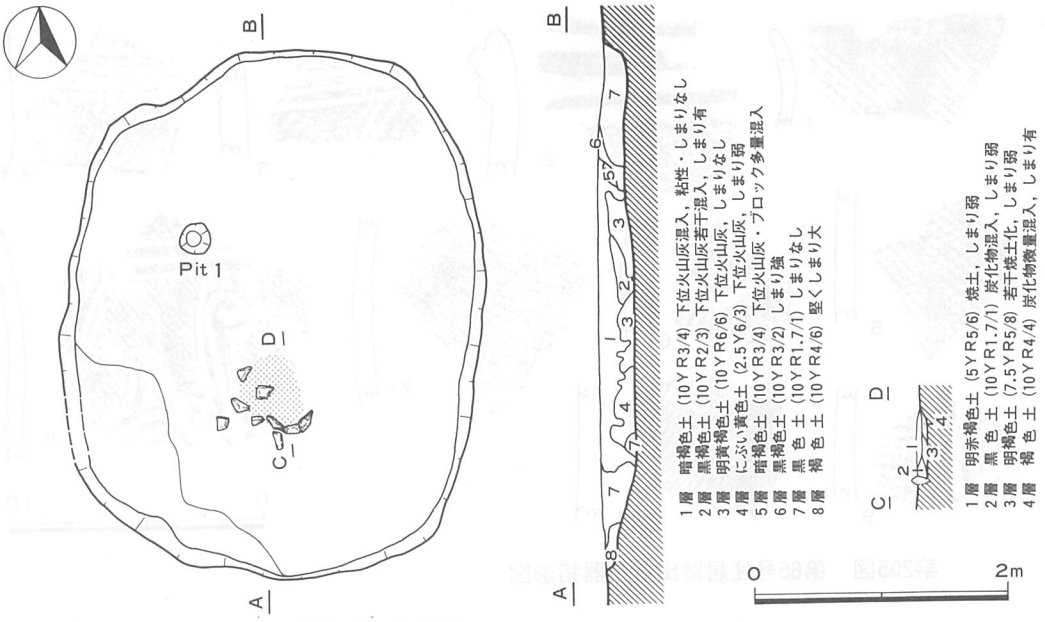
第66号竪穴住居跡と出土遺物（第206，207図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区中央部のZA・A—18・19グリッドに位置する。北西壁側がⅣ層，南東壁側はⅢ層中位で確認された。37・39・41号土壙と重複，本住居跡はいずれよりも新しい。

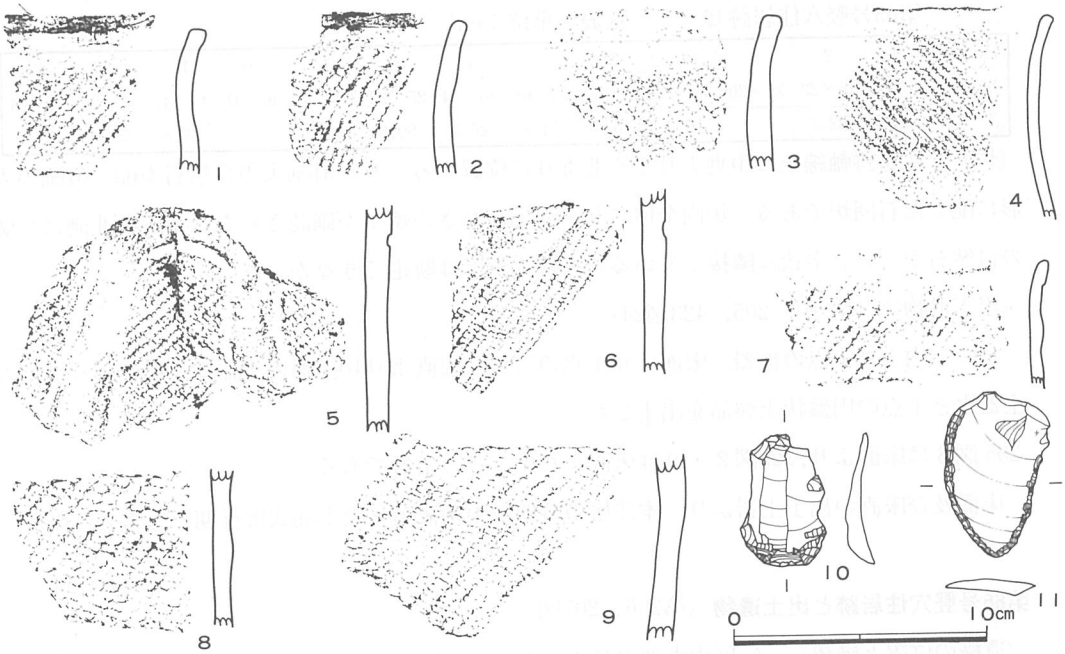
〈平面形・規模〉　4.21×3.28mの楕円形を呈する。主軸方向はN—5°—E，床面積は10.52㎡を計る。

〈堆積土〉　8層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　北西側はⅤ層を，南東側はⅣ層を掘り込んで床面としている。若干レンズ状で



第206図　第66号竪穴住居跡実測図



第207図　第66号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

北西側はしまりがあるが，南東側はしまりが弱い。北西側の壁はⅣ・Ⅴ層，南東側の壁は，Ⅲ・Ⅳ層から成り，緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁 9.9cm，西壁24.5cm，南壁10.8cm，北壁16.4cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　中央より北西寄りに，26×23cmの規模で，深さ22.0cmのピット１個が検出されたのみである。

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや南寄りに位置する。遺存度が悪いが，58×50cmの範囲で最大６cmの厚さである焼土の周囲に，9～16cm大の炉石と思われる自然石が散在していることより，石囲炉と考えられる。

〈出土遺物〉（第207図）

床面より４点，床直より10点弱の土器片を出土，他に覆土より少量の土器片と，石匙・掻器を各１点出土した。これらの遺物は，平面的には炉とその周辺に多く分布している。

207図４は床面，２は床直からの出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

第67号竪穴住居跡と出土遺物（第208～210，407図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区中央部のＺＡ・Ａ—19・20グリッドに位置する。Ⅲ層中位での確認である。本住居跡の南西側に60・66号住居跡，北東側に42Ａ・42Ｂ号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉　4.90×4.59mの円形を呈する。主軸方向はＮ—34°—Ｅ，床面積は16.68㎡を計る。

〈堆積土〉　３層に区分でき，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅲ層を掘り込んで床面としている。若干凹凸があり，しまりは弱い。壁はⅢ層より成り，やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は北壁33.0cm，南壁16.0cmを計る。

〈周溝〉　なし

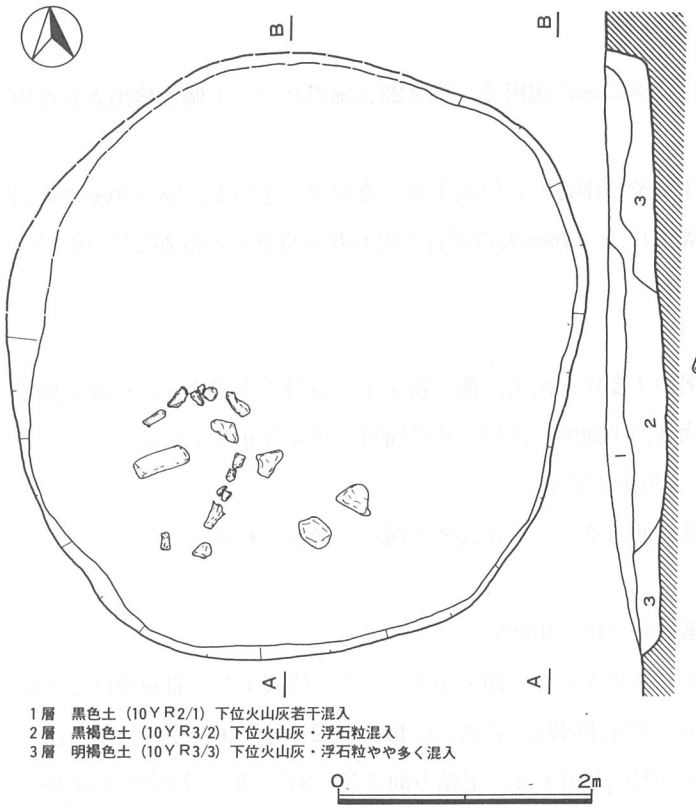
〈柱穴〉　確認できなかった。

〈炉〉　南西壁寄りに位置する。遺存状態が悪く，土器片囲炉と石囲複式炉が重複するような状態で検出された。遺存状態を考えるならば，土器片囲部＋石囲部＋掘り込み部から成る複式炉とも考えられる。土器片囲部は45×44cmの円形に土器片を配したもので，その内部は上面から15cmほどの深さまで焼土化していた。また石囲部は７～35cm大の自然石を86×83cmの半円状に配したもので，その内部は最大８cmの深さまで焼土化していた。掘り込み部両側縁には「ハ」字状に13～48cm大の自然石が残存しており，石囲複式炉は全体として「Ａ」字状の炉石配置であったと推測される。

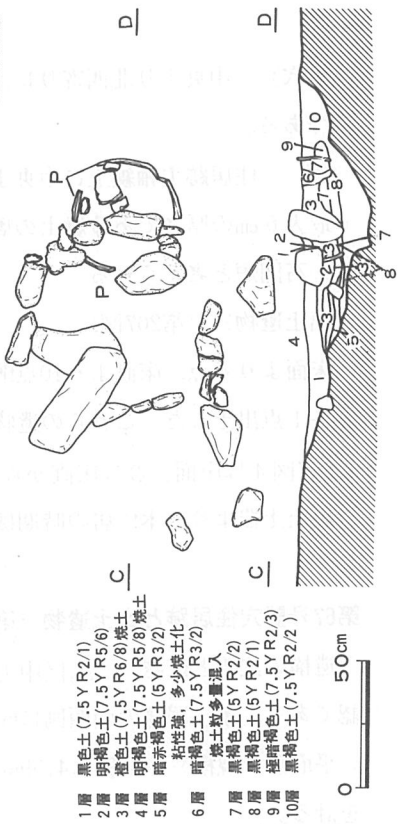
〈出土遺物〉（第210図，407図８）

床直より数点の土器片を出土，他に覆土より２個の復元可能土器，少量の土器片，１点の石鏃を出土した。これらの遺物は，平面的には炉の周辺に多く分布している。

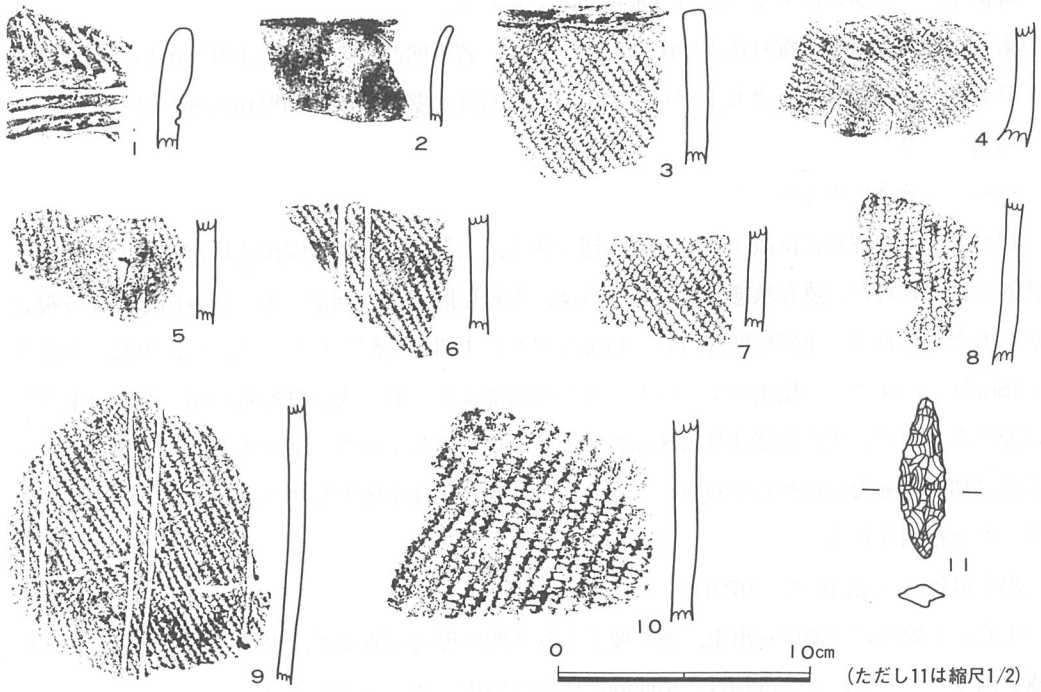
407図８は，土器片囲炉の土器を復元したもので，深鉢形を呈し，口径19.8cmを計る。折り返



第208図　第67号竪穴住居跡実測図



第209図　第67号住居炉跡微細図



第210図　第67号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

し口縁部を含む器面全体にＲＬの斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調は褐色(7.5ＹＲ４/３)を呈する。

210図９は，床直出土土器である。

炉土器及び床直出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第68号竪穴住居跡と出土遺物（第211，213，423図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部のＺＣ・ＺＢ－９・10グリッドに位置する。本遺構周辺の表土が浅く，耕作による攪乱がＶ層にまで及んでいる。このため本遺構のプラン確認には，Ｖ層上面まで下げざるを得なかった。１号溝と重複，本住居跡は１号溝より古い。

〈平面形・規模〉　4.83×3.71mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN—22°—E，床面積は14.92㎡を計る。

〈堆積土〉　攪乱を受けているが，基本的に３層に区分でき，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ｖ層を掘り込んで床面としている。若干凹凸があり，堅くしまっている。壁はＶ層から成り，やや急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁15.2cm，北西壁26.2cm，南東壁12.4cmを計る。なお，北東・北西壁の一部は，１号溝により消失している。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より７個のピットが検出された。このうちPit２・３・７を主柱穴とし，北西壁際に位置するであろう未検出のピット一個を加えた計４個を基本とする柱配置と考えられる。

第68号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7
規　模	29×23	40×39	49×47	21×20	38×35	25×23	49×40
深　さ	24.5	72.9	56.2	21.5	33.1	41.2	61.5

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する地床炉である。86×82cmの円形で深さ７cmの掘り込みの南側に，70×48cmの範囲で，最大４cmの厚さの焼土が確認された。

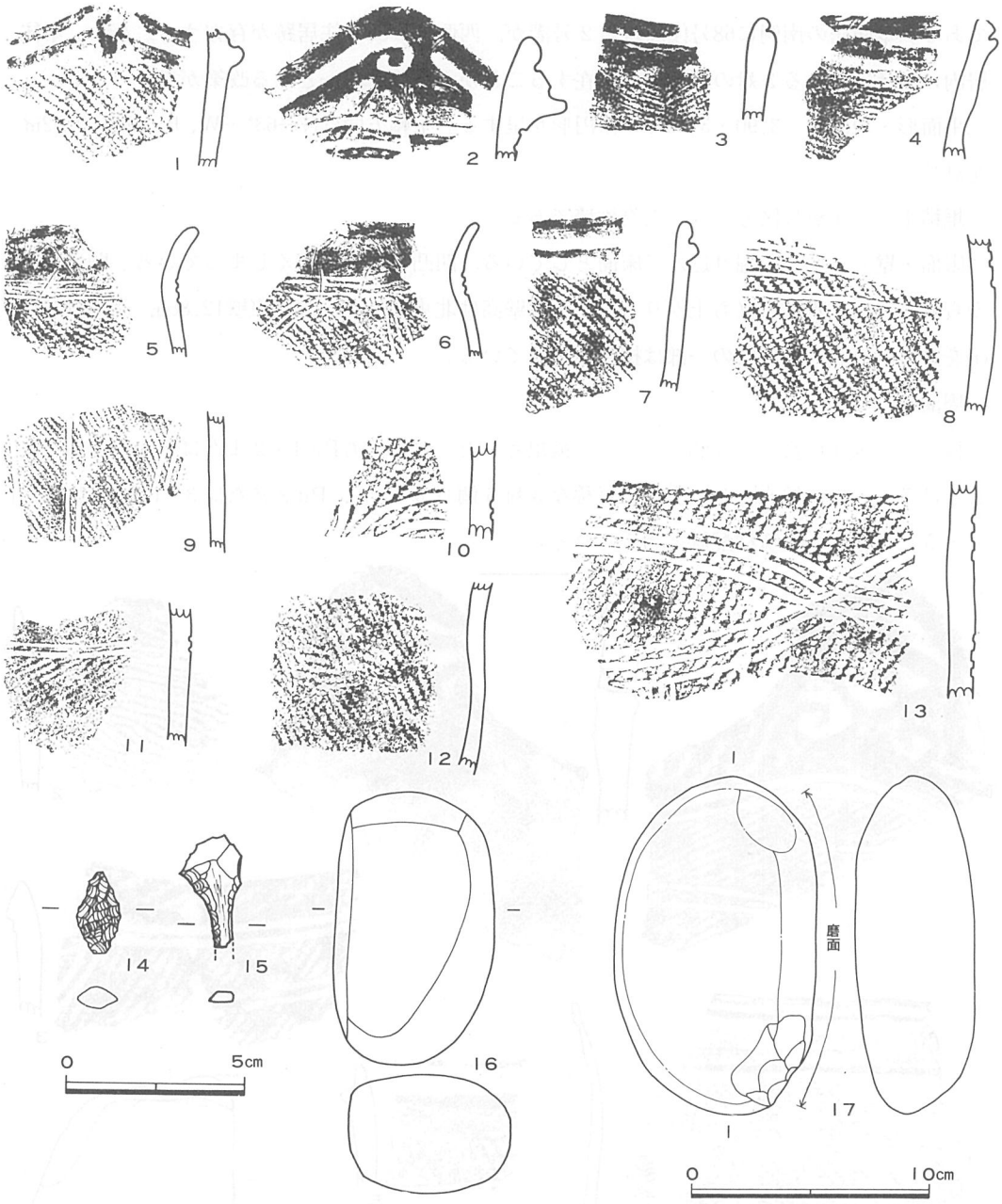
〈その他の施設〉　住居跡主軸線上南西壁に接する93号土壙は，本住居跡床面で確認されたものであり，土壙底面はしまりがある。また，その位置関係からも，本住居と同時期であり，住居の付属施設と考えられる。その規模は84×62cmの楕円形で，最大の深さは20cm，底面は壁側への若干の傾斜をもつ。本施設の用途については確認できなかった。

〈出土遺物〉（第213図，423図25）

床面より16点，床直より10数点の土器片を出土した。この他に覆土より少量の土器片，１点の石鏃・石錐・円盤状土製品，２点の磨石を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央部付近に多く分布している。

第211図　第68号竪穴住居跡実測図

第212図　第69号竪穴住居跡実測図



第213図　第68号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

213図1・3・5・7・9は床面，6は床直の出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。

第69号竪穴住居跡と出土遺物（第212，214図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部のZD・ZC—9・10グリッドに位置する。V層での確認

である。本住居の南側に68号住居跡と２号溝が，西側には87号住居跡が存在する。なお，本住居内にほぼ近接する２対のピットが存在することから，壁を同一とする改築が考えられる。

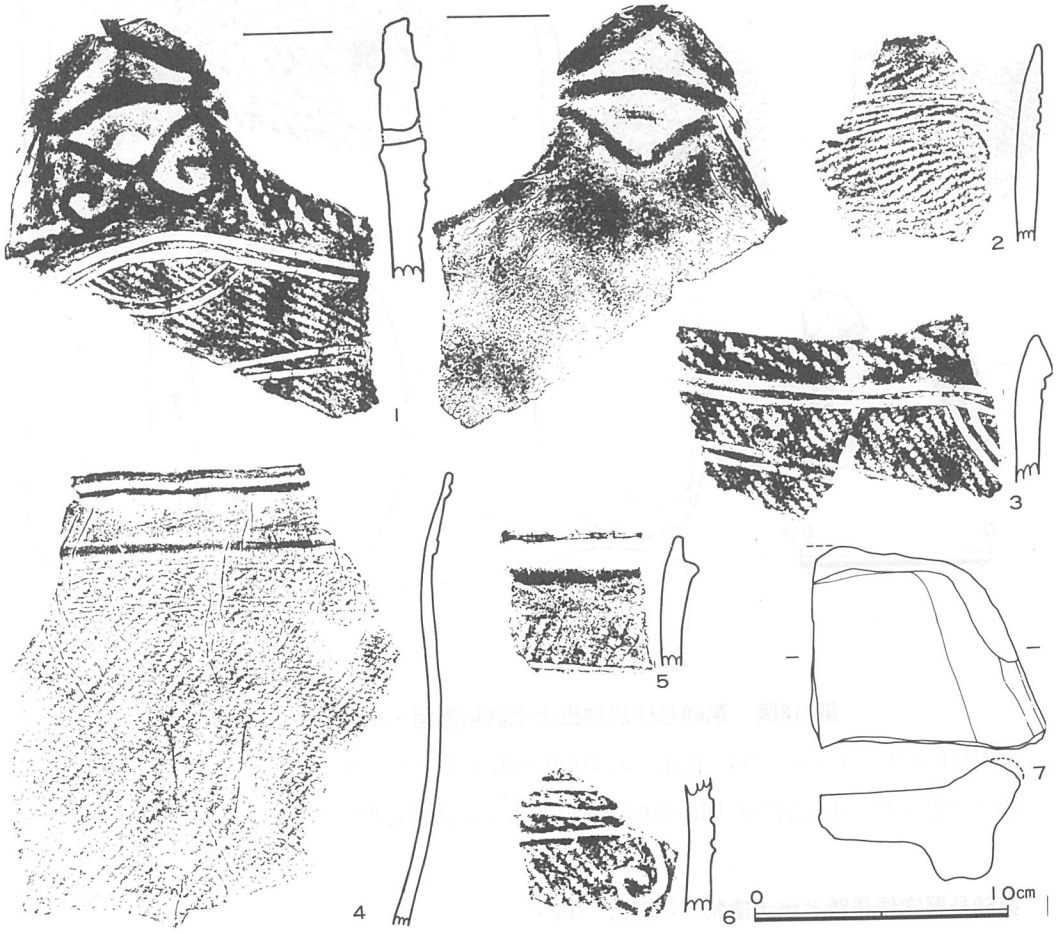
〈平面形・規模〉　3.90×3.15mの楕円形を呈する。主軸方向はN—63°—W，床面積は9.52㎡を計る。

〈堆積土〉　４層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。凹凸があり，堅くしまっている。壁はⅤ層から成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁19.6cm，南東壁12.8cm，南西壁19.5cmを計る。なお，北西壁の一部は攪乱を受けている。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡から８個のピットが検出された。このうちPit１・２または３・４・５・６または７・８を主柱穴とし，主軸に対称な３対６個(Pit１・８，Pit２または３・６または７、Pit４・５）を基本とする柱配置と考えられる。



第214図　第69号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

第69号竪穴住居ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	28×25	30×22	30×34	21×18	29×28	26×21	34×24	26×18
深　さ	43.8	43.7	49.3		20.1	57.9	14.5	63.0

〈炉〉　住居跡主軸線上に２つの地床炉が検出された。１号炉は，住居跡中心よりやや北西寄りに位置し，38×27cmの範囲に，最大６cmの厚さの焼土が確認された。２号炉は，中心よりやや南東寄りに位置し，43×34cmの範囲に，最大４cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第214図）

床面より２点，床直より数点の土器片を出土した。この他に覆土より，１個の復元可能土器，少量の土器片，１点の石皿を出土した。これらの遺物は，平面的には北東側の分布密度が小さい。

214図１～３は，床直出土土器である。

床面及び床直上出土土器より，本住居の時期は中期 中葉(円筒上層e式併行期)と考えられる。

第70号竪穴住居跡と出土遺物（第215，216，396，427図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北側のＺＤ・ＺＣ—17・18グリッドに位置する。本住居跡周辺は配石遺構の集中する場所で，本遺構は２号配石遺構の精査中に確認された。

２号配石遺構，90号土壙と重複，本遺構は２号配石遺構より古く，90号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉　4.97×4.74mの不整円形を呈する。長軸方向はＮ—90°—Ｗ，主軸方向Ｎ—０°—Ｗ，床面積は20.12㎡を計る。

〈堆積土〉　人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ｖ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，しまりは弱い。壁はⅣ・Ｖ層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁35.3cm，西壁46.9cm，南壁39.6cm，北壁44.5cmを計る。

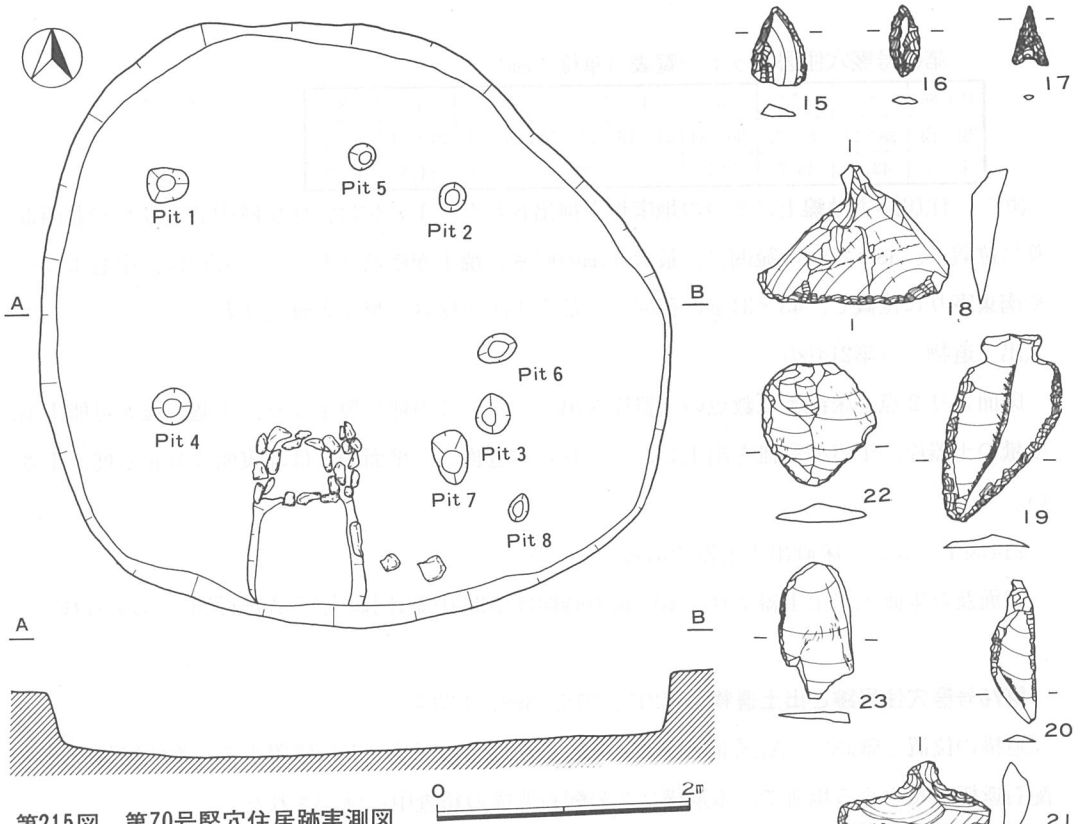
〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より８個のピットが検出された。このうちPit１・２・４・７を主柱穴とし，主軸線に対称な２対４個（Pit１・２，Pit４・７）を基本とする柱配置と考えられる。

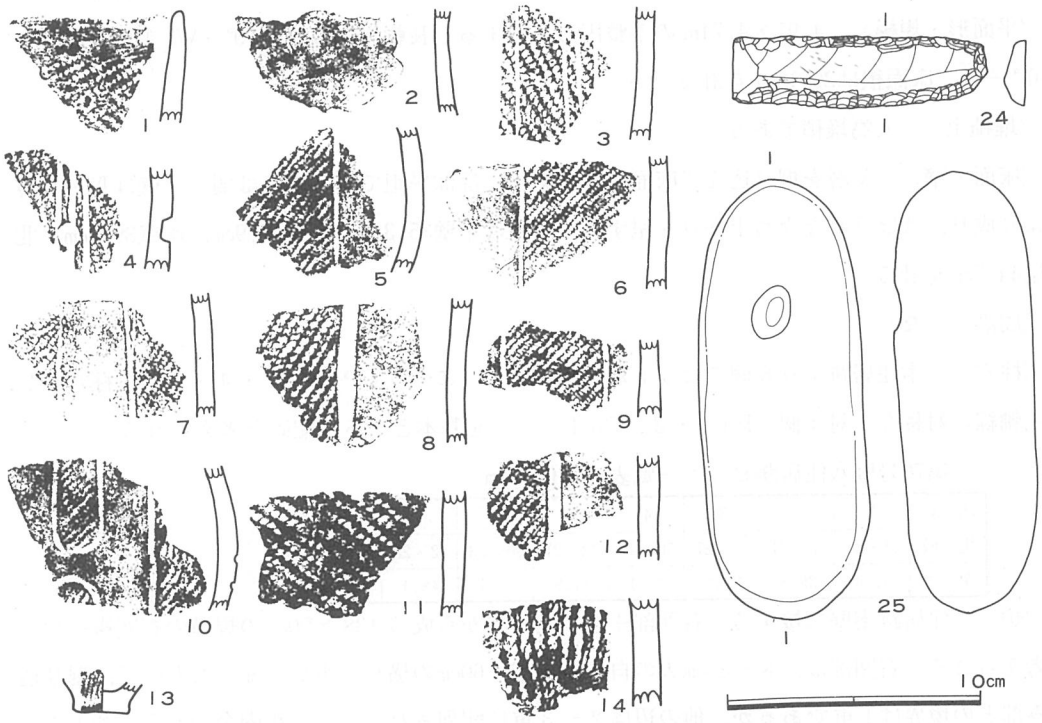
第70号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	32×28	22×21	30×27	30×28	22×21	30×23	12×28	23×16
深　さ	32.8	29.3	22.9	30.4	17.8	15.1	48.4	19.3

〈炉〉　住居跡南壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る138×90cmの規模の石囲複式炉と考えられる。石囲部は，８～20cm大の自然石を86×60cmの横長の方形に配したもので，掘り込み部との境界は１重であるが，他の辺は２～３重に配列されている。炉内全域から，若干の火



第215図　第70号竪穴住居跡実測図



第216図　第70号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

熱を受けた痕跡が確認された。掘り込み部は92×90cmの隅丸方形で，片側縁の定位置に28cm大の自然石，その周辺に炉石と思われる14cm・18cm大の２個の自然石が検出され，全体として，「⌂」形の炉石の配置となるものと思われる。

〈出土遺物〉（第216図，396図11，427図８）

床面より１個の復元可能土器と数点の土器片，床直より数点の土器片を出土した。また覆土より，１個の復元可能土器,1/5箱の土器片，１点の凹石・有孔石製品，３点の石鏃・掻器，４点の石匙を出土した。これらの遺物は，平面的には炉西側に多く分布している。

396図11は,中央床面出土の深鉢形土器で，口径14.9cmを計る。口縁部から胴部上半に隆沈文による横位楕円文を主文様とする文様帯をもち，区画文内にはＬＲ縄文を充塡，胴部下半には床面の出土土器より，本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

第71Ａ号竪穴住居跡と出土遺物（第217,218,220,221,223,396,399,403,422,426図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＨ・Ｉ―９・10グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。71Ｂ・71Ｃ号住居跡と重複，本住居跡がいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉　4.80×4.72mの円形を呈する。主軸方向はＮ―11°―Ｅ，床面積は14.84㎡を計る。

〈堆積土〉　５層に区分でき，人為堆積である。

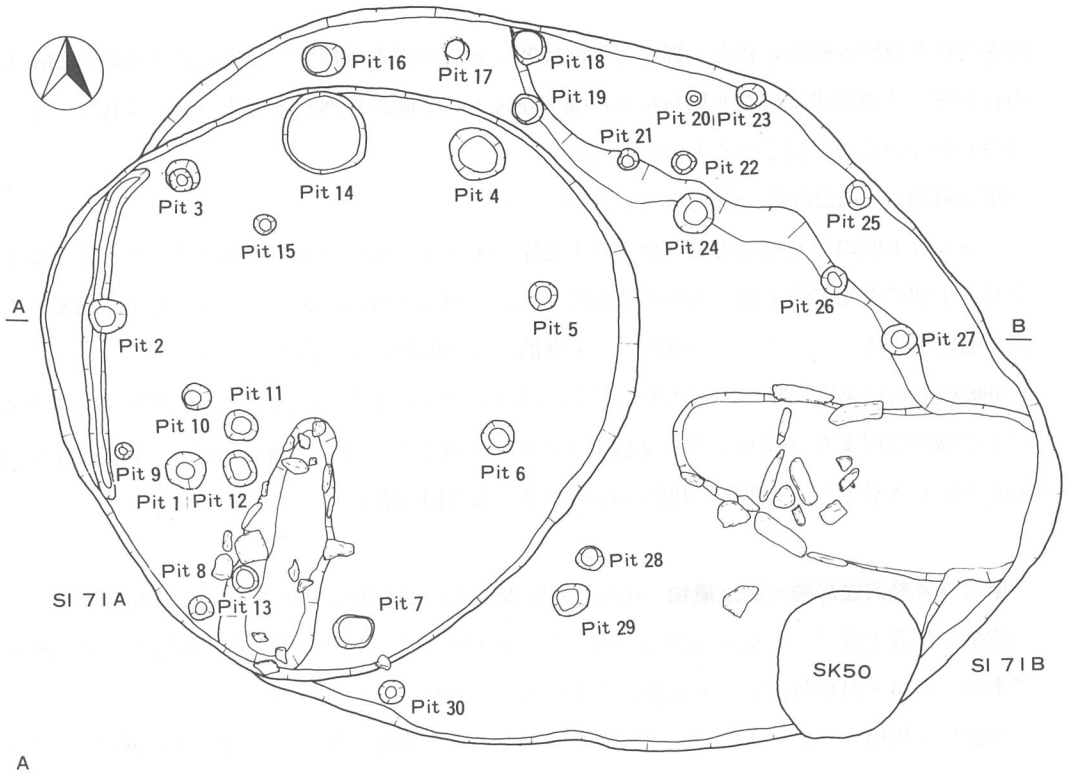
〈床面・壁〉　Ⅴ層を床面とする。なお東壁側には，明黄褐色土による貼床を施している。床面はほぼ平坦で，しまりはあまり強くない。東・北壁及び南東壁側は71Ｂ号住居跡覆土，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成り，急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁34cm，西壁26cm，南壁37cm，北壁42cmを計る。

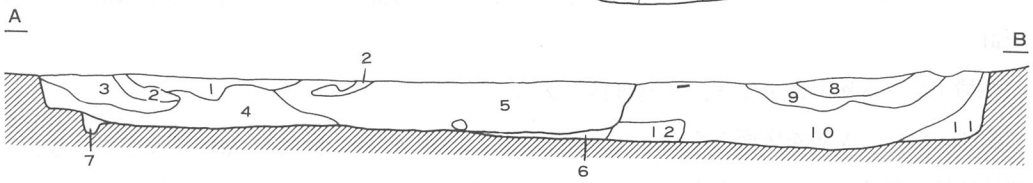
〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　71Ａ・71Ｂ号住居跡より計30個のピットが検出された。このうちPit２～５・７・８・14を主柱穴とし，主軸線に対称な５対10個（Pit２(未検出)，３・５，４・14，７・８，９・(未検出)）を基本とする柱配置が考えられる。また，Pit３・４・６～９を主柱穴とし，主軸線に対称な３対６個（Pit３・４，６・９，７・８）を基本とする柱配置も考えられる。

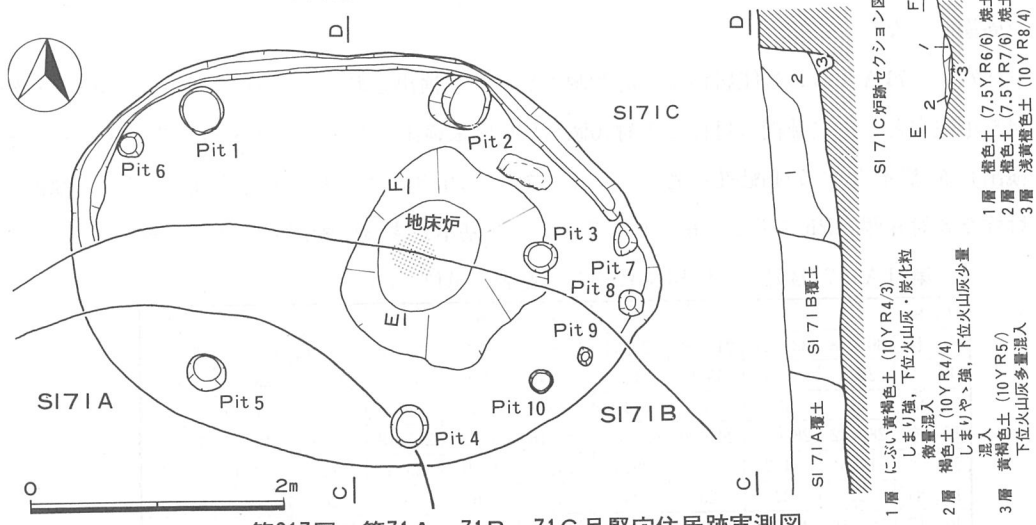
第71Ａ・71Ｂ号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	30×28	32×24	24×24	42×41	14×11	26×26	32×26	20×16	16×13	22×20
深　さ	20.5	31.9	55.1	41.3	17.4	21.9	34.3	23.2	28.1	13.2
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	28×22	28×22	20×20	65×65	18×16	33×26	20×18	26×25	24×23	11×10
深　さ	19.8	4.2		29.5	13.0	19.9	25.5	17.4	29.9	13.4
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
規　模	18×16	20×20	22×20	32×30	23×20	22×20	26×24	22×20	30×26	20×18
深　さ	26.0	22.8	14.1	39.6	19.1	13.9	20.5	14.8	34.3	7.4

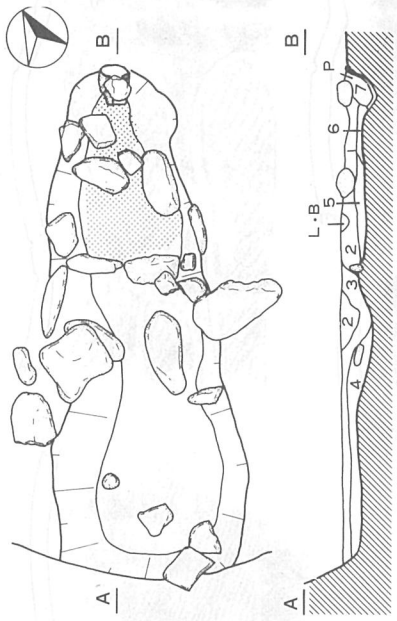




1層　褐色土（10YR4/4）炭化粒微量混入
2層　浅黄橙色土（10YR8/4）
3層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
4層　褐色土（10YR4/4）
5層　褐色土（10YR4/4）浮石・炭化粒多量混入
6層　明黄褐色土（10YR7/6）SI 71A貼床土
7層　暗褐色土（10YR3/4）SI 71B周溝覆土
8層　褐色土（10YR4/4）しまり強，炭化物微量混入
9層　黄褐色土（10YR5/6）しまり強
10層　黄褐色土（10YR5/6）しまり弱
11層　暗褐色土（10YR3/4）
12層　暗褐色土（10YR3/4）



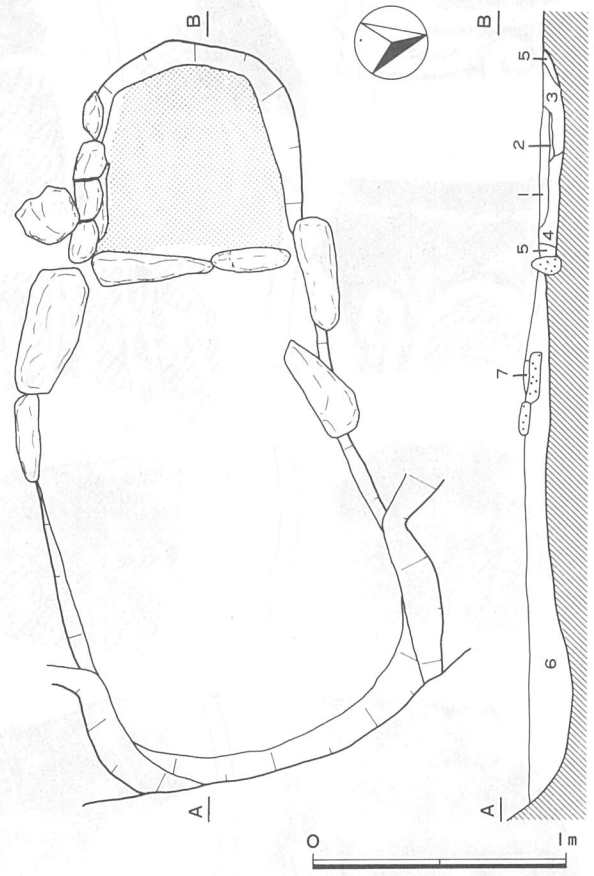
第217図　第71A・71B・71C号竪穴住居跡実測図



1層　黒褐色土（10YR2/3）
　　焼土・炭化物微量混入
2層　暗褐色土（10YR3/4）
　　しまり強，焼土・炭化物・下位火山灰微量混入
3層　暗褐色土（10YR3/4）
　　しまりやや弱，下位火山灰ブロック若干混入
4層　黒褐色土（10YR2/3）
　　しまりやや弱，下位火山灰若干混入
5層　明褐色土（7.5YR5/6）
　　焼土，しまり強
6層　橙色土（7.5YR6/6）
　　焼土，炭化物微量混入
7層　明黄褐色土（10YR6/6）
　　しまり弱，褐色土少量混入

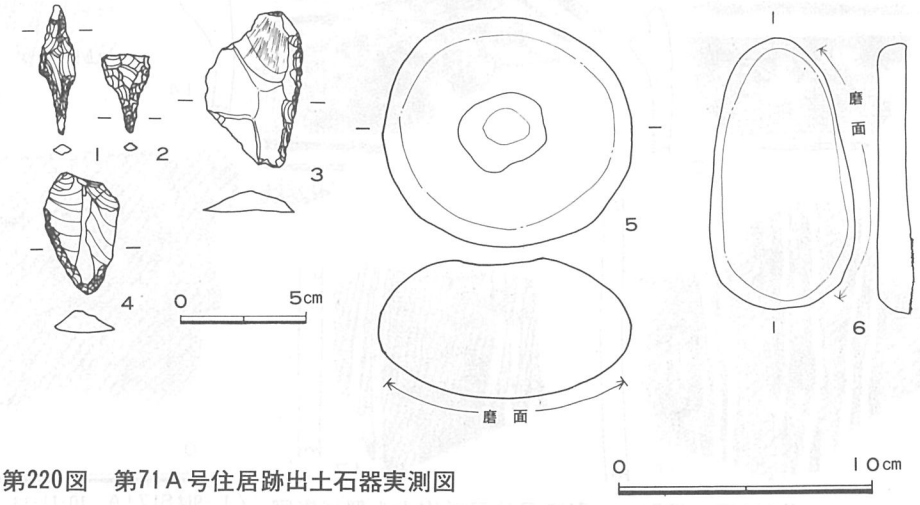
0　1m

第218図　第71A号住居炉跡微細図

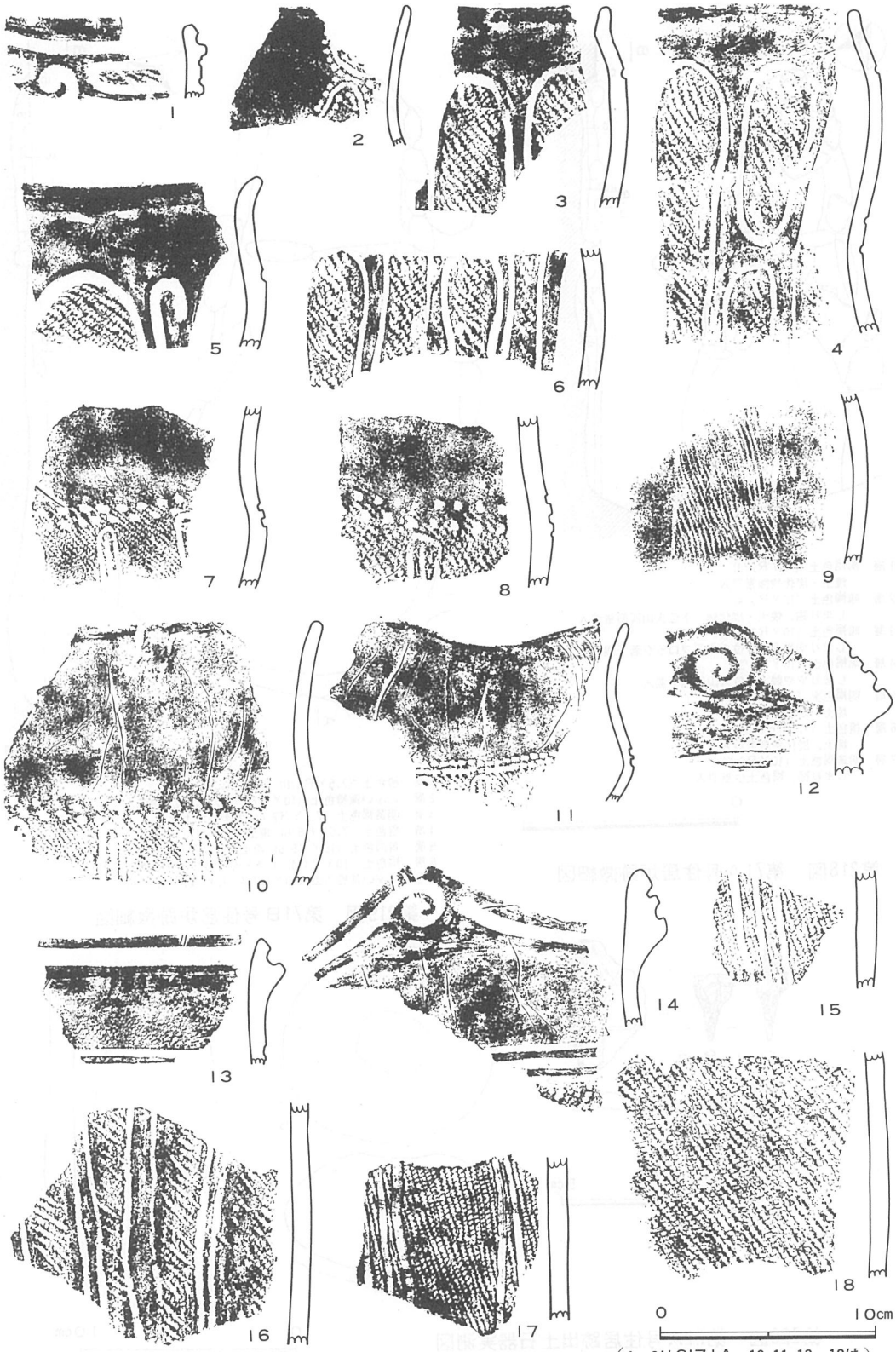


1層　橙色土（7.5YR6/8）焼土，しまり強
2層　にぶい黄橙色土（10YR7/3）砂質，焼土粒混入
3層　明黄褐色土（7.5YR7/6）若干の焼土化
4層　橙色土（7.5YR6/6）焼土，しまりやや弱
5層　黄褐色土（10YR5/6）焼土微量混入
6層　褐色土（10YR4/4）しまりやや強，炭化物微量混入
7層　にぶい黄橙色土（10YR7/4）粘性強，しまり弱

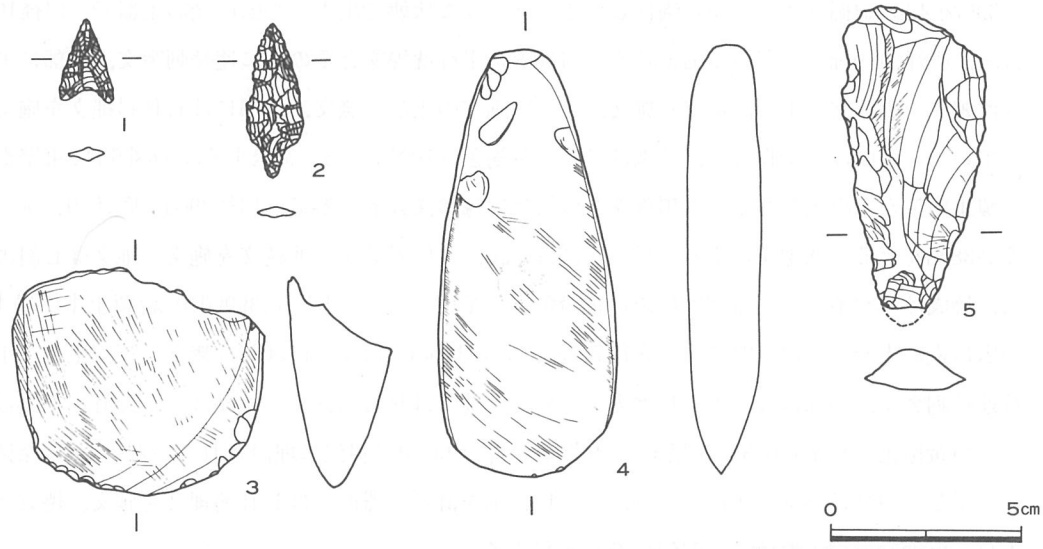
第219図　第71B号住居炉跡微細図



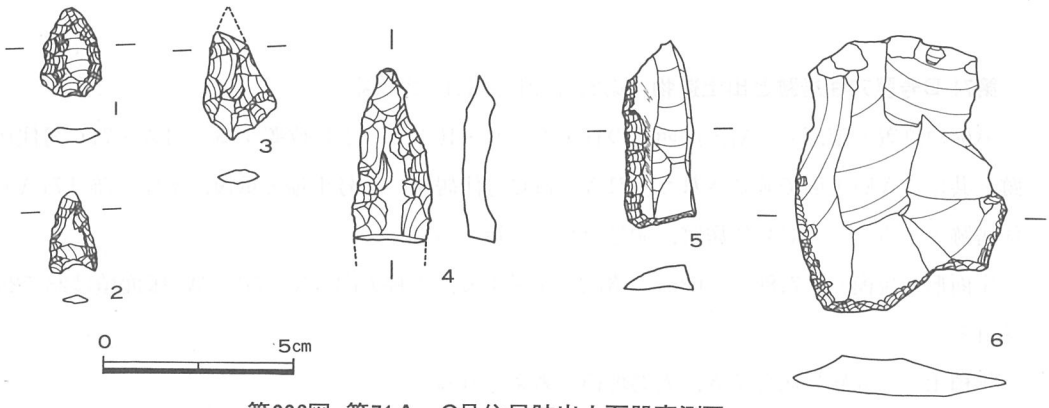
第220図　第71A号住居跡出土石器実測図



第221図　第71A・71B号住居跡出土土器拓影図　（1～9はSI71A，10・11・13～18はSI71B，12はSK50）



第222図　第71B・71C号住居跡出土石器実測図（1，3，4はS171B　2，5は　S171C）



第223図　第71A～C号住居跡出土石器実測図

〈炉〉　南壁に接する。半壊しているが，土器埋設石囲部＋石囲部＋掘り込み部から成る200×74cmの規模の土器埋設石囲複式炉と考えられる。土器埋設石囲部及び石囲部内底面ほぼ全域が火熱を受け，焼土化している。なお，埋設土器は土器埋設部の先端に位置し斜位の状態で埋設されていた。

〈出土遺物〉（第220，221，223図，396図2，399図6・10，403図15，422図25，426図17）

炉内より2個の復元可能土器，ピット内より1点の掻器，床面より5点の土器片，床直より20点弱の土器片と1点の掻器を出土した。この他に覆土中から，2個の復元可能土器，1/2箱の土器片，1点の石槍・石錐・磨石・ペンダント・有孔石製品・有孔土製品，2点の凹石，4点の石鏃・掻器を出土した。

396図２は，炉掘り込み部から横転しつぶれたような状態で出土した広口壺形土器で，口径10.7cm，底径 4.9cm，器高15.9cmを計る。口頸部に平行沈線文とその間に連続刺突文，胴部に平行沈線文と刺突文による波状文を施文，この区画文の上部は無文，下部にはＬＲ斜縄文を施文している。焼成はやや良好で，色調はにぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）を呈する。399図６は，東壁寄り覆土中位から出土した５つの頂部をもつ波状口縁の深鉢形土器で，口径29cm，底径 9.5cm，器高38cmを計る。沈線文による「Ｕ」文，「∩」文，縦位渦巻文の連続文を施文，地文はＬ斜縄文，焼成はやや不良で，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/6）を呈する。399図10は，覆土中位出土の広口壺形土器で，口径24.7cm，底径7.5cm，器高31.5cmを計る。口縁部は無文，胴部上端に平行連続刺突文，胴部には「ⅿ」状懸垂文を施文，地文はＲＬ斜縄文，焼成はやや良好，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）を呈する。403図15は，炉北端に斜位に埋設されていた土器で，深鉢形を呈し，口径15.8cm，底径 6.6cm，器高19.4cmを計る。器面にはＬＲ斜縄文を施文，焼成は不良，色調はにぶい橙色（7.5ＹＲ7/3）を呈する。

221図１・７は床面より，２・９は床直の出土土器である。

炉内からの出土土器より，本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。

第71Ｂ号竪穴住居跡と出土遺物（第217，219，221～223図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＨ・Ｉ－９・10グリッドに位置する。71Ａ・71Ｃ号住居跡と共に，Ⅳ層上面で確認された。71Ａ・71Ｃ号住居跡，50号土壙と重複，本住居跡は71Ａ号住居跡より古く，71Ｃ号住居跡，50号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉　7.86×5.68m の楕円形を呈する。主軸方向はN－77°－W，床面積は23.52㎡を計る。

〈堆積土〉　５層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともⅤ層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは，炉跡部分を除く北壁東半より東壁にかけて位置し，その規模は22～80cmの幅で，床面から８～15cmの高さにある。壁高は南東壁68.9cm，南西壁39.2cm，北西壁35.6cm，北東壁確認面からテラス面まで64.8cmを計る。床面は，ほぼ平坦でしまりは弱く，テラス面も，しまりは弱い。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，西壁は71Ａ号住居構築により消失している。ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　西壁下に幅14～18cm，深さ８～10cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　Pit１・16・19・24・27・29を主柱穴とし，未検出及び重複により消失した柱穴を加え，主軸線に対称な４対８個（Pit１・16，Pit19・(未検出)，Pit24・29，Pit27・(未検出)）を基本とする柱配置と考えられる。また，北東壁際に位置するテラスの壁際及び床側に規則的な柱

列が見られる。(本住居跡ピット一覧は，71A号住居跡に付す)

〈炉〉　住居跡主軸線上，東壁に接する。半壊しているが，石囲部＋掘り込み部，または石囲部（Ⅰ）＋石囲部（Ⅱ）＋掘り込み部から成る291×130cmの規模の石囲複式炉である。石囲部（Ⅰ）は半壊し，東・南側縁の炉石のみしか残存しないが，掘り込み及び焼土範囲より，90×90cmの台形または方形に自然石を配していたものと推測される。この石囲部（Ⅰ）内ほぼ全域に褐色の焼土が確認され，その最大の厚さは10cmにも及ぶ。石囲部（Ⅰ）を除く部分は，200×130cmの長方形の掘り込みで，その両縁の石囲部（Ⅰ）側半分には炉石が配置されている。この掘り込みを二分する石の抜き取り痕は検出できなかったが，掘り込みの長軸が長いこと，壁側の底面が一段下がること，石囲部（Ⅰ）側に6個の炉石と見られる石が散在すること等より，方形の石囲部と掘り込み部に二分されていた可能性もある。すなわち全体として「⊓」または「⊟」形の炉石の配置と考えられる。なお掘り込み部には，微量の炭化物の混入は見られるものの，焼土は確認されていない。

〈出土遺物〉（第221～223図）

床面より13点の土器片と1点の石鏃・掻器，床直より1個の復元可能土器と10点弱の土器片を出土，他に覆土より1/2箱の土器片，1点の石鏃，2点の磨製石斧・掻器を出土した。これらの遺物は，平面的には炉周辺に多く分布している。

221図11・13・15・17は床面，14は床直出土の土器である。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第71C号住居跡と出土遺物（第217，222，223図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部H－9・10グリッドに位置する。71A・71B号住居跡と共にⅣ層上面で確認された。71A・71B号住居跡と重複，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　4.68×3.24mの楕円形を呈する。主軸方向はN－78°－W，床面積は(11.20)㎡を計る。

〈堆積土〉　南半が71A・71B号住居跡との重複のため，本住居跡堆積土は消失している。残存部は3層に区分でき若干レンズ状で，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。若干レンズ状で，堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，南半の壁は，71A・71B号住居構築により消失している。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁43.0cm，西壁37.5cm，北壁47.6cmを計る。

〈周溝〉　東壁の一部を除き，残存する壁下に，幅10cm前後，深さ3～10cmの周溝が一巡する。

〈柱穴〉　本住居跡に関連するピットとして，10個検出された。このうちPit 1・2・4・5を主柱穴とし，主軸線に対称な2対4個（Pit 1・5，Pit 2・4）を基本とする柱配置と考えられ

る。南東壁際に，壁柱穴と考えられるPit 7 ～10が配置される。

第71C号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	38×34	50×44	26×24	34×30	30×28	20×20	26×18	20×20	13×12	19×18
深　さ	35.0	53.1	8.0	11.7	16.7	15.5	18.4	15.9	20.0	34.1

〈炉〉　住居跡主軸線上に，中央よりやや東寄りに位置する。地床炉で規模174×160cm，深さ8cmの凹地の中央底面に，35×34cmの範囲で，最大5cmの深さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第222，223図）

遺物量は少なく，住居中央よりやや南西寄りに点在する。床面・床直より各数点の土器片を出土したほか，北東壁下より1点の石皿を出土した。覆土からは，少量の土器片を出土したのみである。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第72号竪穴住居跡と出土遺物（第224～227図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北東部のZA・A—22グリッドに位置する。Ⅲ層中位での確認である。本住居跡北西側に42A・42B号住居跡が近接する。

〈平面形・規模〉　3.56×3.94mの楕円形を呈する。主軸方向はN—18°—E，床面積は10.96㎡を計る。

〈堆積土〉　6層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅲ層を掘り込んで床面としている。北西壁際から南東壁際へ緩やかに傾斜し，ほぼ平坦で軟らかい。壁はⅢ層より成り，緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は北東壁9.9cm，北西壁13.3cm，南東壁10.8cm，南西壁10.0cmを計る。

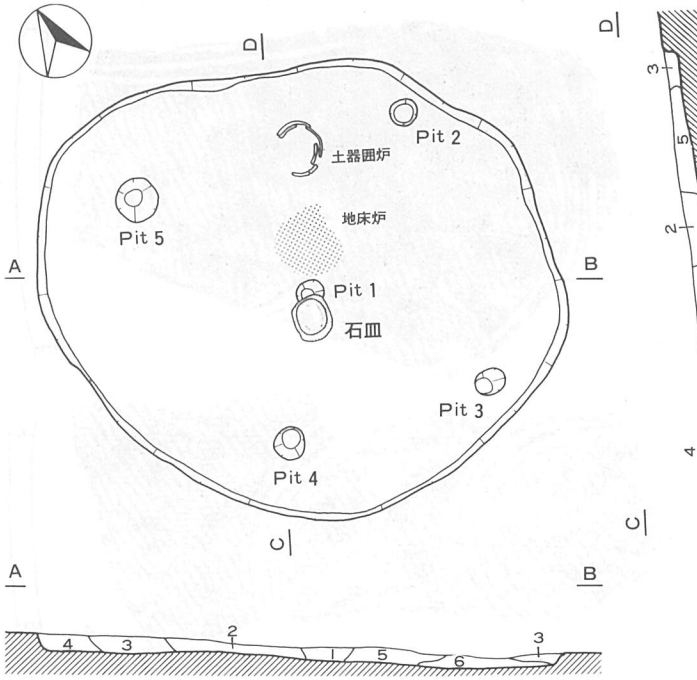
〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より5個のピットが検出された。住居跡のほぼ中央（Pit 1）と，北東・北西・南東・南西壁際（Pit 5・Pit 2・Pit 4・Pit 3）という柱配置である。

第72号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

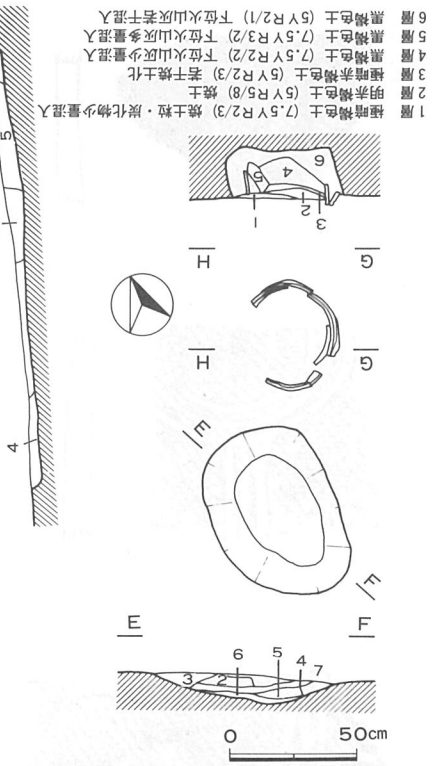
Pit No.	1	2	3	4	5
規　模	23×20	22×20	24×20	25×25	35×33
深　さ	39.3	17.9	49.8	66.0	23.4

〈炉〉　住居跡中央よりやや北寄りに地床炉，北東壁際に土器片囲炉が検出された。地床炉は，71×50cmの規模で，最大11cmの深さの楕円形の掘り込み内より，厚さ約7cmの焼土が確認された。土器片囲炉は，深鉢形土器片を直径42cmに3/4周させたもので，部分的に2重に配されている。この炉内には，若干東側に偏在して厚さ4～5cmの焼土が確認された。土器片囲炉の掘り方は，径44cm，深さ20cmである。



1層　にぶい赤褐色土（5YR4/4）焼土粒・下位火山灰多量混入
2層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）浮石粒・下位火山灰 やや多く混入，焼土粒若干混入
3層　暗褐色土（10YR3/3）浮石粒・下位火山灰混入
4層　黒褐色土（10YR3/2）浮石粒混入
5層　褐色土（7.5YR4/4）浮石粒多量混入，下位火山灰・焼土粒若干混入
6層　黒褐色土（10YR2/2）下位火山灰若干混入

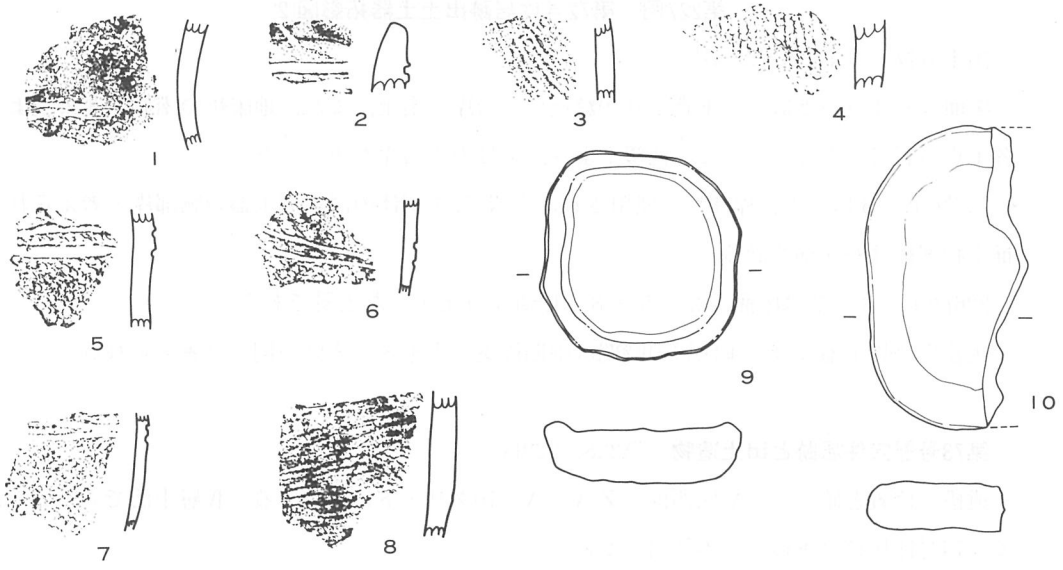
第224図　第72号竪穴住居跡実測図



1層　極暗褐色土（7.5YR2/3）焼土粒・炭化物少量混入
2層　明赤褐色土（5YR5/8）焼土
3層　極暗赤褐色土（5YR2/3）若干焼土化
4層　黒褐色土（7.5YR2/2）下位火山灰少量混入
5層　黒褐色土（7.5YR3/2）下位火山灰多量混入
6層　黒褐色土（5YR2/1）下位火山灰若干混入

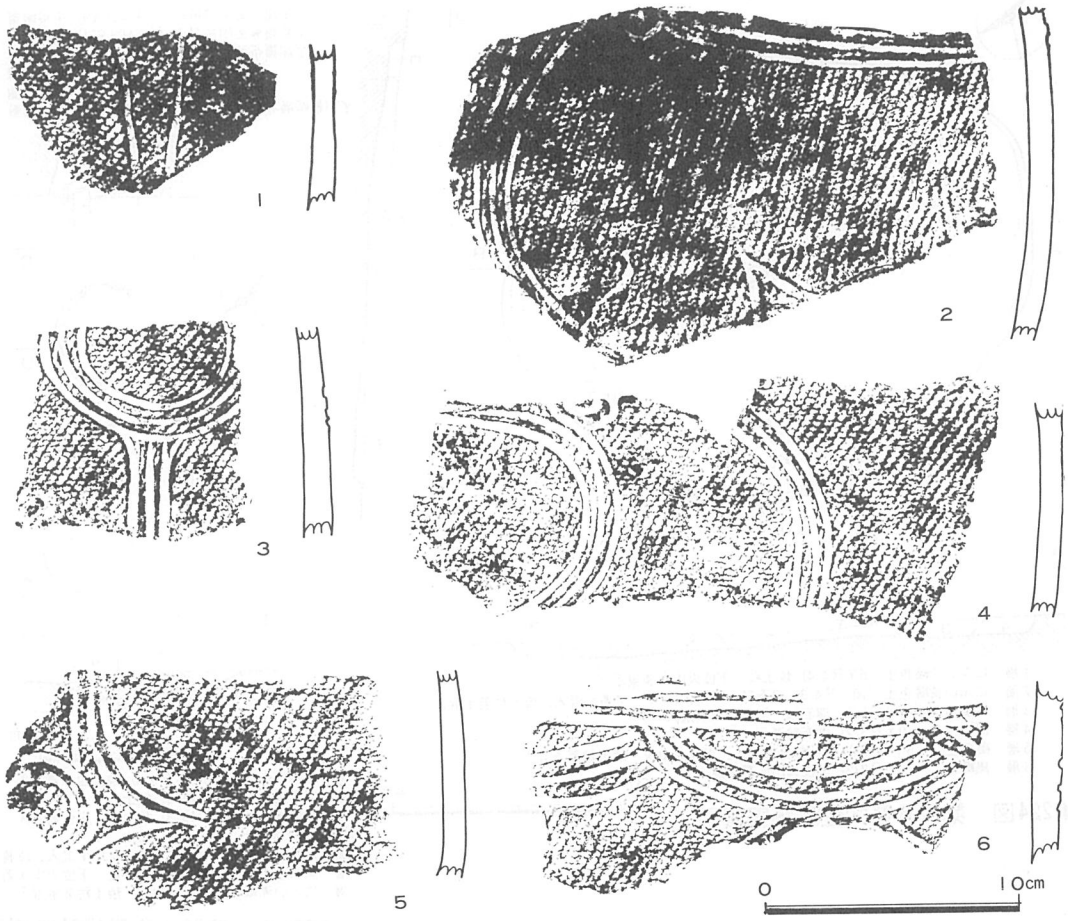
1層　にぶい赤褐色土（5YR4/4）焼土粒多量混入
2層　明赤褐色土（5YR5/8）焼土
3層　暗赤褐色土（5YR3/3）焼土粒・炭化物混入
4層　明赤褐色土（5YR5/6）焼土
5層　黒褐色土（7.5YR3/1）焼土粒若干混入，灰質
6層　黒褐色土（7.5YR2/2）焼土粒・下位火山灰若干混入
7層　にぶい赤褐色土（5YR4/3）焼土粒多量混入

第225図　第72号住居炉跡微細図



第226図　第72号住居跡出土土器拓影図(1)、石器実測図

（ただし、9・10は縮尺$\frac{1}{12}$）



第227図　第72号住居跡出土土器拓影図(2)

〈出土遺物〉（第226，227図）

床面より３点の土器片，床直より10数点の土器片を出土，また，地床炉の南側と北東側より各１点の石皿を出土した。この他覆土より，少量の土器片を出土した。

227図１～６は，土器片囲炉に使用された土器で，１個体の深鉢形土器の胴部片と考えられる。推定胴部径は25.6cmを計る。

226図１・６・７は床面，２・５・８は床直より出土した土器である。

土器片囲炉土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第73号竪穴住居跡と出土遺物（第228，229図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＺＡ・Ａ—10グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。74号住居跡と重複し，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　2.4×2.4m の円形を呈する。床面積は（3.96）㎡を計る。

〈堆積土〉　黒褐色土の単一層である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，堅くしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁22.4cm，西壁16.4cm，南壁13.5cm，北壁14.7cmを計る。南東壁は，74Ｂ号住居構築により消失している。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　南西壁に接して，規模40×36cm，深さ66cmのピット１個が検出されたのみである。

〈炉〉　検出されなかった。

〈出土遺物〉（第228，229図）

床面からは１点の磨製石斧を出土，他に覆土より１/４箱の土器片を出土した。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第74号竪穴住居跡と出土遺物（第228，230図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＺＡ・Ａ・Ｂ—10・11グリッドに位置する。第Ⅳ層上面にて確認された遺構である。床面において，同心楕円形の２重の周溝及びそれぞれに対応する規則的な柱列が検出されたこと等より，一回の増改築が行なわれたと考えられる。便宜的に改築前のプランをＡプラン，改築後のプランをＢプランとして以下記述する。本住居は73・106号住居跡と重複関係にあり，本住居はいずれよりも新しい。

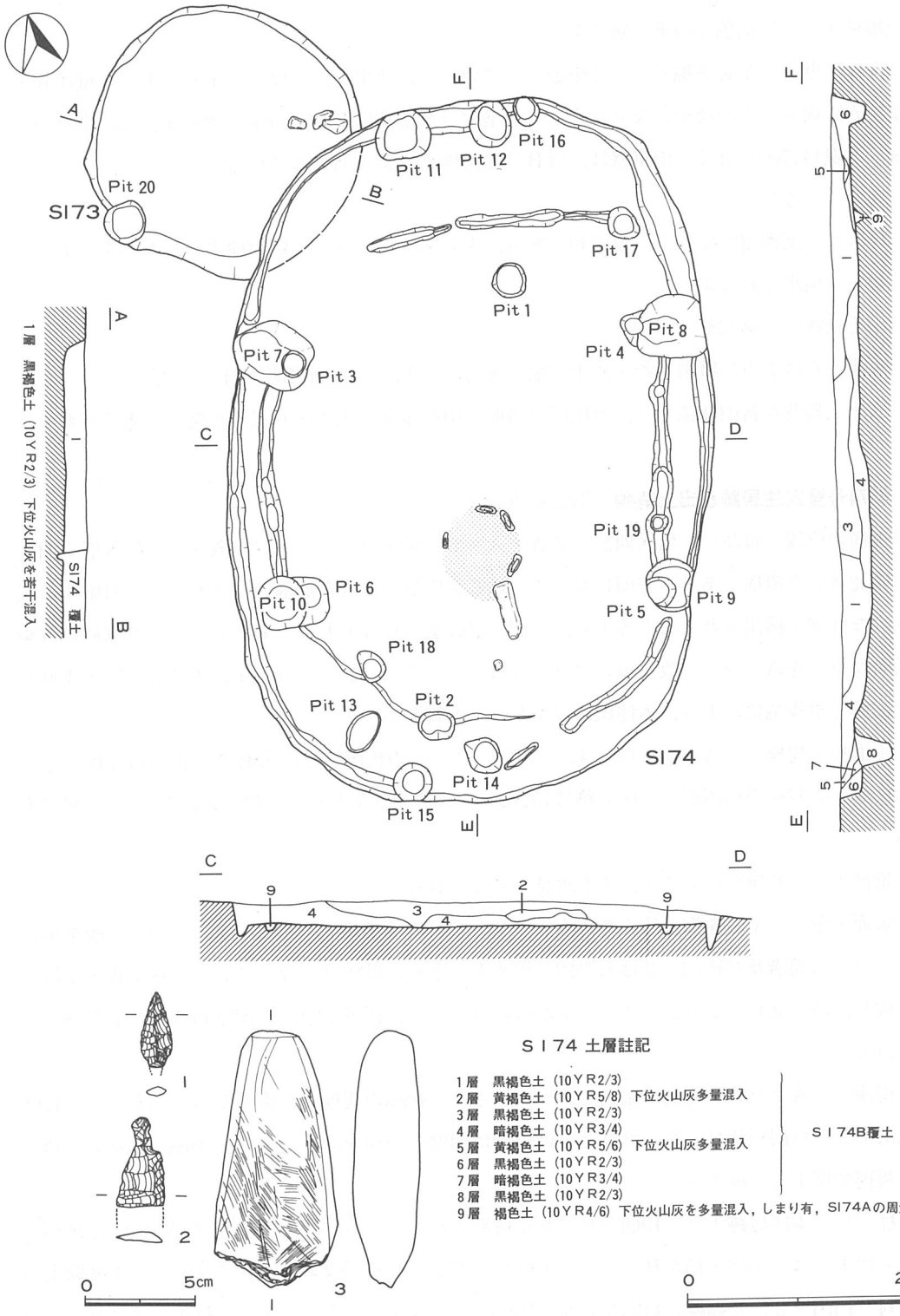
〈平面形・規模〉　Ａプランは（4.9）×（3.9）ｍの楕円形で，床面積は14.28㎡，Ｂプランは6.46×4.47ｍの楕円形で，床面積は19.12㎡を計る。いずれも，主軸方向はＮ—16°—Ｅである。

〈堆積土〉　６層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，堅くしまっている。改築前のＡプランの周溝及びPit１・２は人為的に埋めもどされ，貼床状となっている。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁 5.4cm，西壁19.9cm，南壁14.7cm，北壁16.6cmを計る。

〈周溝〉　Ａプランの周溝は幅15～20cm，深さ７～10cmの規模で，南西壁の一部を除いて4.60×3.60ｍの楕円形状に一巡，Ｂプランの周溝は南壁の一部を除き，幅14～33cm　深さ７～13cmの規模で壁下を一巡する。

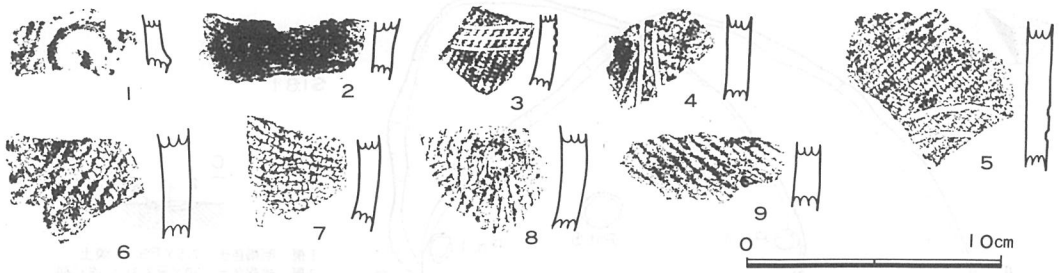
〈柱穴〉　本住居跡より，19個のピットが検出された。このうちPit１～６がＡプラン，Pit７～11・12または16・14・15がＢプランの主柱穴と考えられる。改築前（Ａプラン）が主軸線上の１対（Pit１・２）と軸線に対称な２対（Pit３・４，５・６）の計６個，改築後（Ｂプラン）がが主軸線に対称な４対（Pit７・８，９・10，11・12または16，13・14）８個を基本とする柱配



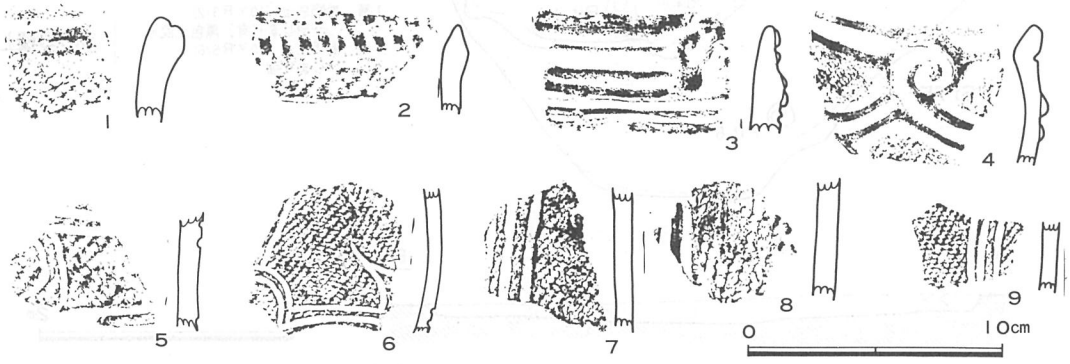
SI74 土層註記

1層	黒褐色土（10YR2/3）	SI74B覆土
2層	黄褐色土（10YR5/8）下位火山灰多量混入	
3層	黒褐色土（10YR2/3）	
4層	暗褐色土（10YR3/4）	
5層	黄褐色土（10YR5/6）下位火山灰多量混入	
6層	黒褐色土（10YR2/3）	
7層	暗褐色土（10YR3/4）	
8層	黒褐色土（10YR2/3）	
9層	褐色土（10YR4/6）下位火山灰を多量混入，しまり有，SI74Aの周溝覆土	

第228図　第73・74号竪穴住居跡実測図・出土石器実測図



第229図　第73号住居跡出土土器拓影図



第230図　第74号住居跡出土土器拓影図

置と考えられる。

第74号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	32×32	34×32	24×22	30×(20)	30×25	40×(30)	70×58	62×57	47×42	50×40
深　さ	16.8	58.9	73.2	78.6	68.1	73.1	65.2	81.0	36.1	81.2
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
規　模	50×44	40×38	42×25	40×32	36×35	26×22	33×26	30×23	17×16	
深　さ	60.2	52.5	59.2	46.8	67.2	42.2	34.4	33.3	44.5	

〈炉〉　主軸線上，中央よりやや南寄りに位置する。凹地が85×76cmの範囲で，若干赤変（焼土化）しており，その周囲より石の抜き取り痕と思われるピットが検出された。このことから本炉は石囲炉と考えられる。

〈出土遺物〉（第228，230図）

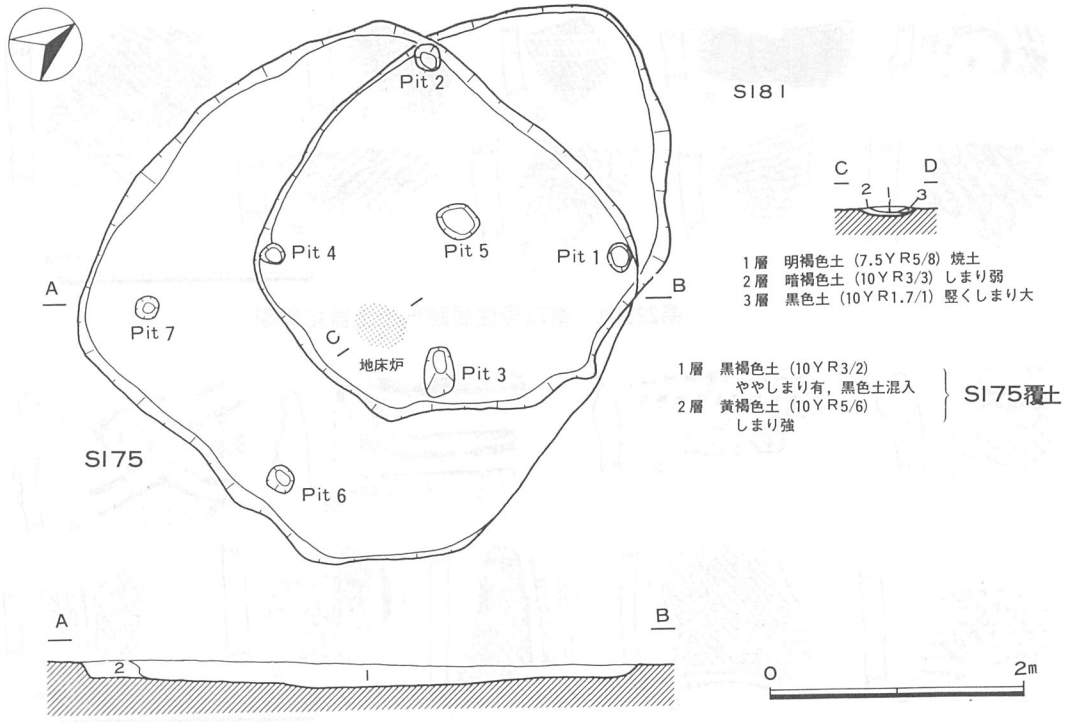
遺物はすべて覆土中から出土したものであり，2/3箱の土器片と，石鏃・石匙を１点出土した。

出土遺物及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

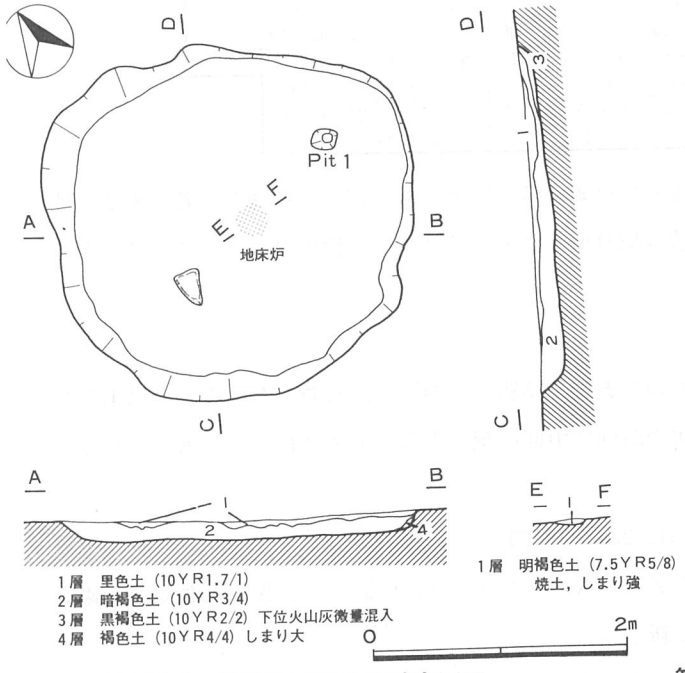
第75号竪穴住居跡と出土遺物（第231，234，235図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部のＺＡ・Ａ―８グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。81号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

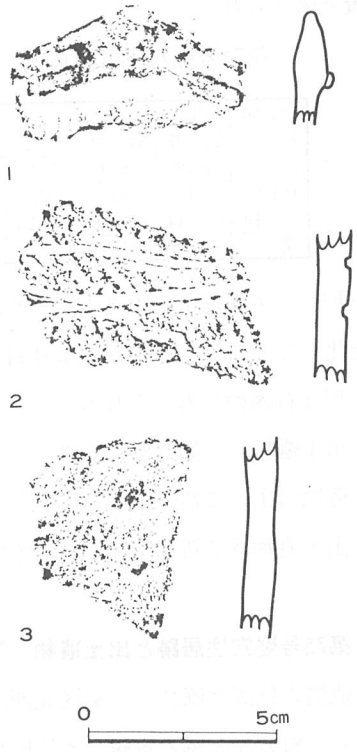
〈平面形・規模〉　3.86×(3.68)ｍの隅丸方形を呈する。床面積は(11.60)㎡を計る。



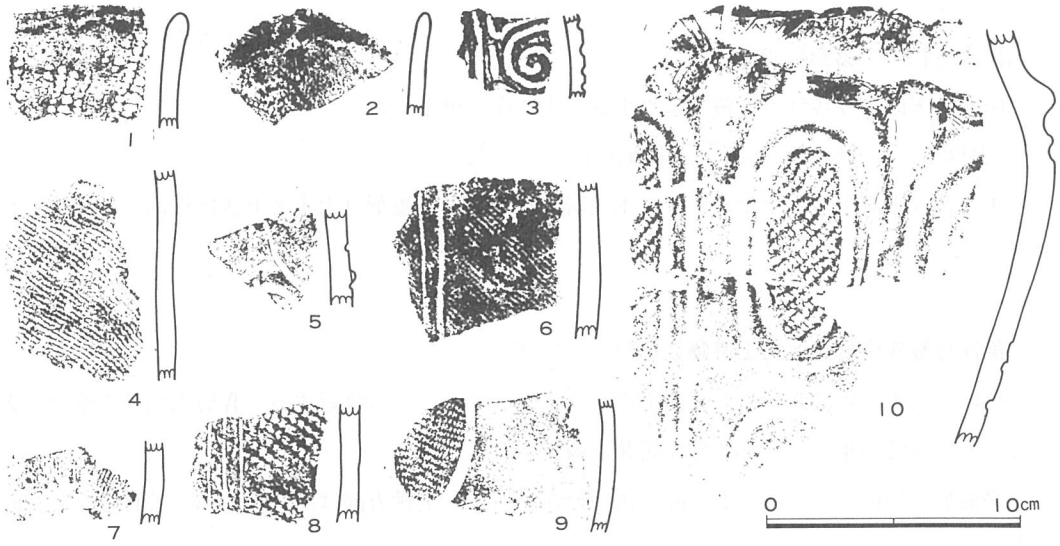
第231図　第75・81号竪穴住居跡実測図



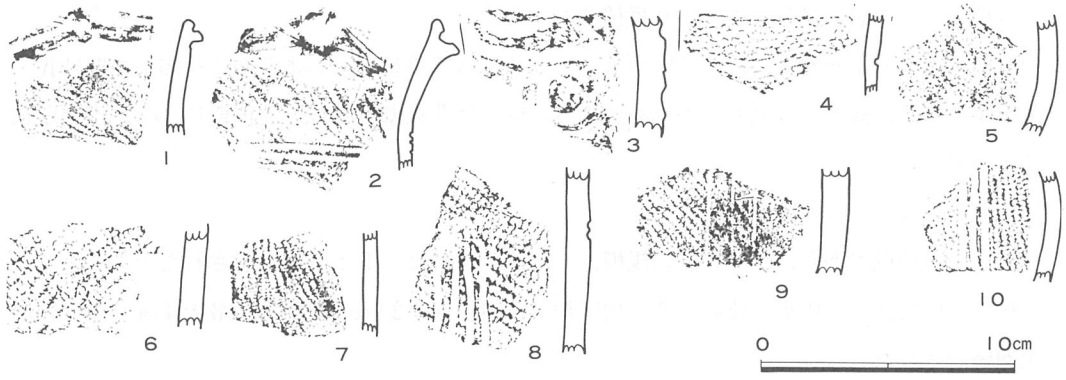
第232図　第76号竪穴住居跡実測図



第233図　第76号住居跡出土土器拓影図



第234図　第75号住居跡出土土器拓影図



第235図　第81号住居跡出土土器拓影図（ただし４は第75号住居出土遺物）

〈堆積土〉　２層に区分でき，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　重複部分は81号住居跡覆土，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。平坦で，全体的にしまりが弱い。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，やや緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は北西壁6.7cm，南東壁7.4cm，南西壁11.3cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　75・81号住居跡より計７個のピットが検出された。このうち各壁隅のPit１・２・６・７が主柱穴と考えられる。

第75・81号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7
規　模	24×19	25×19	42×20	22×17	35×26	23×19	21×18
深　さ	16	13	61.3	30.6	32.9	37	12

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉であり，42×31cmの範囲に，最大７cmの深さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第234，235図）

床面・床直より各数点，覆土より少量の土器片が出土した。

234図２・５は床面，235図４は床直出土の土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第76号竪穴住居跡と出土遺物（第232，233図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部のＡ－７・８グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡の東側に75・81号住居跡が隣接する。

〈平面形・規模〉　3.06×2.73mの楕円形を呈する。主軸方向はN—83°—W，床面積は5.32㎡を計る。

〈堆積土〉　４層に区分でき，自然堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，しまりがやや弱い。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は北東壁27.6cm，北西壁13.0cm，南西壁13.3cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　西壁際から，22×17cmの規模，１cmの深さのピット１個が検出されたのみである。

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉であり，24×20cmの範囲に，最大４cmの深さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第233図）

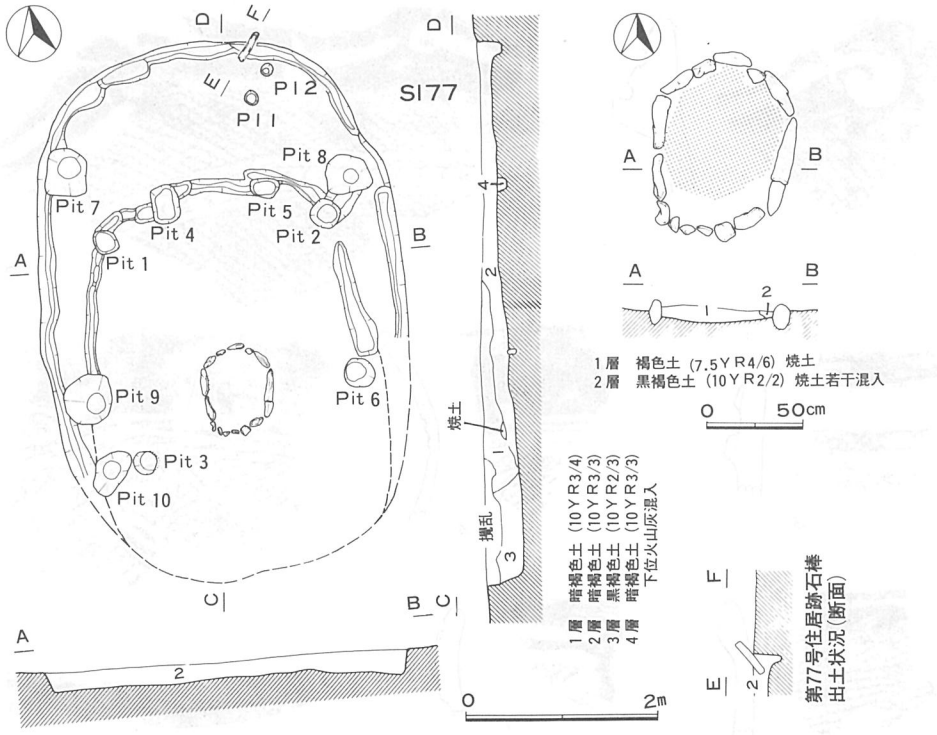
床面より数点，覆土より若干の土器片を出土した。

出土土器より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層ｅ式併行期）と考えられる。

第77号竪穴住居跡と出土遺物（第236，237，427図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＢ・Ｃ—10・11グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。床面において，２重の周溝及びそれぞれに対応する規則的な柱列が検出され，この２つのプランの長軸が同一であること等より，一回の増改築が行なわれたと考えられる。柱列及び周溝より，北・東・西の三方向への拡張と判断される。便宜的に改築前のプランをＡ，改築後のプランをＢとして以下記述する。本住居南壁側が78Ｂ号住居跡と重複，本住居が新しい。

〈平面形・規模〉　Ａプランは（4.14）×（3.20）ｍの楕円形で，床面積は9.84㎡，Ｂプランは（5.56）×3.86mの楕円形で，床面積は（17.12）㎡を計る。いずれも主軸方向はN—3°—Eである。



第236図　第77号竪穴住居跡実測図・同住居炉跡微細図

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　本住居跡南側は78B号住居跡覆土，他はⅤ層を床面とする。全体に平坦で，堅くしまりがある。南半の重複部分は78B号住居跡覆土を，他はⅣ・Ⅴ層を壁とする。いずれの壁も垂直に立ち上がりを呈し，壁高は東壁19cm，西壁24cm，南壁25cm，北壁18cmを計る。

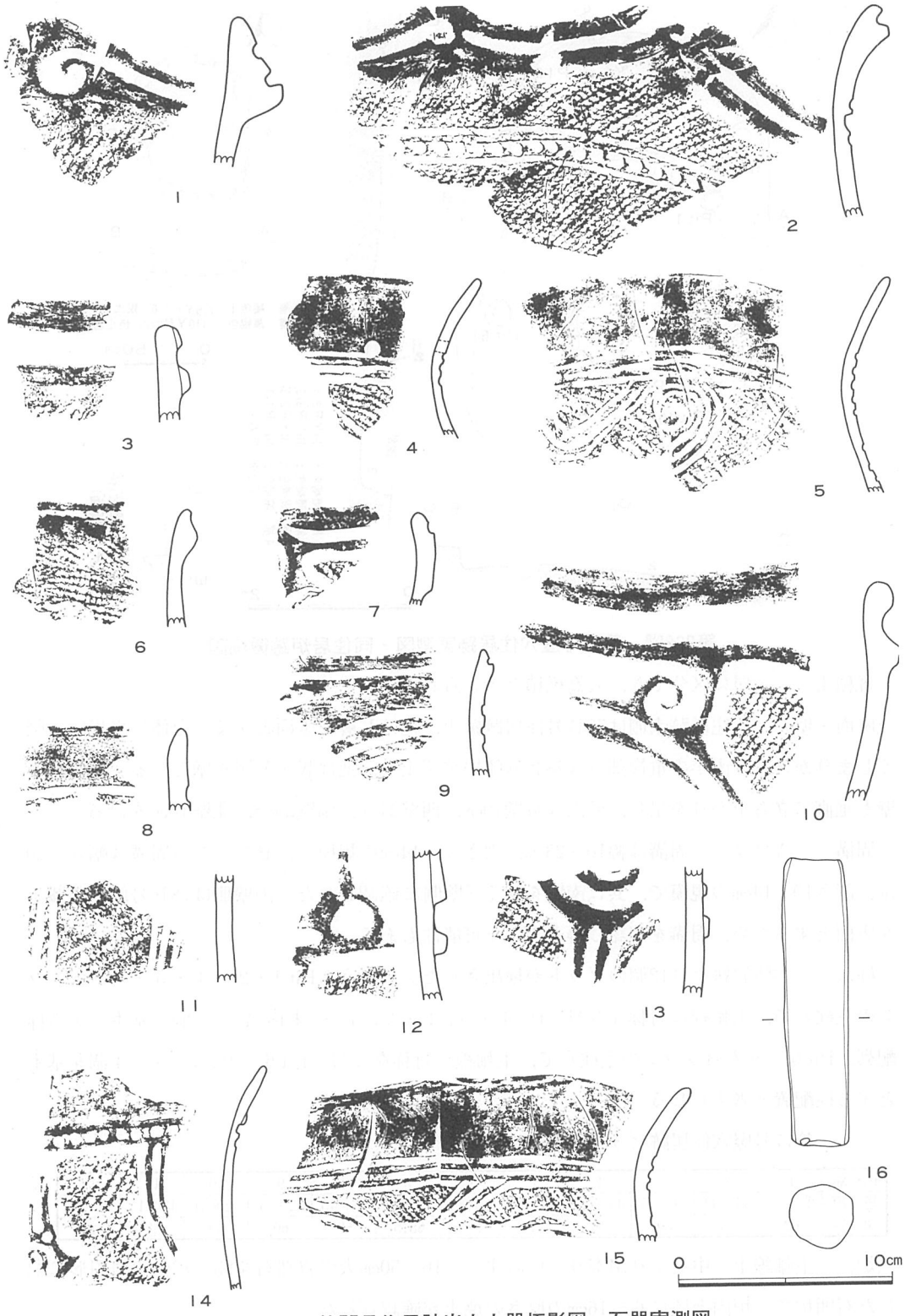
〈周溝〉　Aプランの周溝は幅10～23cm，深さ3～14cmの規模で，Bプランの周溝は幅8～20cm，深さ10～14cmの規模で，共に南壁を除く三壁側に確認された。南壁側は78B号住居跡覆土を床面とするため，周溝を確認し得なかった可能性もある。

〈柱穴〉　本住居跡より12個のピットが検出された。このうちPit 1・2・4・5・10がAプランの主柱穴で，主軸線に対称な3対（Pit 4・5，1・2，10・(未検出)）6個を基本とする柱配列，Pit 6～9がBプランの主柱穴で，主軸線に対称な2対（Pit 6・9，7・8）4個を基本とする柱配置と考えられる。

第77号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	25×25	33×32	24×23	40×28	25×20	32×30	50×42	46×40	52×51	52×51	17×15	12×12
深　さ	62	55	89	20	21	96	68.5	59	60	60	22	25

〈炉〉　主軸線上，中央より南寄りに位置する。10～50cm大の自然石を95×73cmの楕円形に配した石囲炉で，炉内全域に6～16cmの厚さの焼土が確認された。



第237図　第77号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

（ただし15は第78B号住居出土遺物）

〈出土遺物〉（第237図，427図９）

床面より20点弱の土器片，床直より10点弱の土器片と１点の石棒を出土した。また覆土より，1/2箱の土器片と１点の有孔石製品を出土した。これらの遺物は，平面的には南西部に多く分布している。

237図３・８・９は床面，２・11は床直の出土土器である。

床面，床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第78Ａ号竪穴住居跡と出土遺物（第238，239，241図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＣ—10・11，Ｄ—10グリッドに位置する。Ⅳ層上面で張り出しをもつ楕円形プランを確認，これを78号住居跡とし精査を進めたが，この張り出し部近傍より石囲炉を確認，２軒の住居跡の重複と判明した。石囲炉をもつ，先に張り出し部と思われたプランを壁とする住居跡を78Ａ号住居跡，もう１軒を78Ｂ号住居跡とした。以下78Ａ号住居跡について記述する。本住居跡は，78Ｂ号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉　（2.42）×（2.68）ｍの楕円形を呈すると考えられる。床面積は（4.24）㎡を計る。

〈堆積土〉　黒褐色土の単一層である。

〈床面・壁〉　重複部分は78Ｂ号住居跡覆土を，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，Ⅴ層を床面とする部分は堅くしまっている。東・西・北壁は78Ｂ号住居跡覆土より，南壁はⅣ・Ⅴ層より成る。いずれもほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は南壁20cm，北壁30cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　検出できなかった。

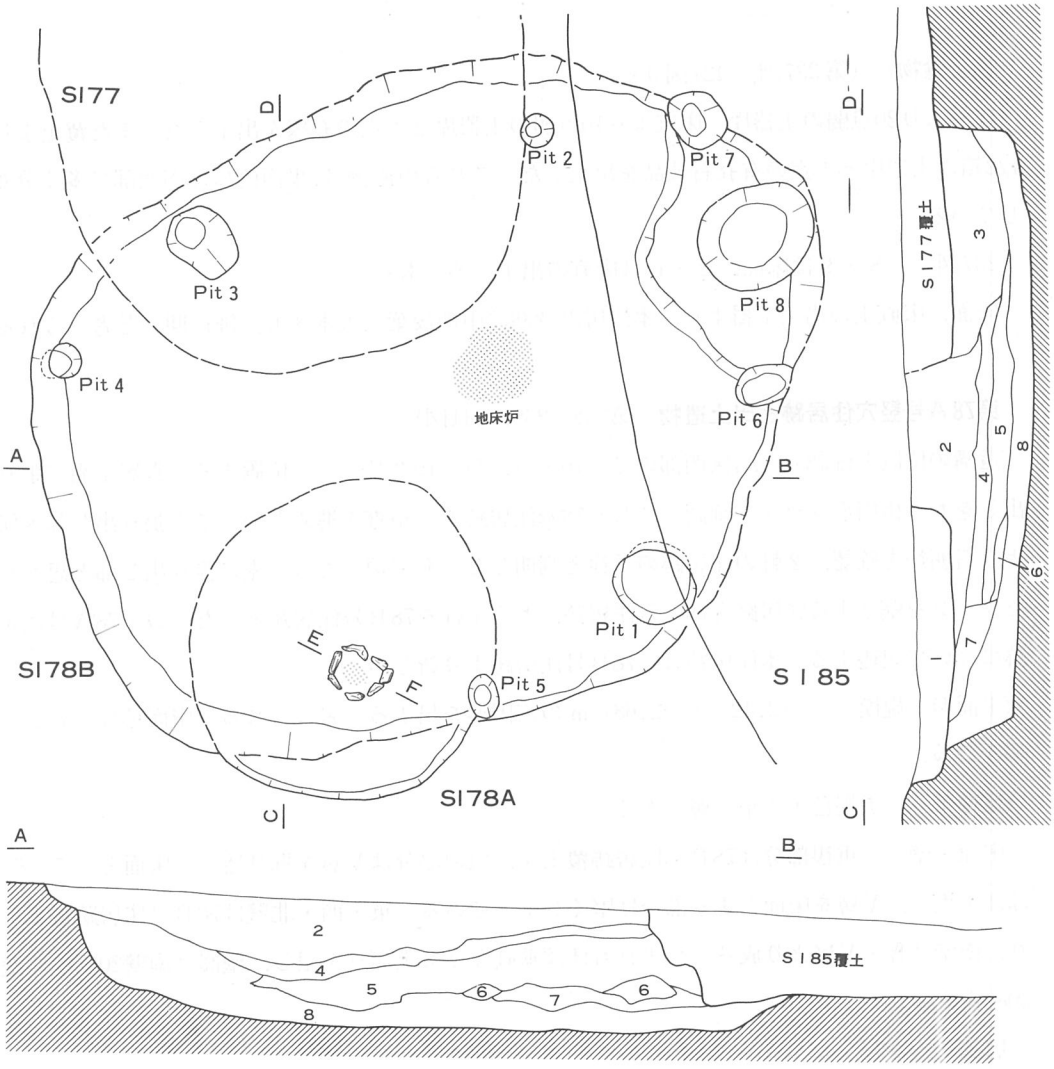
〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。15～25cm大の自然石７個を，49×37cmの楕円形に配した石囲炉である。炉内に20×17cmの範囲で，最大３cmの厚さの焼土が堆積していた。

〈出土遺物〉（第241図）

床面・床直より各数点，覆土より若干の土器片を出土した。

241図７・８は床面，１は床直より出土した土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

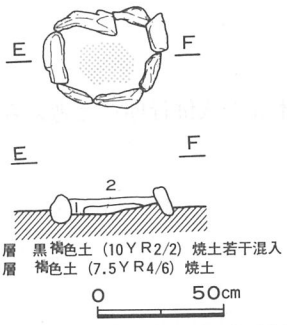


SI78A土層注記
1層　黒褐色土（10YR2/2）

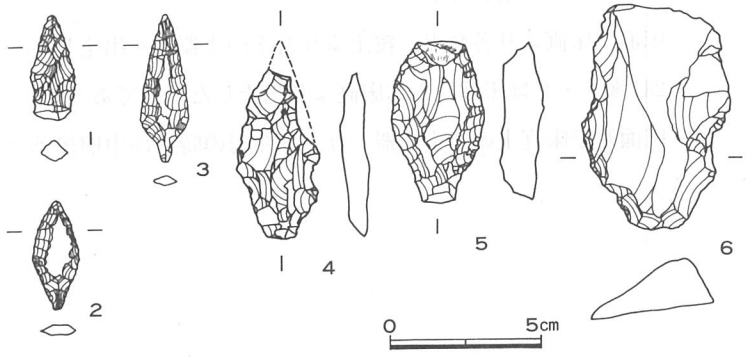
SI78B土層注記
2層　黒褐色土（10YR2/2）
3層　黒褐色土（10YR2/3）
4層　黒褐色土（10YR3/2）
5層　黒色土（10YR2/1）
6層　黒褐色土（10YR2/3）
7層　黒褐色土（10YR2/3）
8層　黒褐色土（10YR2/3）

0　2m

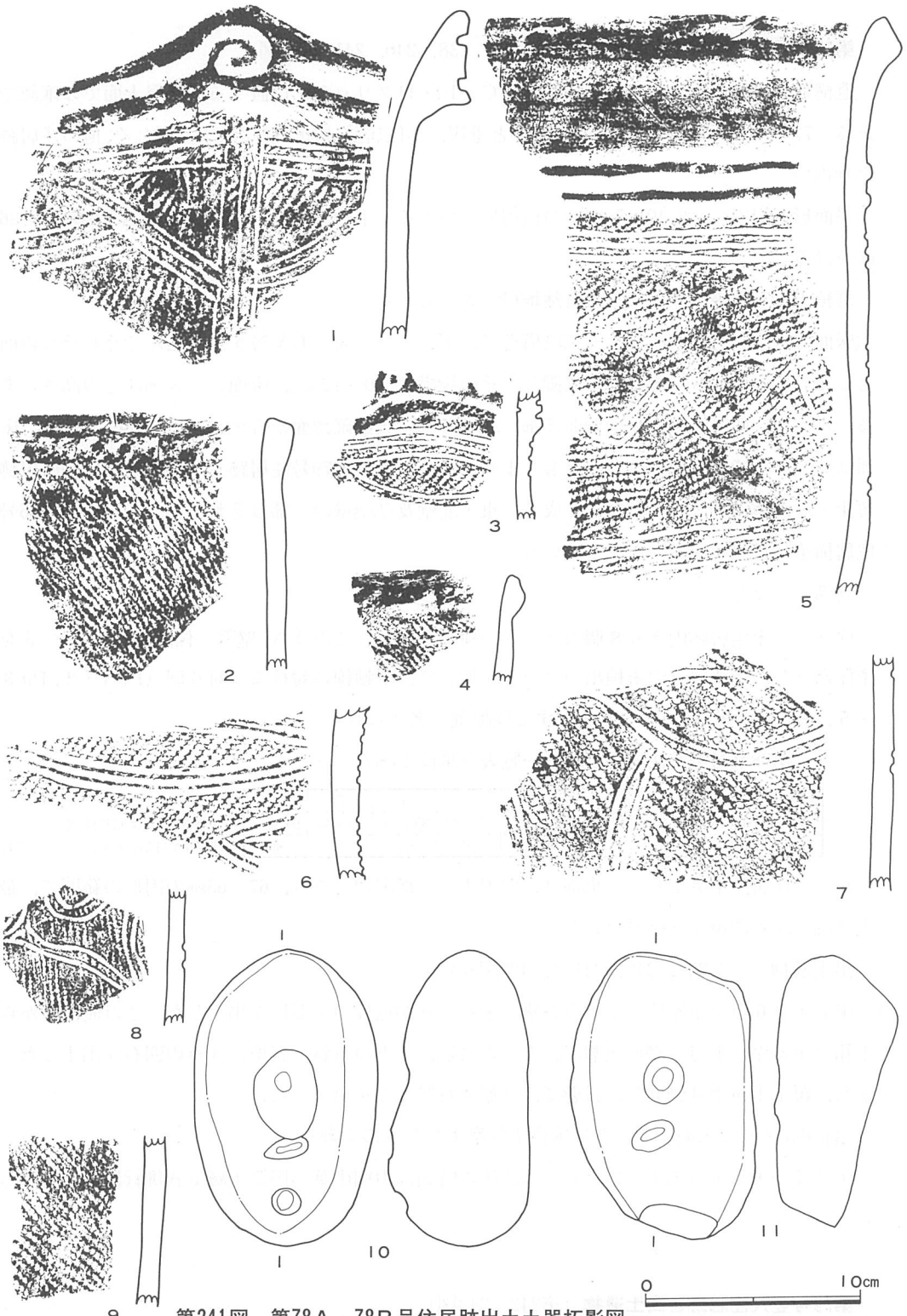
第238図　第78A・78B号竪穴住居跡実測図



第239図　第78A号住居炉跡微細図



第240図　第78B号住居跡出土石器実測図(1)



第241図　第78A・78B号住居跡出土土器拓影図
第78B号住居跡出土石器実測図(2)
(1・3・7・8…S178A、2・4～6・9～11…S178B)

第78B号竪穴住居跡と出土遺物（第237，238，240，241，422図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西側のB・C—10・11グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。77・78A・79・85・114号住居跡と重複，本住居跡は79号住居跡より新しく，他の住居跡より古い。

〈平面形・規模〉　6.40×5.04mの楕円形を呈する。主軸方向はN—71°—E，床面積は28.36㎡を計る。

〈堆積土〉　7層に区分でき，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床，テラス面ともⅤ層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは東壁際に位置し，その規模は220×120cm，床面から8cmほどの高さにある。壁高は，西壁65.5cm，南壁65.5cm，北壁67cm，東壁確認面からテラスまで28cmを計る。床面はレンズ状で，床・テラス面ともしまりは弱い。南壁の79号住居跡との重複部分は同住居跡覆土より，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。東・北壁及び南壁の一部はそれぞれ，77・78A・85号住居構築により壁上半が消失している。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡内より8個のピットが検出された。このうち，壁際に位置するPit 1～5を主住穴とし，南西壁際の未検出のピットを加えて，主軸線に対称な3対6個（Pit 1・2，Pit 3・5，Pit 4・(未検出)）を基本とする柱配置と考えられる。

第78B号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	65×56	27×27	65×45	30×26	35×23	35×37	50×40	94×80
深　さ	40	40	38	47	16	63	73	80

（Pit 6・7は85号住居，Pit8は114号住居のピットである）

〈炉〉　住居跡中央よりやや東寄りに位置する。地床炉であり，67×65cmの円形の範囲で，最大2cmの深さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第237，240，241図，422図6）

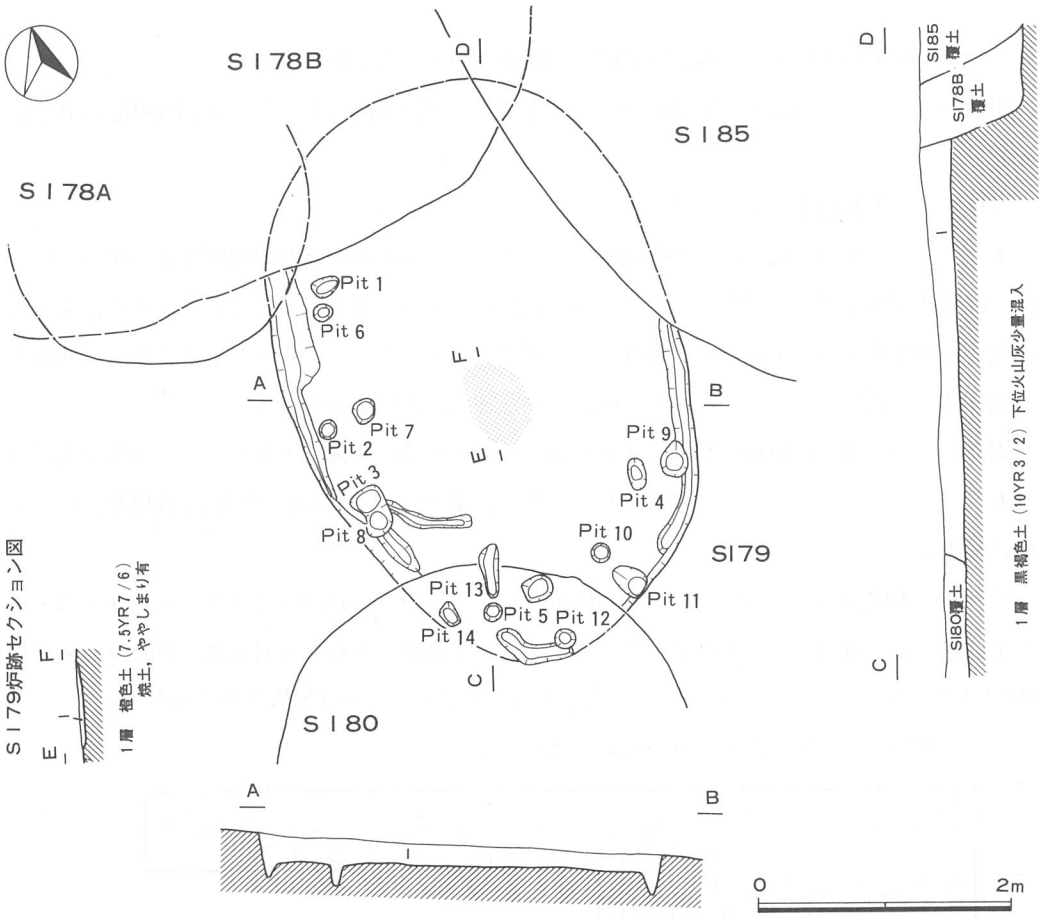
床面より6点の土器片と1点の石鏃，床直より20点程の土器片を出土した。この他覆土から，1箱の土器片，1点の鐸形土製品，1点の掻器，2点の石鏃・石槍，3点の凹石を出土した。また，覆土上層より倒立した状態で，完形の石皿1点を出土した。

241図5・6は床面より，2は床直より出土した土器である。

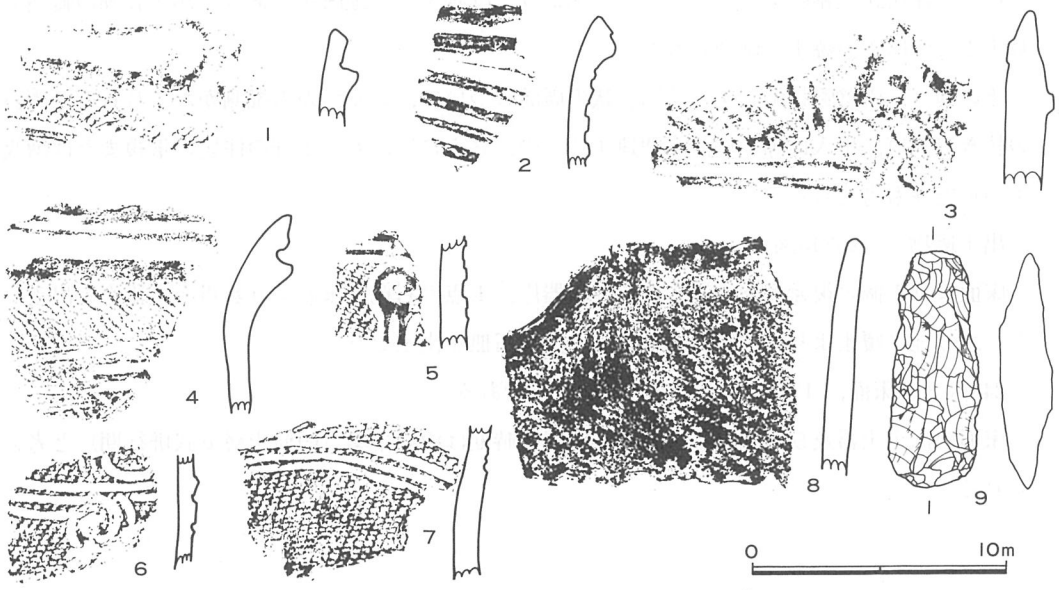
床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層e式併行期）と考えられる。

第79号竪穴住居跡と出土遺物（第242，243図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部C・D—10・11グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認であ



第242図　第79号竪穴住居跡実測図



第243図　第79号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

る。78B・80・85・114号住居跡と重複し，本住居跡がいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉　(4.60)×3.12mの楕円形を呈し，主軸方向はN—5°—E，床面積は(10.52)㎡を計る。

〈堆積土〉　黒褐色土の単一層である。

〈床面・壁〉　V層を掘り込んで床面としている。北・南西壁際及び東壁際北半の床は，78B・80・85号住居構築により消失している。若干の凹凸があり，堅くしまっている。また，北・南西壁及び東壁北半は，重複により残存せず，西壁及び東壁南半は，Ⅳ・V層より成る。残存する壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁19cm，西壁29cmを計る。

〈周溝〉　残存壁下に幅10～25cm，深さ6cmの周溝が不連続に検出された。これは壁消失部分にも及び，一巡していたものと考えられる。また，深さ2.8～14.4cmの周溝が，南壁際に「∪」字状に検出された。

〈柱穴〉　本住居跡より14個のピットが検出された。このうちPit 1・3または8・9・11・14を主柱穴とし，重複により未検出のピットを加え，主軸線に対称な4対8個（Pit 1・（未検出），Pit 3または8・9，Pit 11・14，未検出の1対）を基本とする柱配置と考えられる。

第79号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	23×13	15×14	25×20	25×20	23×18	15×13	18×13	20×20	20×10	15×15
深　さ	25	23	33	14.5	20	10	14	28	28	13
Pit No.	11	12	13	14						
規　模	27×20	16×15	14×14	18×12						
深　さ	28	11.7	8.6	17.7						

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや南寄りに位置する。地床炉であり，70×47cmの範囲で最大1cmの厚さの焼土が確認された。

〈その他〉　南壁際に位置する「∪」状の周溝について，いくつかの推測がたてられる。炉石の抜き取り痕，出入口等の施設に関連するもの，さらには，もう1軒の住居の重複または増改築の可能性も考えられる。

〈出土遺物〉（第243図）

床面より1個の復元可能土器，数点の土器片，1点の石篦，床直より数点の土器片を出土した。この他に覆土より，1/4箱の土器片と1点の石皿を出土した。

243図8は床面，4は床直より出土した土器である。

床面の出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層e式併行期）と考えられる。

第80号竪穴住居跡と出土遺物（第244，245，402図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部D・E—10・11グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。79・99A・99B・111号住居跡と重複，本住居跡が最も新しい。

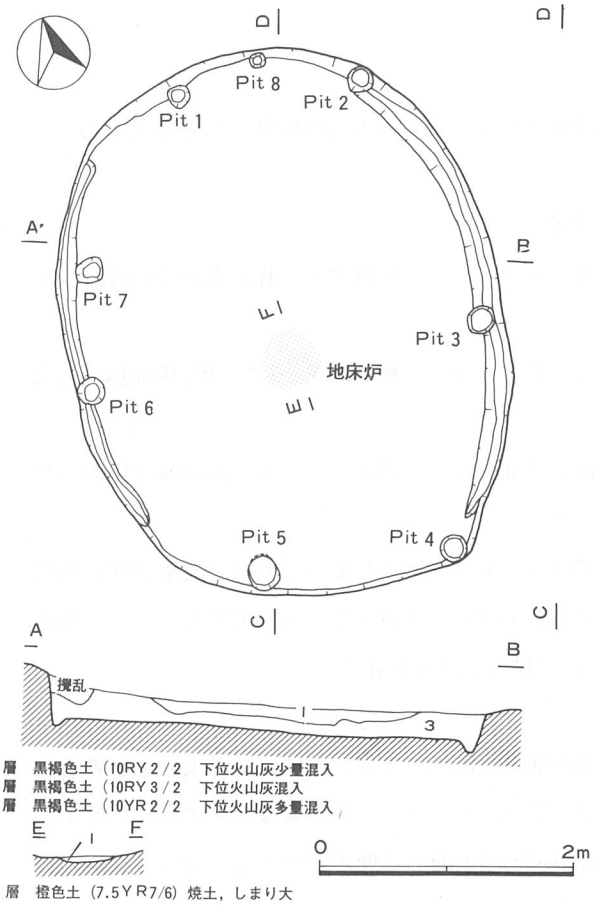
〈平面形・規模〉　4.34×3.44mの楕円形を呈する。主軸方向はN—10°—E，床面積は11.36㎡を計る。

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積と考えられる。

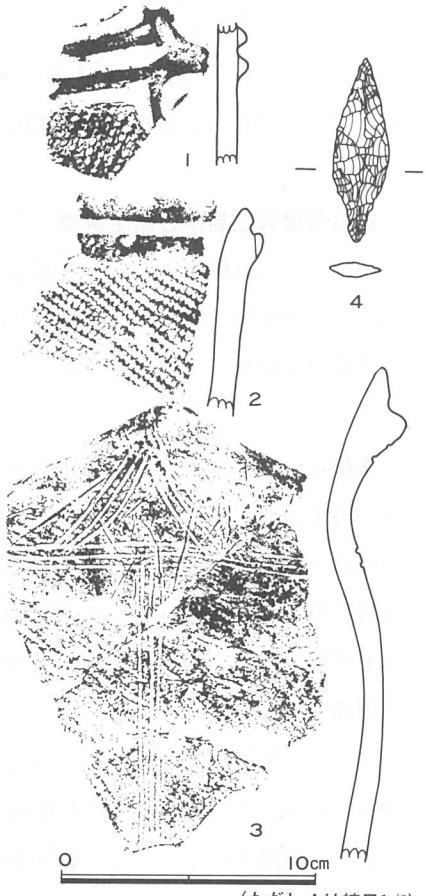
〈床面・壁〉　ほぼ全体がⅤ層を掘り込んで床面としている。平坦で堅くしまりがある。西壁の一部・南壁・北壁が，79・99A・99B・111号住居跡覆土及びⅤ層から成る。いずれの壁も急な立ち上がりを呈し，壁高は東壁31cm，西壁34cm，南壁15cm，北壁18cmを計る。

〈周溝〉　東・西壁下に，幅20cm，深さ16cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡壁際より8個のピットが検出された。Pit 1～6が主柱穴で，主軸に対称な3対6個（Pit 1・2，Pit 3・6，Pit 4・5）を基本とする柱配置が考えられる。また，位置関係より，Pit 1～7を主柱穴とし，主軸に対称な4対8個（Pit 1・2，Pit 3・6，Pit 4・5，Pit



第244図　第80号竪穴住居跡実測図



（ただし4は縮尺1/2）

第245図　第80号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

7・(未検出)) を基本とする柱配置も考えられるが，Pit 7 が浅く，その対となるピットが未検出であるため，前者の柱配置の可能性が強い。

第80号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	17×17	20×20	23×22	24×23	27×24	24×22	24×19	12×12
深　さ	12	17	38	38	38	30	8	7.1

ただし，Pit 8 は79号住居跡のピットとも考えられる。

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉で，47×46cmの円形で，最大 3 cmの深さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第245図，402図16）

床面より 1 個の復元可能土器と数点の土器片を出土，他に覆土より，1/4箱の土器片と 1 点の石鏃を出土した。

402図16は，東壁際床面出土の 2 つの山形小突起を有する深鉢形土器で，口径17.7cm，底径8.4cm，器高15.4cmを計る。器面全体にＬＲの斜縄文を施文し，焼成はやや不良，色調は黒褐色(10ＹＲ3/2）を呈する。

245図 1 ・ 3 は床面出土の土器である。

床面からの出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第81号竪穴住居跡と出土遺物（第231，235図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部ＺＡ・Ａ－８グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。75号住居跡と重複，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　3.60×2.80m の不整楕円形を呈する。主軸方向Ｎ－11°－Ｗ，床面積は7.24㎡を計る。

〈堆積土〉　本住居跡の大部分が75号住居跡との重複により消失している。断面観察用のベルトの設定が悪く，堆積土の観察ができなかった。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。平坦で堅くしまっており，北東の柱穴位置は特に堅くしまっている。 5号住居構築により東・西・南壁のほとんどを消失している。壁高は北東壁7.0cm，北西壁15.2cm，南東壁0.6cm，南西壁1.1cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　床面ほぼ中央のPit 5 及び南西・北西壁隅のPit 3・4 が，本住居跡の主柱穴と考えられる。Pit 3・4 に対称な柱穴が北西・北東隅に想定される。(ピット一覧は75号住居跡に付す)

〈炉〉　検出されなかった。本住居跡と75号住居跡で床面の高低差がほとんどないことから，75号住居構築により壊されたものと推定される。

〈出土遺物〉（第235図）

本住居のほとんどは75号住居構築により消失しているため，出土遺物は非常に少ない。床面，床直より数点，覆土より若干の土器片を出土したのみである。

235図１・７は床面，５は床直より出土した土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第82号竪穴住居跡と出土遺物（第246，247，395，401図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＢ・Ｃ－８・９グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡の南側に88Ｂ・117号住居跡，北東側に１号埋設土器が存在する。

〈平面形・規模〉　3.96×3.86m の円形を呈する。主軸方向はＮ－45°－Ｗ，床面積は11.08㎡を計る。

〈堆積土〉　２層に区分でき，自然堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は，北東壁32.8cm，北西壁27.8cm，南東壁31.3cm，南西壁33.2cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より３個のピットが検出された。これらは南東壁際に位置し，ほぼ等間隔に一列に並ぶ。

第82号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	43×39	50×31	32×31
深　さ	26.0	57.2	17.5

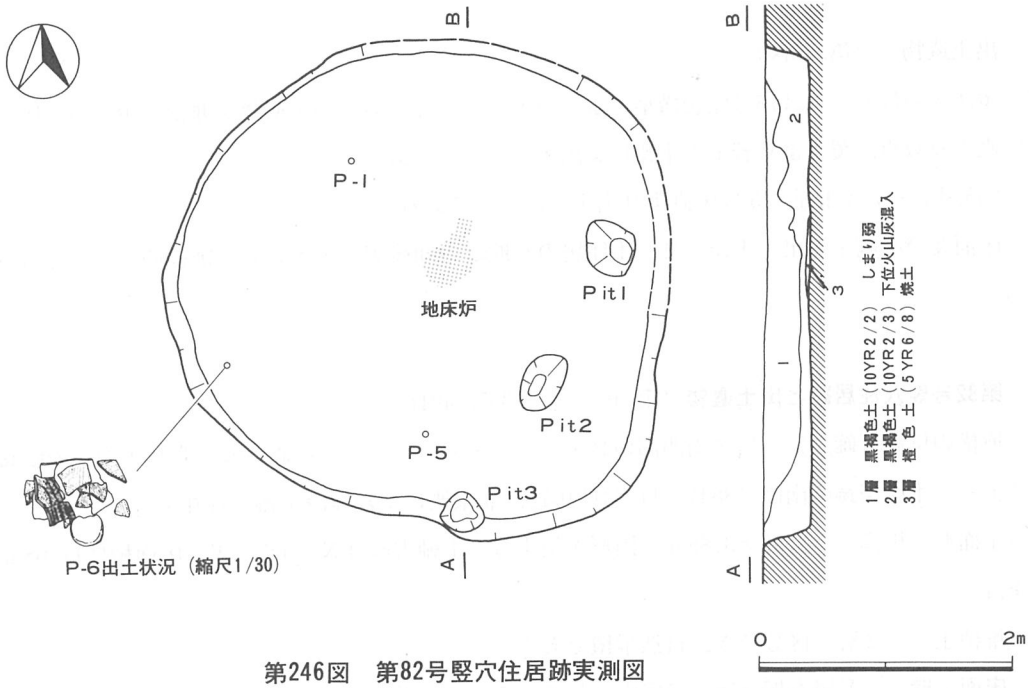
〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉であり，57×31cmの範囲で最大1.1cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第247図，395図６，401図３）

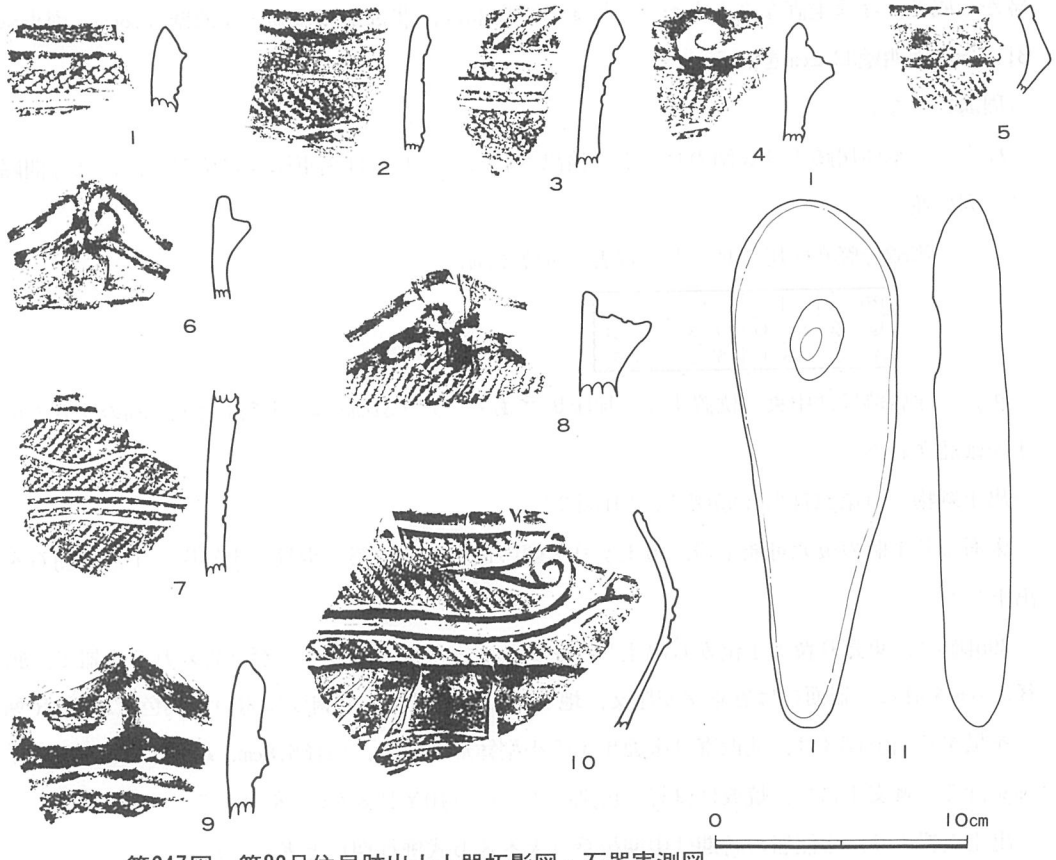
床面より１個の復元可能土器，覆土より２個の復元可能土器，少量の土器片，１点の凹石を出土した。

395図6は，東寄り覆土上位から出土した小型鉢形またはキャリパー形と思われる土器で，底径5.2cmを計る。器面には懸垂文が施文，地文はＬＲ斜縄文，色調はにぶい赤褐色（2.5ＹＲ5/3）を呈する。401図３は，北西寄り床面出土の小型鉢形土器で，口径6.8cm，底径3.7cm，器高6.7cmを計る。無文土器で，焼成は良好，色調は灰白色（10ＹＲ８/２）を呈する。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。



第246図　第82号竪穴住居跡実測図



第247図　第82号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

第83号竪穴住居跡と出土遺物（第248～251，398，402図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部のＺＢ・ＺＡ—８・９グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。93号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　4.16×4.12m の円形を呈する。主軸方向Ｎ—5°—Ｗ，床面積は13.08㎡を計る。

〈堆積土〉　４層に区分でき，自然堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。平坦で，炉周辺を中心に堅くしまっている。南東壁の一部は93号住居跡覆土及びⅤ層より，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁57.3cm，西壁33.0cm，南壁33.2cm，北壁41.3cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より10個のピットが検出された。このうちPit１～５を主柱穴とし，主軸線上のPit５と，軸線に対称な２対４個（Pit１・２，Pit3・4）の計５個を基本とする柱配置と考えられる。南壁際の付属施設の両端には同規模の一対のピット（Pit９・10）が検出された。

第83号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	30×25	25×20	31×30	32×32	25×22	20×18	20×20	20×19	28×21	33×27
深　さ	45	62	47	53	59	62	61	38	12	10

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。南・北辺に30cm大の自然石を各１個，東・西辺に18～20cm大の自然石を各２個ずつ配した，50×55cmの方形の石囲炉である。炉内全体が最大３cmの深さまで明赤褐色に焼土化している。

〈その他の施設〉　住居跡南壁に接して，半円形の堤状施設を有する。幅 1.8m，奥行き88.0cmの規模で，床面と堤上面との比高は４～８cmで，堤内はレンズ状にくぼみ，最下部は堤上面より約14cmを計る。

〈出土遺物〉（第250，251図，398図２，402図５・８）

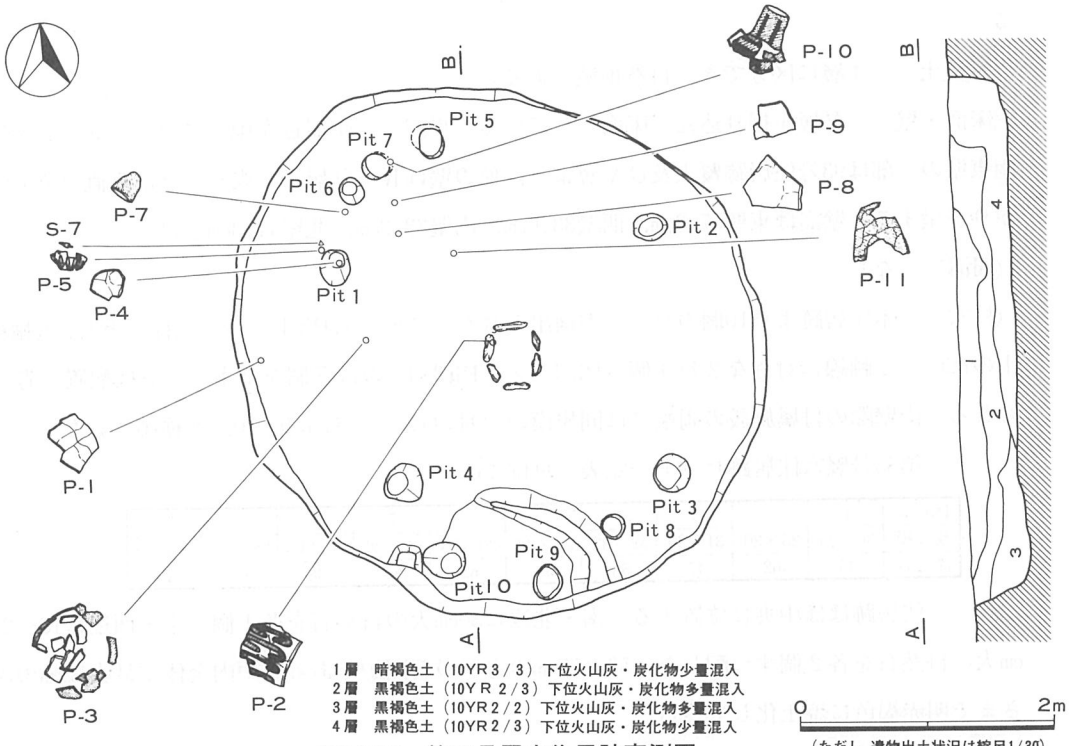
床面より数点の土器片と掻器・石砸各１点，床直より数点の土器片を出土した。この他覆土より，７個の復元可能土器，少量の土器片，石鏃・掻器各１点を出土した。これらの遺物は，平面的には北西部に多く分布している。

398図2は，北壁際覆土中位で，横転しつぶれたような状態で出土したキャリパー形の土器で，口径17cm，底径 8.5cm，器高23.4cmを計る。口縁部には隆沈文による横位渦巻文を主体とする文様，体部には２～３条の平行沈線文による懸垂文，曲線文，曲様文を施文，地文はＲＬ斜縄文，焼成はやや良好で，色調は灰褐色（５ＹＲ5/2）を呈する。402図５・８は，北西壁際覆土中位より横転の状態で出土した。５は，広口壺と考えられる土器の胴部下半で，底径 4.2cmを計る。胴部には沈線文による懸垂文，円文，ゼンマイ状懸垂文等を施文，色調は灰黄褐色（10

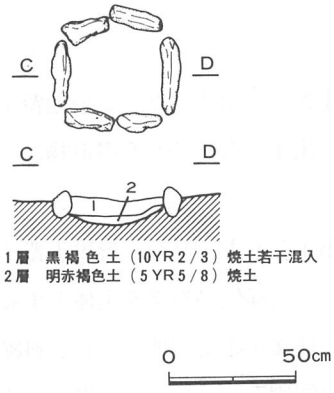
ＹＲ4/2）を呈する。８は，底径4.6cmの広口壺形土器で，胴部上端に横位刺突文，胴部に懸垂文を施文し，地文はＲＬ斜縄文，色調はにぶい橙色（7.5ＹＲ6/4）を呈する。

251図５は床面，２は床直より出土した土器である。

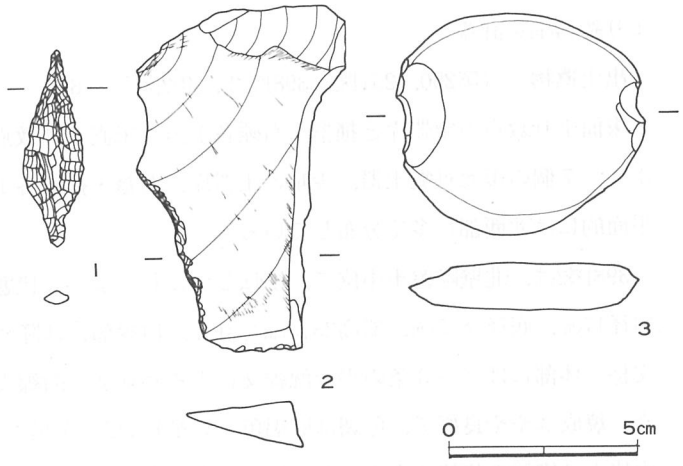
床面の出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。



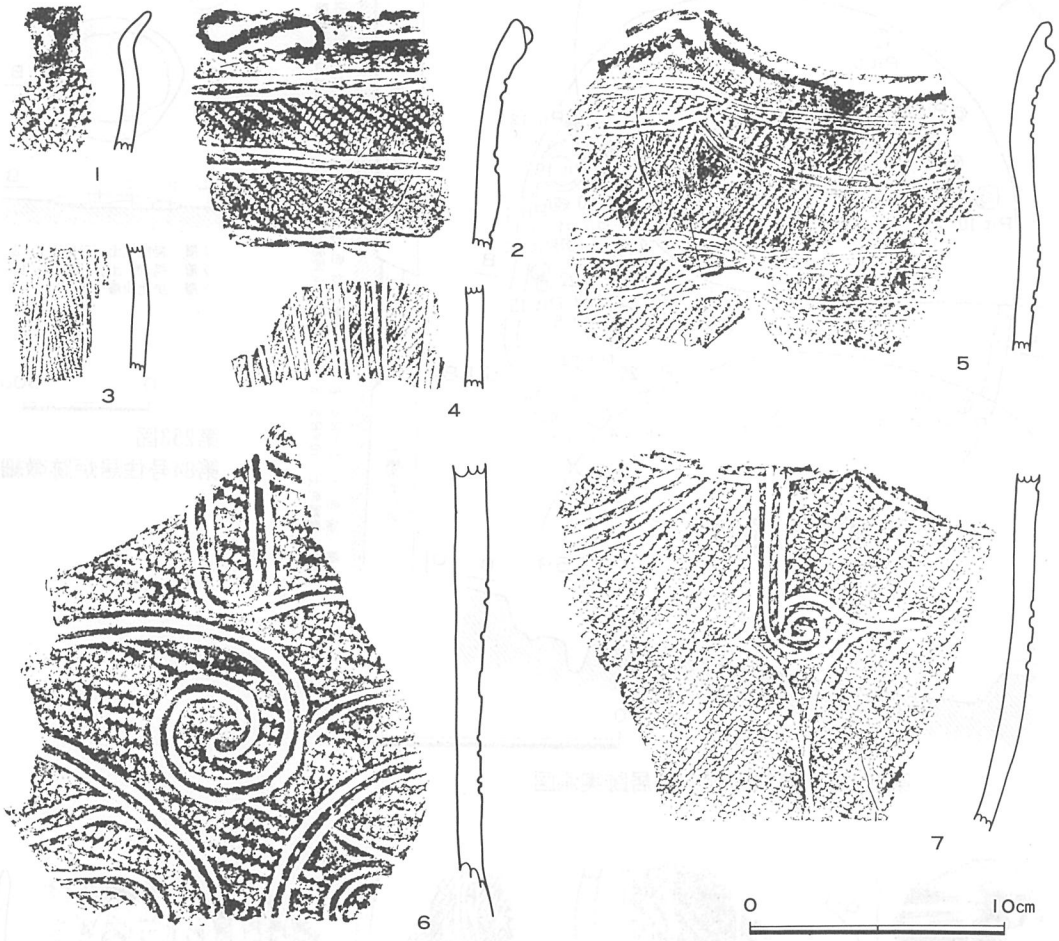
第248図　第83号竪穴住居跡実測図



第249図　第83号住居炉跡微細図



第250図　第83号住居跡出土石器実測図



第251図　第83号住居跡出土土器拓影図

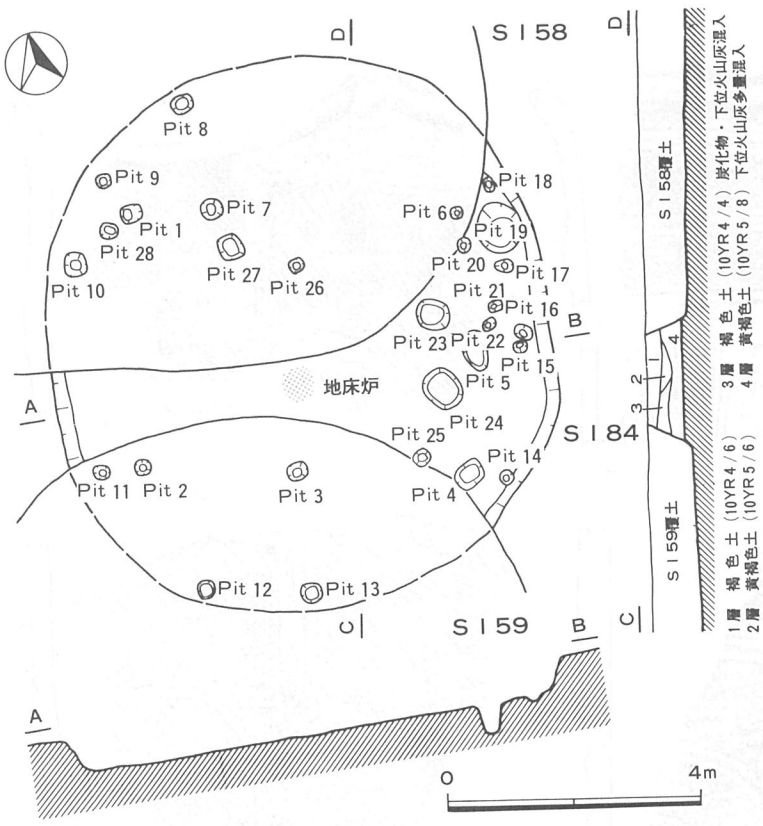
第84号竪穴住居跡と出土遺物（第252～254，424図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南部のF・G—18・19・20グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。58・59号住居跡，54・55・80号土壙と重複，本住居跡は54・55・80号土壙より新しく，59号住居跡より古い。また，58号住居跡より古いと考えられる。

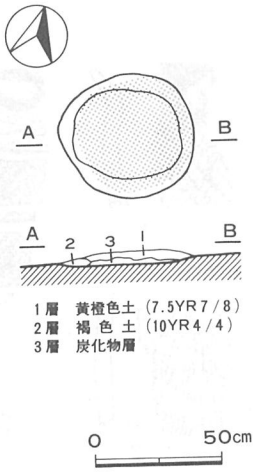
〈平面形・規模〉　大部分を58・59号住居構築時に消失しているが，残存部の曲率より(8.72)×(7.84)mの楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN—7°—E，推定床面積は50.56㎡を計る。

〈堆積土〉　残存する部分は4層に区分でき，人為堆積と考えられる。

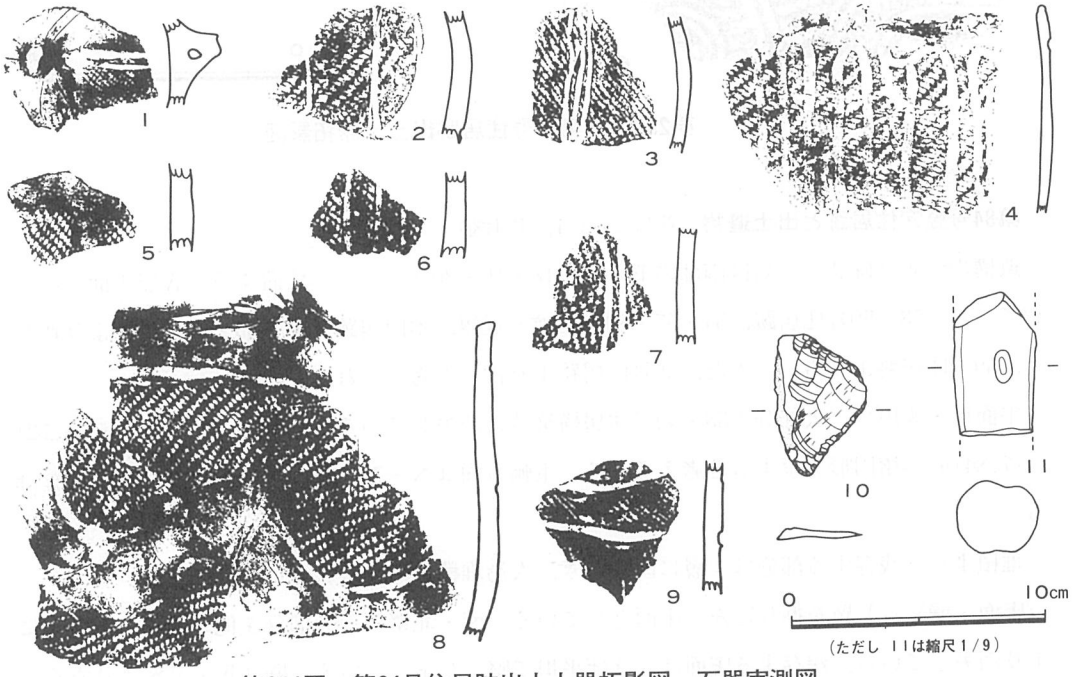
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。南・北壁側の大部分を他の遺構との重複により消失している。残存する床面は，ほぼ平坦で堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，



第252図　第84号竪穴住居跡実測図



第253図
第84号住居炉跡微細図



第254図　第84号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

北壁・西壁北側の大部分は58号住居，南壁・西壁南側の大部分は59号住居構築により消失している。残存する壁は急な立ち上がりを呈し，壁高は東壁47.8cm，西壁73.8cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　重複部分に位置し，本住居跡に関連すると考えられるものを含めて，計28個のピットが検出された。このうちPit 1・2・4・6または19を主柱穴とする柱配置と考えられる。またPit 3・5等は，主柱穴の中間に位置することから，これらと対となる未検出の柱穴を含めて副柱穴となるものと推測される。

第84号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	34×33	26×23	31×27	47×34	65×38	16×15	34×31	36×30	20×20	40×37
深　さ	51.6	43.1	31.0	21.1	54.6	30.1	21.0	47.6	21.3	55.3
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	24×22	26×26	32×30	22×20	22×18	23×20	23×19	20×20	80×72	19×18
深　さ	17.9	35.8	63.0	27.6	11.9	20.6	28.8	18.3	30.9	76.3
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28		
規　模	19×15	20×16	50×45	52×46	26×23	24×22	40×34	25×24		
深　さ	27.3	40.7	23.9	33.9	21.2	37.9	46.3	43.4		

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉であり，46×45cmの範囲で焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第254図，424図１）

床面より２個の復元可能土器と11点の土器片，床直より10数点の土器片を出土，他に覆土中より 1/3 箱の土器片，１点の石棒・円盤状土製品，２点の掻器を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央部に多く分布している。

254図１・４～７は床面，２・９は床直より出土した土器である。

床面及び床直の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第85号竪穴住居跡と出土遺物（第255～260，394，403，421図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＢ・Ｃ・Ｄ—11・12グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。78Ｂ・79・101・113・114号住居跡と重複，本住居跡は101号住居跡より古く，他のいずれよりも新しい。

また本住居跡には，４回の増改築が認められる。以下，便宜的に新しい（規模の大きい）ものから順にＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅとし，各項目ごとにその概要を述べる。

〈平面形・規模〉　最終残存プラン（Ａ）は，10.68×5.14m の楕円形を呈し，主軸方向はＮ—3°—Ｗ，床面積は50.52㎡を計る。Ｂプラン以下も柱列及び周溝より，ほぼ同方向の主軸を有する楕円形を呈すると考えられ，その規模はＢプラン10.68×4.75m，Ｃプラン9.39×(4.32)m，Ｄプラン8.88×(3.70)m，Ｅプラン8.88×(3.40)m を計る。

すなわちＩ期（Ｅ→Ｄ）は，若干短軸方向の柱間隔を広げたものの，ほとんど規模の変わら

ない改築，Ⅱ期（D→C）は北壁及び西壁側の増築で，北西壁周辺の増築が最も大きい。Ⅲ期（C→B）は東，西，北壁の三壁部の増改築で，特に北壁部への増築が著しい。この増築により主軸方向が若干東傾する。Ⅳ期（B→A）は，西壁側のみの若干の増築である。

〈堆積土〉　5層に区分でき，人為堆積と考えられる。6層はD・Eプラン，7層はCプランの周溝の覆土である。いずれもしまりがあり，増築時に埋め戻されている。

〈床面・壁〉　113号住居跡覆土及びⅤ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で,堅くしまりがある。重複部分は78B・79・101・114号住居跡覆土及びⅤ層より，他はⅣ・Ⅴ層より壁を成す。　ほぼ垂直な立ち上がりを呈し，東壁30cm，西壁44cm，南壁48cm，北壁24cmを計る。

〈周溝〉　最終プラン（Aプラン）の南東壁を除く壁下に，不連続ながら幅15～40cm，深さ7～30cmの周溝が一巡する。Bプランの北西壁際に幅10～17cm，深さ15～20cmの周溝，Cプランの西壁際北側から北壁際を通り東壁際北側にかけ，幅10～30cm，深さ15～18cmの周溝，Dプランの西壁際北側に幅12～20cm，深さ20～23cmの周溝，Eプランの西壁際北側から北壁際にかけ幅12～15cm，深さ10cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡より46個のピットが検出された。各プランごとの柱配置は次のように考えられる。

Aプラン：Pit 1～10を主柱穴とし，主軸線に対称な5対10個（Pit 1・2，3・10，4・9，5・8，6・7）を基本とする柱配置。

Bプラン：Pit 1～5・11～13・33・34を主柱穴とし，主軸線に対称な6対12個（Pit 1・2，3・10，4・13，5・(未検出)，11・12，33・34）を基本とする柱配置。

Cプラン：Pit14～21・31・32を主柱穴とし，主軸線に対称な5対10個（Pit14・21，15・20，16・19，17・18，31・32）を基本とする柱配置。

Dプラン：Pit14～16・18・22～25・31・32を主柱穴とし，主軸線に対称な5対10個（Pit14・25，15・24，16・23，22・18，31・32）を基本とする柱配置。

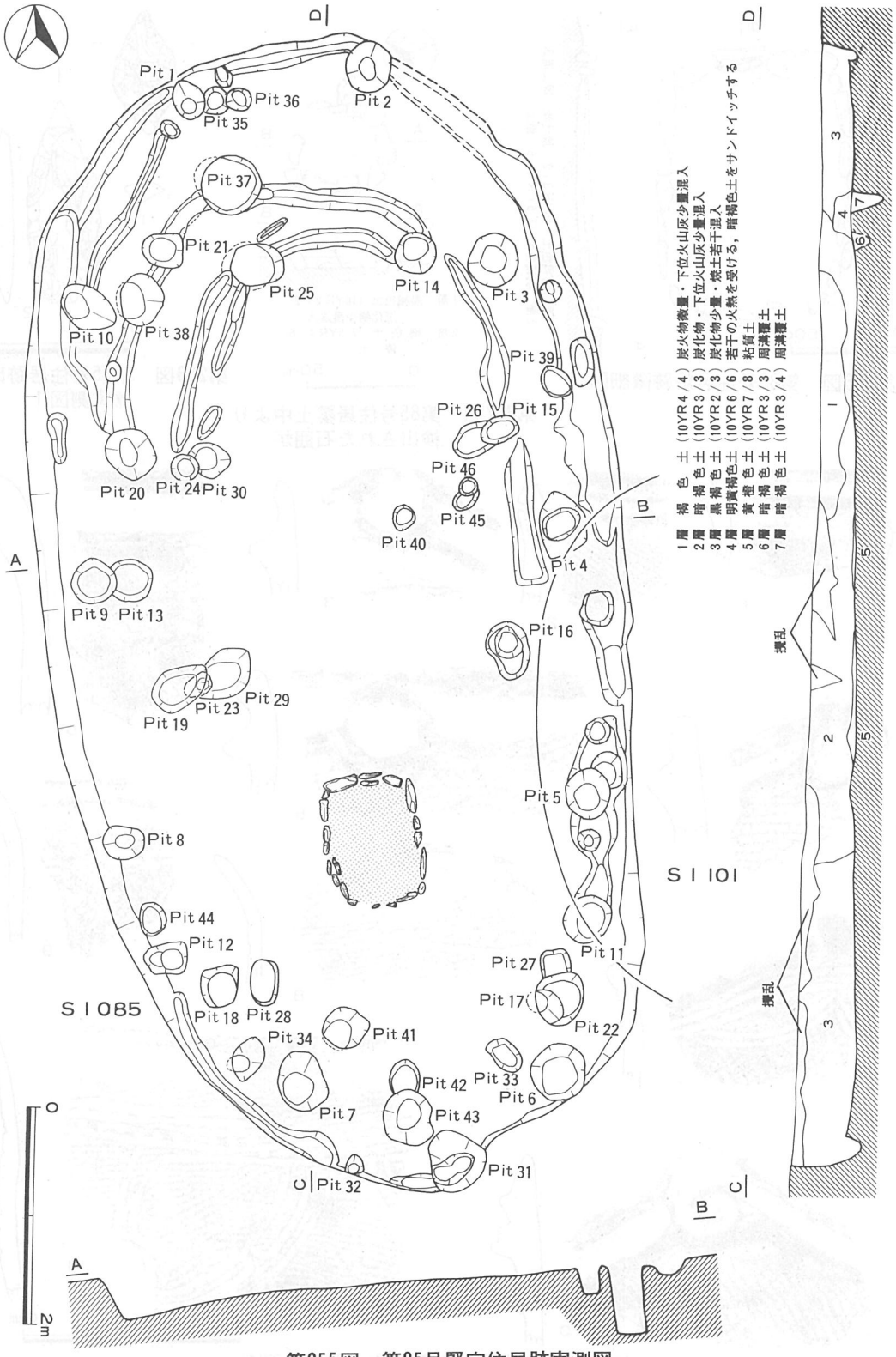
Eプラン：Pit14・16・25～32を主柱穴とし，主軸線に対称な5対10個（Pit14・25，26・30，16・29，27・28，31・32）を基本とする柱配置。

Pit42・43は，Pit 6・7とPit31・32のほぼ中間に位置することから，副柱穴と考えられる。

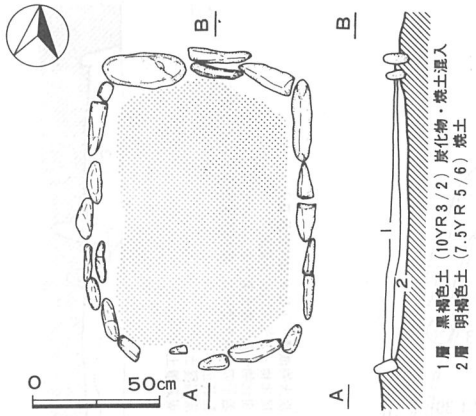
以上のように，上屋構造に規模の大小こそあれ，各期とも長軸に対称な5～6対の柱配置であり，基本的には同じ構造と考えられる。

第85号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

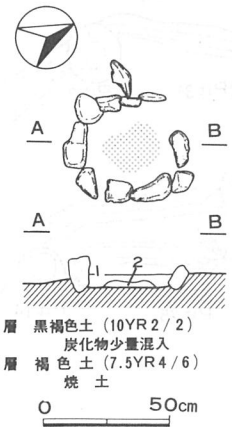
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	40×30	47×40	50×41	45×25	48×40	52×52	57×43	38×32	40×40	52×38	45×43	31×22	40×40
深　さ	57	62	61	59	69	102	47	73	77	41	55	38	50
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
規　模	40×38	35×24	26×24	33×25	35×34	55×37	50×40	38×29	45×45	25×17	25×24	48×38	40×30
深　さ	46	56	66	63	74	63	73	43	40	61	40	38	43



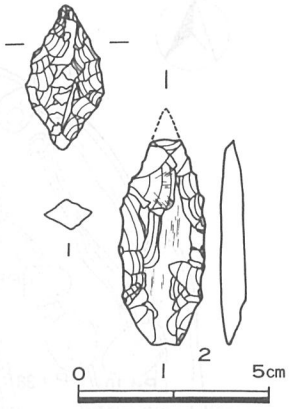
第255図　第85号竪穴住居跡実測図



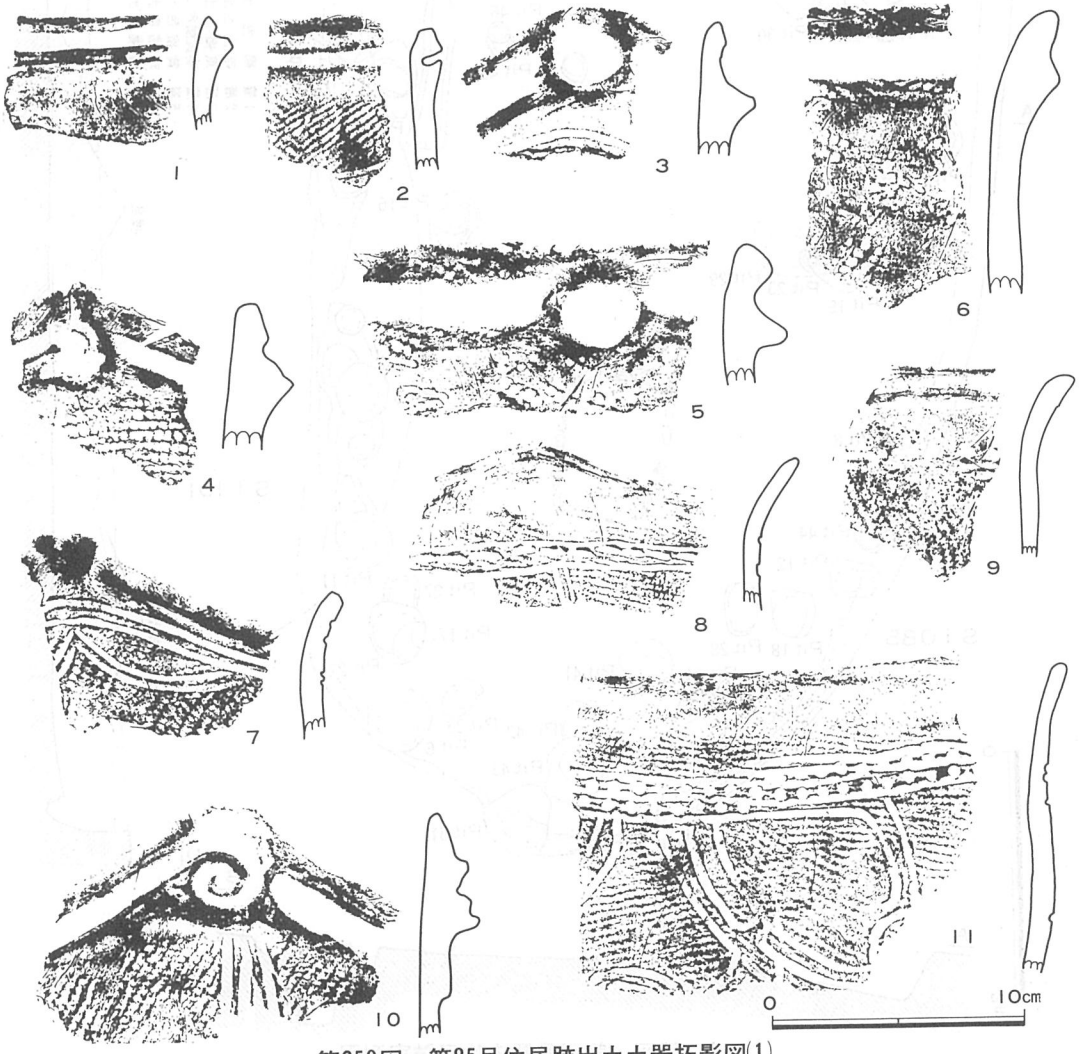
第256図　第85号住居炉跡微細図



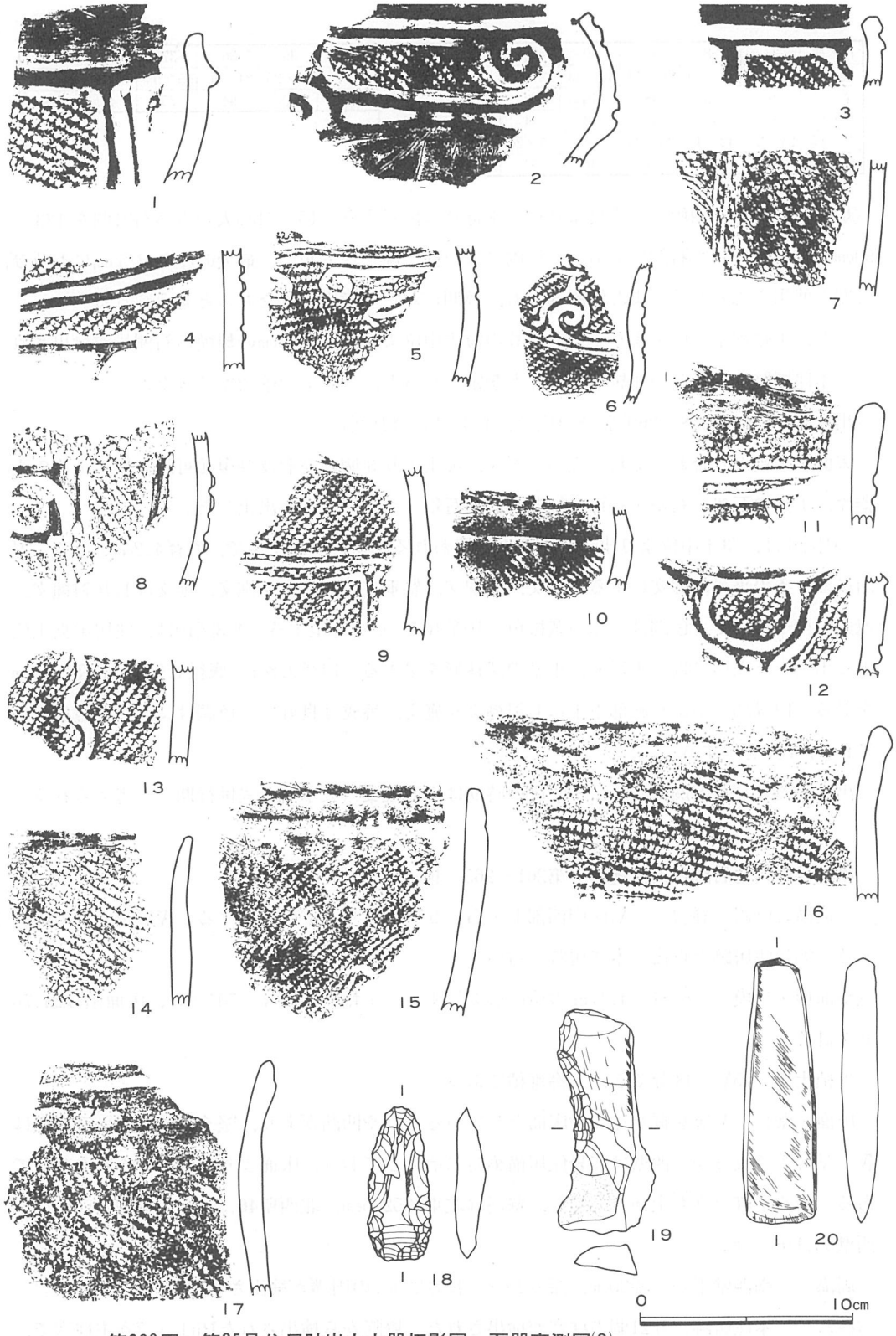
第257図　第85号住居覆土中より検出された石囲炉



第258図　第85号住居跡出土石器実測図(1)



第259図　第85号住居跡出土土器拓影図(1)



第260図．第85号住居跡出土土器拓影図・石器実測図(2)

Pit No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
規　模	30×28	43×20	50×43	40×33	22×22	18×16	35×22	40×28	25×25	24×20	55×55	47×40	30×23
深　さ	6	62	48	46	32	32	11	52	30	54	75	42	19
Pjt No.	40	41	42	43	44	45	46						
規　模	24×20	42×40	36×26	50×40	35×20	30×17	15×14						
深　さ	15	60	6	46	31	22	20						

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや南寄りに位置する。15～34cm大の自然石21個を123×90cmの方形に配した石囲炉である。炉内には一様に焼土が分布し，最大の厚さは5cmにも及び，長期の使用を思わせる。また位置的にも，数期にわたり使用されたものと考えられる。

また，主軸線上の中央よりやや北寄りの覆土中位より，50×46cmの規模の石囲炉が検出された。本住居跡より新しい住居跡の存在が想定できるが，プランの確認ができなかった。

〈出土遺物〉（第258～260図，394図6，403図10，421図11）

床面・床直から合わせて数10点の土器片，覆土より3個の完形及び復元可能土器，1箱の土器片，1点の石鏃・石槍・石篦・掻器・磨製石斧・ペンダントを出土した。

394図6は，覆土中位より出土した壺形と思われる土器の胴部下半で，底径4.2cmを計る。器面には3条の平行沈線文による渦巻文，曲線文，懸垂文の連続文を施文，地文はＬＲ斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/6）を呈する。403図10は，住居中央上位より出土した完形に近い土器で，小型の深鉢形を呈する。口径9.8cm，底径4.5cm，器高12.0cmを計る。口縁部下半より胴部下半にＬ斜縄文を施文，焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ6/4）を呈する。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木8ｂ式併行期）と考えられる。

第86号竪穴住居跡と出土遺物（第261～265，405，424，426図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部Ｆ・Ｇ―9・10グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。95号住居跡と重複，本住居跡が古い。

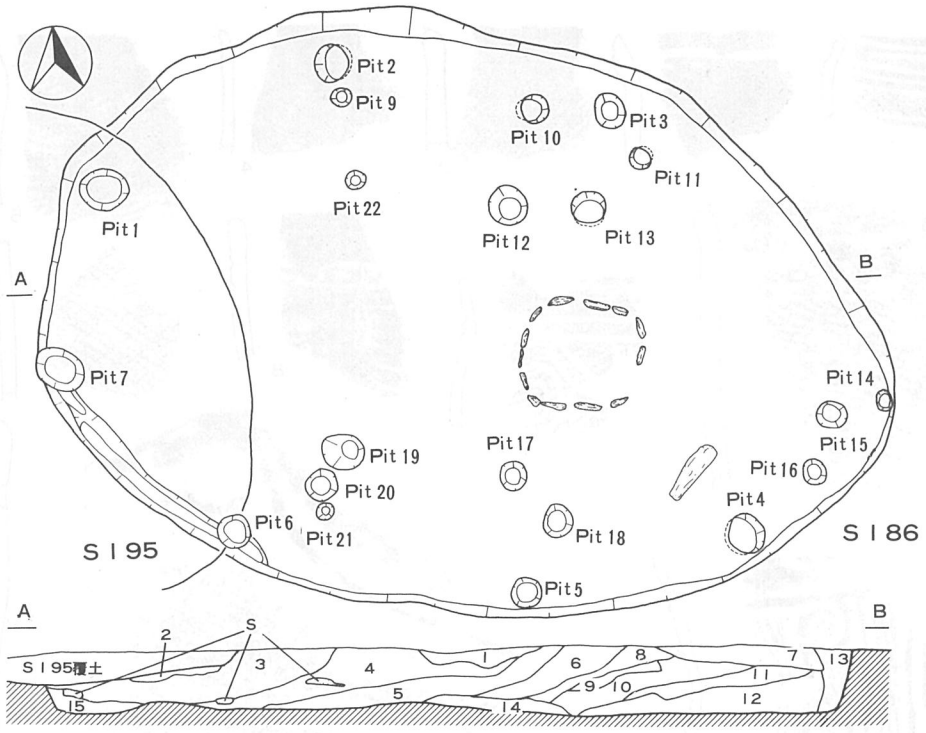
〈平面形・規模〉　6.81×4.47mの楕円形を呈する。主軸方向はＮ―70°―Ｗ，床面積は24.76㎡を計る。

〈堆積土〉　15層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，西壁は95号住居構築時に消失しており，床面より20cmほどを残すのみである。やや垂直な立ち上がりを呈し，壁高は北東壁52.5cm，北西壁46.5cm，南東壁44.6cm，南西壁36.1cmを計る。

〈周溝〉　南西壁下から幅20cm，深さ29cm，長さ220cmの周溝が検出された。

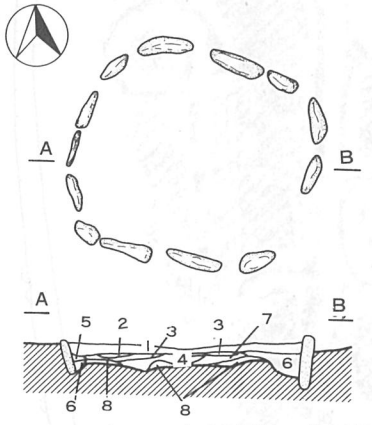
〈柱穴〉　本住居跡より21個の柱穴が検出された。壁際から検出されたPit1～7が主柱穴で，



1層　暗褐色土（10YR 3 / 3）下位火山灰若干混入
2層　黄褐色土（10YR 5 / 8）
3層　にぶい黄褐色土（10YR 5 / 8）
4層　褐 色 土（10YR 4 / 4）炭化物少量混入
5層　暗褐色土（10YR 3 / 4）下位火山灰混入
6層　黄褐色土（10YR 5 / 6）
7層　褐 色 土（10YR 4 / 4）下位火山灰多量混入
8層　褐 色 土（10YR 4 / 4）炭化物少量混入
9層　褐 色 土（10YR 4 / 6）
10層　暗褐色土（10YR 3 / 4）
11層　褐 色 土（10YR 4 / 4）
12層　暗褐色土（10YR 3 / 3）下位火山灰多量混入
13層　暗褐色土（10YR 3 / 3）
14層　にぶい黄褐色土（10YR 4 / 3）
15層　黒褐色土（10YR 2 / 3）

0　2m

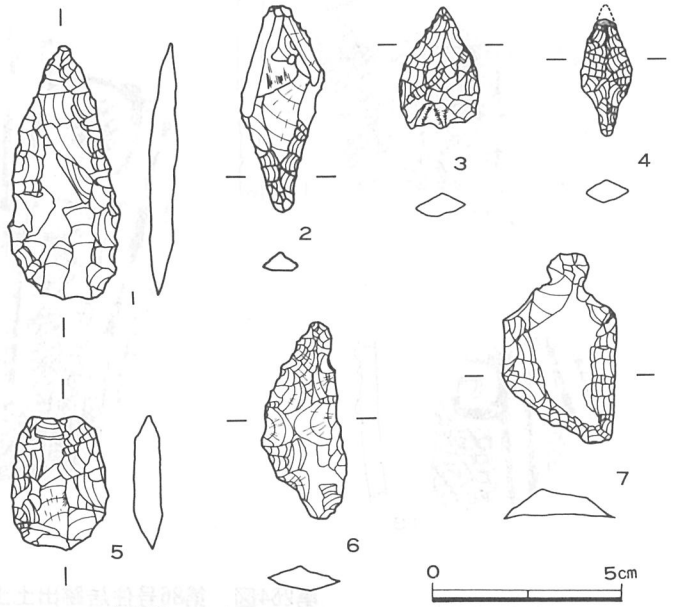
第261図　第86号竪穴住居跡実測図



1層　暗褐色土（10YR 3 / 3）炭化粒若干・下位火山灰多量混入
2層　暗褐色土（10YR 3 / 4）炭化粒若干混入
3層　黄褐色土（10YR 5 / 6）焼土粒若干混入
4層　にぶい黄橙色土（10YR 7 / 3）炭化粒若干混入
5層　暗褐色土（10YR 3 / 3）炭化粒若干混入
6層　褐 色 土（10YR 4 / 4）
7層　明黄褐色土（10YR 7 / 8）焼土粒若干混入
8層　橙 色 土（7.5YR 6 / 8）焼土

0　1m

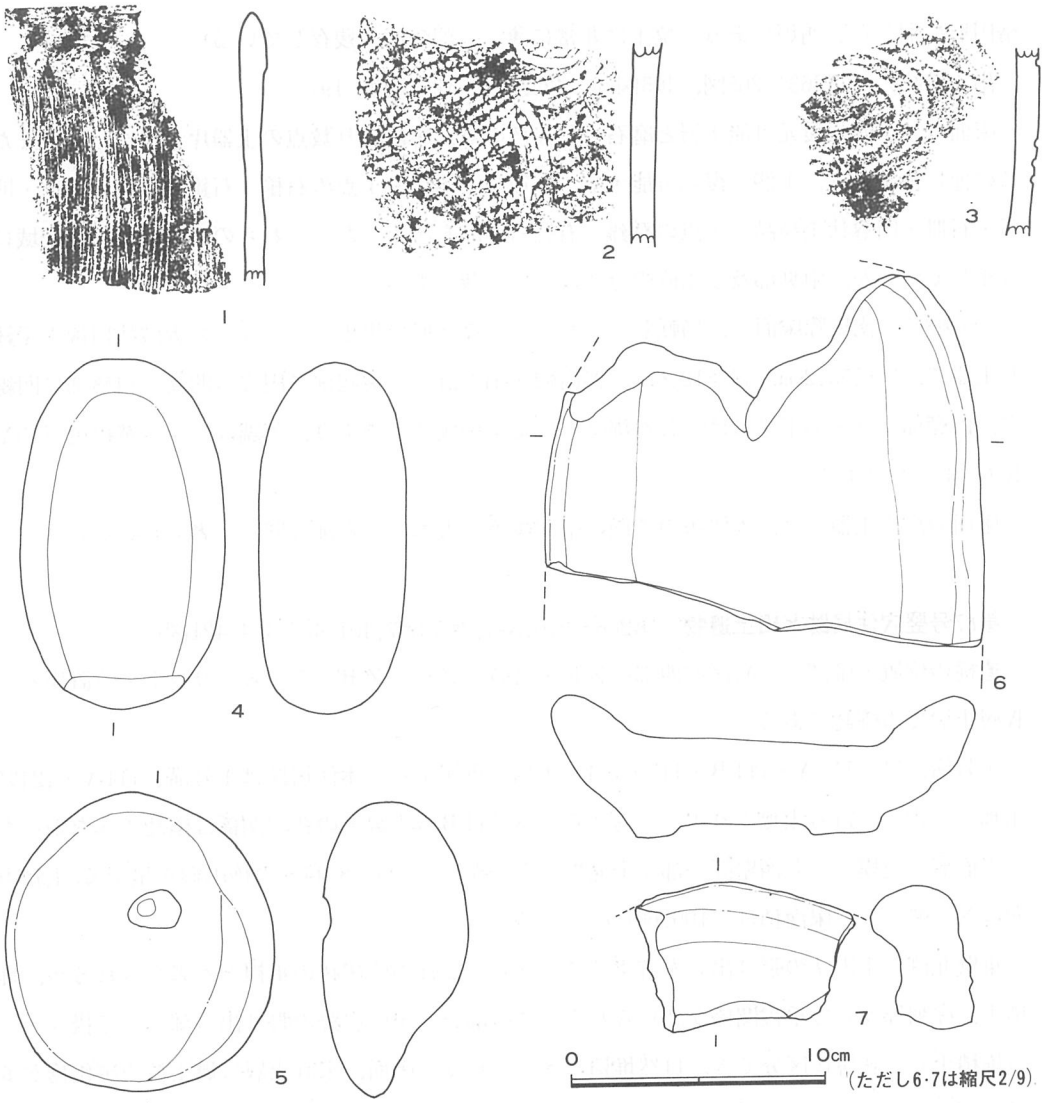
第262図　第86号住居炉跡微細図



0　5cm

第263図　第86号住居跡出土石器実測図(1)

第264図　第86号住居跡出土土器拓影図(1)（ただし4・6・9は第95号住居出土遺物）



第265図　第86号住居跡出土土器拓影図・石器実測図(2)

北東壁際に位置するであろう未検出の柱穴を加えて，主軸線に対称な4対8個（Pit 1・7，Pit 2・6，Pit 3・5，Pit 4・(未検出)）を基本とする柱配置と考えられる。またPit13・18, Pit20・22の2対は，規則的であることから副柱穴と考えられる。

第86号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	39×32	30×26	29×24	33×28	24×24	26×25	39×29	欠　番	18×15	24×21	18×16
深　さ	49.1	56.2	54.2	47.4	61.4	37.5	60.8		22.7	35.0	37.7
Pit No.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
規　模	33×32	28×25	18×13	25×21	21×18	23×22	27×23	28×23	26×25	14×14	18×18
深　さ	28.0	32.4	19.8	36.8	14.7	15.5	32.2	21.4	26.1	26.8	20.1

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや東寄りに位置する。16～29cm大の自然石を96×88cmの

楕円形に配した石囲炉である。焼土は非常に薄く，部分的に残存している。

〈出土遺物〉（第263～265図，405図３，424図２，426図15・19）

床面より１個の復元可能土器と磨石・石皿各１点，床直より数点の土器片を出土した。またこの他に覆土より，１個の復元可能土器，１箱の土器片，１点の石槍・石錐・石匙・石篦・凹石・石皿・円盤状土製品，２点の石鏃・有孔石製品を出土した。これらの遺物は住居内全域に分布しているが，中央部及び南側の分布はやや希薄である。

405図3は，南壁際床面で，横転しつぶれたような状態で出土した，５つの大波状口縁の深鉢形土器で，口径55.2cm，底径12.6cm，器高62.0cmを計る。突起部に円文（凹文），口唇部に凹線文，口頸部より胴部下半にはＬＲ斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ６/４）を呈する。

床面の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第87号竪穴住居跡と出土遺物（第266～270,394,395,397,401,403,404,421図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部のＺＥ・ＺＤ・ＺＣ・ＺＢ―７・８グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。

１号溝，71・111Ａ・111Ｂ・112・124号土壙と重複する。本住居跡は１号溝，111Ａ・124号土壙より古く，71号土壙より古いと考えられる。111Ｂ号土壙との新旧関係は確認できなかった。

〈平面形・規模〉　北西壁際一部が未発掘であるが，16.00×8.44mの楕円形を呈する。主軸方向はＮ―9°―Ｅ，床面積は（109.60）㎡を計る。

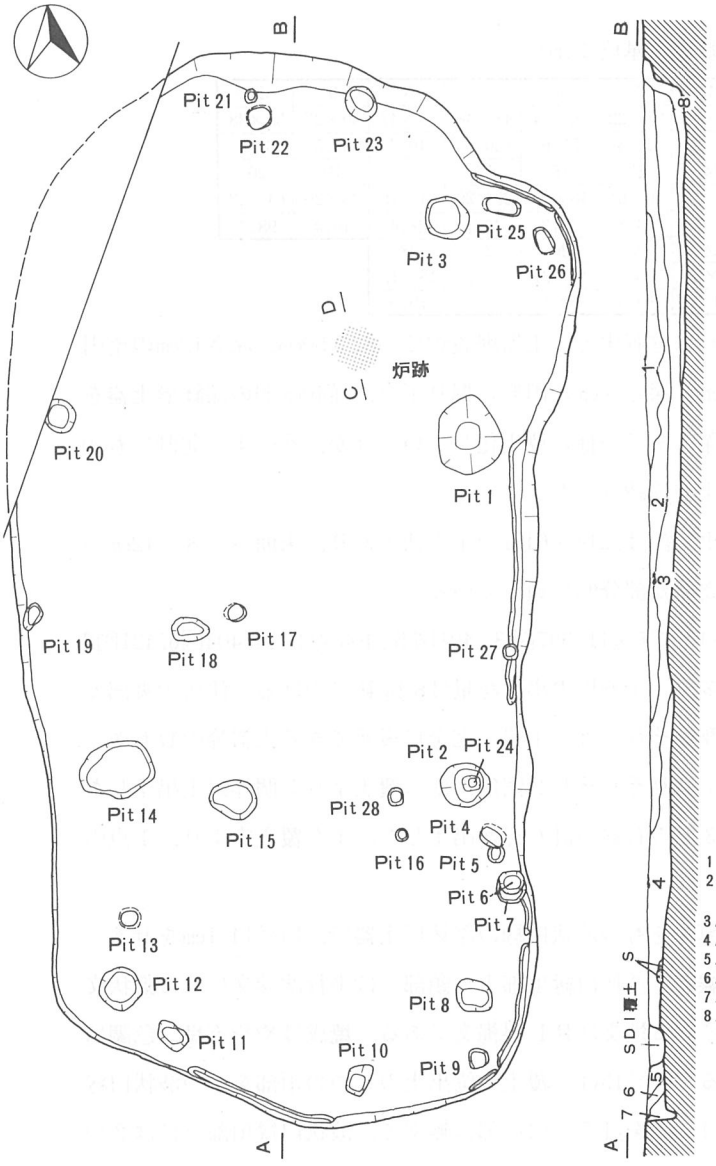
東壁北側に半円状の張り出しを有することから，２軒の住居跡の重複とも考えられるが，堆積土，柱列等からは重複関係が認められず，この部分は本住居跡の張り出し部として扱う。

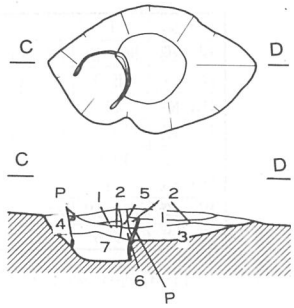
〈堆積土〉　８層に区分でき，自然堆積と考えられる。床面，床直土層に焼土粒や炭化物が多数確認され，焼失家屋と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。南壁際から北壁際へかけ若干傾斜があるが，ほぼ平坦で，しまりはやや弱い。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁49.1cm，西壁50.0cm，南壁39.0cm，北壁69.3cmを計る。北西壁は未発掘のため不明，また，東・南壁の一部は，１号溝により消失している。

〈周溝〉　東壁・南壁及び北壁東側壁下から不連続の周溝が検出された。幅６～20cm，深さ４～18cmを計る。

〈柱穴〉　本住居跡より28個のピットが検出された。このうちPit１～３・８・12・14・20を主柱穴，Pit10・11・22・23を副柱穴とし，主軸に対称な６対12個（Pit１・20，Pit２・14，Pit３・（未検出），Pit８・12，Pit10・11，Pit22・23）を基本とする柱配置と考えられる。





1層　明褐色土（7.5YR5/8）焼土
2層　明褐色土（7.5YR5/6）焼土
3層　黄褐色土（10YR5/6）炭化物少量混入
4層　明黄褐色土（10YR6/6）炭化物若干混入
5層　明褐色土（10YR3/4）
6層　明褐色土（7.5YR5/8）
7層　暗褐色土（10YR3/4）
焼土，炭化物，土器片混入

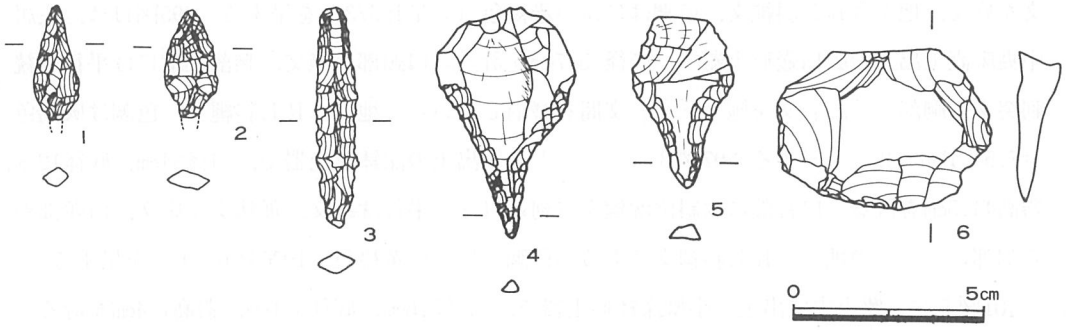
0　50cm

第267図　第87号住居炉跡微細図

1層　黒褐色土（10YR3/2）しまり弱
2層　褐色土（10YR4/4）炭化物・下位火山灰微量混入，黒色土少量混入
3層　暗褐色土（10YR3/3）しまり強・炭化物・下位火山灰少量混入
4層　暗褐色土（10YR3/2）炭化物多量混入
5層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強
6層　暗褐色土（10YR3/4）下位火山灰多量混入
7層　暗褐色土（10YR3/3）下位火山灰多量混入
8層　黒褐色土（10YR3/2）炭化粒・下位火山灰多量混入

0　4m

第266図　第87号竪穴住居跡実測図



第268図　第87号住居跡出土石器実測図

第87号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	108×116	80×71	74×65	42×29	26×22	36×34	48×48	58×47	30×25	50×38
深　さ	115.9	79.4	39.0	65.2	24.3	55.6	20.6	40.7	55.5	62.9
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	52×34	67×64	28×23	117×88	76×61	18×18	28×29	61×15	38×26	64×42
深　さ	49.9	74.0	32.5	50.3	24.3	17.3	46.1	28.4	19.4	98.7
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28		
規　模	19×18	34×34	52×47	26×22	54×25	46×21	25×23	15×13		
深　さ	7.6	22.3	24.7	100.4	59.0	60.4		19.9		

〈炉〉　住居跡中央よりやや北東寄りに位置する。土器埋設炉で，82×50cm，深さ12cmの楕円形の掘り込みの西側を，さらに径35cm，深さ８cmの円形に掘り下げ，径40cm弱の深鉢形土器を埋設している。埋設土器内が11cmの深さまで一様に焼土化しているほか，そのすぐ北側にも70×60cmの範囲で，厚さ６～８cmの焼土が確認された。

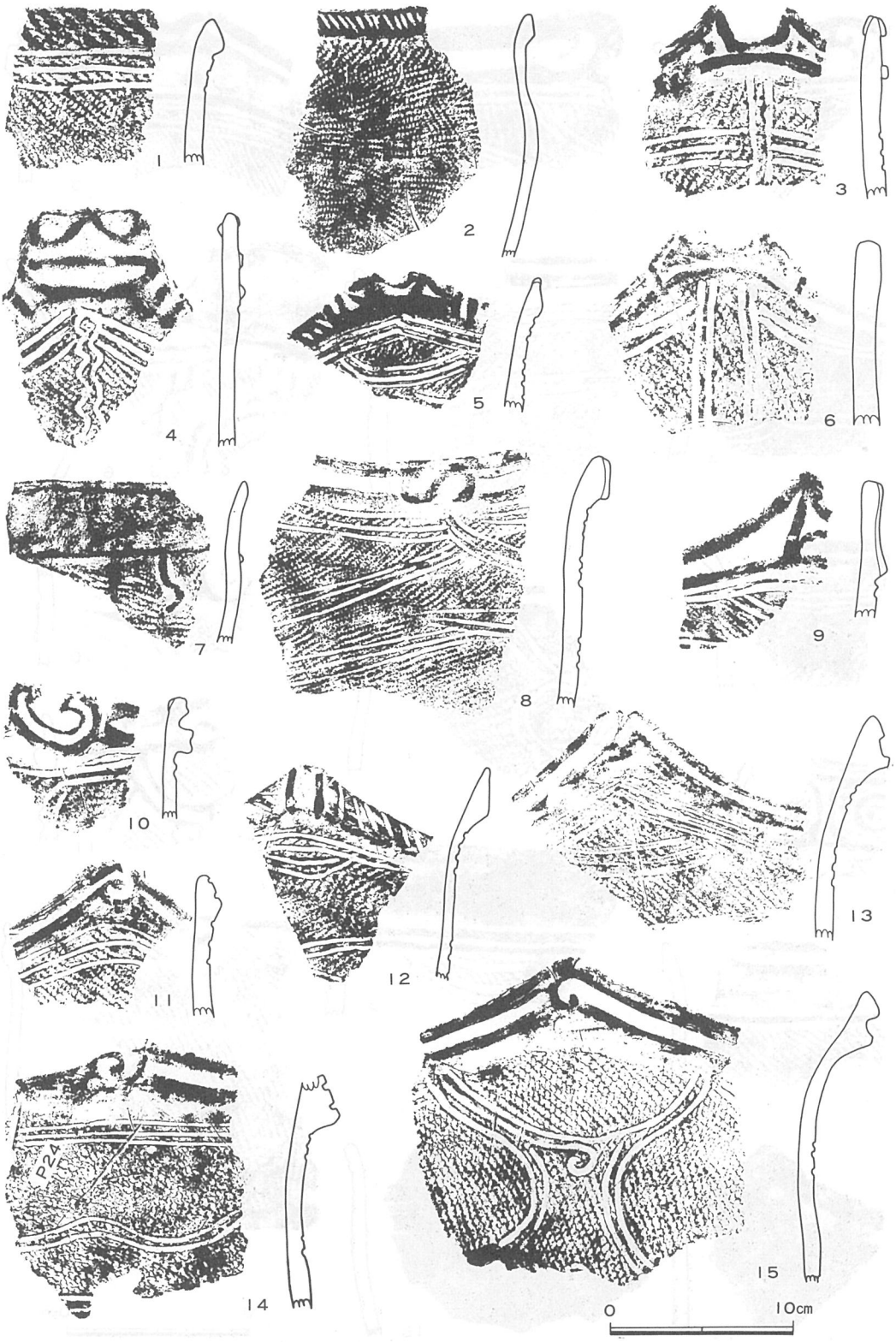
〈その他〉　住居跡東壁北側の張り出し部は，214×64cmの半円状であり，床面から８～12cmの比高をもつ。この張り出し下にも，周溝が部分的に通っている。

〈出土遺物〉（第268～270，394図４・13，395図11，397図３，401図５，403図４・14，404図6，421図2）

本住居からの出土遺物量は非常に多く，土器片の出土総量は8½箱にのぼる。住居中央部から南側にかけての出土が多い。完形及びそれに近い土器，完全に復元できる土器等の数も多く，ピット内より１個体，床面及び床直上よりそれぞれ２個体，他に覆土より５個体以上出土した。石器は，１点の掻器，２点の石錐，３点の石鏃の計６点が出土した。また覆土中より，１点の土偶を出土した。

394図4は，覆土中位出土の２つの項部をもつ波状口縁の深鉢形土器で，口径14.1cmを計る。口頸部及び胴部上半に３条の平行沈線文，波状口縁項部下の頸部には平行沈線文による孤状文を施文，頸部から胴部下半に施されている地文はＲＬ斜縄文である。焼成はやや不良，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ５／４）を呈する。394図13は，覆土中位出土の３つの項部をもつ波状口縁の広口壺形土器で，底径4.5cm，器高11.8cmを計る。口縁部は無文で，波状口縁項部下には２つの円文（凹文），胴部上端には横位連続刺突文，胴部には「∩」文，懸垂文，ゼンマイ状懸垂文を施文，地文はＲＬ斜縄文，色調はにぶい赤褐色（５ＹＲ5/3）を呈する。395図11は，住居中央床直上出土の広口壺形土器で，底径 5.7cmを計る。口頸部は無文，胴部上端には平行連続刺突文，胴部に「∩」文を施文，「∩」文間を磨消している。地文はＲＬ斜縄文，色調は灰褐色（7.5ＹＲ４／２）を呈する。397図３は，ピット上位出土の深鉢形土器で，口径34cm，底径12cm，器高44.5cmを計る。口唇部には斜位沈線文（刻み目文），平行沈線文，孤状文を施文，口頸部から胴部にかけての地文はＲＬ斜縄文である。色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ６／４）を呈する。

401図５は，覆土中位出土の小型深鉢形土器で，口径5.6cm，底径3.1cm，器高7.4cmを計る。無文の土器で，焼成は良好，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ５／３）を呈する。403図４は，住居中



第269図　第87号住居跡出土土器拓影図(1)

第270図　第87号住居跡出土土器拓影図(2)

央部床面からほぼ完形に近い形で出土した鉢形土器で，口径11.7cm，底径 5.0cm，器高10.2cmを計る。器面にはＬＲ斜縄文を施文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ６／３）を呈する。403図14は，北西壁寄り床面からほぼ完形に近い形で出土した小型深鉢形土器で，口径8.9cm，底径4.5cm，器高9.8cmを計る。器面にはＲ斜縄文を施文，焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ６／３）を呈する。404図６は，床直上出土の深鉢形土器で，口径13.4cm，底径 7.6cm，器高18cmを計る。器面全体にＬＲ斜縄文を施文，焼成は不良，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ ７／３）を呈する。

269図13，270図５は，地床炉内より出土した土器である。

ピット及び床面の出土土器より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層ｅ式併行期）と考えられる。

第88Ａ号竪穴住居跡と出土遺物（第271図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＣ・Ｄ―８・９グリッドに位置する。Ⅳ層上面で南西壁の一部を確認したが，他の住居跡との重複により，全プランは88Ｂ・91号住居跡床面において判明した。88Ｂ・91・98号住居跡と重複，本住居跡はいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉　3.60×3.20m の楕円形を呈する。主軸方向はＮ―37°―Ｗ，床面積は7.76㎡を計る。

〈堆積土〉　そのほとんどを重複により消失し不明であるが，確認された床直上の堆積土は黒褐色土，下位火山灰混入の暗褐色土であり，人為堆積と考えられる。この上面を88Ｂ号住居跡床面としているので，非常に固くしまっている。

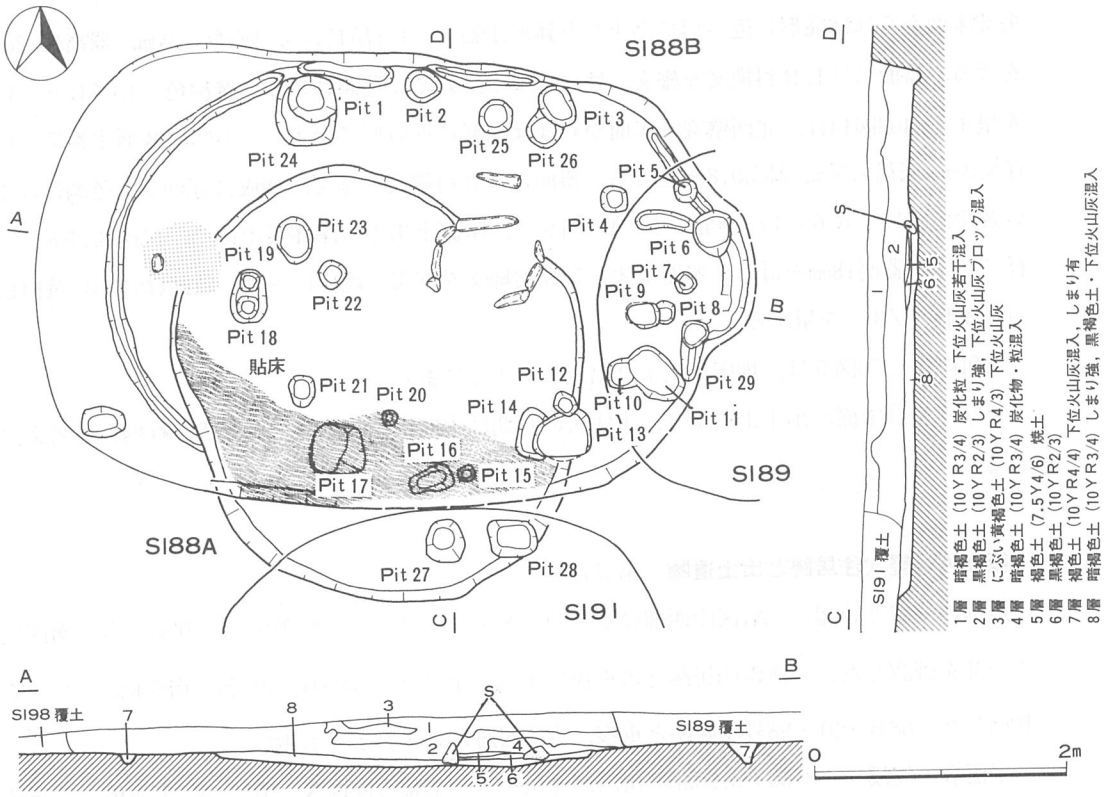
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。重複部分が多く，ほとんど壁は存在しない。南西壁は38cm，重複部分は５～８cmの壁高を残すのみである。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　88Ａ・88Ｂ号住居跡より計29個のピットが検出された。このうちPit16・22が，本住居跡の主柱穴で，２本柱の配列と考えられる。

第88Ａ・88Ｂ号住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	42×36	28×27	36×26	22×21	20×18	36×28	17×17	19×16	26×20	26×24
深　さ	73.3	15.7	51.3	30.6	13.5	47.1	29.4	25.7	46.1	39.5
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	51×33	21×16	42×36	39×22	13×12	36×21	41×27	30×24	24×21	13×12
深　さ	51.2	49.1	47.6	27.2	13.6	21.6	39.6	58.3	58.8	13.4
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
規　模	27×20	23×22	38×30	56×50	29×28	32×27	34×32	36×28	35×23	
深　さ	14.4	53.5	18.5	21.6	19.5	33.2	26.1	24.0	11.5	



第271図　第88A・88B号竪穴住居跡実測図

〈炉〉　検出されなかった。

〈出土遺物〉

本住居からの出土遺物は少ない。南西壁際より，底部を欠いた土器が倒立状態で出土した。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層ｅ式併行期）と考えられる。

第88B号竪穴住居跡と出土遺物（第271・272・395図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のC—8・9グリッドに位置する。Ⅵ層上面での確認である。88A・89・98号住居跡と重複，本住居跡は89号住居跡より古く，88A・98号住居跡より新しい。また本住居跡は，その柱配置より1回の改築が推測される。

〈平面形・規模〉　(5.66)×3.60mの，東壁に張り出しをもつ楕円形を呈する。主軸方向はN—82°—W，床面積は（15.86）㎡を計る。

〈堆積土〉　4層に区分でき，人為堆積である。5・6層は炉内覆土，7層は本住居跡周溝覆土である。

〈床面・壁〉　88A号住居跡との重複部分は同住居跡覆土を，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまっている。東壁の大部分は89号住居構築により消失

しているが，西・南壁の大部分はそれぞれ88A・98号住居跡覆土より，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し，北壁の高さは31.3cmを計る。

〈周溝〉　東壁から北壁の壁下及び西壁際へと不連続な幅14cm，深さ12cmの周溝が一巡する。

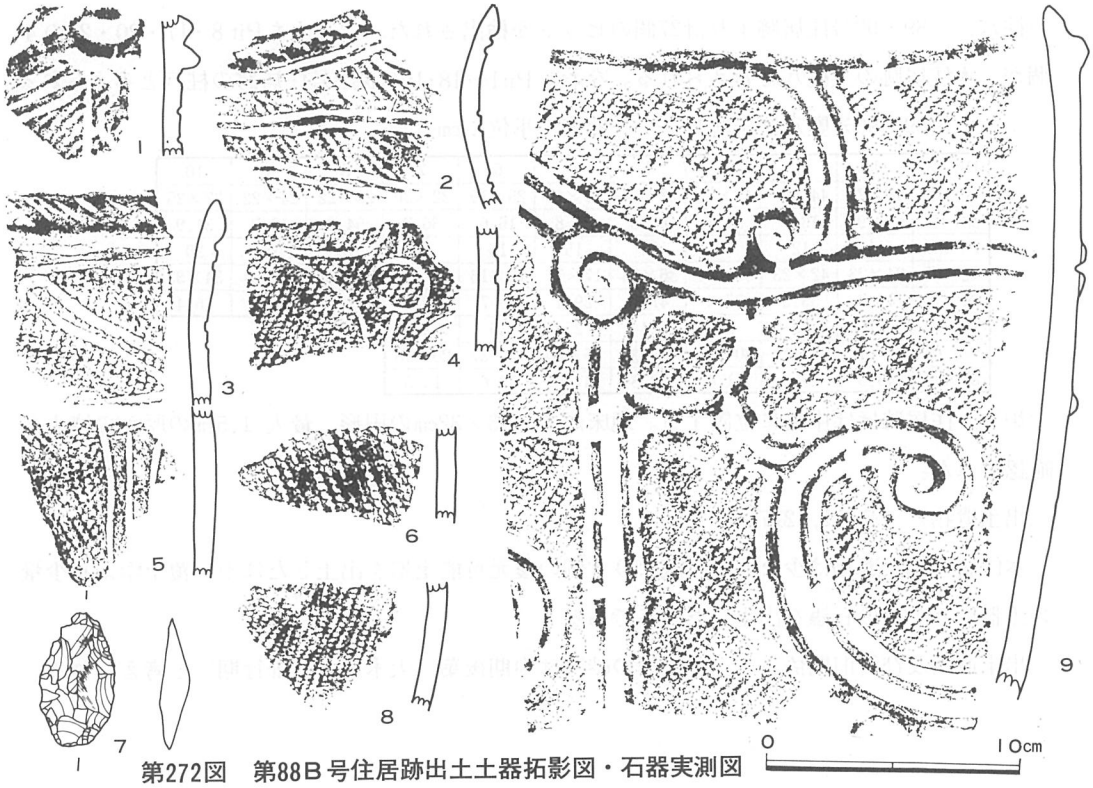
〈柱穴〉　近似する二通りの柱列より1回の改築が考えられる。重複する柱穴の新旧関係より改築前の柱配置は，Pit 4・10・14・17・18・24・26を主柱穴とし，主軸線上のPit18と，軸線に対称な3対6個（Pit 4・10，Pit14・26，Pit17・24）の計7個を基本とするものと考えられる。またPit21・23は，深さが浅いものの規則的な配列であることより，上屋構造に関連する柱穴と考えられる。

改築後は，Pit 1～3・5・13・15・17・19・29を主柱穴とし，主軸線上のPit19と，軸線に対称な4対8個（Pit 1・17，Pit 2・15，Pit 3・13，Pit 5・29）の計9個を基本とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は，88A号住居跡に付す）

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや東寄りに位置する。11～51cm大の自然石を86×71cmの楕円形に配した石囲炉である。炉内には，若干北西に偏在して，40×38cmの範囲に最大6cmの厚さの焼土が堆積している。

〈出土遺物〉（第272図，395図3）

ピット内，床面，床直より各数点の土器片を出土，他に覆土より1個の復元可能土器，少量



第272図　第88B号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

の土器片，１点の石槍を出土した。

395図3は，北東壁際覆土中位より出土した深鉢形土器の胴部下半で，底径６cmを計る。器面には沈線文による懸垂文を施文，地文はＲＬＲ斜縄文，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ５/４）を呈する。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第89号竪穴住居跡と出土遺物（第273・275・277図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＣ―９グリッドに位置する。Ｖ層上面での確認である。88Ｂ・90号住居跡と重複，本住居跡は88Ｂ号住居跡より新しく，90号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉　2.98×2.79mの円形を呈する。床面積は（6.36）㎡を計る。

〈堆積土〉　２層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　西側の重複部分は88Ｂ号住居跡覆土を，他はＶ層を掘り込んで床面としている。北東側の床面は，90号住居構築により消失している。残存する床面は，ほぼ平坦で堅くしまっている。西壁は88Ｂ号住居跡覆土より，他はＶ層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁13.9cm，南壁18.5cm，北壁27.9cmを計る。北東壁は90号住居構築時に消失している。

〈周溝〉　東・西・北壁の一部を除き不連続に，幅13cm，深さ10cm前後の周溝が一巡する。

〈柱穴〉　89・90号住居跡より計27個のピットが検出された。このうちPit８・17・20・21の４個が，本住居跡の主柱穴と考えられる。なお，Pit14・18・19は88B号住居跡の柱穴と考えられる。

第89・90号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

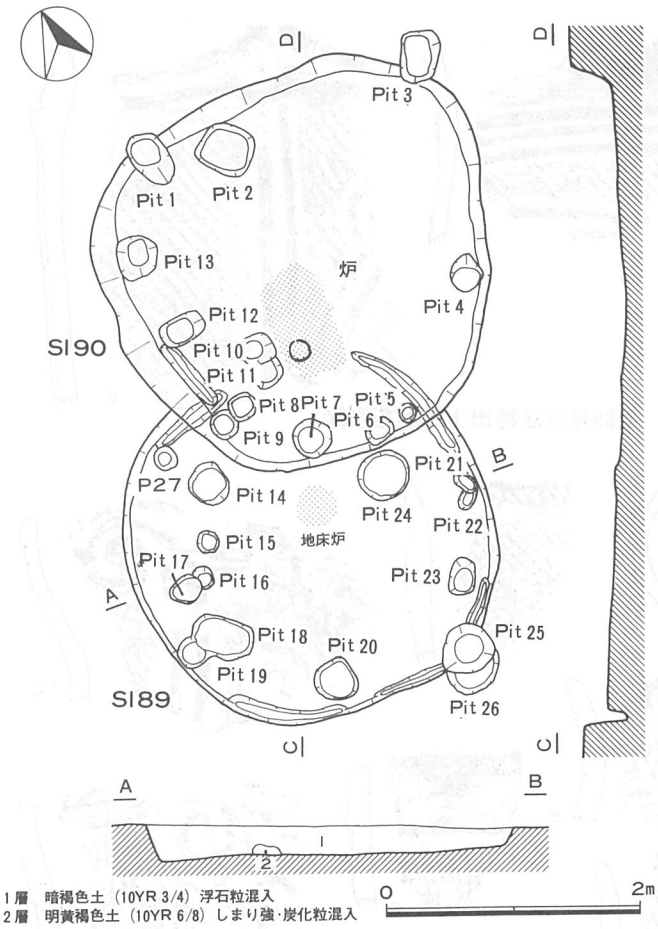
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	48×28	44×40	42×31	32×24	15×13	25×19	32×30	23×22	24×22	27×25
深　さ	31.9	13.7	31.9	50.8	21.8	16.6	36.7	54.2	13.0	31.9
Pi tNo.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	24×23	42×23	37×31	36×28	17×17	19×16	26×20	51×33	26×24	34×33
深　さ	16.2	53.2	37.3	47.1	29.4	25.7	46.1	51.2	39.5	46.4
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27			
規　模	22×12	21×13	30×21	41×39	15×40	44×37	20×18			
深　さ	49.3	25.8	11.4	43.8	41.8	12.6	13.5			

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉で，33×32cmの円形，最大 1.5cmの厚さの焼土が確認された。

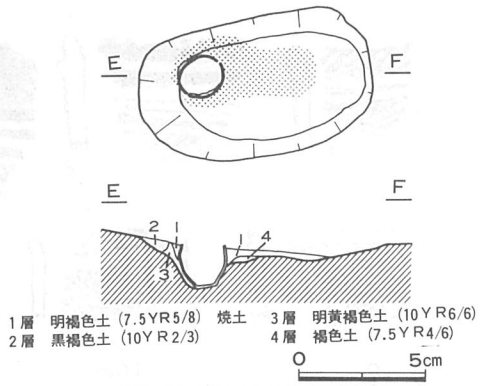
〈出土遺物〉（第275，277図）

本住居の出土遺物は少なく，床直より１個の復元可能土器を出土したほか，覆土中より少量の土器片と１点の石鏃を出土したのみである。

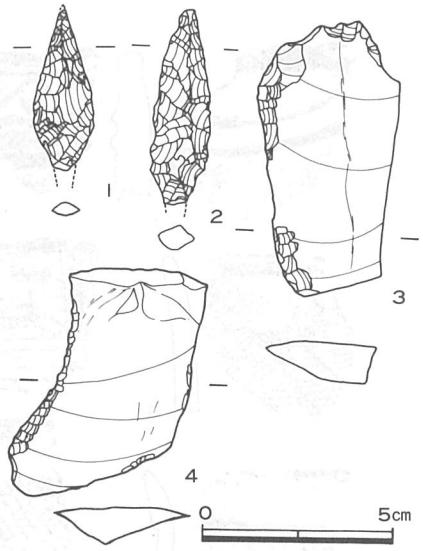
出土遺物及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。



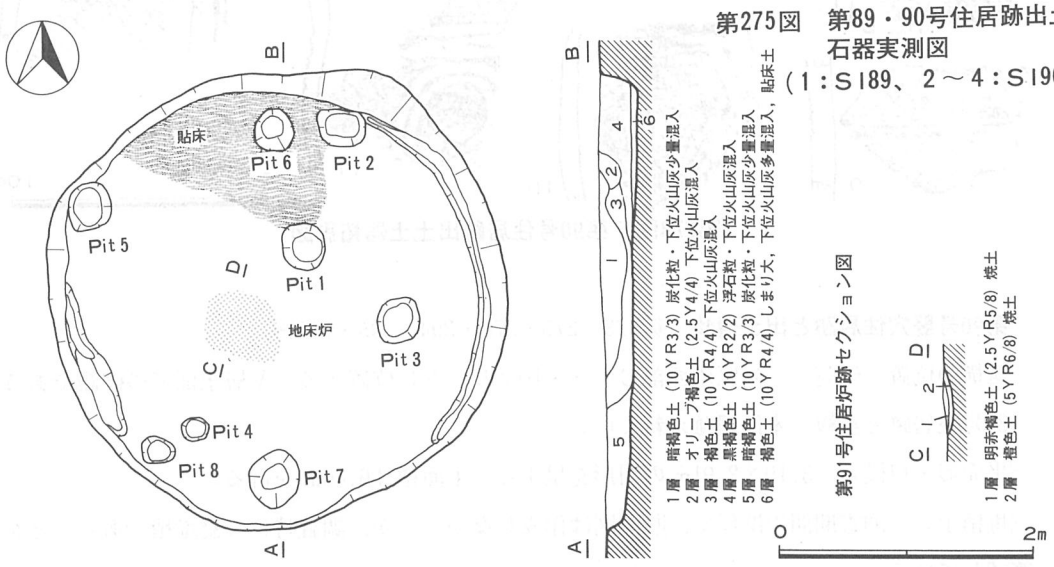
第273図　第89・90号竪穴住居跡実測図



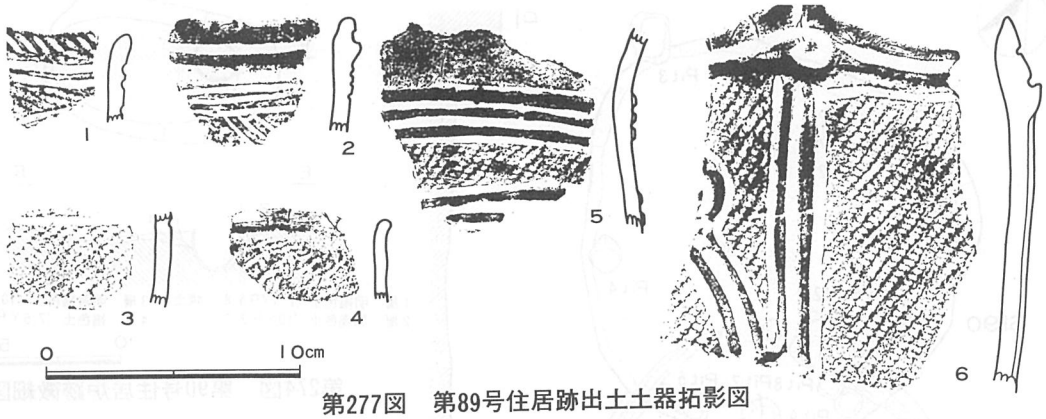
第274図　第90号住居炉跡微細図



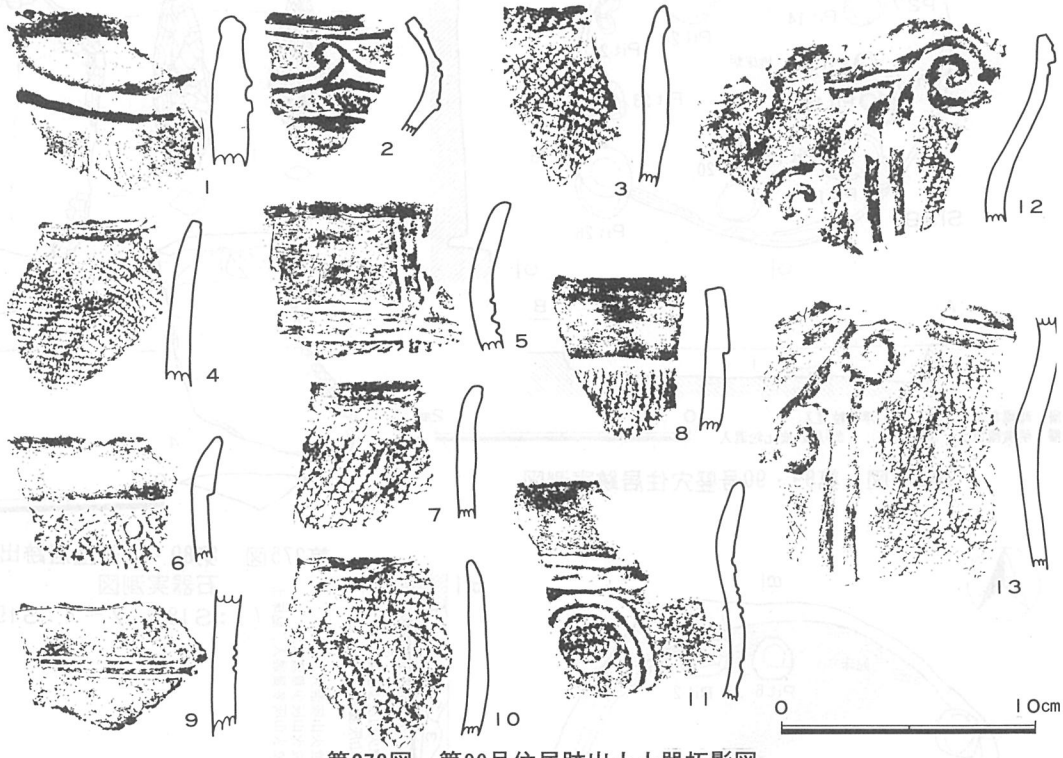
第275図　第89・90号住居跡出土石器実測図
（1：S189、2～4：S190）



第276図　第91号竪穴住居跡実測図



第277図　第89号住居跡出土土器拓影図



第278図　第90号住居跡出土土器拓影図

第90号竪穴住居跡と出土遺物（第273～275・278・394・395・398図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部C－9・10グリッドに位置する。V層上面での確認である。89号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　3.19×2.91mの円形を呈する。床面積は6.80㎡を計る。

〈堆積土〉　調査期間の関係で，断面図は作成しなかったが，調査時に人為堆積であることを確認している。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。西側半分は平坦，中央部から東壁際へかけて若干傾斜する。全体的に堅くしまりがある。南壁は89号住居跡覆土及びⅤ層より，他の壁はⅤ層より成る。いずれも急な立ち上がりを呈し，壁高は東壁25.2cm，西壁34.1cm，南壁32.5cm，北壁26.0cmを計る。

〈周溝〉　西壁南側に幅13cm，深さ 6.1cm，長さ62cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　Pit 1・3・4・7・12の5個が，本住居跡の主柱穴と考えられる。（ピット一覧は89号住居跡に付す）

〈炉〉　住居跡中央よりやや南寄りに位置する土器埋設炉である。92×55cmの楕円形の掘り込みの南端に径13cmほどの深鉢形土器が埋設されている。埋設土器のための掘り方は，径25cm，深さ14.5cmを計る。この埋設土器周辺から北側へかけ，57×27cmの範囲で，明褐色の焼土が確認された。焼土の厚さは，埋設土器周辺で最大7cmを計る。

〈出土遺物〉（第275・278図，394図10，395図15，398図3）

覆土中より2個の復元可能土器，少量の土器片，1点の石鏃，2点の掻器を出土した。

394図10は,住居中央部覆土中位より出土した深鉢形土器で，口径14.5cmを計る。口頸部に平行沈線文とその間に連続刺突文を施文，胴部には円形文を主体とした連続文，懸垂文を施文，地文はＲＬ斜縄文，色調は灰褐色（10ＹＲ4/2）を呈する。395図15は，南東壁際覆土中位より出土の広口壺と考えられる土器で，縦位楕円文＋「∩」文と「∩」文を施文，区画文外を磨消している。地文はＬＲ斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい赤褐色（5ＹＲ5/4)を呈する。398図3は，土器埋設炉の土器で，広口壺形を呈し，底径6.7cmを計る。口縁部は無文，胴部上端に横位連続刺突文，胴部には「∩」文を施文，地文はＲＬ斜縄文，色調は橙色（5ＹＲ6/6）を呈する。

土器埋設炉土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第91号竪穴住居跡と出土遺物（第276，279，407図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＣ・Ｄ—8・9グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。88Ａ号住居跡と重複，本住居跡は88Ａ号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉　3.74×3.60mの円形を呈する。床面積は8.80㎡を計る。

〈堆積土〉　5層に区分でき，人為堆積である。第6層は下位火山灰を多量混入し，しまりが大であり，その部分が88Ａ号住居跡との重複部分であることから，貼床土と考えられる。

〈床面・壁〉　北側の重複部分は，88Ａ号住居跡覆土上に貼床を施しているが，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまっている。北壁は88Ａ号住居跡覆土，他の壁はⅤ層より成り，西壁は緩やかな立ち上がりを，他の壁はほぼ垂直な立ち上がりを

呈する。壁高は東壁16.3cm，西壁19.6cm，南壁17.8cm，北壁29.8cmを計る。

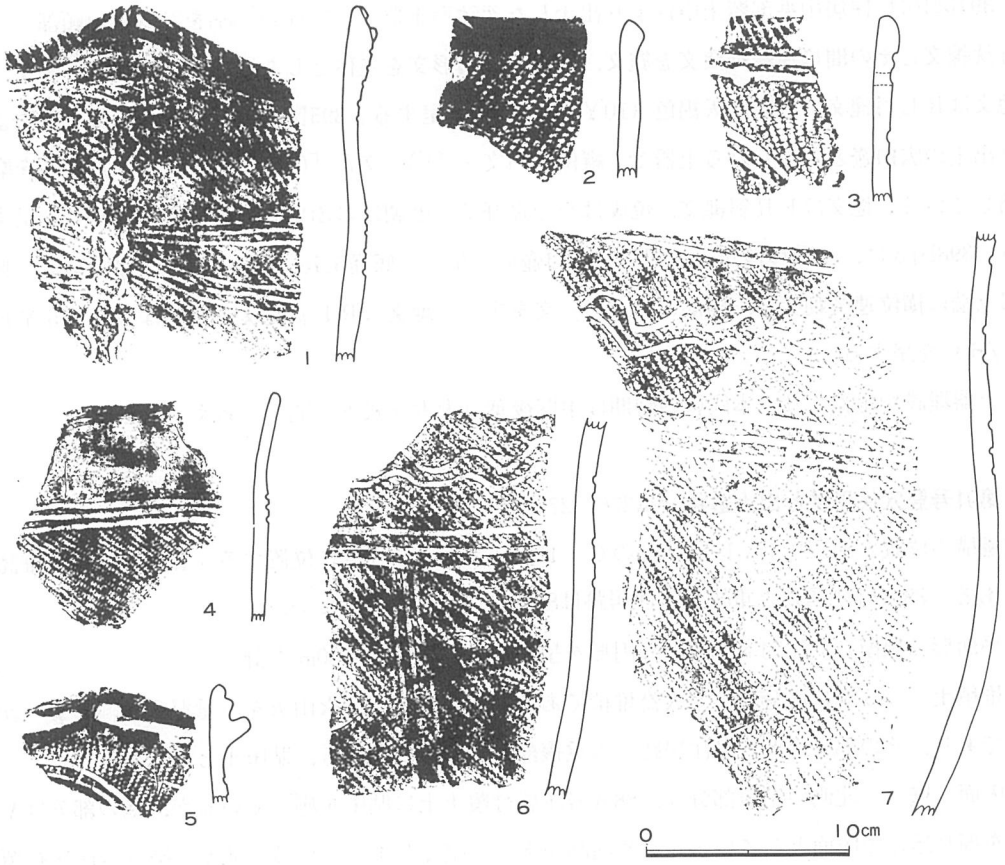
〈周溝〉　南西壁及び北東壁下より周溝が検出された。南西壁下の周溝は幅22cm，深さ 6.1～19.4cm，北東壁下の周溝は幅12cm，深さ 4.6cmを計る。

〈柱穴〉　本住居跡より８個のピットが検出された。５本柱の柱配置と考えられ，Pit１はその規模，深さ，配置から主柱穴と考えられるが，他の軸線に対称な２対４個については，Pit３・５，Pit６・７という組み合わせと，Pit２・３，Pit４または８・５という組み合わせと，二通り考えられる。平面規模が大きいこと，深さが一定であること等より，前者の方が有力と考えられる。

第91号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	38×34	38×30	35×34	22×18	38×34	34×31	48×41	16×12
深　さ	44.7	24.0	24.5	62.7	21.3	33.1	28.8	59.9

〈炉〉　住居跡中央よりやや南西寄りに位置する。地床炉であり，59×52cmの範囲で，最大４



第279図　第91号住居跡出土土器拓影図

cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第279図，407図１）

本住居からは，床面より１個のほぼ完形の土器を出土したほか，炉内，床面，床直，覆土から各数点の土器片を出土した。

407図1は，北壁際床面よりほぼ完形に近い状態で出土した深鉢形土器で，口径18.4cmを計る。３個の突起には円文（凹文），口唇部には凹線文，器面にはＲＬ斜縄文を施文，焼成はやや良好で，色調は灰褐色（7.5ＹＲ４/２）を呈する。

279図１・４～７は，床直上からの出土土器である。

床面の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第92号竪穴住居跡と出土遺物（第280，283図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部ＺＡ・Ａ－９グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。93号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　3.00×2.83mの円形を呈する。床面積は6.12㎡を計る。

〈堆積土〉　３層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。緩やかな凹凸があり，堅くしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁26.6cm，西壁29.7cm，南壁20.5cm，北壁25.9cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より６個のピットが検出された。

第92号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6
規　模	32×30	30×30	43×33	18×18	27×25	35×28
深　さ	34	16	49	27	10	36.5

〈炉〉　検出されなかった。

〈その他の施設〉　住居東側に規模90×75cm，深さ34cmの隅丸方形の掘り込みを有する。

〈出土遺物〉（第283図）

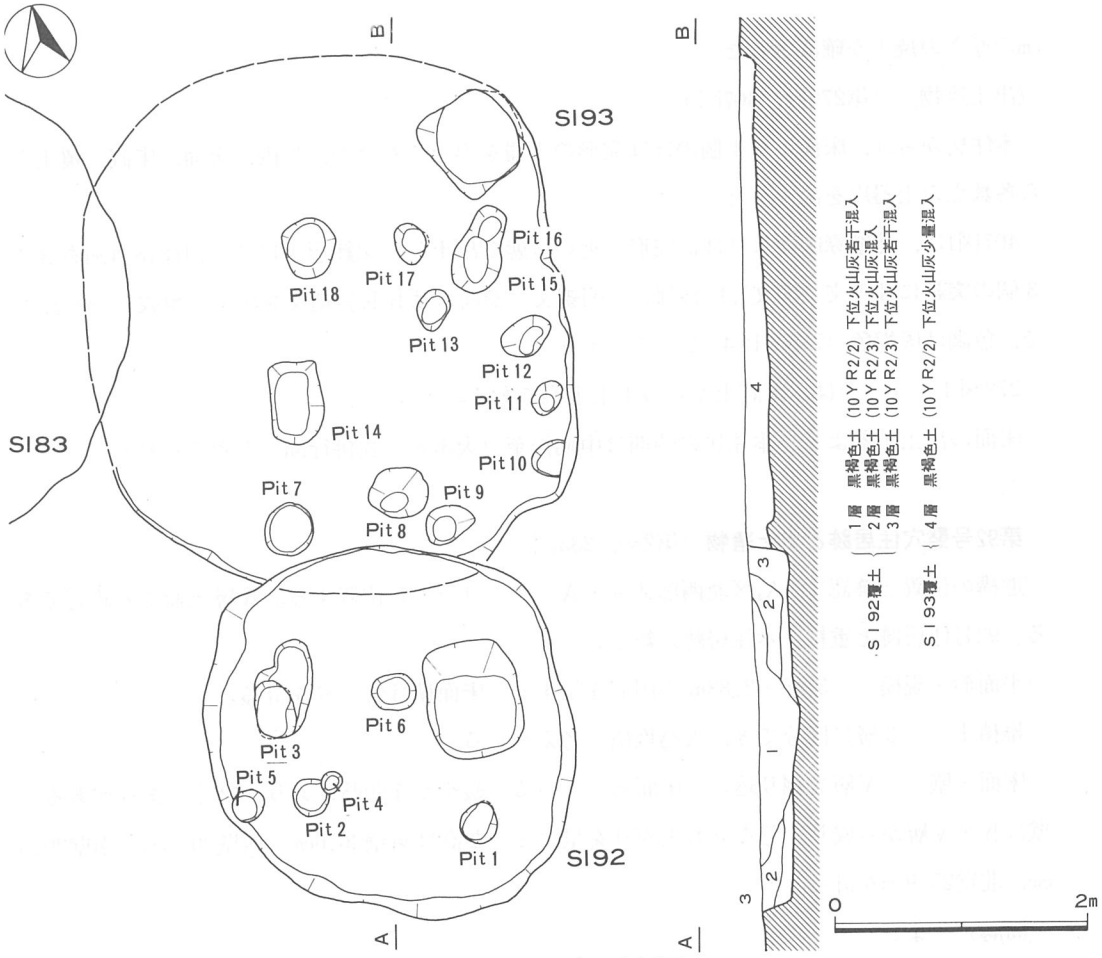
本住居の出土遺物は少なく，床直と覆土より，各数点の土器片を出土したのみである。

283図６は，床直上からの出土土器である。

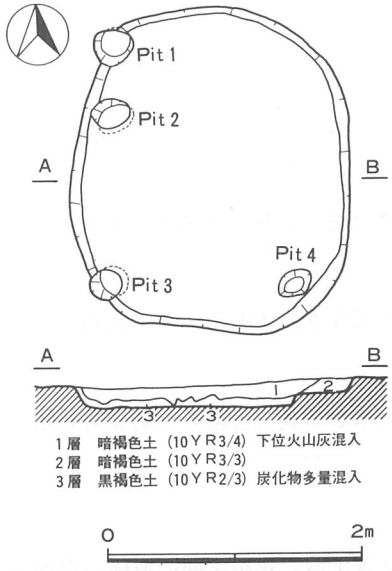
出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第93号竪穴住居跡と出土遺物（第280，284図）

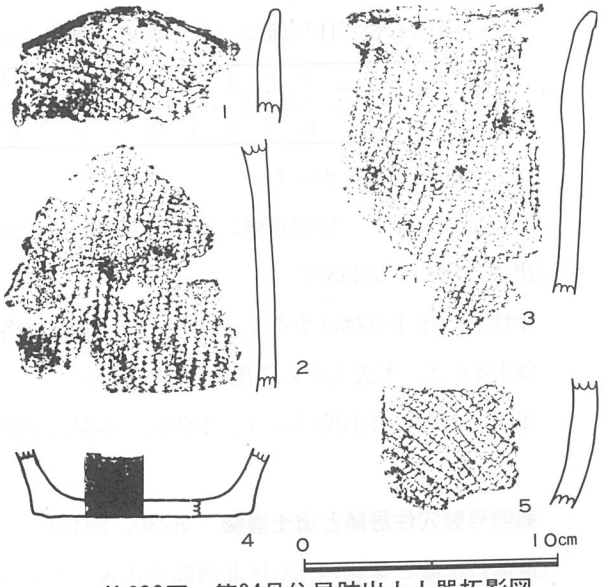
〈遺構の位置と確認〉　A_1区北西部のＺＡ－９グリッドに位置する。Ⅳ層上面で遺構の存在を



第280図　第92・93号竪穴住居跡実測図



第281図　第94号竪穴住居跡実測図



第282図　第94号住居跡出土土器拓影図

確認したが，攪乱が著しく，Ⅴ層上面まで確認面を下げざるを得なかった。83・92号住居跡と重複，本住居跡がいずれよりも古い。

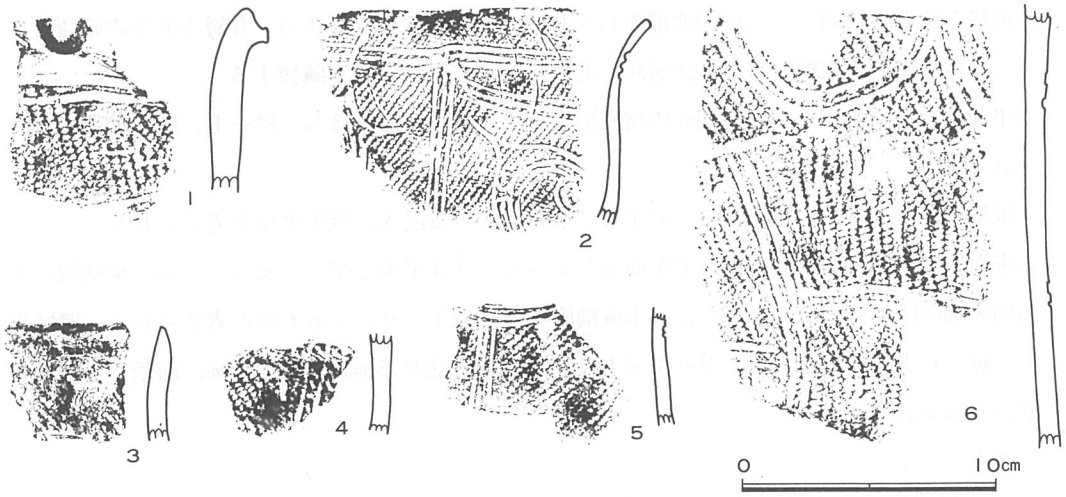
〈平面形・規模〉　(3.80)×(4.26)mの楕円形を呈すると考えられる。床面積は12.64㎡程度と推測される。

〈堆積土〉　黒褐色土の単一層である。

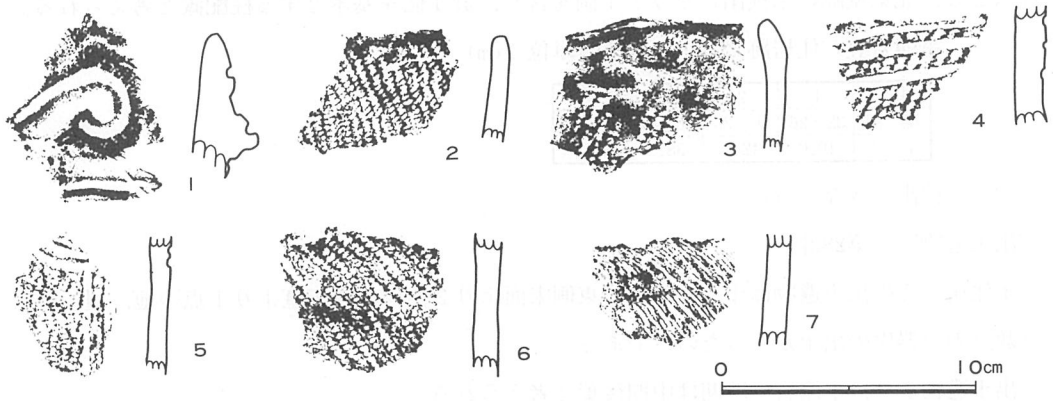
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。大きな凹凸があり，北側1/3ほどが攪乱をうけている。壁はⅣ・Ⅴ層より成る。西壁及び南壁の一部は，83・92号住居構築により消失し，北壁は，攪乱により確認できなかった。壁高は東壁5㎝，南壁13㎝を計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より11個のピットが検出された。北壁側は攪乱のため確認できなかった。



第283図　第92号住居跡出土土器拓影図



第284図　第93号住居跡出土土器拓影図

第93号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
規　模	44×40	47×40	40×30	29×25	32×22	43×25	32×25	65×42	43×39	28×26	34×25	44×42
深　さ	9	31	29	6	12.5	12	8	50	47	42	26	18

〈炉〉　検出できなかった。

〈その他の施設〉　住居北東部に規模78×72cm，深さ54cmの隅丸方形の掘り込みを有する。

〈出土遺物〉（第284図）

土器片の総出土量は1/3箱程であるが，床面，床直からの出土土器片は少ない。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第94号竪穴住居跡と出土遺物（第281，282図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＧ・Ｈ―９グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。本住居跡の南東側に71Ｃ号住居跡，北側に86・95号住居跡が隣接する。

〈平面形・規模〉　2.52×2.18m の楕円形を呈する。主軸方向はＮ―8°―Ｅ，床面積は4.20㎡を計る。

〈堆積土〉　３層に区分できる。最下層に炭化物を多量混入，焼失家屋と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。東壁側に比高約８cmの段差があるが，これは，本遺構廃棄後の地すべりによるものと考えられる。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁22.5cm，西壁15.1cm，南壁 3.7cm，北壁15.6cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より４個のピットが検出された。ピットの規模・深さより，Pit２～４を主柱穴とし，北東壁際の未検出のピット１個を含む，計４個を基本とする柱配置と考えられる。

第94号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4
規　模	32×26	30×23	26×24	28×20
深　さ	10.0	42.6	38.3	33.5

〈炉〉　検出できなかった。

〈出土遺物〉（第282図）

本住居からの出土遺物は少なく，住居東側床面より２点，北側床直より１点の他，覆土中より数点の土器片の出土があったのみである。

出土遺物より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第95号竪穴住居跡と出土遺物（第264，265，286図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のF・G－8・9グリッドに位置する。Ⅳ層での確認である。86・96B号住居跡と重複，本住居跡はいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉　4.11×3.21mの楕円形を呈する。主軸方向はN－12°－W，床面積は9.32㎡を計る。

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　南東側の重複部分は86号住居跡覆土を，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。若干凹凸があり，堅くしまっている。南東壁は86号住居跡覆土，北西壁は96号住居跡覆土，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成り，急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁19.9cm，南西壁7.3cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡に関連するピットは5個検出された。このうちPit 3・5を主柱穴とする柱配置と考えられる。

第95号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5
規　模	33×22	42×28	29×27	40×38	30×27
深　さ	21.1	12.7	24.6	50.4	39.6

〈炉〉　住居跡北西側の96号住居跡との重複部分の床面において，2つの焼土が確認された。このうち南東側のものが，位置的に本住居跡の地床炉と考えられる。48×26cmの範囲で，最大3cmの厚さを計る。

〈出土遺物〉（第264，286図）

床面より4点，床直より1点の土器片を出土，この他覆土中より10数点の土器片と1点の石篦を出土した。

264図9は床面，264図6，286図1は床直の出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

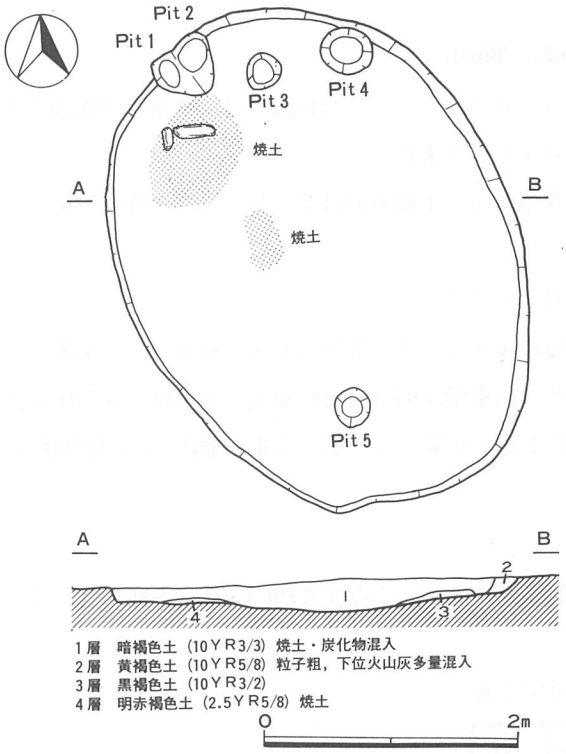
第96A号竪穴住居跡と出土遺物（第287，288図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のF－8グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。96B号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

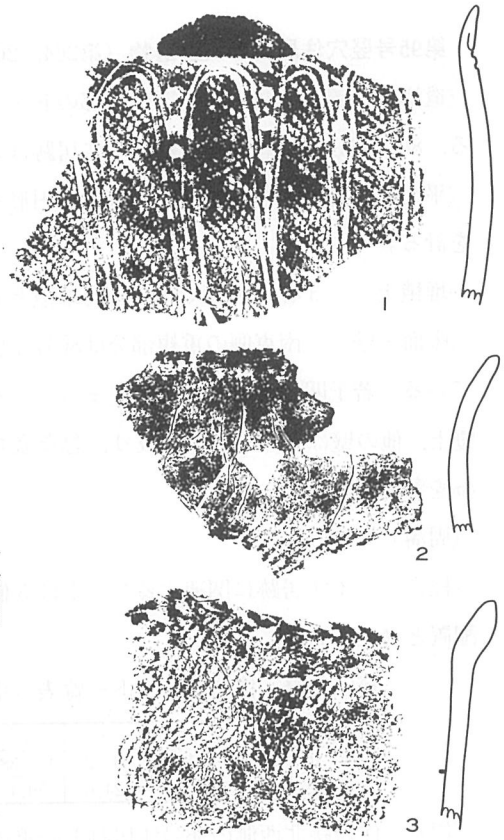
〈平面形・規模〉　2.88×2.33mの楕円形を呈する。主軸方向はN－12°－E，床面積は5.16㎡を計る。

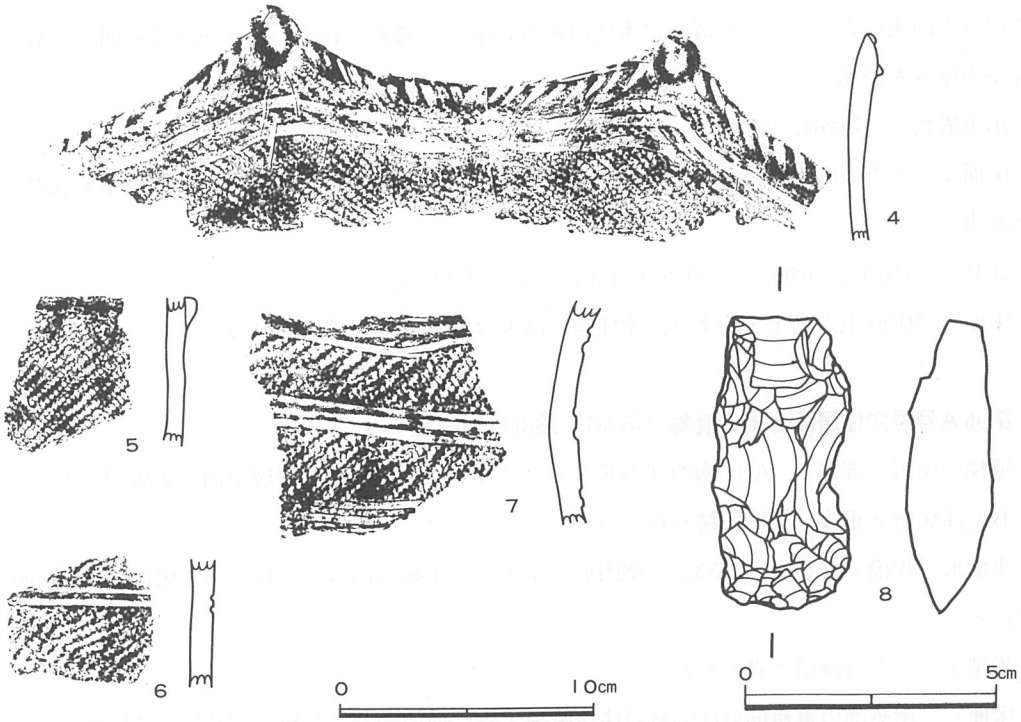
〈堆積土〉　人為堆積と考えられる。

〈床面〉　南東部の重複部分は96B号住居跡覆土を，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面として



第285図　第95号竪穴住居跡実測図





第286図　第95号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

いる。やや凹凸があり，堅くしまっている。東壁及び南壁東側半分は96Ｂ号住居跡覆土より，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁12.2cm，西壁9.6cm，南壁8.4cm，北壁16.5cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　北西壁及び北東壁隅より計２個のピットが検出された。

第96Ａ号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2
規　模	20×18	21×18
深　さ	12.0	13.6

〈炉〉　検出されなかったが，住居跡ほぼ中央の床面，及び床直上より19～32cm大の自然石が５個検出された。規則性や焼土の確認ができなかったため，炉跡とは断定できないが，これらの石が炉石である可能性はある。

〈出土遺物〉（第288図）

床面より３点，床直より５点の土器片を出土，他に覆土より20数点の土器片を出土した。これらの遺物は，平面的には本住居中央から東壁寄りに多く分布している。

288図２は床面，６は床直の出土土器である。

床面の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第96Ｂ号竪穴住居跡と出土遺物（第287，288図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＦ・Ｇ－８・９グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。95・96Ａ号住居跡と重複，本住居跡がいずれよりも古い。

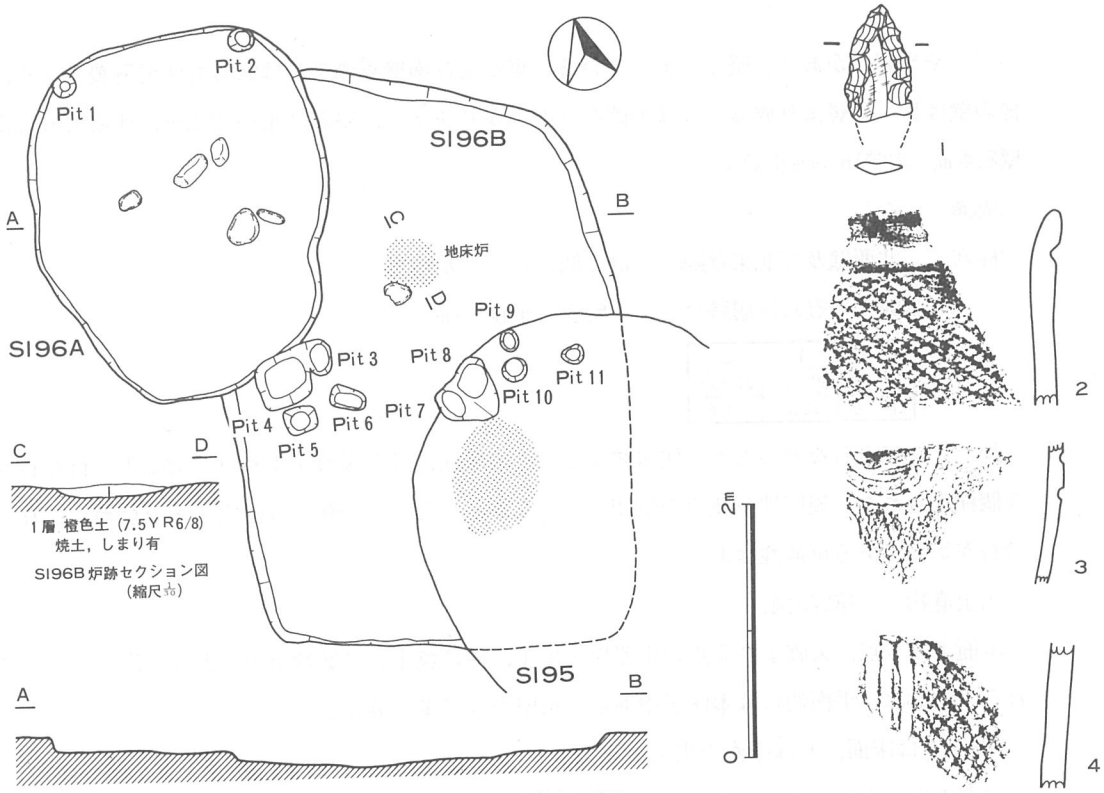
〈平面形・規模〉　4.56×(3.20)ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－13°－Ｅ，床面積は(12.08)㎡を計る。

〈堆積土〉　人為堆積と考えられる。

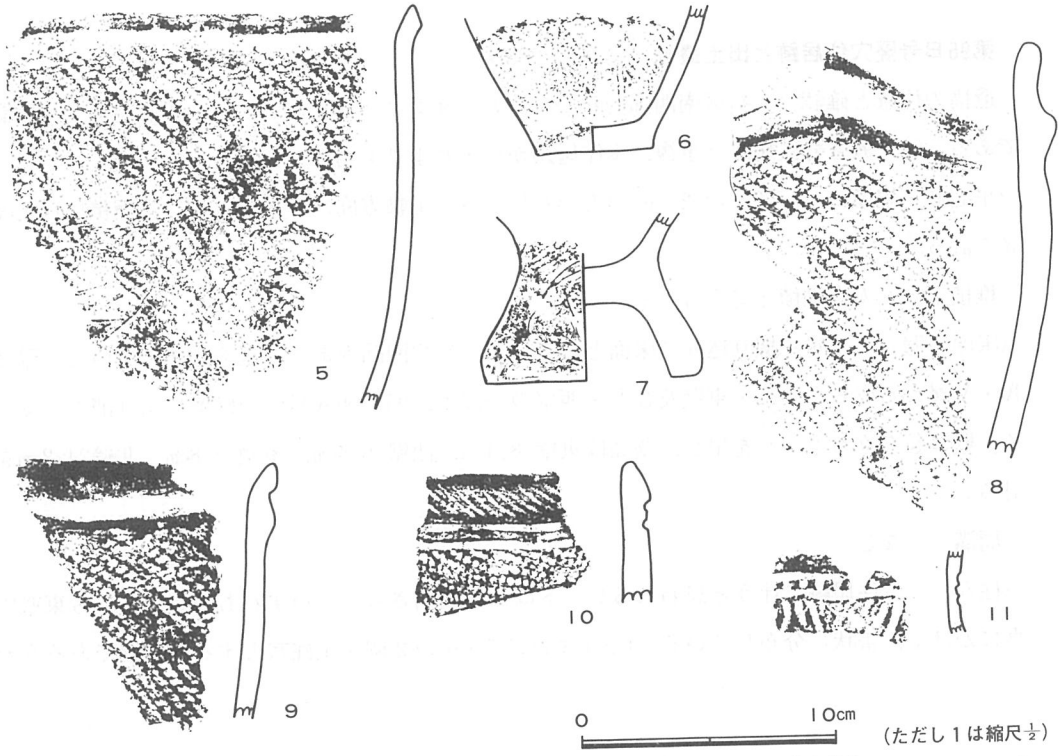
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまっている。壁はⅣ・Ⅴ層から成るが，南・東壁及び北・西壁の一部が，95・96Ａ号住居構築により消失している。壁は急な立ち上がりを呈し，壁高は東壁 8.4cm，西壁19.4cm，南壁 8.8cm，北壁24.2cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡に伴うと思われるピットは９個検出された。いずれも西壁中央から東壁中央にかけて，帯状に分布している。Pit４または５・10の２個を主柱穴とする柱配置であろうか。



第287図　第96A・96B号竪穴住居跡実測図



第288図　第96A・96B号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

第96B号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	31×22	45×42	25×22	29×16	33×22	42×28	18×14	21×19	18×14
深　さ	19.1	26.6	27.7	22.0	21.1	12.7	9.9	72.4	10.5

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや北寄りに位置する。地床炉であり，42×42cmの円形で，最大 4.8cmの厚さの焼土が確認された。

また，中央よりやや南東寄りの95号住居跡との重複部分の床面からも，96×68cmの範囲で，最大4.2cmの厚さの焼土が確認されたが，位置的に，地床炉と断定できない。

〈出土遺物〉（第288図）

ピット内，床面，床直より各数点の土器片を出土，他に覆土より10数点の土器片，1点の石鏃を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央から西壁寄りに多く分布している。

288図4は，床直の出土土器である。

出土遺物及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉～後葉（円筒上層 e～大木8 b式併行期）と考えられる。

第97A号竪穴住居跡と出土遺物（第289，292図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のE・F－8・9グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。97B号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　3.11×2.81m の円形を呈する。床面積は6.28㎡を計る。

〈堆積土〉　自然堆積と考えられる。

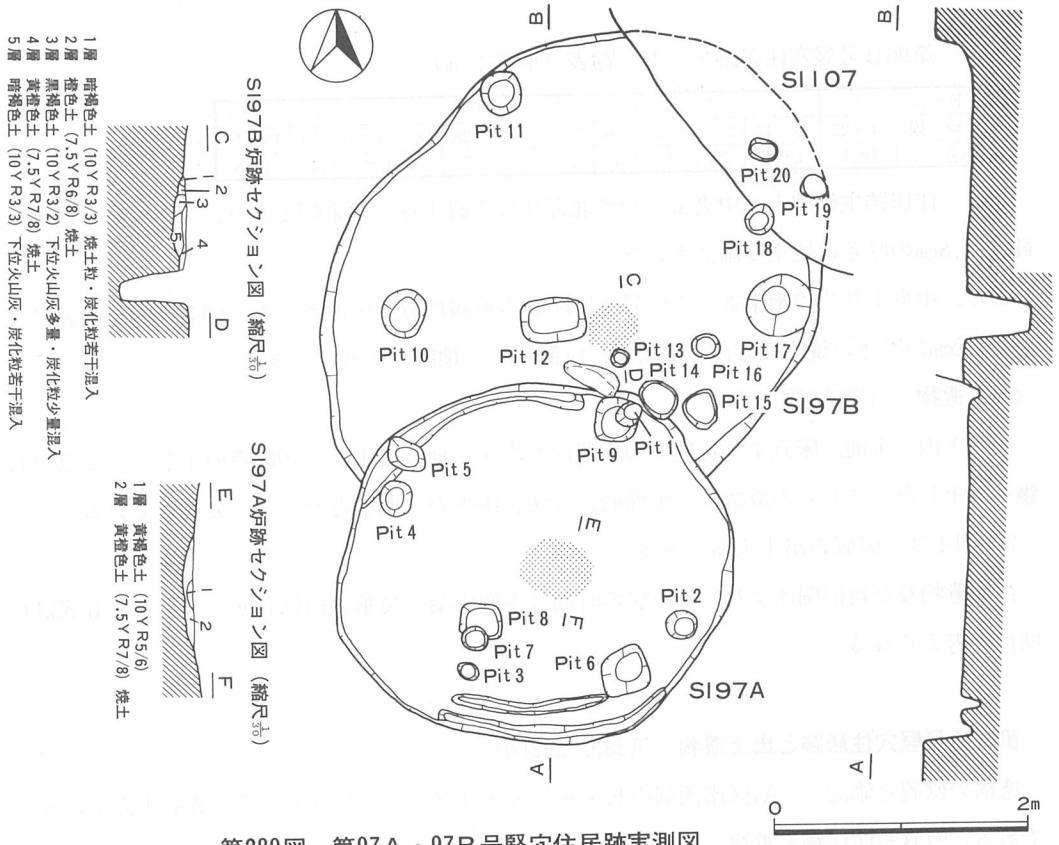
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。西壁際から東壁際へ緩い傾斜があるが，ほぼ平坦で堅くしまっている。北壁は97B号住居跡覆土及びⅤ層，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。いずれもほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁24.0cm，西壁47.5cm，南壁29.5cm，北壁26.5cmを計る。

〈周溝〉　南壁側に2重の周溝が検出された。南壁下のものは幅14cm，深さ12cm，その内側のものは幅9cm，深さ14cmを計る。また，北壁下の周溝は幅18cm，深さ9cmを計る。

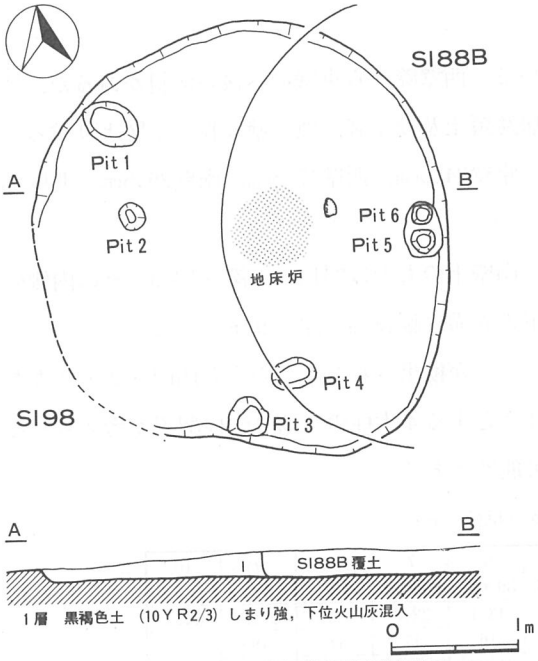
〈柱穴〉　97A・97B号住居跡より計20個のピットが検出された。このうちPit 1・2・3または7・4と，Pit 3または7・5・6・9を主柱穴とする4本柱の二通りの柱配置が考えられる。南壁寄りの2重の周溝の構造からも増改築の可能性がある。

第97A・97B号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

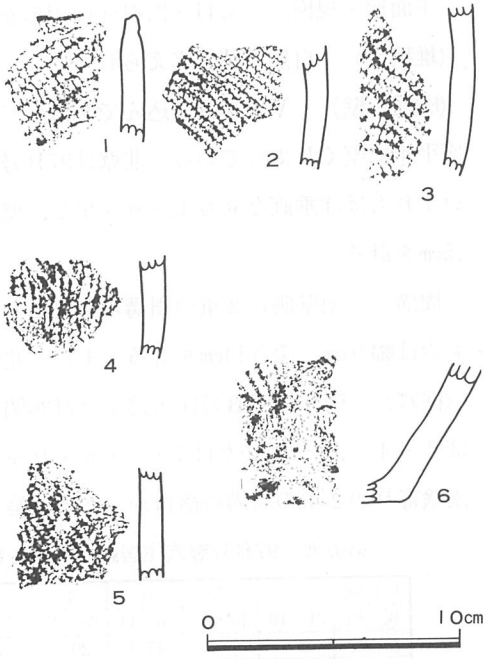
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	21×19	25×22	18×14	28×25	32×24	39×37	20×19	32×28	36×35	40×35
深　さ	61.1	29.1	45.4	20.8	21.9	43.1	22.3	10.6	27.3	42.4
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	34×31	51×36	16×14	32×24	30×27	21×20	50×50	24×22	21×18	23×18
深　さ	20.9	47.7	50.0	20.6	54.0	16.7	19.7	46.1	60.0	69.3



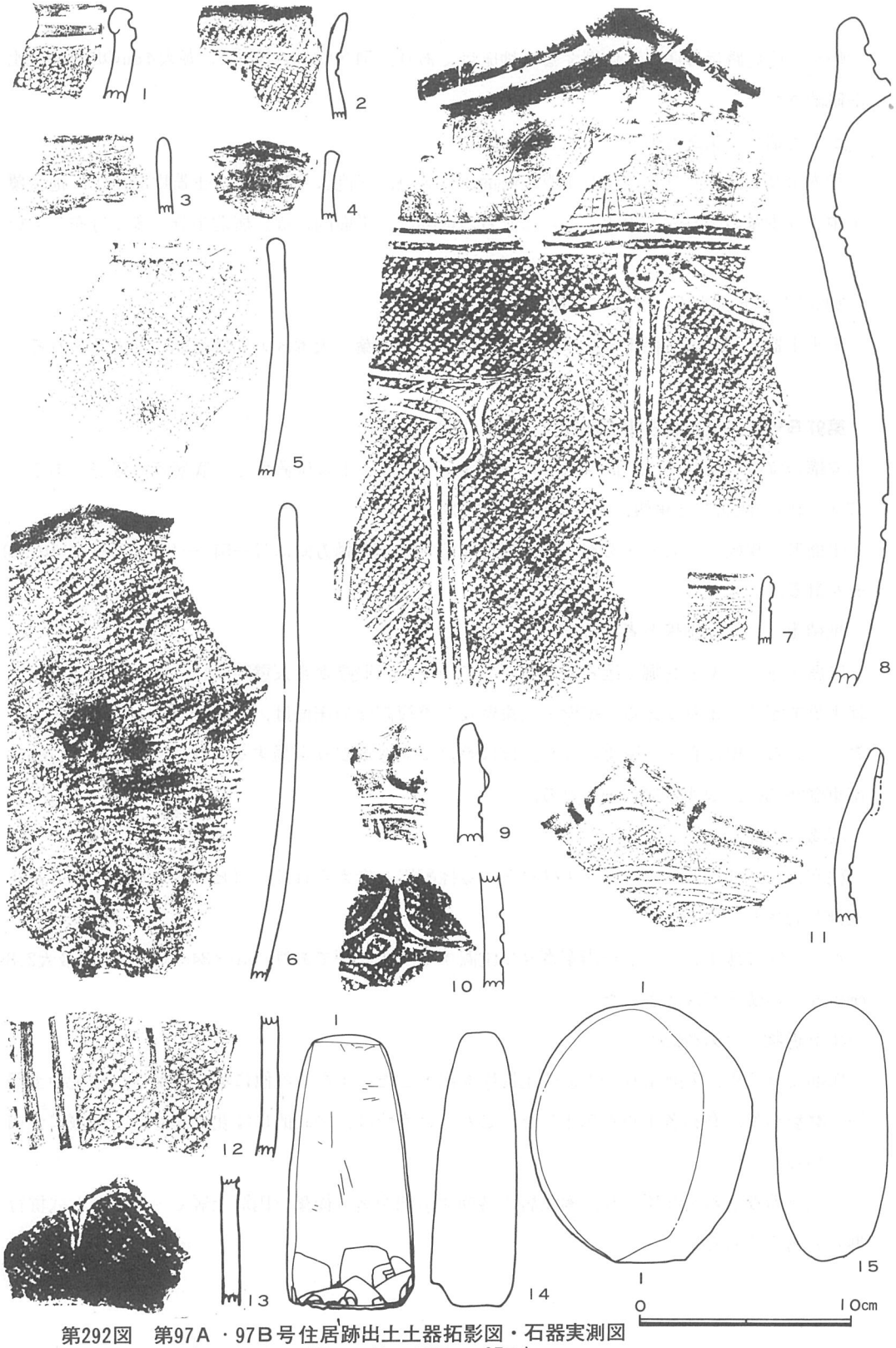
第289図　第97A・97B号竪穴住居跡実測図



第290図　第98号竪穴住居跡実測図



第291図　第98号住居跡出土土器拓影図



第292図　第97A・97B号住居跡出土土器拓影図・石器実測図
（1～6はS197A、7～15はS197B）

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉であり，54×42cmの範囲で，最大4cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土土器〉（第292図）

炉内より6点，ピット内より1点，床面より8点，床直より10数点の土器片を出土，他に覆土中より少量の土器片を出土した。これらの遺物は，平面的には住居北半分に多く分布している。

292図5・6は床面，2は床直の出土土器である。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木8 b式併行期）と考えられる。

第97B号竪穴住居跡と出土遺物（第289，292図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のE－8・9グリッドに位置する。Ⅳ層での確認である。97A・107号住居跡と重複，本住居跡はいずれも古い。

〈平面形・規模〉　4.50×3.34mの楕円形を呈する。主軸方向はN－51°－E，床面積は(10.96)㎡を計る。

〈堆積土〉　人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。西壁際から東壁際へ緩い傾斜があるが，ほぼ平坦で堅くしまりがある。南壁・北東壁及び重複部分の床面は，97A・107号住居構築時に消失している。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は北西壁25.7cm，南東壁29.3cm，南西壁34.3cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　Pit10・11・15・18を主柱穴とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は，97A号住居跡に付す）

〈炉〉　住居跡中央よりやや南東寄りに位置する。地床炉であり，40×34cmの範囲で，最大2.8cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第292図）

床面より5点，床直より10点弱の土器片を出土した。またこの他に覆土中より，少量の土器片と磨製石斧，磨石各1点を出土した。これらの遺物は，平面的には北東側を除く全域に分布している。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉～後葉（円筒上層e～大木8 b式併行期）と考えられる。

第98号竪穴住居跡と出土遺物（第290，291図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のC—8グリッドに位置する。88A・88B・100A号住居跡と重複，本住居跡は88B号住居跡より古く，88A・100A号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉　3.52×(3.26)mの円形を呈する。床面積は8.24㎡を計る。

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　東側の重複部分は88A号住居跡覆土を，他の部分はV層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。南西壁の一部は100A号住居跡覆土より，他の壁はⅣ・V層より成るが，東壁は88B号住居構築により消失している。壁は急な立ち上がりを呈し，壁高は東壁18.5cm，西壁8.0cm，南壁13.9cm，北壁14.3cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より6個のピットが検出された。

第98号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6
規　模	49×34	26×20	31×31	36×24	30×24	24×21
深　さ	16.5	34.9	13.9	11.5	58.3	28.8

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉であり，65×61cmの範囲で，最大3.9cmの厚さの焼土が確認された。また，中央よりやや東寄りに60×58cmの範囲で焼土が分布しており，地床炉の可能性がある。

〈出土遺物〉（第291図）

本住居出土遺物は少なく，10数点の土器片を出土したのみである。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。

第99号竪穴住居跡と出土遺物（第293，294図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のE—10・11グリッドに位置する。Ⅳ層上面にて80号住居跡と重複する円形と想定されるプランを確認，精査の結果，80号住居床面にて230×70cmの「コ」状に巡らされた周溝が確認された。当初，先に確認されたプラン（Aプラン）とこの「コ」状張り出しを持つ円形プラン（Bプラン）の2つの住居跡の重複と考えたが，軸方向が同一であること，1組の柱配列しか確認されないこと，Aプラン北壁下の周溝のみが人為的に埋めもどされ，堅く踏み固められた痕跡があることより，本住居はAプランからBプランの拡張の行なわれた住居跡と考えられる。また80号住居跡との重複関係については，本住居が古い。

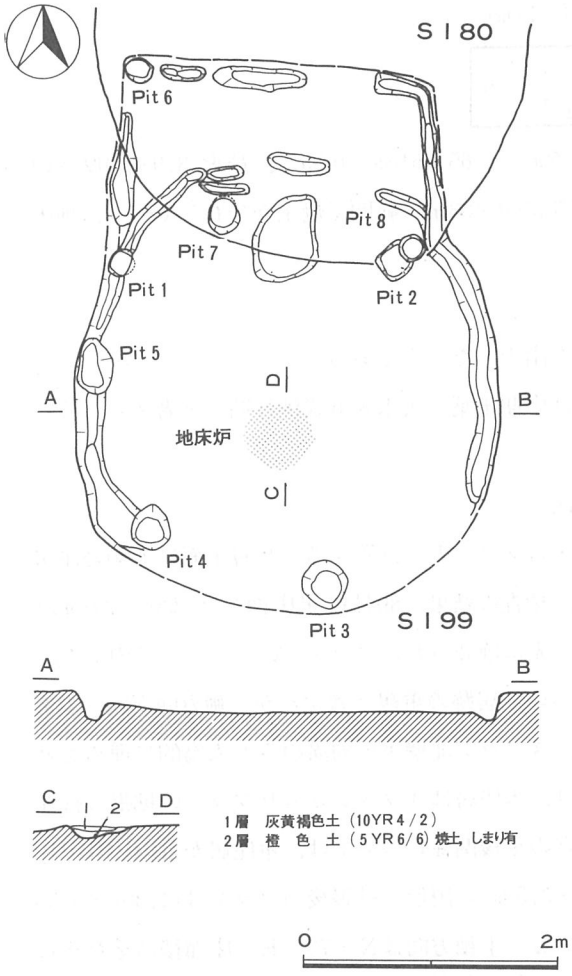
〈平面形・規模〉　拡張前のプランは(3.60)×3.30mの円形，拡張後のプランは(4.30)×3.30mの張り出し部をもつ円形（ほたて貝形）である。主軸方向はN—7°—E，床面積はそれぞれ，9.24㎡，12.74㎡を計る。

〈堆積土〉　単一層である。

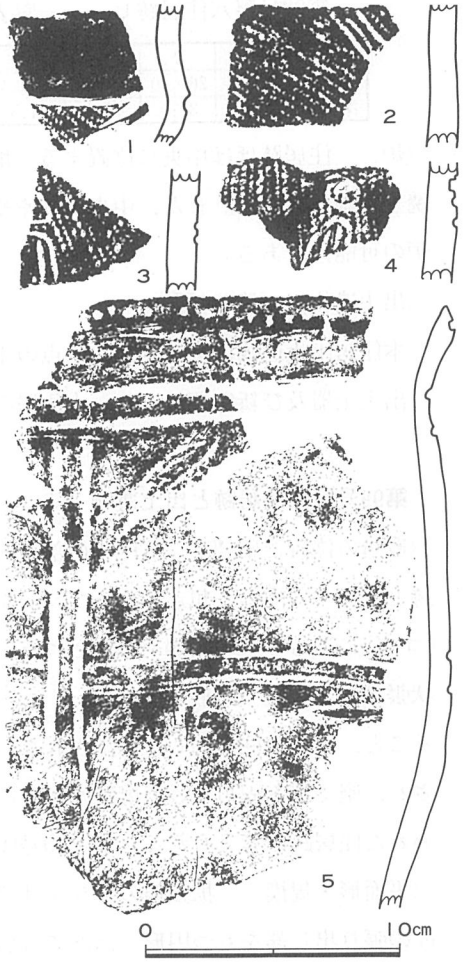
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。緩やかな凹凸を有し，堅くしまっている。張り出し部は北側に若干傾斜している。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，南壁は攪乱，北壁は80号住居構築により消失している。残存する壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は東壁14cm，西壁21cmを計る。

〈周溝〉　攪乱のため検出できなかった南壁下を除き，幅10～32cm，深さ約10～14cmの周溝がほぼ一巡する。また拡張時には北壁の周溝を埋め，張り出し部周縁に幅12～19cm，深さ８～19cmの周溝を付け加えている。

〈柱穴〉　本住居跡より８個のピットが検出された。Pit１・２・３・４を主柱穴とし，軸線に対称な２対（Pit１・２，Pit３・４）４個の柱配置と考えられる。なおPit７・８は80号住居跡の柱穴である。



第293図　第99号竪穴住居跡実測図



第294図　第99号住居跡出土土器拓影図

第99号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	25×15	30×25	37×35	35×29	45×27	22×19	27×24	24×23
深　さ	45	48	21	40	28	22.5	38	38

〈炉〉　住居中央よりやや南寄りに位置する。地床炉で，焼土範囲は55×55cm，最大焼土厚は2.6cmを計る。

〈その他〉　Pit 1・2間に75×55cm，深さ20cmの不整形の掘り込みを有する。この堆積土は人為堆積で堅くしまっていることから，増築時に埋め戻したと考えられる。

〈出土遺物〉（第294図）

付属施設内より，口縁部1/2個体の土器を出土，他に本住居より1/2箱の土器片を出土したが，その多くは覆土中位から出土したものである。

出土遺物及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木８ｂ式併行期）と考えられる。

第100Ａ号竪穴住居跡と出土遺物（第295～297,394,397,399,402,405,424図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ―７・８グリッドに位置する。Ⅳ層上面で東側半分のプランを確認した。西壁側は発掘区域外のため調査できなかった。98・100Ｂ・100Ｃ号住居跡と重複，本住居跡はいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉　長軸（16.15）ｍの楕円形を呈すると考えられる。

〈堆積土〉　単一層であり，人為堆積と考えられる。

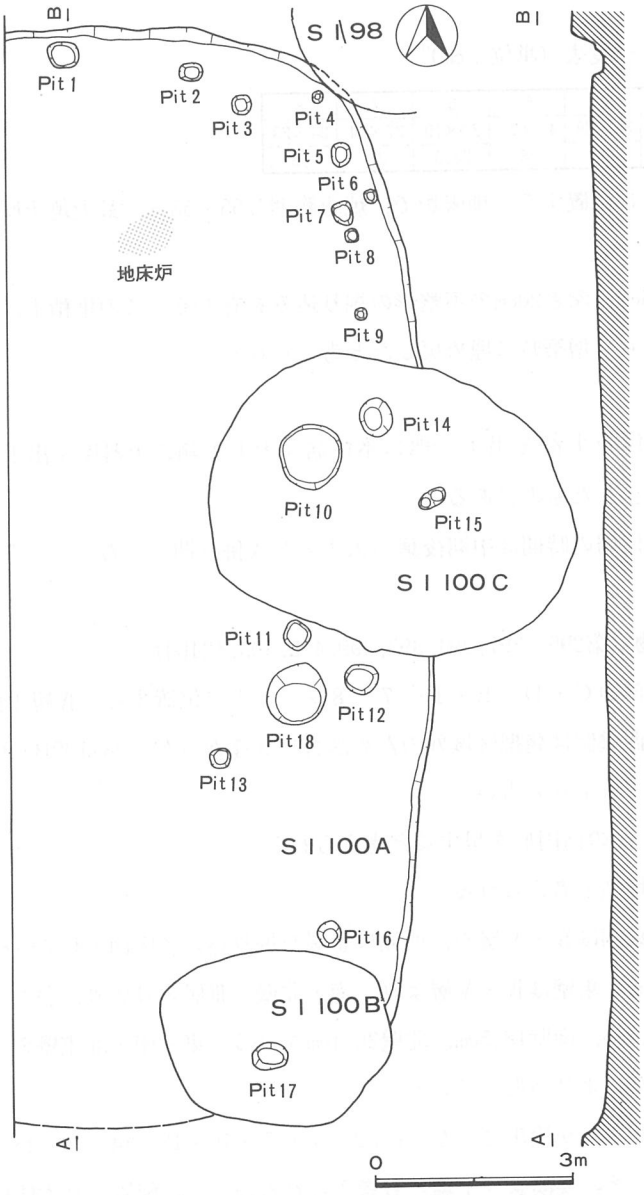
〈床面・壁〉　本住居跡長軸より東側はⅣ・Ⅴ層を，西側はⅢ層を掘り込んで床面としている。凹凸があり，やや堅くしまっている。東壁はⅣ・Ⅴ層より，南・北壁はⅢ層より成り，急な立ち上がりを呈する。壁高は東壁28.5cm，南壁18.5cm，北壁26.1cmを計る。東・南・北東壁の一部は，98・100Ｂ・100Ｃ号住居構築により消失している。

〈柱穴〉　東・北壁際より18個のピットが検出された。Pit 2・3・7・10・12・14・16～18が主柱穴と考えられる。Pit10・18は，その規模より土壙とも考えられるが，その配置より本住居跡の主柱穴とした。未発掘部に，これらと対になる柱穴の存在が推測される。

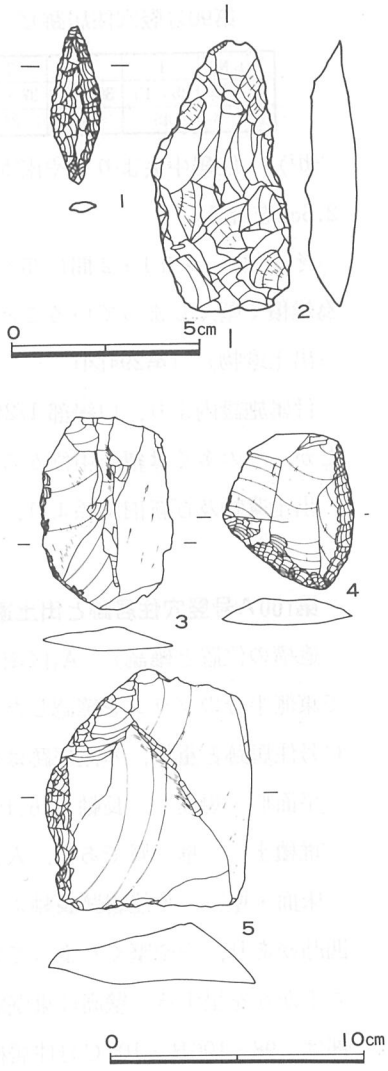
第100Ａ号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	50×39	37×26	31×31	13×13	37×29	21×20	37×31	21×20	19×18	97×92
深　さ	11.6	46.8	31.7	11.4	16.7	15.0	42.3	12.2	12.9	89.8
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18		
規　模	41×41	52×45	31×30	61×48	22×21	40×34	52×44	94×85		
深　さ	12.5	71.7	48.2	89.2	34.7	65.2	33.9	55.7		

〈炉〉　住居跡長軸線上の北壁際に位置する。地床炉であり，93×57cmの範囲で，最大2.5cmの厚さの焼土が確認された。



第295図　第100Ａ号竪穴住居跡実測図

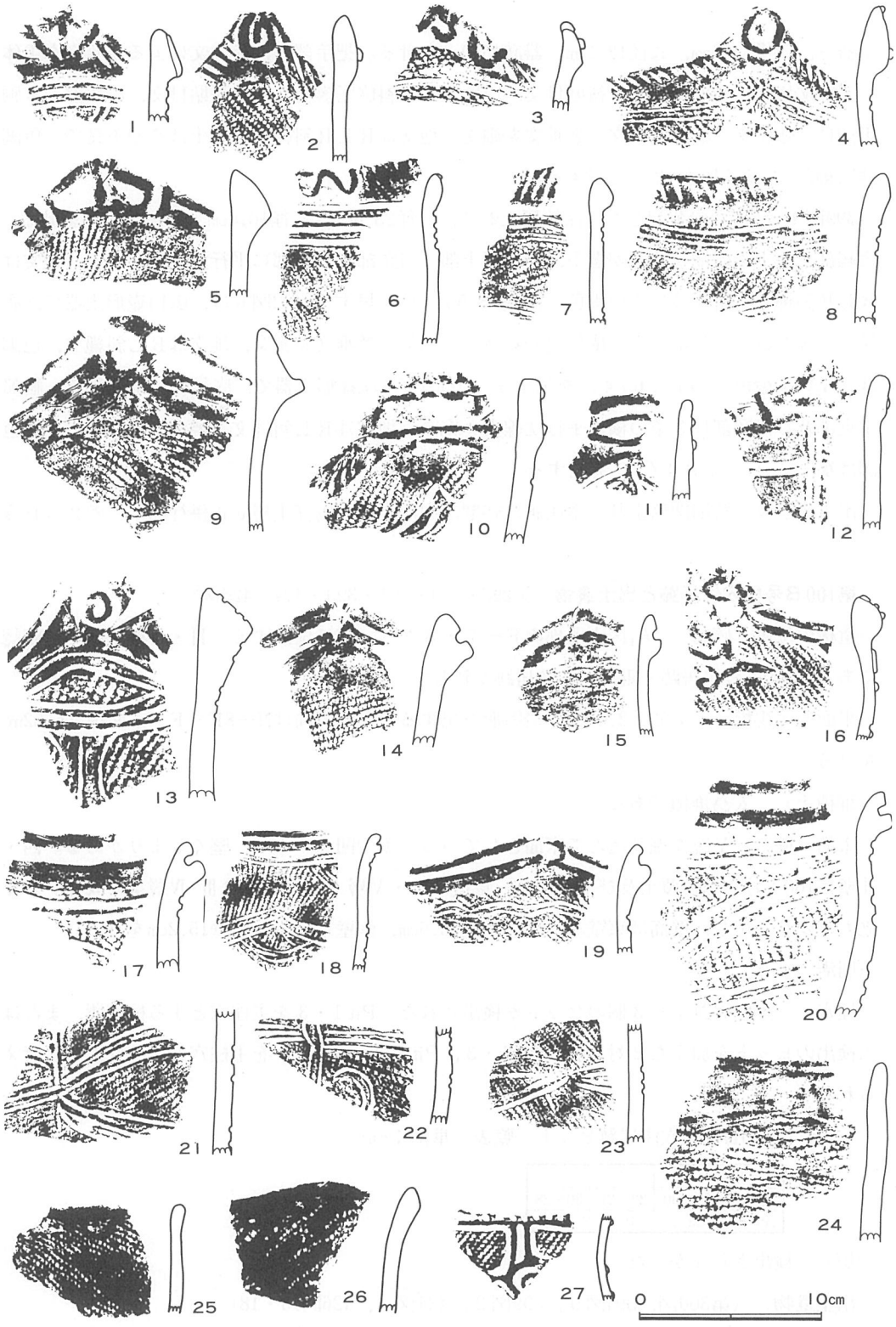


第296図　第100Ａ号住居跡
出土石器実測図

〈出土遺物〉（第296, 297図, 394図14, 397図２, 399図１, 402図６, 405図２, 424図３）

本住居からは８個の復元可能土器と1⅓箱の土器片，１点の石鏃・石篦・円盤状土製品（完形品），３点の掻器を出土した。これらの遺物は，平面的には住居北側を除き広く分布し，特に中央部に多く分布している。

394図14は，２つの頂部をもつ大波状口縁の広口壺で，底径5.1cm，器高17.3cmを計る。口縁部は無文，胴部上端に２条の横位連続刺突文，胴部には懸垂文を施文，地文はＲＬ斜縄文，色調は黒褐色(10ＹＲ２/２)を呈する。397図２は，１つの装飾把手と３つの突起部をもつ深鉢形



第297図　第100A号住居跡出土土器拓影図

土器で，口径34.6cm，底径12.1cm，器高43.9cmを計る。把手部には隆沈文による渦巻文を主体とする文様，突起部には粘土紐貼付文，口唇部には斜位圧痕文と粘土紐貼付文，口頸部から胴上部には弧状文，縦位渦巻文，懸垂文を施文，地文はＲＬＲ斜縄文，焼土はやや不良で，色調は灰褐色（7.5ＹＲ４/２）を呈する。

399図１は，４つの突起をもつ深鉢形土器で，口径23.8cm，底径10.0cm，器高29.0cmを計る。突起部より１条の波状沈線が懸下，口縁部上部，口頸部，胴上部に平行沈線文を施文，地文はＲＬＲ斜縄文，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ５/４）を呈する。402図６は，広口壺形土器で，底径 5.6cmを計る。胴部上端に横位連続刺突文，胴部に懸垂文を施文，地文はＲＬ斜縄文，色調はにぶい黄橙色（10ＹＲ６/４）を呈する。405図２は深鉢形土器で，底径 8.8cmを計る。胴部中央部及び口頸部に３条の横位平行沈線文を施文，地文はＲＬ斜縄文，焼成はやや不良で，色調は褐灰色（7.5ＹＲ４/１）を呈する。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層ｅ式併行期）と考えられる。

第100Ｂ号竪穴住居跡と出土遺物（第298・300・394・399・424・426図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＦ－７・８グリッドに位置する。Ⅲ・Ⅳ層上面での確認である。100Ａ号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　3.52×2.62m の楕円形を呈する。主軸方向はN－81°－E，床面積は6.52㎡を計る。

〈堆積土〉　人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまりがある。西・北壁は100Ａ号住居跡覆土及びⅤ層より，東壁はⅣ・Ⅴ層より，南壁はⅢ・Ⅳ層より成る。急な立ち上がりを呈し，壁高は東壁21.1cm，西壁13.6cm，南壁18.5cm，北壁15.2cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より３個のピットが検出された。Pit１・３を主柱穴とする柱配置，または，未検出のピットを加えた２対４個（Pit１・３，Pit２・(未検出)）を主柱穴とする柱配置と考えられる。

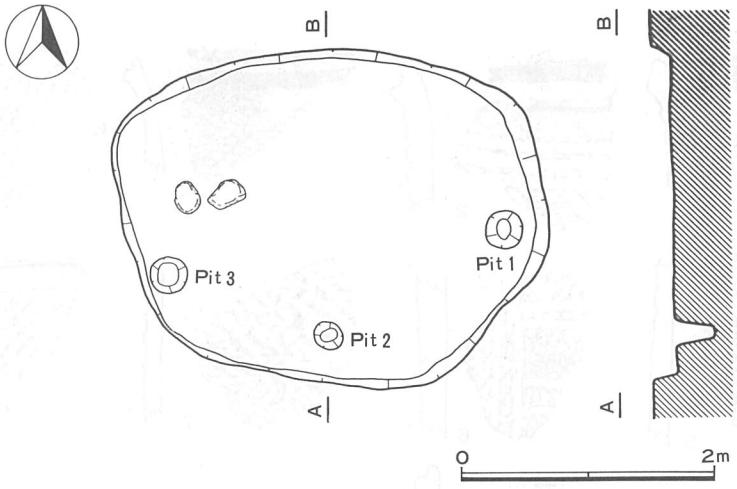
第100Ｂ号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	30×30	22×21	30×28
深　さ	23.1	31.3	37.4

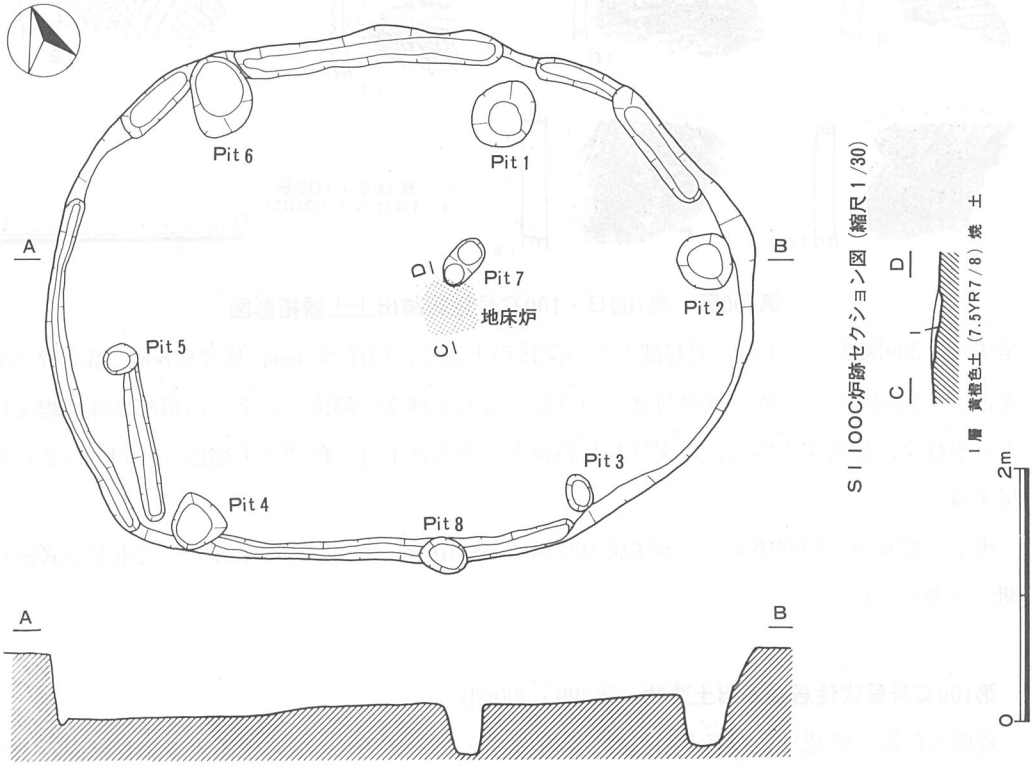
〈炉〉　検出されなかった。

〈出土遺物〉（第300図，394図９，399図２，424図４，426図13・18）

本住居より２個の復元可能土器と少量の土器片，１点の凹石・円盤状土製品（完形品），２



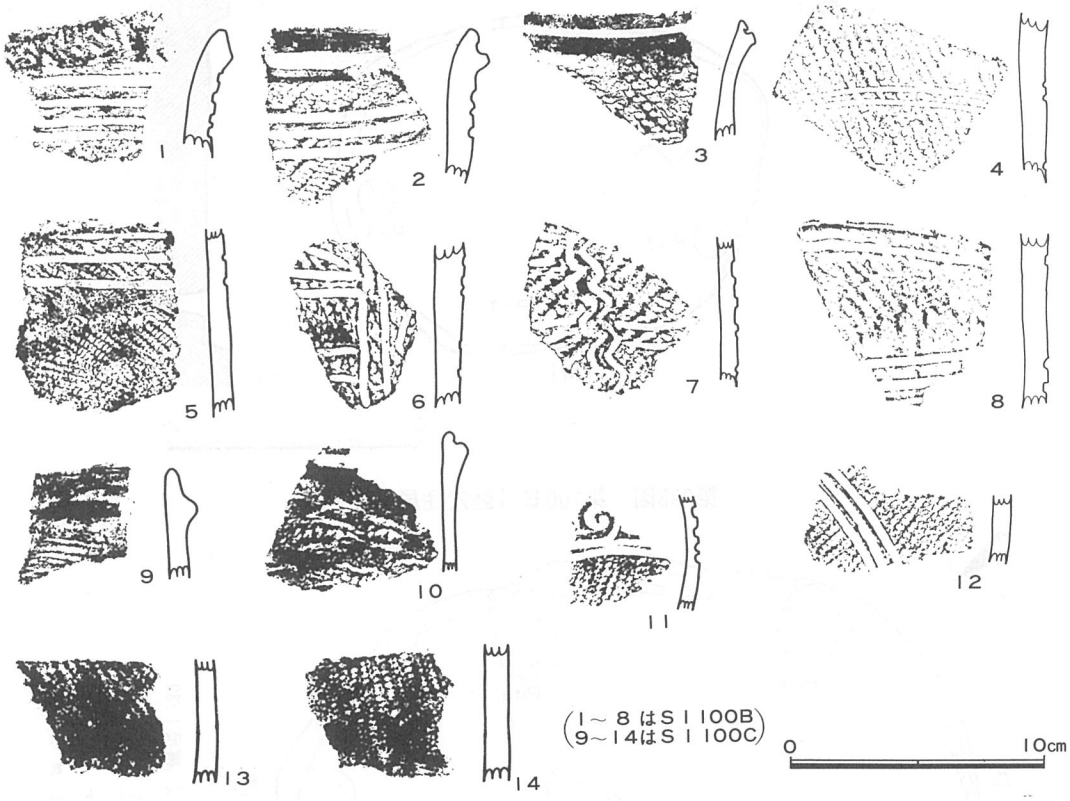
第298図　第100Ｂ号竪穴住居跡実測図



第299図　第100Ｃ号竪穴住居跡実測図

点の有孔石製品を出土した。これらの遺物は，平面的には住居中央部に多く分布している。

394図9は台付深鉢形土器で，口径15.4cmを計る。口縁部上端に凹線文を施し，これは，突起部で渦巻文となる。口頸部から胴部には渦巻文を主文様とする連結文，懸垂文を施文，地文は縦位のＲＬ斜縄文，色調は上半は黒褐色(7.5ＹＲ３/１)，下半がにぶい褐色(7.5ＹＲ６/３）を



第300図　第100B・100C号住居跡出土土器拓影図

呈する。399図2は，4つの突起部をもつ深鉢形土器で，口径27.1cm，底径9.8cm，器高37.5cmを計る。突起部には「W」状貼付文，口唇部にはLR縄文の斜位圧痕文，口頸部には沈線文による平行文，弧状文を施文，地文はLR斜縄文，焼成は不良，色調は黒褐色（10YR 2/2）を呈する。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉～後葉（円筒上層e～大木8b式併行期）と考えられる。

第100C号竪穴住居跡と出土遺物（第299・300図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のD・E—7・8・9グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。100A号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　5.62×4.20mの楕円形を呈する。主軸方向はN—79°—W，床面積は20.12㎡を計る。

〈堆積土〉　人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。西壁際から東壁際へ緩い傾斜があるが，ほ

ぼ平坦で堅くしまっている。西側半分の壁は100A号住居跡覆土，東側半分の壁は，Ⅳ・Ⅴ層より成る。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁35.4cm，西壁48.2cm，南壁35.0cm，北壁32.3cmを計る。

〈周溝〉　幅約18cmの周溝が，南東壁の一部を除き，不連続ながらほぼ一巡する。周溝の深さは，西・南壁下では約4cm，北壁下の最も深いところで30cmを計る。この他に，西壁下の周溝の内側に，幅20cm，深さ13.9cm，長さ127cmの，ほぼ直線的な溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡より8個のピットが検出された。このうちPit 1～6を主柱穴とし，主軸線上のPit 2・5と，軸線に対称な2対4個（Pit 1・3，Pit 4・6）の計6個を基本とする柱配置と考えられる。

第100C号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	53×50	43×42	29×21	41×40	28×22	63×47	24×24	38×28
深　さ	86.2	46.8	68.6	62.4	34.7	68.6	38.0	31.3

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや南東寄りに位置する。地床炉であり，43×43cmの範囲に，最大4cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第300図）

本住居からは，少量の土器片を出土したのみである。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。

第101号竪穴住居跡と出土遺物　（第301～304・395・399・401～403・408・421・424図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のB・C・D—12・13・14グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。東壁付近は，農道のため発掘できなかった。

85・113・114・118号住居跡，92号土壙と重複し，本住居跡はいずれよりも新しい。117号住居跡とは重複関係が判然としない。

〈平面形・規模〉　(9.60)×6.36mの楕円形を呈すると推測される。主軸方向はN—72°—W，推定床面積は47.76㎡を計る。

〈堆積土〉　9層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床面は92号土壙覆土及びⅤ層を，テラス面はⅤ層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは南壁際に位置し，約50cmの幅で，床から10～20cmの高さにある。壁高は北壁45cm，南壁確認面からテラス面まで32cmを計る。床面は，住居中央部が若干高いレンズ状で，しまりは弱いが，テラス面はやや堅い。西壁は85号住居跡覆土及びⅤ層，北壁は114・117・118号住居跡覆土及びⅤ層，南壁はⅣ・Ⅴ層より成る。東壁は未発掘のため不明であるが，他の壁はやや急な立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　炉掘り込み部の南側縁からテラスに沿って，幅15cm，深さ10cm，長さ80cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡に関連するピットとして10個が検出された。Pit 1 ～ 7・10を主柱穴とし，主軸線上のPit10と，軸線に対称な4対8個（Pit 1・(未検出)，2・7，3・6，4・5）の計9個を基本とする柱配置と考えられる。

第101号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	23×21	43×35	40×39	40×39	34×30	55×45	37×27	38×35	37×36	34×32
深　さ	10	26	32	32	25	35	32	30	44	29

〈炉〉　住居跡主軸線上東壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る（3.38）×2.27mの規模の石囲複式炉である。石囲部は，9～40cm大の自然石を130×110cmの方形に配したもので，一部が2重になっている。炉内底面には2～6cmの厚さの焼土が確認された。掘り込み部は，250×227cmの規模で，両側縁は石囲部に連続して10～30cm大の自然石が配置され，全体として「∩」形の炉石の配置となる。

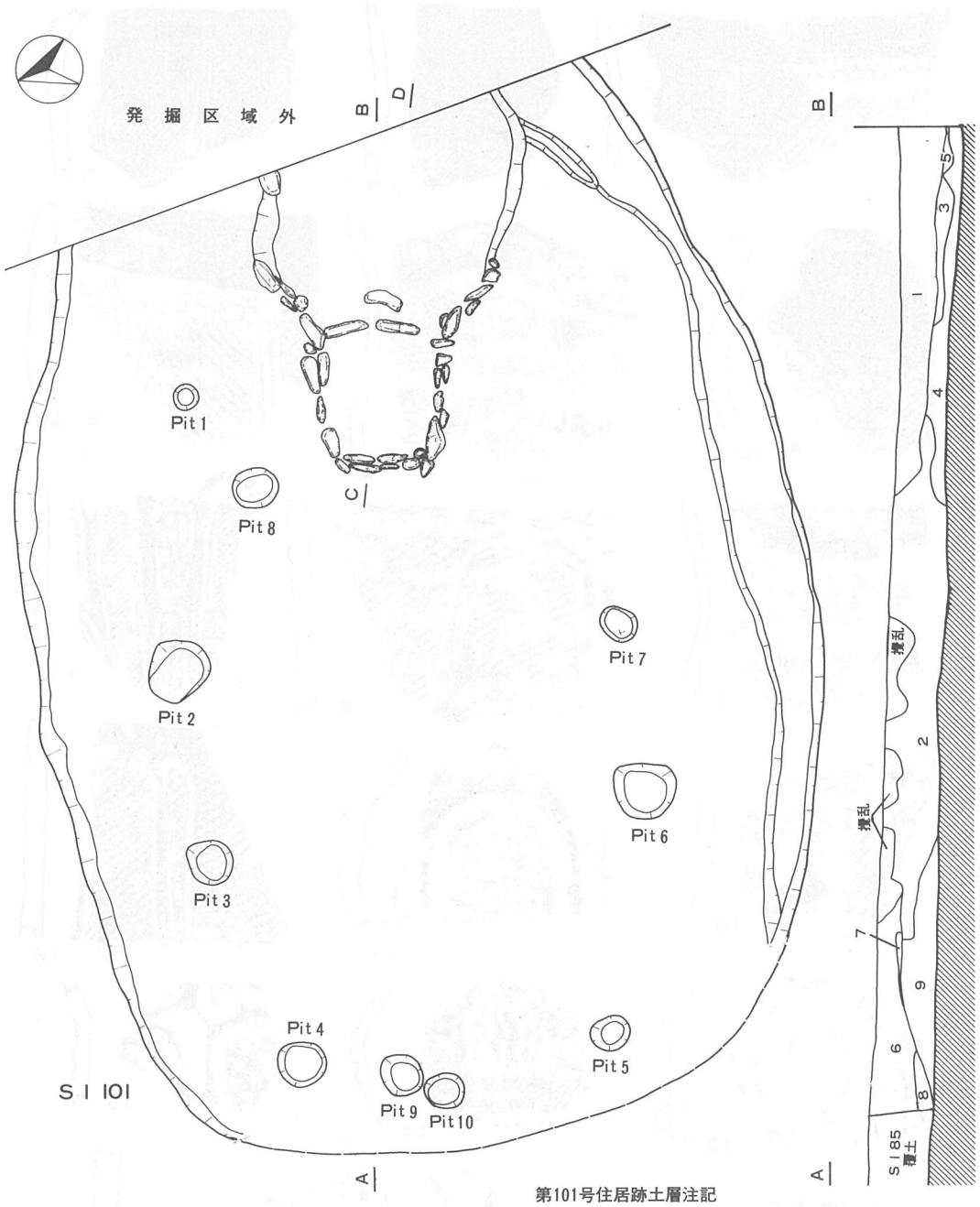
〈出土遺物〉　（第302～304図，395図4，399図9，401図37，402図14，403図1，408図10，421図6，424図4）

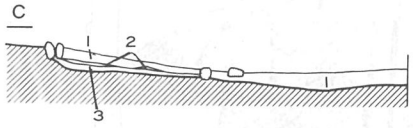
炉内より1個の完形土器，床面より数十点の土器片，床直より100点弱の土器片と1点の石皿を出土，他に覆土中より6個の復元可能土器，2箱の土器片，1点の円盤状土製品・スタンプ状土製品，2点の石錐，9点の掻器を出土した。

395図4は小型深鉢形土器で，口径10.1cm，底径5.2cm，器高10.5cmを計る。口縁部中位より胴部下半にかけ，「∩」文を施文，地文はＬＲ斜縄文，色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。399図9は広口壺形土器で，口径17.3cm，底径7.2cm，器高27.9cmを計る。口縁部は無文，胴部上端に2条の横位連続刺突文，胴部には懸垂文を施文，地文はＬＲ斜縄文，色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。401図37は小型深鉢形土器で，口径8.2cm，底径3.3cm，器高9.8cmを計る。口縁部には波状文，胴部に「Ｃ」文を施し，区画文内にＲＬ斜縄文を充塡，色調は黒褐色（7.5ＹＲ３/２）を呈する。

402図14は広口壺形土器で，底径5.8cmを計る。口縁部は無文，胴部にはＲＬ斜縄文を施文，色調はにぶい褐色(7.5ＹＲ5/3)を呈す。403図1は，炉内より完形で出土した浅鉢形土器で，口径11.8cm，底径5.2cm，器高8.7cmを計る。器面にはＬＲ斜縄文を施文，色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。408図10は深鉢形土器で，口径21.7cm，底径7.0cm，器高46.4cmを計る。器面全体にＬＲ斜縄文を施文，焼成はやや良好，色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。





1層　褐色土（10YR4/4）しまり・粘性なし，粒子細
2層　炭化物層
3層　橙色土（7.5YR6/6）焼土，しまりやや有，粒子粗

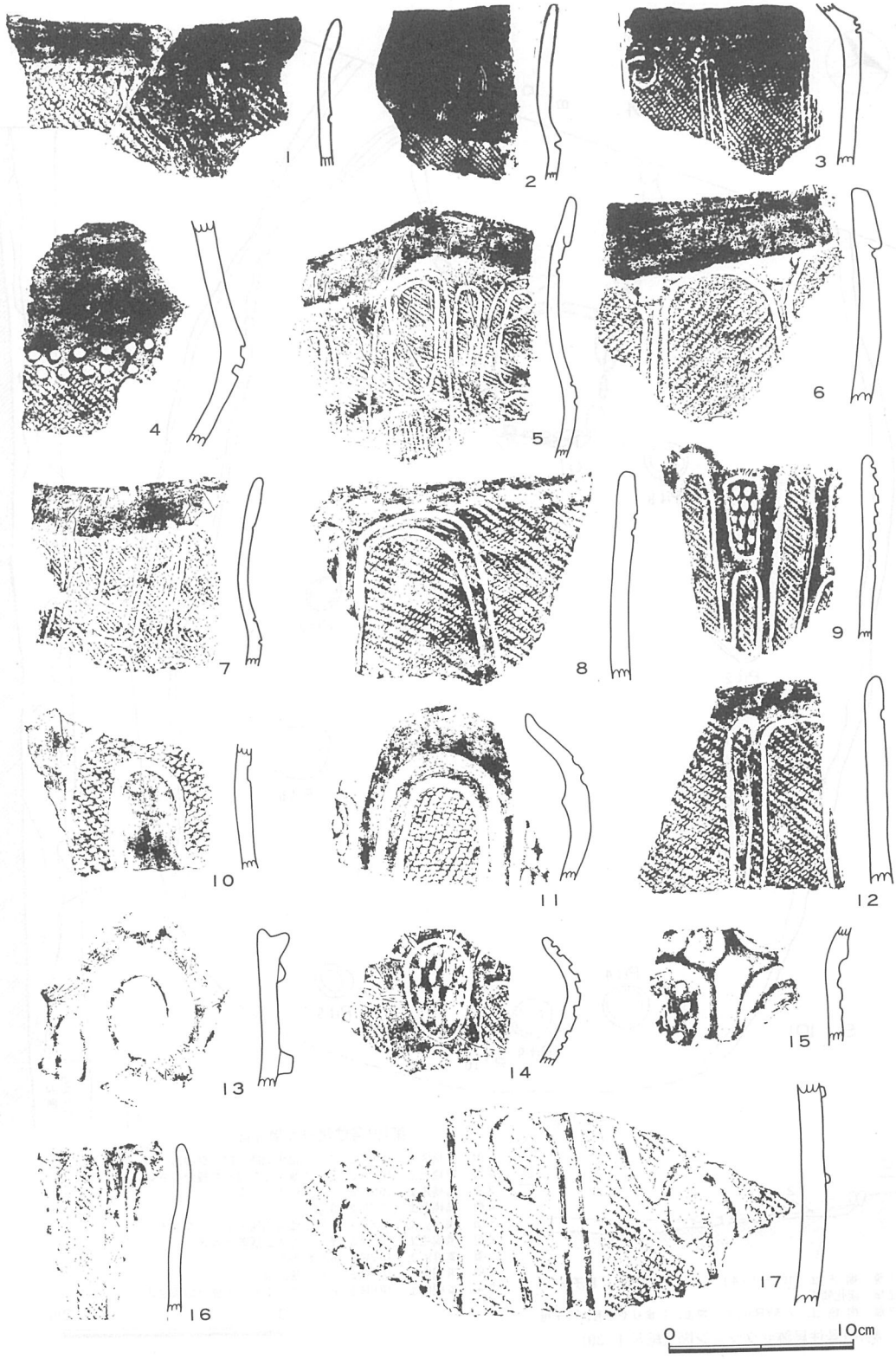
第101号住居跡セクション図（縮尺1/30）

第101号住居跡土層注記

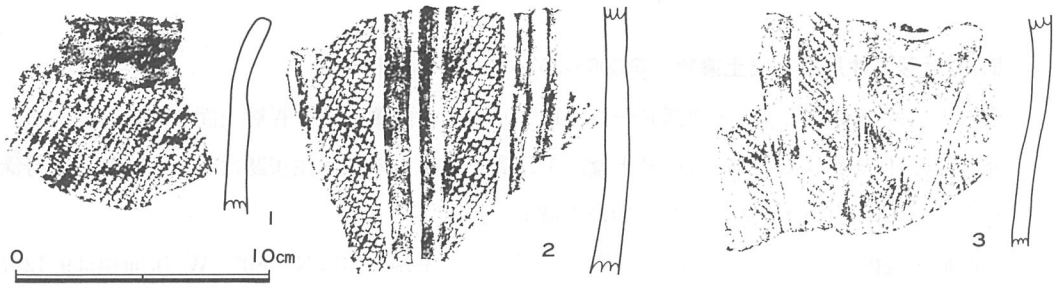
1層　暗褐色土（10YR3/3）下位火山灰ブロック混入
2層　暗褐色土（10YR3/3）1層よりブロック径が小さい
3層　暗褐色土（10YR3/4）下位火山灰混入
4層　黒褐色土（10YR2/3）
5層　褐色土（10YR4/4）下位火山灰・ブロック混入
6層　黒褐色土（10YR3/2）下位火山灰若干混入
7層　黄橙色土（10YR8/6）粘性有
8層　黒褐色土（10YR3/2）7層土混入
9層　黄褐色土（10YR5/8）しまりなし、下位火山灰混入

0　2m

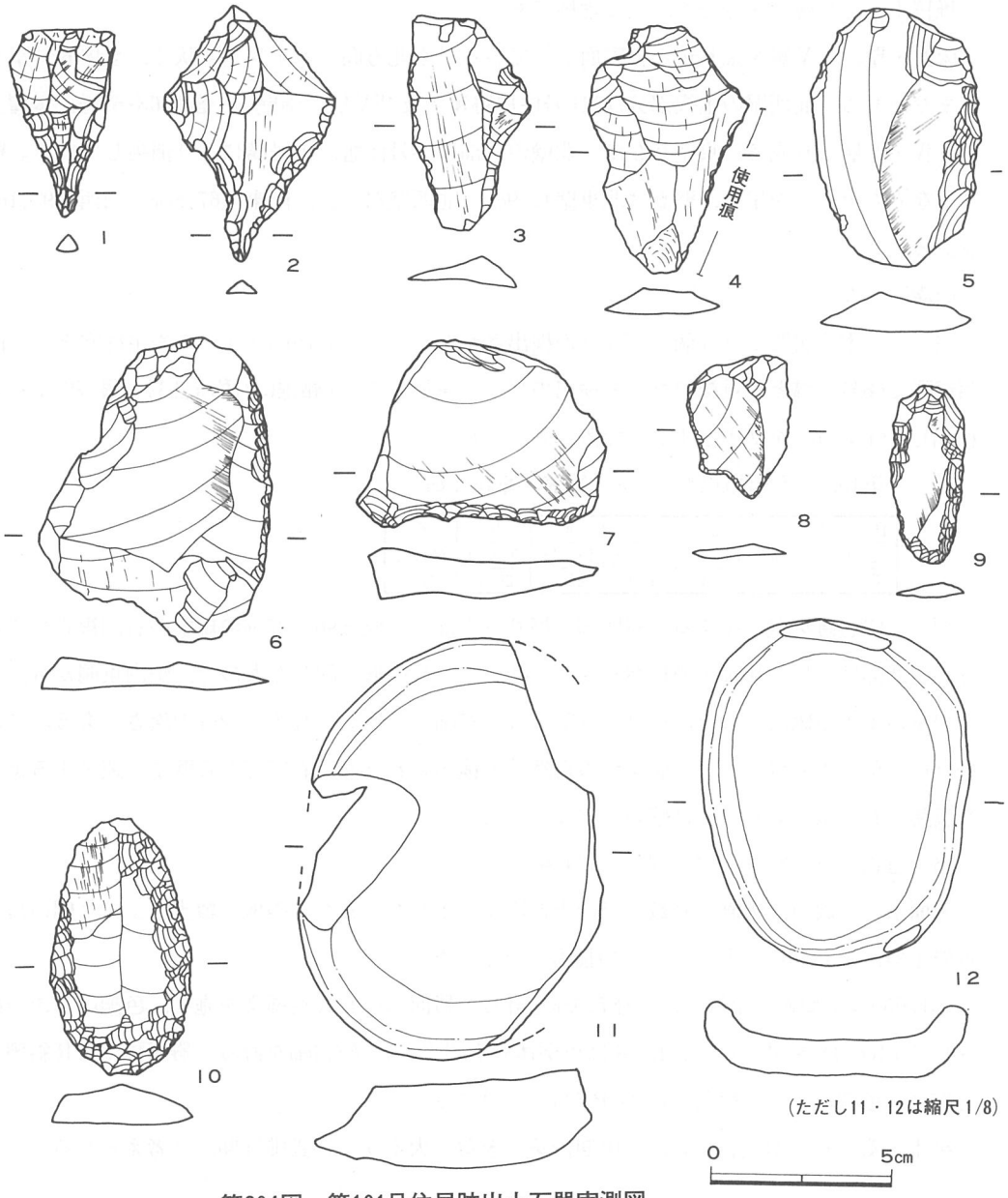
第301図　第101号竪穴住居跡実測図



第302図　第101号住居跡出土土器拓影図(1)



第303図　第101号住居跡出土土器拓影図(2)



第304図　第101号住居跡出土石器実測図

第102号竪穴住居跡と出土遺物（第305・307・401・404図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南部F—17・18グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。58・116号住居跡，67・68・110号土壙，1号溝と重複する。本住居跡は58号住居跡・1号溝より古く，116号住居跡，67・68・110号土壙より新しい。

〈平面形・規模〉　4.17×3.66mの楕円形を呈する。主軸方向はN—80°—W，床面積は9.12㎡を計る。

〈堆積土〉　9層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。南北方向に若干レンズ状で，全体的に堅くしまりがある。北西壁の重複部分は116号住居跡覆土及びⅤ層，南壁の一部は68・69号土壙覆土，他はⅣ・Ⅴ層より成る。東壁及び南・北壁の一部は58号住居，1号溝により消失している。壁は急な立ち上がりを呈し，壁高は北東壁47.9cm，北西壁74.4cm，南東壁67.8cm，南西壁97.1cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より6個のピットが検出された。このうちPit 1・4・6を主柱穴とし，南西壁際で68号土壙との重複のため未検出のピットを加えて，主軸線に対称な2対4個（Pit 1・(未検出)，Pit 4・6）を基本とする柱配置と考えられる。

第102号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6
規　模	48×40	24×20	23×22	19×18	20×19	24×21
深　さ	52.3	24.6	33.0	22.6	25.7	34.1

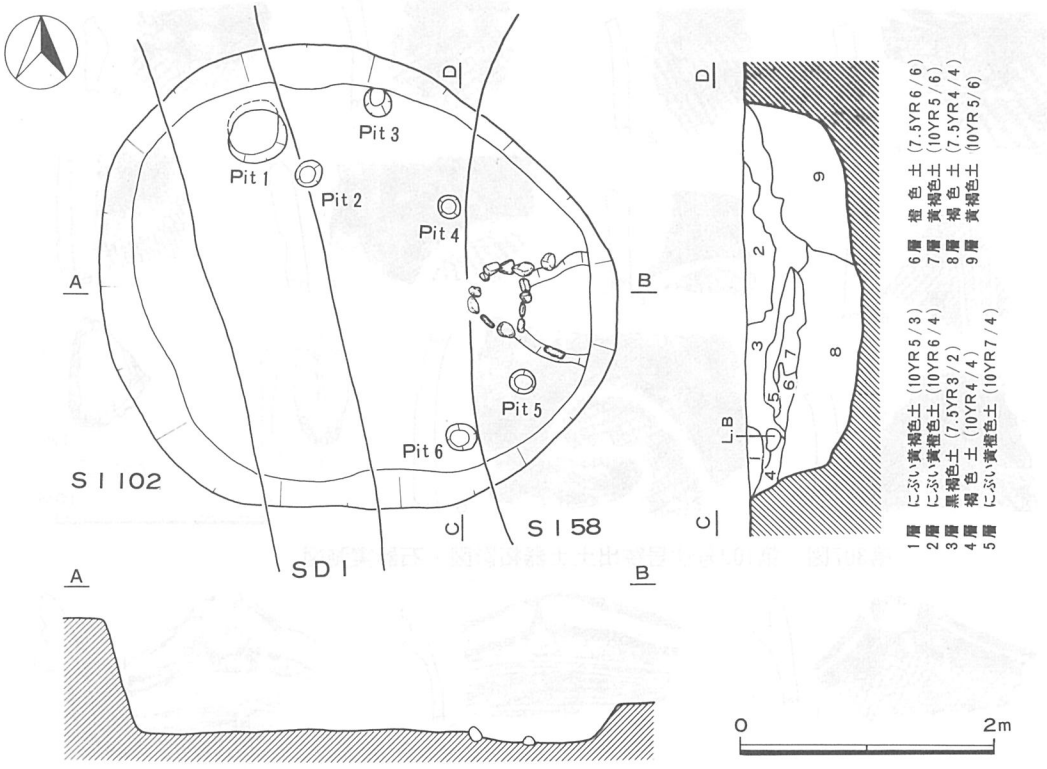
〈炉〉　住居跡東壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る96×87cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は，10～16cm大の自然石を60×49cmの半楕円形に配したもので，炉内東側から，ごく少量の焼土が確認された。掘り込み部は47×87cmの台形で，最大8.2cmの深さである。この掘り込み部の両側縁より，1個ずつの自然石が検出されたが，石囲部から壁まで連続するような痕跡（石の抜き取り痕）は確認できなかった。

〈出土遺物〉（第307図，401図39，404図8）

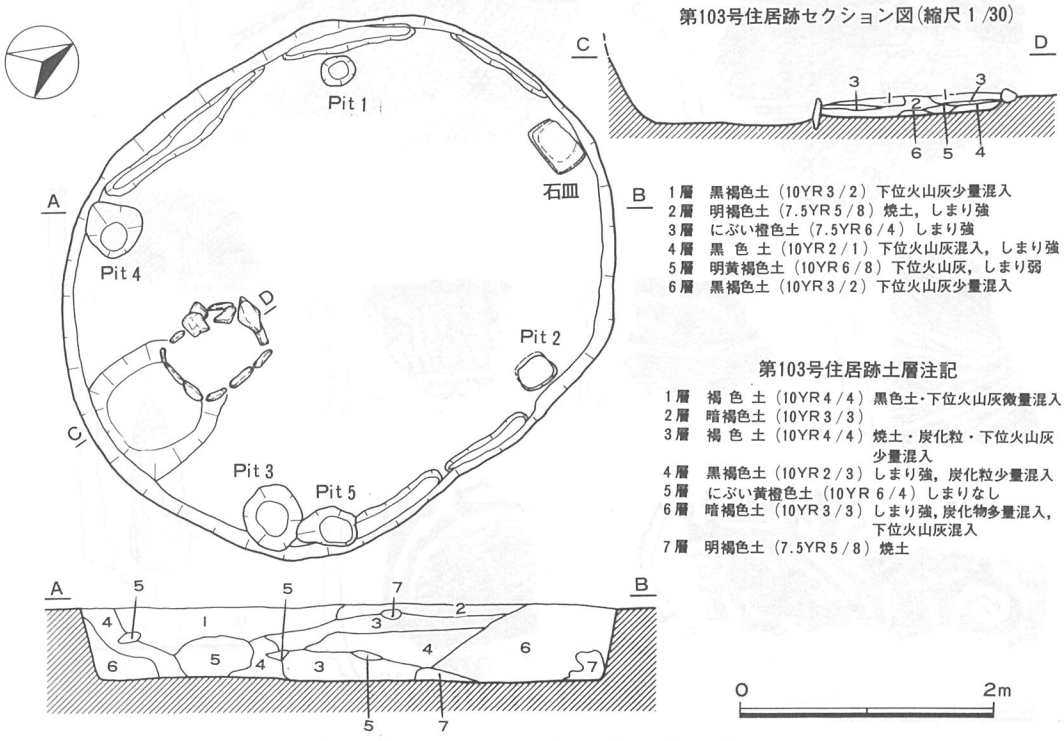
床面より10数点，床直より数10点の土器片を出土した。またこの他に覆土中より2個の復元可能土器，1/4箱の土器片，2点の掻器を出土した。

401図39は小型壺形土器で，底径7.0cmを計る。器面にはLR斜縄文を施文，色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。404図8は小型鉢形土器で，底径3.4cmを計る。器面にはLR斜縄文を施文，色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。

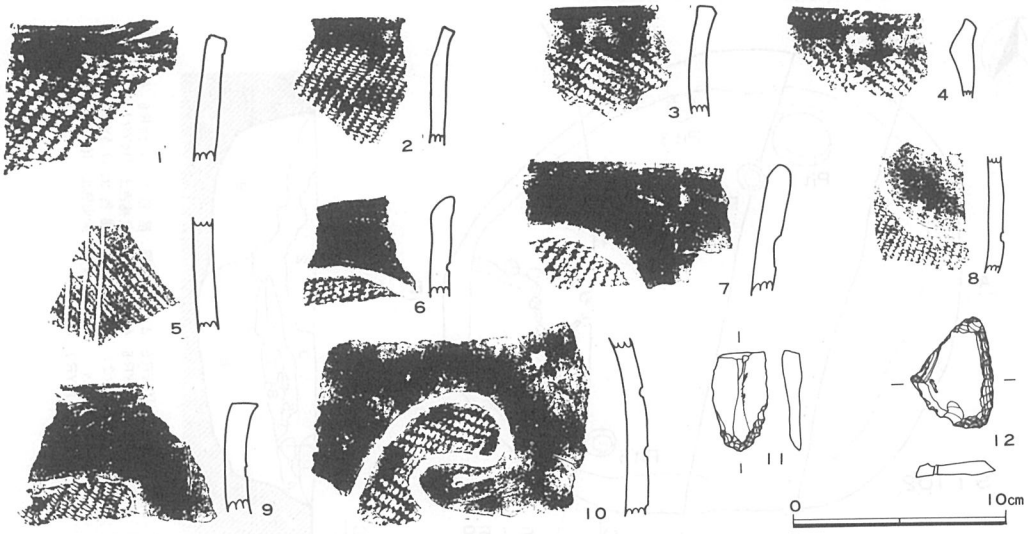
出土土器より，本住居の時期は中期後葉～末葉（大木9～10式併行期）と考えられる。



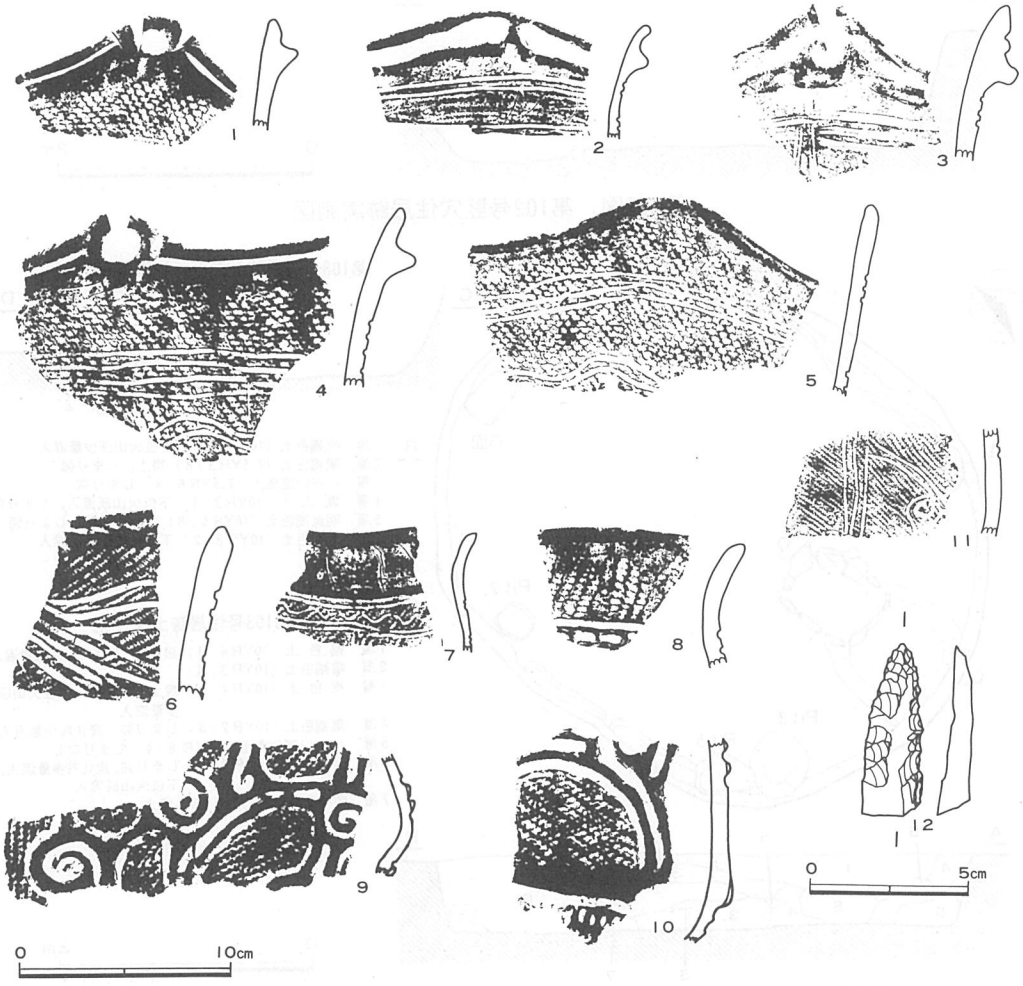
第305図　第102号竪穴住居跡実測図



第306図　第103号竪穴住居跡実測図



第307図　第102号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第308図　第103号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

第103号竪穴住居跡と出土遺物（第306・308・398図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のD・E— 9・10グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。105A・105B・107号住居跡と重複，本住居跡が最も新しい。

〈平面形・規模〉　4.55×3.78mの楕円形を呈する。主軸方向はN—8°—W，床面積は12.68㎡を計る。

〈堆積土〉　7層に区分でき，人為堆積である。6層に炭化物を多量混入し，床直上の7層が焼土であること等より，焼失家屋と判断される。

〈床面・壁〉　南側の重複部分は105B号住居跡覆土を，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，堅くしまっている。南壁は105A・105B・107号住居跡覆土，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁58.3cm，西壁60.6cm，南壁52.4cm，北壁57.3cmを計る。

〈周溝〉　南壁・北東壁を除き，約20cm，深さ10～12cmの周溝が，不連続に壁下を巡る。

〈柱穴〉　本住居跡より5個のピットが検出された。このうちPit 1・2・3または5・4を主柱穴とし，主軸線に対称な2対（Pit 1・2，Pit 3または5・4）の4個を基本とする柱配置と考えられる。

第103号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5
規　模	28×24	29×22	52×46	48×46	25×21
深　さ	25.7	58.5	27.8	66.4	21.9

〈炉〉　住居跡南壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る 164×96cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は，13～32cm大の自然石を84×68cmの楕円形に配したもので，炉内の焼土の厚さは最大で4cmを計る。掘り込み部は50×56cmの横長の隅丸方形で，最大の深さは約20cmを計る。

〈出土遺物〉（第308図，398図5）

床面より1個の復元可能土器と数点の土器片を出土，他に覆土中より1/3箱の土器片と石槍，石皿各1点を出土した。

398図5は，住居中央部床面より出土した広口壺形土器で，口縁部は無文，胴部上端には横位平行沈線文とその間に連続刺突文，胴部にはLR斜縄文を施文，色調は黒褐色（10YR3/1）を呈する。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第104号竪穴住居跡と出土遺物（第309・311・401・403・408図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北部のZF・ZE—16・17グリッドに位置する。Ⅴ層での確認である。本住居跡の南東側に8号配石遺構が近接する。

〈平面形・規模〉　4.14×3.74m の楕円形を呈する。主軸方向はN—56°—W，床面積は10.60㎡を計る。

〈堆積土〉　5層に区分でき，人為堆積である。

〈床面・壁〉　V層を掘り込んで床面としている。ほとんど平坦で，しまりがなくやわらかい。壁はV層より成り，緩やかな立ち上がりを呈し，壁面もしまりがなくやわらかい。壁高は北東壁18.4cm，北西壁22.3cm，南東壁20.2cm，南西壁27.7cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より8個のピットが検出された。Pit 2・4・5・7または8を主柱穴とし，主軸線に対称な2対（Pit 2・4，Pit 5・7または8）の4個を基本とする柱配置と考えられる。

第104号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	23×18	21×20	16×16	22×21	48×39	20×17	22×22	20×19
深　さ	9.9	18.5	14.8	28.7	30.7	16.7	31.4	23.7

〈炉〉　住居跡南東壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る 175×85cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は，7～21cm大の自然石を100×85cmの「∪」状に配したもので，南西側は3重に配されている。炉内南側に，小範囲で厚さ5cmの焼土が確認された。掘り込み部は，75×64cmの規模，10cm程度の深さである。

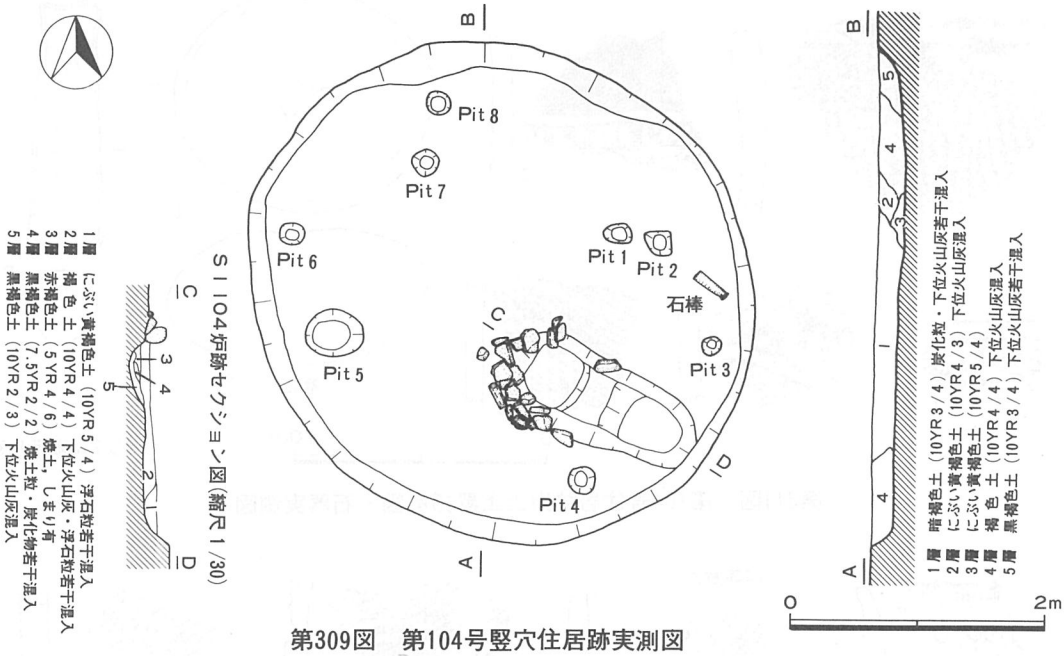
〈出土遺物〉（第311図，401図20，403図7，408図4）

床面より2個の復元可能土器と数点の土器片，東壁際床面より1点の石棒を出土，床直より1個の復元可能土器と少量の土器片，北壁際床直より1点の凹石を出土した。また覆土中より若干の土器片を出土した。

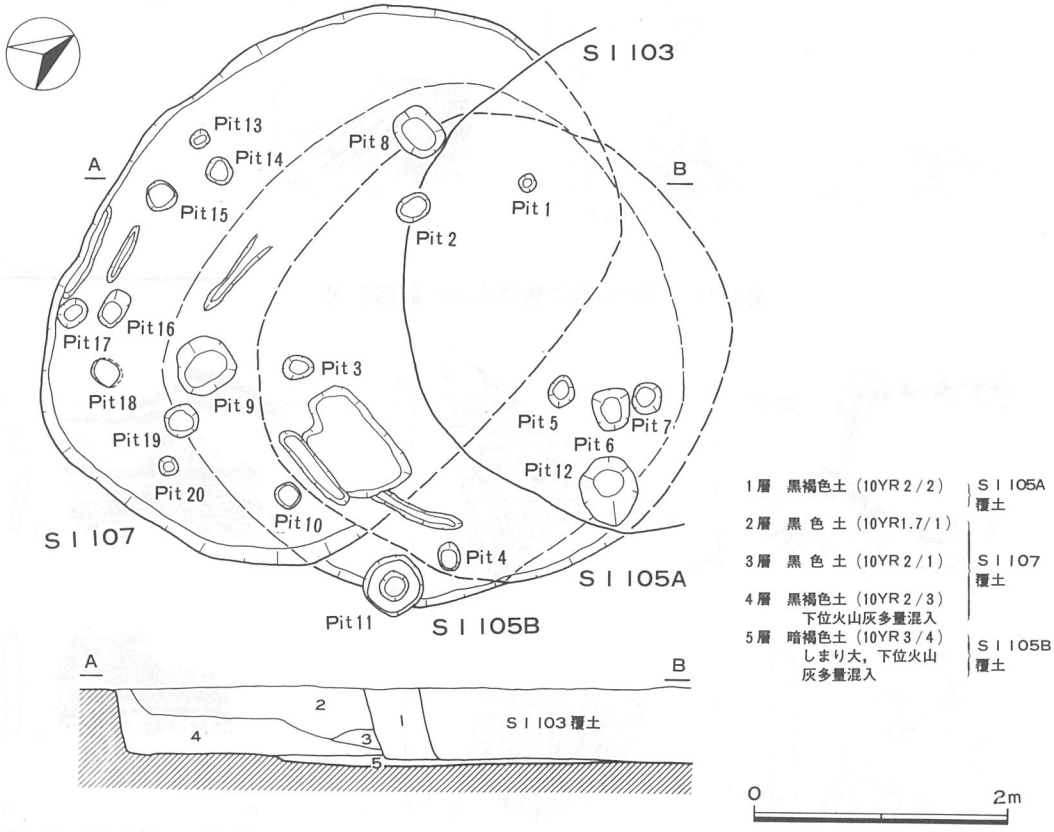
401図20は，北壁寄り床面から出土した小型深鉢形土器で，底径2.5cmを計る。器面にはL斜縄文を施文，色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。403図7は，北寄り床直から横転しつぶれたような状態で出土した鉢形土器で，口径11.9cm，底径 5.4cm，器高13.2cmを計る。口縁部下半より胴部下半にかけLR斜縄文を施文，色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。408図4は，中央部床面より横転しつぶれたような状態で出土した深鉢形土器で，口径20.2cmを計る。口頸部から胴部下半にかけLR斜縄文を施文，色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。

311図4は，床面の出土土器である。

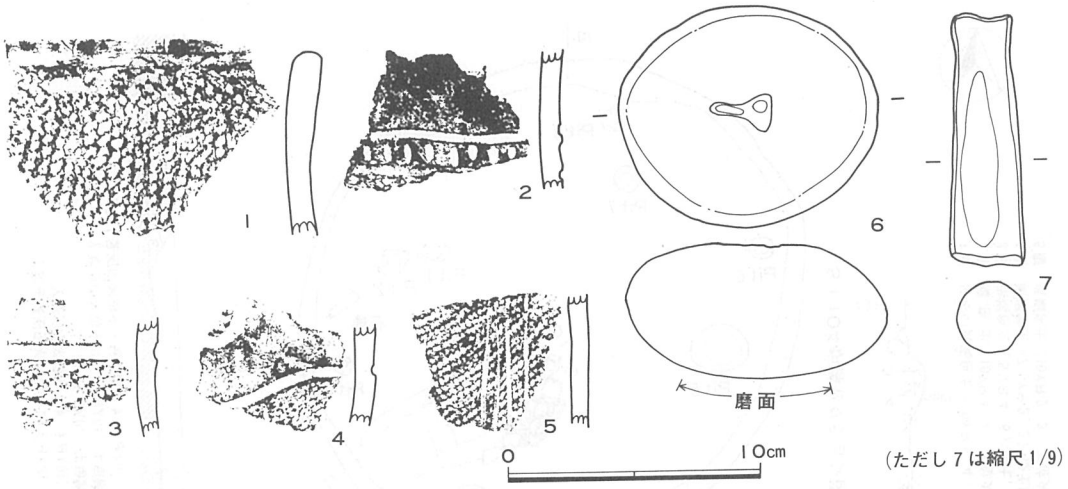
床面の出土土器より，本住居の時期は中期末葉（大木10式併行期）と考えられる。



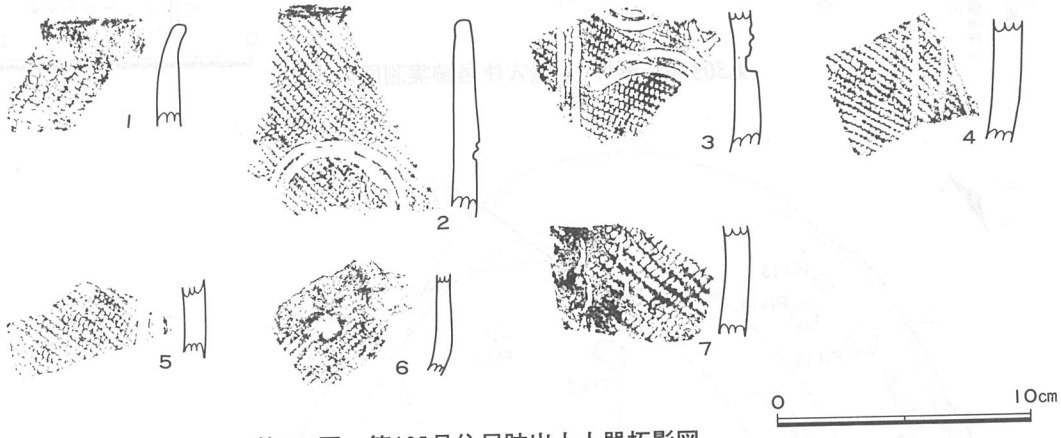
第309図　第104号竪穴住居跡実測図



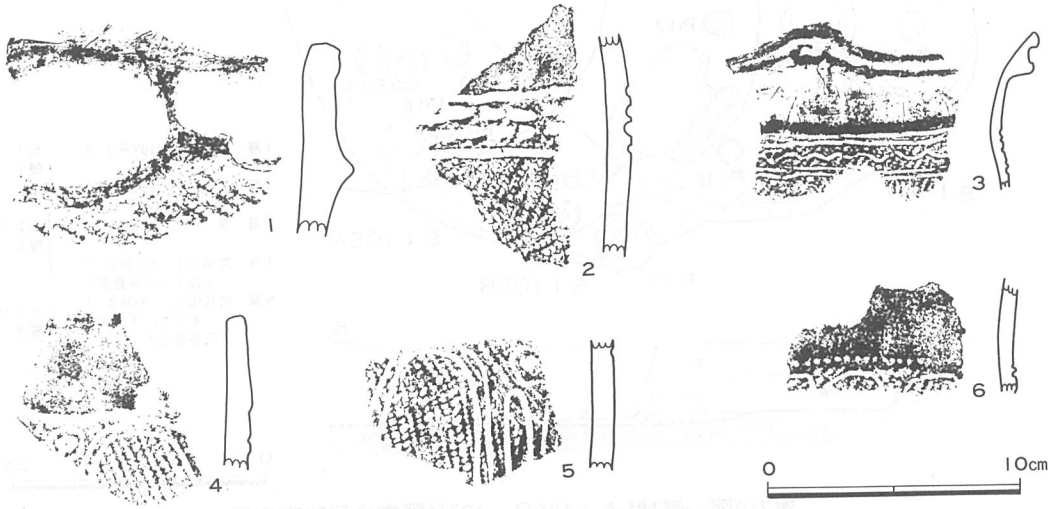
第310図　第105A・105B・107号竪穴住居跡実測図



第311図　第104号住居跡出土土器拓影図・石器実測図



第312図　第105号住居跡出土土器拓影図



第313図　第107号住居跡出土土器拓影図

第105A号竪穴住居跡と出土遺物（第310・312図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のD・E－9・10グリッドに位置する。不整円形プランの1軒の住居跡として精査を進めるうち，重複した2軒の住居跡と判明したので，これらを，105A・105B号住居跡とした。以下，北東側に位置する105A号住居跡について記述する。本住居跡は103・105B・107号住居跡と重複しており，103号住居跡から107号住居跡に及ぶ土層断面図の検討の結果，103号住居跡より古く，105B・107号住居跡より新しいと考えられる。

〈平面形・規模〉　前述のように，土層観察用ベルト部を除いて，壁を見逃がしたため，プランは明らかでない。柱列・周溝等より，(3.42)×(3.60)mの円形と推測される。推定床面積は，9.36㎡を計る。

〈堆積土〉　その大部分が103号住居跡と重複しているため，本住居跡の覆土は西壁際の黒褐色土一層しか残存しない。

〈床面・壁〉　東・北壁際はⅤ層を，他は105B号住居跡覆土を床面とする。やや凹凸があり堅くしまりがある。東壁はⅣ・Ⅴ層を，西・南壁は105B・107号住居跡覆土を壁とする。北壁から東壁北側は103号住居跡構築時に消失している。東壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，43.8cmを計る。

〈周溝〉　南東壁際より長さ74cm，幅12cm，深さ7.7cmの，南壁際より長さ78cm，幅16cm，深さ8.5cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　105A・105B・107号住居跡より計20個のピットが検出された。このうちPit 2・3・4・5が主柱穴で，主軸線に対称な2対（Pit 2・5，Pit 3・4）4個を基本とする柱配置と考えられる。

第105A・105B・107号住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	14×14	29×21	25×19	24×18	26×22	34×29	25×24	41×36	46×44	20×19
深　さ	15.1	29.4	23.7	25.2	32.8	7.2	34.1	10.2	50.8	50.8
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規　模	47×47	55×44	16×13	22×21	25×24	31×19	21×15	23×20	28×25	16×15
深　さ	28.3	27.8	22.0	23.3	53.0	48.6	22.0	44.0	14.4	46.7

〈炉〉　炉跡は検出できなかった。南壁寄りに96×54cm，深さ38cmの横長の不整台形の掘り込みが確認されたが，炉跡との関連はつかめなかった。

〈出土遺物〉（第312図）

床直より数点の土器片，覆土中より少量の土器片を出土した。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第105Ｂ号竪穴住居跡と出土遺物（第310図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＤ・Ｅ－９・10グリッドに位置する。103・105Ａ・107号住居跡と重複，本住居跡が最も古い。

〈平面形・規模〉　残存壁，柱配列，周溝等より（3.90）×（3.66）ｍの円形と考えられる。推定面積は（10.52）㎡である。

〈堆積土〉　重複により，そのほとんどの覆土を消失している。最下層の５層は下位火山灰を多量に混入した暗褐色土で，その上面を103・105Ｂ・107号住居の床面として使用しているためか，しまりが非常に大きい。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。若干凹凸があり，堅くしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，重複により南東壁の一部を残し，ほとんど残存しない。南東壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は43cmを計る。

〈周溝〉　西壁際に，幅11cm，深さ5.7cmの周溝が72cmの長さで検出された。

〈柱穴〉　Pit７・８・９・11を主柱穴とし，４本を基本とする柱配置と考えられる。

〈炉〉　炉は検出できなかった。

〈出土遺物〉

本住居の出土遺物は少なく，10数点の土器片を出土したのみである。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

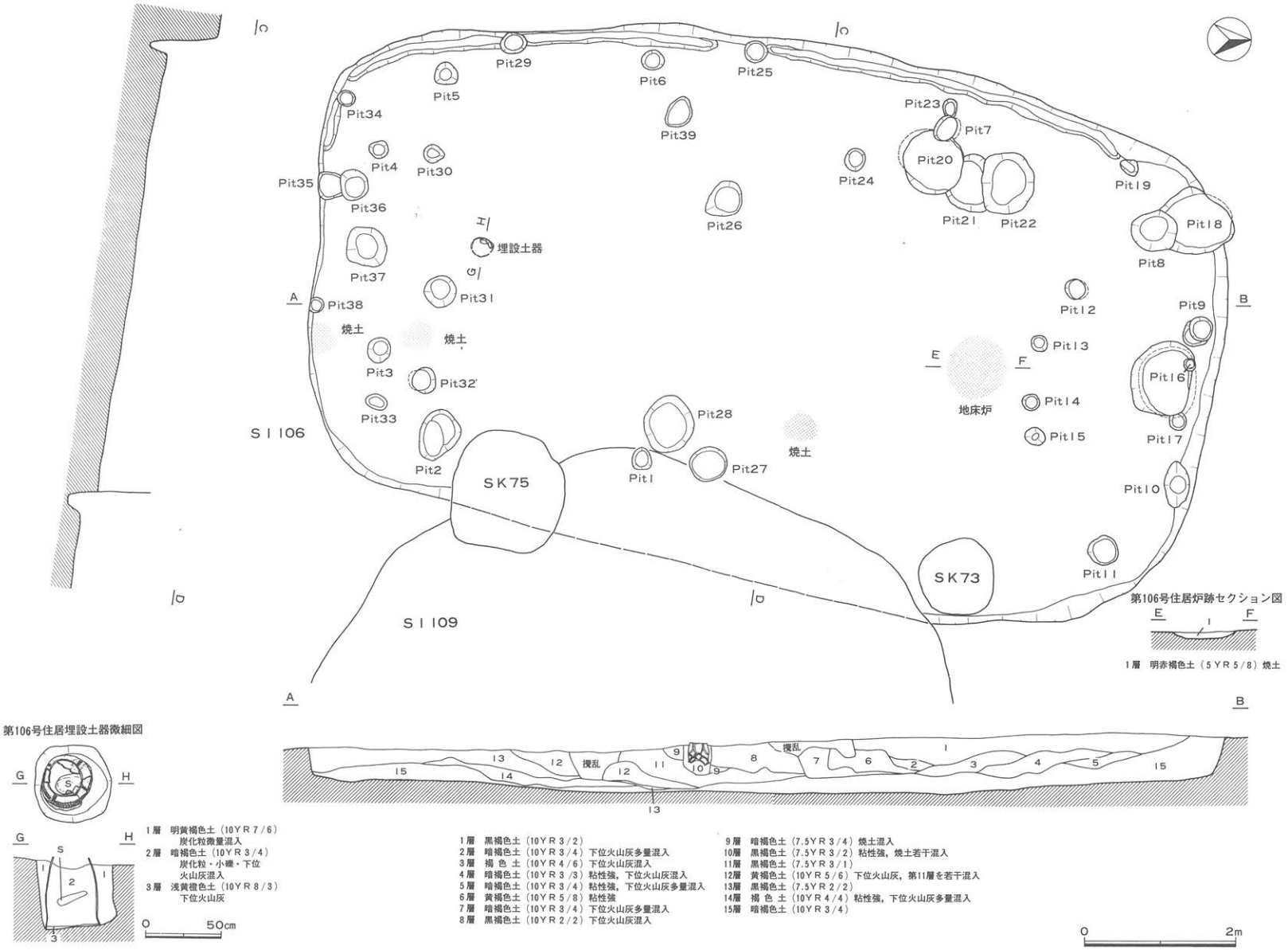
第106号竪穴住居跡と出土遺物（第314～317，397，399図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＺＢ・ＺＡ・Ａ—11・12グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。74・109・114号住居跡，73・75号土壙と重複，本住居跡は74・109号住居跡，75号土壙より古く，114号住居跡より新しい。また，73号土壙とは同時期と考えられる。

〈平面形・規模〉　12.02×6.82ｍの隅丸方形を呈する。主軸方向はＮ—11°—Ｅ，床面積は74.88㎡を計る。

〈堆積土〉　15層に区分でき，人為堆積と考えられる。なお本住居跡中央部の覆土上面(10層)より，倒立した埋設土器を出土した。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。北壁側のPit８・10・12～15の柱列内が若干盛り上がる。他の床面はほぼ平坦でしまりがあり，地床炉を中心に住居跡中央から，北壁際に位置する付属施設周辺までの床面が，特に堅くしまっている。東壁の一部及びその付近の床面は，109号住居構築により消失している。西壁南半分は74号住居跡覆土及びⅤ層，南壁は114号住号跡覆土及びⅤ層，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は西壁64cm，南壁41cm，北壁51cmを計る。



第314図　第106号竪穴住居跡実測図

〈周溝〉　西壁から南壁西側にかけての壁下に幅13～20cm，深さ16～20cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡より39個のピットが検出された。このうちPit 2 ～11を主柱穴とし，主軸線に対称な 6 対12個（Pit 2・5，3・4，6・(未検出)，7・(未検出)，8・11，9・10）を基本とする柱配置と考えられる。また，北壁側に位置する施設周囲に半円状に並ぶPit 9・10・12～15は，北壁際の 1 対のピット（Pit16・17）を含め，この施設に関連する柱列と考えられる。この他にPit 1・39，Pit30・32，Pit35・38等主軸に対称な柱列が目につくが，副柱穴的な役割を負うものと考えられる。

第106号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	26×20	70×55	34×30	25×23	30×30	30×27	40×26	61×50	34×32	60×34	40×40	27×25	22×20
深　さ	78	103	33	27	70	84	108	93	49	69	97	34	23
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
規　模	23×22	30×23	17×16	22×20	100×88	25×20	86×85	75×70	83×70	22×19	30×20	30×30	55×42
深　さ	29	22	50	52	59	16	57	80	61	36	26	15	24
Pit No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
規　模	50×45	75×66	35×29	26×25	52×41	34×31	30×21	23×21	35×30	40×37	53×51	20×20	42×34
深　さ	17	56	49	21	52	34	38	25	15	54	73	27	31.6

〈炉〉　住居跡主軸線上に中央よりやや北寄りに位置する。地床炉で，80×75cmの円形の範囲で，最大 5 cmの厚さの焼土が確認された。また，主軸線の東側に 3 ヵ所の焼土の分布が確認された。

〈埋設土器〉　本住居主軸線上南寄り床面にて倒立する埋設土器が検出された。径51cm，深さ45cmの掘り方に，口径36cmの深鉢形土器を倒立に埋設したもので，土器のほぼ中位から21×13cm，厚さ 5 cmのやや扁平な自然石が検出された。土器の外側は明黄褐色土，内側は明褐色土で，いずれにも若干の炭化粒を混入している。

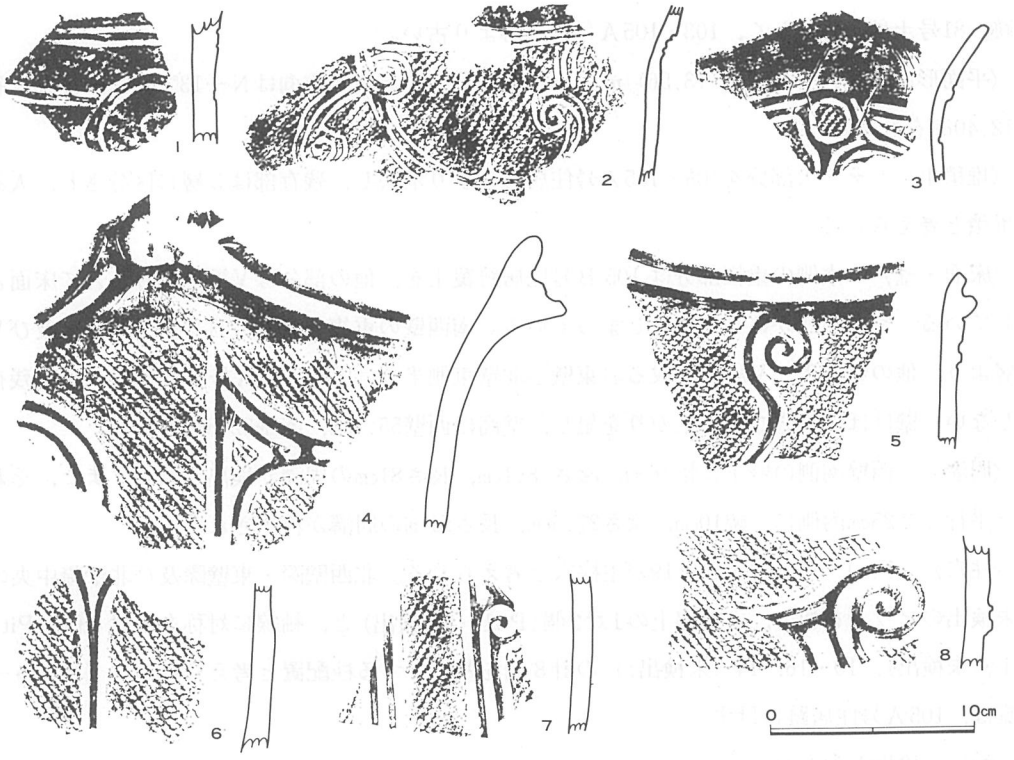
〈その他の施設〉　本住居跡主軸線上北壁に近接した位置から，100×75cm，深さ71cmのフラスコ状ピットが検出された。このピットを中心に半径 1 m の半円状に周囲が若干盛り上がり，その外周付近には，1 対の主柱穴を含めたピット（Pit 9・10・12～17）がほぼ一巡する。これらのものは，フラスコ状ピットを中心とする一連の施設と考えられる。

〈出土遺物〉（第315～317図，397図 1，399図 4）

ピット内より数点の土器片，床面より 1 個の復元可能土器と少量の土器片，床直より少量の土器片を出土した。またこの他に覆土中より 1 個の復元可能土器と 2 箱の土器片，1 点の磨製石斧・凹石，2 点の石鏃を出土した。

397図1は，南寄り床面で確認された埋設土器で，倒立の状態で埋設されていた。口径36cmの深鉢形土器で，口唇部には波状隆沈文，頸部には 3 条の平行沈線文，胴部上半には変形胸骨文を施文，一部に渦巻文が見られる。口縁部は無文，頸部からＬＲ斜縄文を施文し，色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。399図4は，本住居の確認面で倒立の状態で出土した深鉢形土器で，口

第315図　第106号住居跡出土土器拓影図(1)

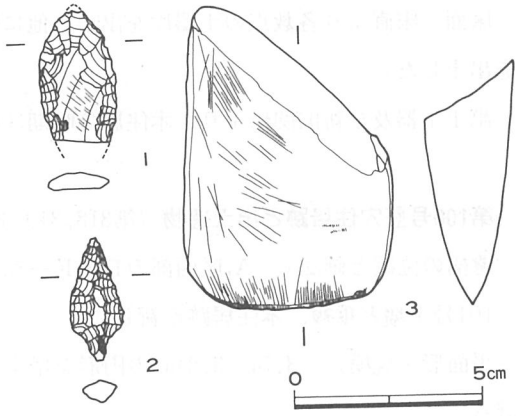


第316図　第106号住居跡出土土器拓影図(2)

径28cmを計る。口唇部には凹線文を施文，それは波状口縁頂部で渦巻文となる。頸部には3条の平行沈線文による弧状文，胴部には「∩」文が施文されている。地文はＬＲ斜縄文，色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。

315図12は，北側に位置するピットの出土土器である。

埋設土器及び床面の出土土器より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層ｅ式併行期）と考えられる。



第317図　第106号住居跡出土石器実測図

第107号竪穴住居跡と出土遺物（第310．313図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のＤ・Ｅ－９・10グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。97Ｂ・103・105Ａ・105Ｂ号住居跡，81号土壙と重複，本住居跡は97Ｂ・105Ｂ号住居

跡，81号土壙より新しく，103・105Ａ号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉　4.82×（3.56）ｍの楕円形を呈する。主軸方向はＮ—13°—Ｗ，床面積は約12.40㎡を計る。

〈堆積土〉　その大部分を103・105Ａ号住居跡により消失し，残存部は３層に区分され，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　東側の重複部分は105Ｂ号住居跡覆土を，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。やや凹凸があり，堅くしまっている。南西壁の重複部分は97Ｂ号住居跡覆土及びⅤ層より，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。東壁と北壁東側半分は103・105Ａ号住居構築により残存しない。壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は西壁55.2cm，南壁32.6cmを計る。

〈周溝〉　西壁南側の壁下に幅９cm，深さ 8.1cm，長さ81cmの周溝が検出された。また，それと平行して25cm内側に，幅10cm，深さ27.5cm，長さ51cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　Pit１・10・14・16・19が主柱穴と考えられる。北西壁際・東壁際及び北壁際中央の未検出のピットを加え，主軸線上の１対２個（Pit19・(未検出）と，軸線に対称な３対６個（Pit１・(未検出)，10・16，14・(未検出)）の計８個を基本とする柱配置と考えられる。（ピット一覧は，105Ａ号住居跡に付す）

〈炉〉　検出されなかった。

〈出土土器〉（第313図）

床面，床直より各数点の土器片を出土，他に覆土中より１個の復元可能土器と少量の土器片を出土した。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

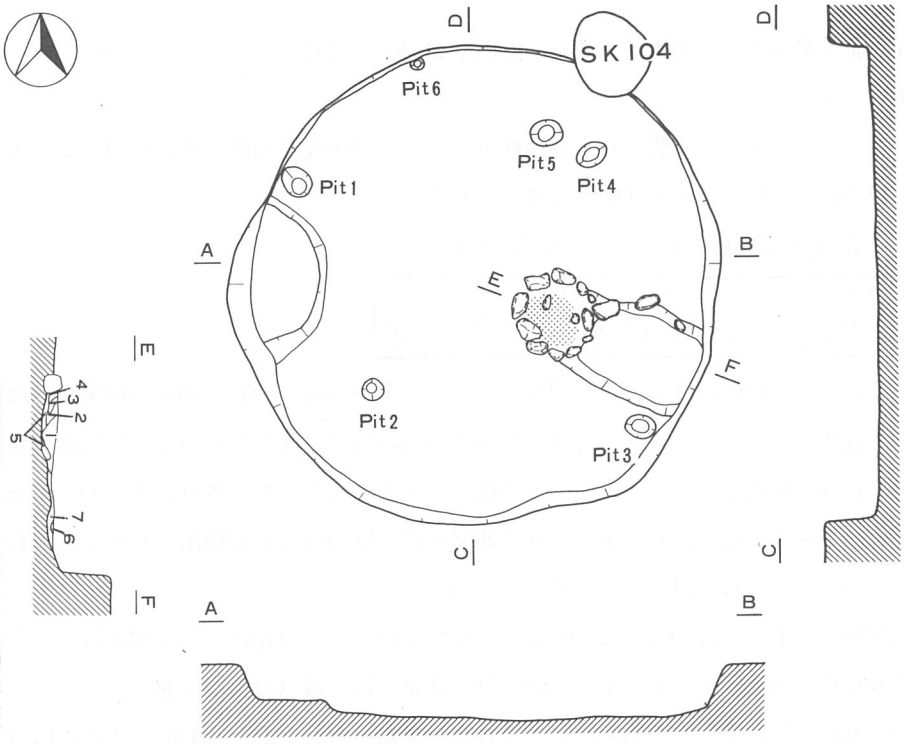
第108号竪穴住居跡と出土遺物（第318,319,395,396,404,406,424,427図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＤ・Ｅ—13グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。104号土壙と重複，本住居跡が新しい。

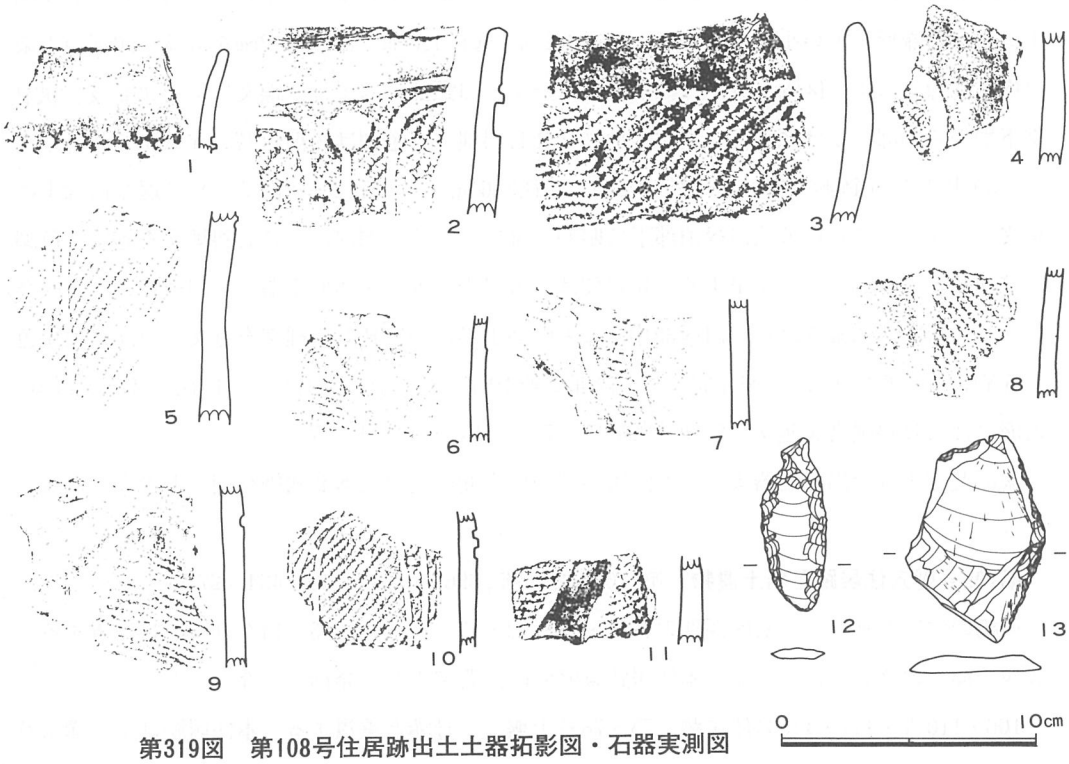
〈平面形・規模〉　3.74×3.84ｍの円形を呈する。主軸方向Ｎ—65°—Ｗ，床面積は10.52㎡を計る。

〈堆積土〉　人為堆積である。（セクション図略）

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともⅤ層を掘り込んでそれぞれの面としている。西壁中央部が若干外側に張り出す，その内側にテラスが位置する。テラスの規模は107×52cmで，床面から11cmの高さにある。このテラス面は，ややしまりがあることから，出入口の可能性がある。床面はやや凹凸があり，しまりが弱い。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，北東壁の一部が，104号土壙により残存しない。壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は北東壁



第318図　第108号竪穴住居跡実測図



第319図　第108号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

30.1cm，北西壁36.2cm，南東壁38.2cm，南西壁42.3cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より6個のピットが検出された。規模及び配置より，Pit 1・2・3・4または5の4個を主柱穴とする柱配置と考えられる。

第108号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6
規　模	26×22	19×18	24×18	26×19	27×19	11×11
深　さ	10.3	18.1	16.5	12.1	16.9	10.9

〈炉〉　住居跡南東壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る156×86cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は，8～22cm大の自然石を68×66cmの円形に配したもので，炉内南西側に偏在して48×40cmの範囲で，最大3cmの厚さの焼土が確認された。掘り込み部は，90×86cmの楕円形で最大の深さは8cmを計る。掘り込みの北側縁に3個の自然石が検出されたことから，全体として「⌂」形に炉石を配置したと考えられる。

〈出土遺物〉（第319図，395図1，396図15，404図3，406図3，424図6・7，427図15）

床面より数点の土器片，床直より4個の復元可能土器と数点の土器片を出土した。また，この他に覆土中より，少量の土器片，1点の石匙・掻器・凹石・有孔石製品，2点の円盤状土製品（朱付着）を出土した。

395図1，396図15，404図3，406図3は，いずれも西壁寄り床面から出土した土器である。395図1は，広口壺形に近い小型の土器で，口径9.1cm，底径4.8cm，器高14.2cmを計る。頸部の1条の横位沈線文により区画され，口縁部上半は無文，口頸部には平行沈線文による波状文，波状文下端から胴部にかけ懸垂文を施文，地文はＲＬ斜縄文，色調は灰褐色（7.5ＹＲ4/2）を呈する。396図15は深鉢形土器で，口径17.3cm，底径5.6cm，器高21.2cmを計る。折り返し口縁上は無文で，3つのゆるい波状口縁頂部下に貼瘤を付けている。胴部にはＲＬ斜縄文を施文，色調は暗赤褐色（5ＹR3/3）を呈する。404図3は，広口壺に近い深鉢形土器で，口径15.8cm，底径5.6cm，器高20.2cmを計る。口縁部中位より胴部下半にかけＲＬ斜縄文を施文，色調は黒褐色（5ＹR3/1）を呈する。406 図3は，口縁部が若干内彎する深鉢形土器で，口径25.9cmを計る。器面にはＬＲ斜縄文を施文，色調は灰褐色（7.5ＹＲ4/2）を呈する。

床面及び床直の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木9式併行期）と考えられる。

第109号竪穴住居跡と出土遺物（第320～322，395，396，401，403，407，424，427図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＺＡ・Ａ—12・13・14，Ｂ—13・14グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。なお本住居跡東壁側は，農道のため発掘できなかった。

106・110Ａ・117・118号住居跡，75～78号土壙，1号溝と重複する。本住居跡は1号溝より

1層　暗褐色土（10YR 3/4）黒褐色土・下位火山灰・炭化粒を混入
2層　暗褐色土（10YR 3/4）下位火山灰多量混入
3層　暗褐色土（10YR 3/4）にぶい黄橙色土混入
4層　暗褐色土（10YR 3/3）下位火山灰多量混入

撹乱1～3は前年度試掘による撹乱

第320図　第109号竪穴住居跡実測図

古く，他のすべての遺構より新しい。

〈平面形・規模〉　短軸8.58mの楕円形を呈する。主軸方向はN—57°—Wである。

〈堆積土〉　4層に区分でき，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。全般にほぼ平坦で，しまりは弱い。各遺構との重複部分は，それらの覆土及びⅤ層より，他の部分はⅣ・Ⅴ層より壁を成す。東側は未発掘のため不明であるが，壁はやや急な立ち上がりを呈する。壁高は西壁76cm，南壁69cm，北壁68cmを計る。

〈周溝〉　不連続ながら，壁下に幅14～27cm，深さ7～22cmの周溝が一巡する。

〈柱穴〉　本住居跡より41個のピットが検出された。明らかに他住居跡の柱穴と思われるものは除いたが，まだいくつかは含まれていると考えられる。これらのうち，Pit 1・8または9・14・16・27を主柱穴とし，主軸に対称な4対8個（Pit 1・27，8または9・(未検出)，14・16，未発掘部に位置する1対2個）を基本とする柱配置と考えられる。

第109号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

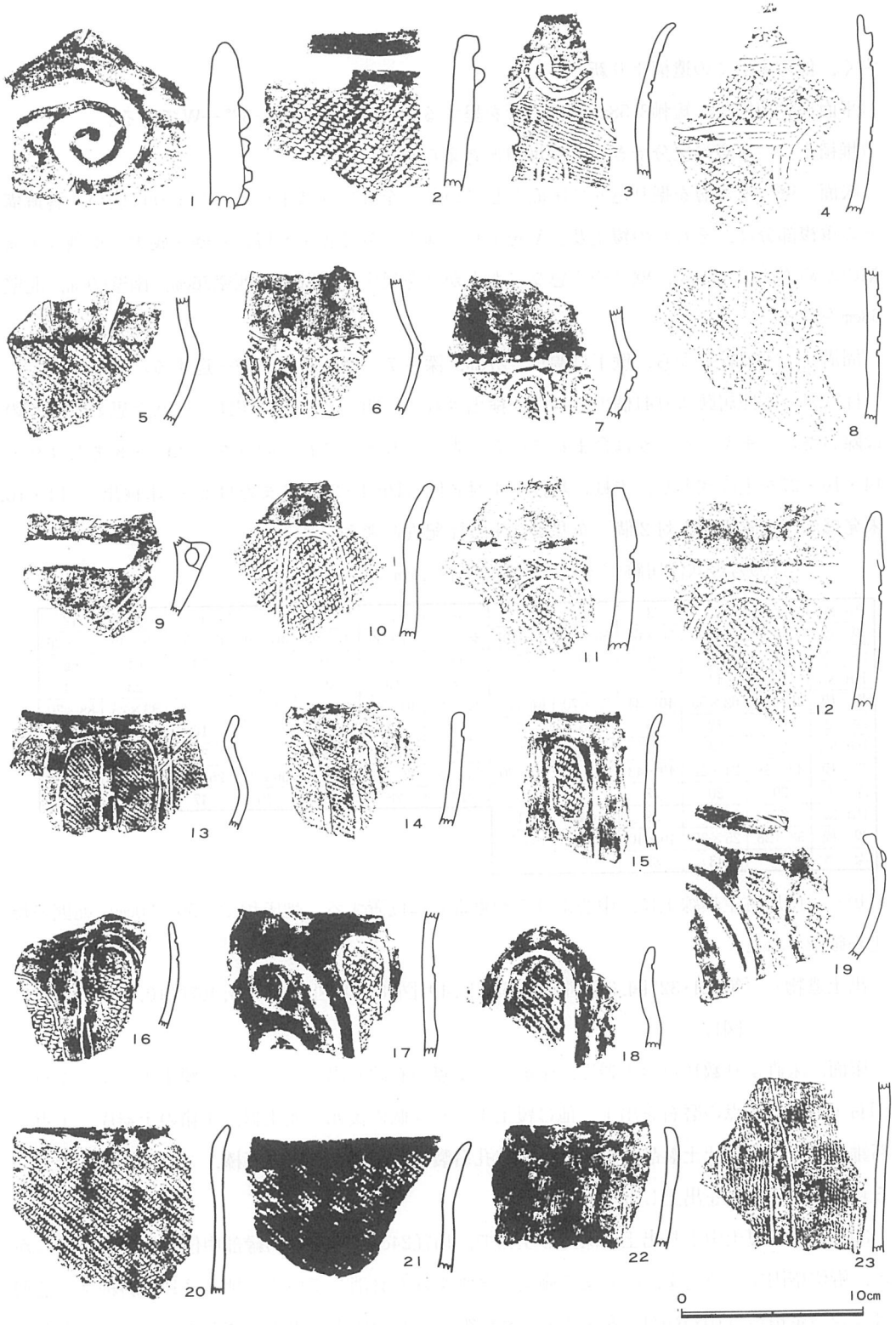
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	75×54	50×50	70×65	50×50	46×40	38×30	54×50	37×28	40×35	66×53	59×49	27×26
深　さ	53	16	36	48	85	44	36	50	52	54	64	66
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規　模	40×32	62×55	40×34	75×70	100×72	32×23	40×33	40×35	31×27	26×26	33×25	88×70
深　さ	67	12	17	45	31	11	38	18	15	16	26	59
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
規　模	42×(58)	24×22	49×43	50×40	36×30	25×22	32×21	35×23	56×47	26×25	55×55	95×65
深　さ	29	20	48	30	16	13	28	13	40	47	96	59
Pit No.	37	38	39	40	41							
規　模	58×28	25×25	40×40	48×32	40×38							
深　さ	15	43	85	56	53							

〈炉〉　住居跡主軸線上に，中心よりやや東寄りに位置する。地床炉で，50×30cmの範囲で焼土が確認された。

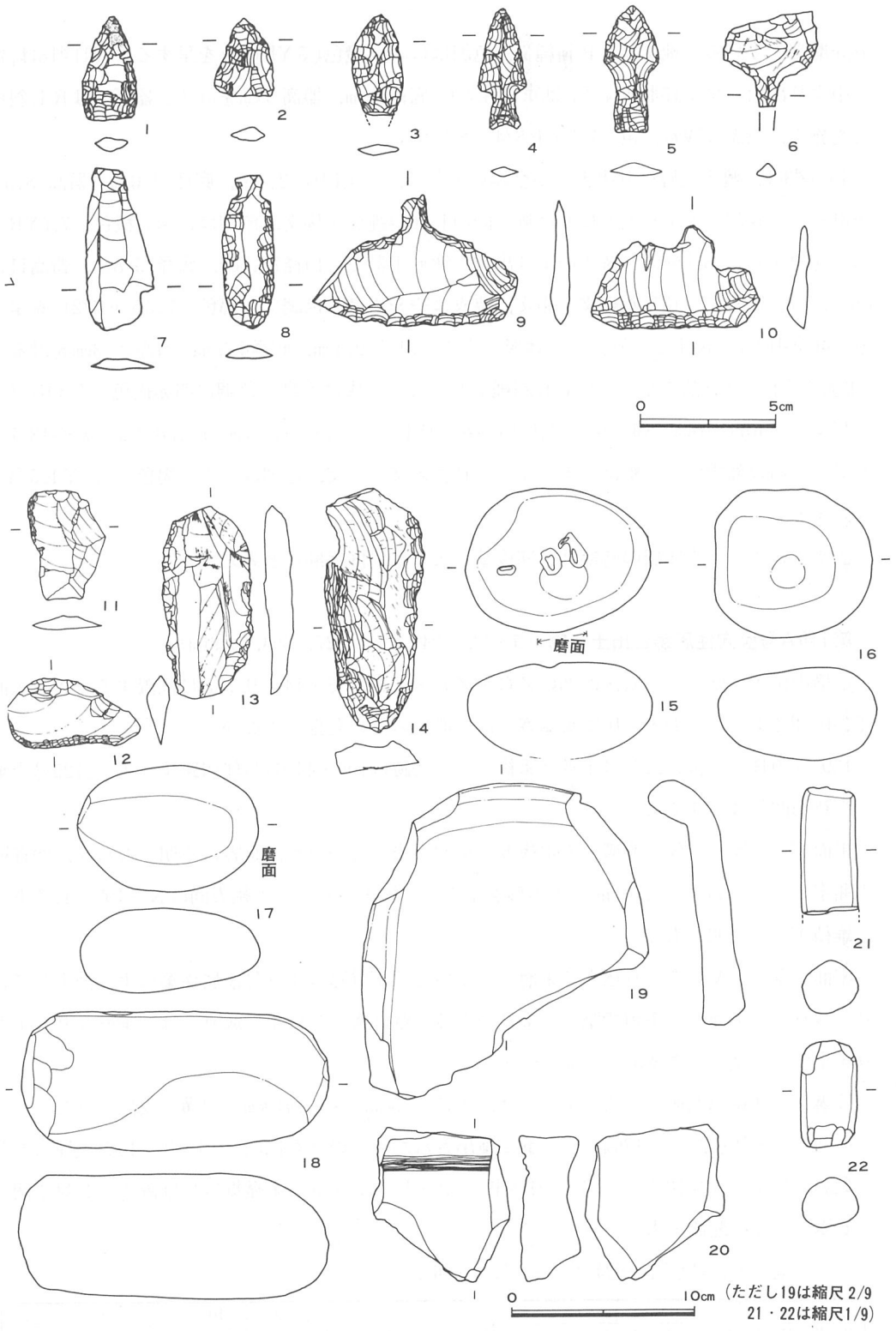
〈出土遺物〉（第321・322図，395図7，396図1，401図18，403図3・6・13，407図10，424図8，427図17）

床面，床直より数10点の土器片，床面より1点の石匙を出土した。また覆土下位より1点の凹石・石皿，2点の磨石を出土，他に覆土中より9個の復元可能土器，4箱の土器片，1点の石錐・凹石・円盤状土製品（朱付着）・有孔石製品，2点の石皿・石棒，3点の石匙・掻器，5点の石鏃・磨石を出土した。

395図17は，覆土中より出土の深鉢形土器で，口径24cmを計る。口縁部中位から胴部下半にかけ，縦位楕円文＋「∩」文，「∩」文を施文，区画文外を磨消している。地文はＲＬ斜縄文，色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。396図1は，覆土中より出土の鉢形土器で，口径11.1cm，底径4.0cm，器高11.6cmを計る。口頸部から胴部中位にかけ「∩」変形文を施文，区画文



第321図　第109号住居跡出土土器拓影図



第322図　第109号住居跡出土石器実測図

外を磨消している。地文はＬＲ斜縄文，色調はにぶい橙色(５YR6/4)を呈する。401図18は，覆土中より出土の小型鉢形土器で，推定口径7㎝，底径４㎝，器高５㎝を計る。器面にはＲＬ斜縄文を施文，色調は浅黄橙色（7.5ＹＲ8/4）を呈する。

403図3は，覆土上層より出土の小型鉢形土器で，推定口径 8.4cm，底径 4.0cm，器高 8.5cm を計る。口縁部下半より胴部にかけ無方向のＬＲ斜縄文を施文，色調はにぶい橙色（7.5YR７/4）を呈する。388図6は，覆土中より出土の鉢形土器で，口径15.5cm，底径 5.8cm，器高11.9㎝を計る。器面にはＲＬ斜縄文を施文，焼成はやや不良，色調は灰褐色（7.5ＹＲ4/2）を呈する。403図13は，覆土中より出土の鉢形土器で，口径10.4cm，底径6.3cm，器高10.3cmを計る。口縁部下半より胴部下半にかけＬＲ斜縄文を施文，焼成は不良，色調は明赤褐色（５YR5/6）を呈する。407図10は，覆土中より出土の深鉢形土器で，口径17.2cm，底径8.1cm，器高13.7cmを計る。口縁部中位より胴部下半にかけＬＲ斜縄文を施文，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ5/4）を呈する。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第110Ａ号竪穴住居跡と出土遺物（第323，324，326，327，394，399図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＺＣ・ＺＢ・ＺＡ—13・14グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。なお本住居跡東壁寄りは，農道のため発掘できなかった。

109・110Ｂ号住居跡，125号土壙と重複，本住居跡は109・110Ｂ号住居跡より古く，125号土壙との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉　他の遺構との重複及び東側が未発掘のため，全容は不明であるが，残存壁の曲率から(12.66)×(5.60)ｍの楕円形を呈すると推測される。主軸方向はＮ—19°—Ｅである。

〈堆積土〉　不明である。

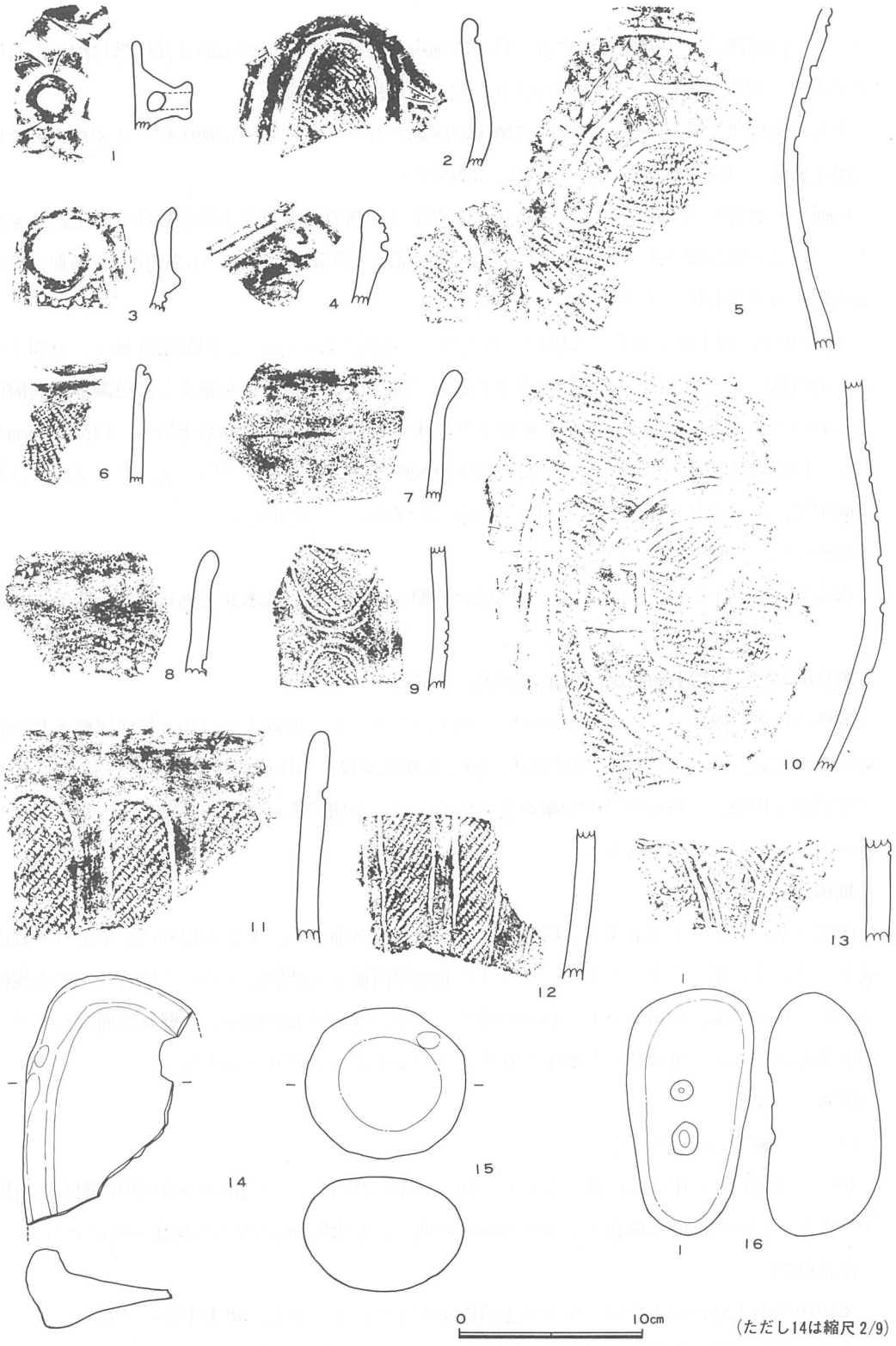
〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。南壁際は109号住居構築により消失しており，残存する床面は，平坦で堅くしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は西壁58cm，北壁62cmを計る。

〈周溝〉　北壁下西側より西壁下にかけ，幅15～25cm，深さ約10cmの周溝が検出された。

〈柱穴〉　本住居跡から13個のピットが検出された。このうちPit１～３・９・10を主柱穴とし，主軸線に対称な５対10個（Pit１・(未検出)，２・10，３・９，未発掘区に位置する２対４個）を基本とする柱配置と考えられる。

第110Ａ号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	65×45	40×29	42×40	43×34	30×24	72×58	53×40	86×42	35×30	25×23	30×28	30×25	20×18
深　さ	78	43	43	20	28	26	65	17	40	42	13	9	10.2



（ただし14は縮尺 2/9）

第327図　第110Ａ号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。15～27cm大の自然石を77×67cmのほぼ円形に配した石囲炉である。炉内全体に，３～５cmの厚さの焼土が堆積している。

また，東壁際より30×28cmの範囲で焼土が確認されたが，位置的に地床炉とは認められない。

〈出土遺物〉（第326，327図，394図16，399図７）

床面より数10点の土器片と１点の磨石，床直より１個の復元可能土器と数10点の土器片を出土した。この他に覆土中より，４個の復元可能土器と2/3箱の土器片，１点の凹石・石皿，２点の石匙，３点の石篦，４点の掻器を出土した。

394図16は，覆土から出土した広口壺形土器で，底径5.0cmを計る。口縁部は無文，胴部上端に２条の横位連続刺突文，胴部に懸垂文を施文，地文はＲＬ斜縄文を施文し，色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。399図7は，床直より出土の広口壺に近い深鉢形土器で，口径19.9cmを計る。口縁部は無文，胴部上端に２条の横位連続刺突文，胴部には「∩」文,「∩」文間には縦位刺突文，地文はＲＬ斜縄文，色調は黒褐色（10ＹＲ3/2）を呈する。

327図８は，床面の出土土器である。

床面及び床直上の出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第110Ｂ号竪穴住居跡と出土遺物（第323．325図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＺＣ―13・14グリッドに位置する。110Ａ号住居跡と共にⅣ層上面での確認である。110Ａ号住居跡，79号土壙と重複，本住居跡はいずれよりも新しい。

〈平面形・規模〉　東壁側は未発掘のためその全容は不明であるが，残存壁から，径３ｍぐらいの円形を呈すると考えられる。

〈堆積土〉　不明である。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面とも，Ⅴ層を掘り込んでそれぞれの面としており，堅くしまりがある。テラスは北壁際西側より西壁際へかけて位置し，その規模は，30～40cmの幅，床面から35～40cmの高さにある。壁高は北壁67cm，西壁確認面よりテラス面まで27cmを計る。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，緩やかな立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　検出できなかった。

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。６～20cm大の自然石を，50～40cmの楕円形に配した石囲炉である。炉内北西側に偏在して18×15cmの範囲で，最大2.5cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉

本住居の出土遺物は少ない。少量の土器片を出土し，その多くは覆土中からである。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉～末葉(大木9～10式併行期)と考えられる。

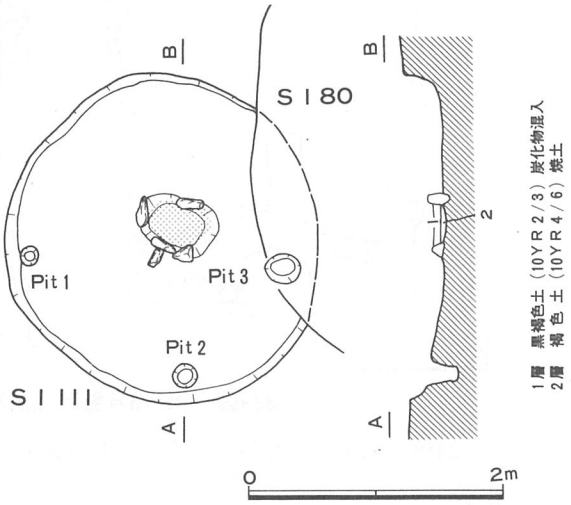
第111号竪穴住居跡と出土遺物（第328図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南西部のD・E—10グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。80号住居跡と重複，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　2.60×（2.45）mの円形を呈する。床面積は(4.48)㎡を計る。

〈堆積土〉　不明である。（セクション図略）

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。若干レンズ状で，南側の部分に少々の凹凸があり，堅くしまりがある。壁はⅣ・Ⅴ層より成るが，東壁は80号住居構築により消失している。壁高は西壁22cm，南壁15cm，北壁21cmを計る。



第328図　第111号竪穴住居跡実測図

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より3個のピットが検出された。若干浅いが，配列から見て柱穴と考えられる。北壁際に位置するであろう未検出のピットを加えた4本柱と考えられる。

第111号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	16×15	20×17	27×22
深　さ	18	22	13

〈炉〉　住居跡中央に位置する。遺存度が悪いが，20cm大の自然石を，60×50cmの円形に配した石囲炉と考えられる。炉内全体に2～4cmの厚さの焼土が確認された。

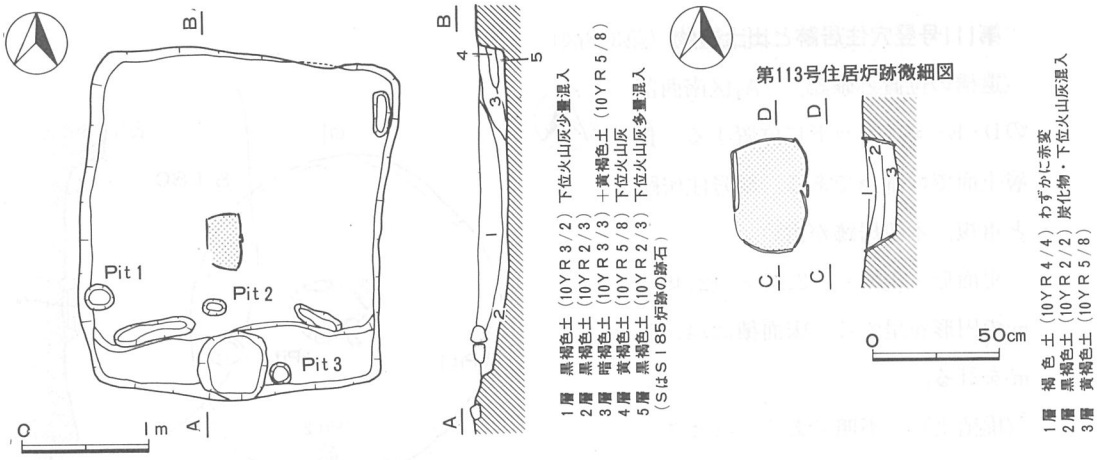
〈出土遺物〉

本住居からは少量の土器片を出土し，その多くは覆土中からである。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期中葉～後葉（円筒上層e～大木8b式併行期）と考えられる。

第113号竪穴住居跡と出土遺物（第329，330図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のC—11・12グリッドに位置する。85号住居跡床面において確認された。85・101・114号住居跡と重複し，本住居跡は85・101号住居跡より古く，114号住居跡より新しい。



第329図　第113号竪穴住居跡実測図・同住居炉跡微細図

〈平面形・規模〉　2.76×2.37mの方形を呈する。主軸方向はN—0°—E，床面積は5.64㎡を計る。

〈堆積土〉　残存する堆積土は5層に区分でき，自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは南壁際に位置し，規模は幅60cm，床面から7.5cmの高さにある。本住居跡床面から85号住居跡床面までの高さは，東壁22cm，西壁20cm，北壁19cm，テラス面からの高さは15cmを計る。床面は平坦で，しまりは弱く，テラス面も軟かい。テラス面のほぼ中央に，径55cm，深さ7cmの円形の掘り込みを有する。壁は，85号住居構築によりその上半を消失するが，残存部はV層より成り，ほぼ垂直な立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より3個のピットが検出されたが，規模が小さく，柱配置の規則性はつかめなかった。

第113号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3
規　模	24×20	17×13	15×15
深　さ	7	11	13

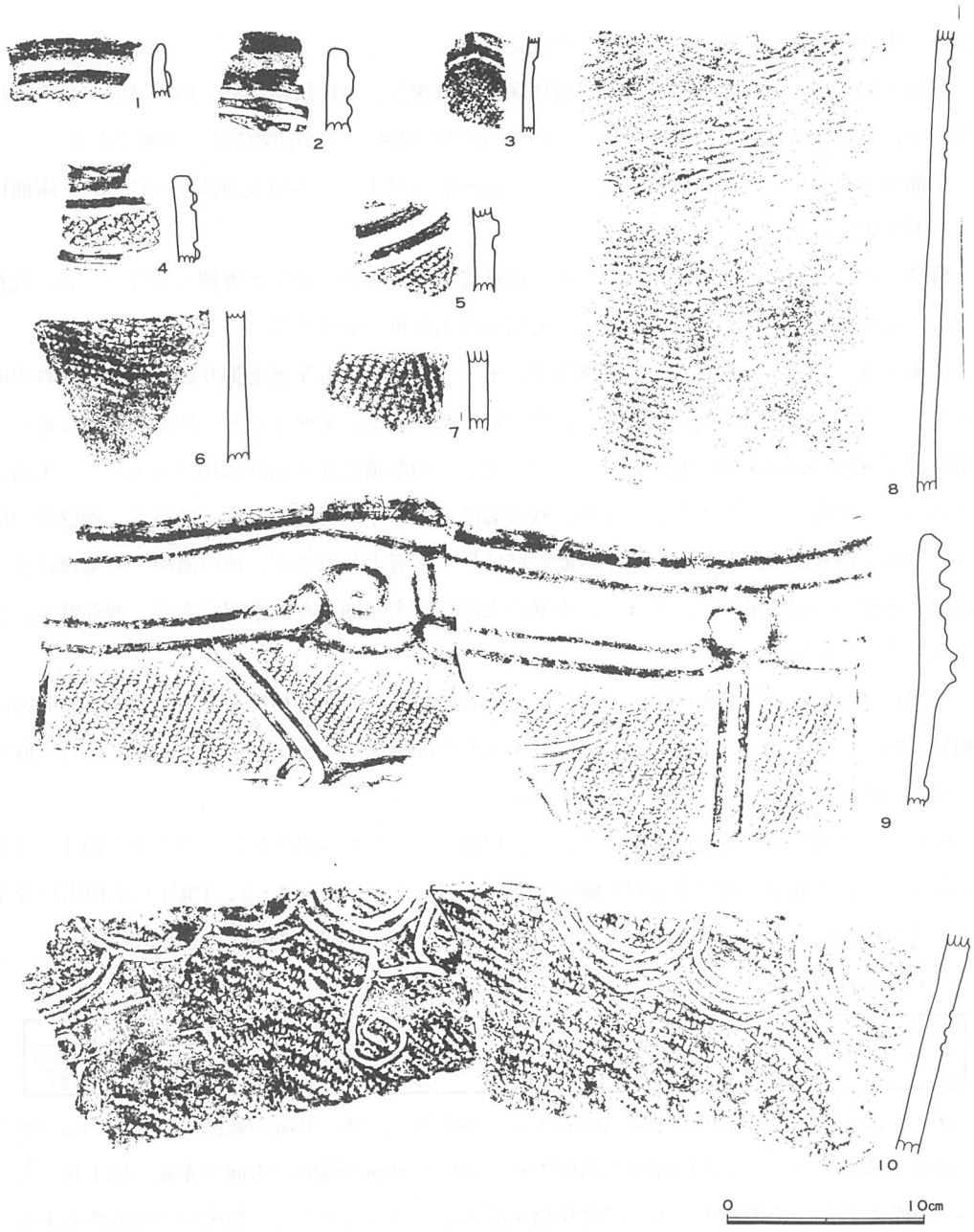
〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。深鉢形土器の口縁部を45×29cmの方形に配した土器片囲炉である。炉内が，最大3cmの深さまでわずかに赤変（焼土化）している。

〈出土遺物〉（第330図）

本住居からは土器片囲炉の土器以外に，少量の土器片を出土したのみである。

330図1～5は炉内出土の土器，8～10は土器片囲炉の土器である。

炉を構成する土器より，本住居の時期は中期後葉（大木8b式併行期）と考えられる。



第330図　第113号住居跡出土土器拓影図

第114号竪穴住居跡と出土遺物（第331・332図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のA・B・C・D—11・12グリッドに位置する。Ⅳ層上面において西壁北側及び南壁の一部を確認したが，多数の遺構との重複によりその壁のほとんどを

失い，床面の柱列及び周溝よりプランを推定した。

78B・79・85・101・106・113・117号住居跡と重複し，本住居跡は85・101・106・113号住居跡より古く，78B・79号住居跡より新しい。117号住居跡との新旧関係は，不明である。

〈平面形・規模〉　(16.4) ×（7.4）mの楕円形を呈する。主軸方向はN—1°—E，床面積は（119.99）㎡を計る。

〈堆積土〉　多数の遺構との重複のため，南壁寄りと北側の一部しか堆積土を残さない。残存部は，炭化粒・下位火山灰を多量混入する暗褐色土の単一層である。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは南壁際に位置し，その最大幅は36cm，床面から8～10cmの高さにある。壁高は南東壁12.0cm，南西壁20.5cm，テラス面から南壁確認面の高さは10.7cmを計る。床面のほとんどは重複により消失しているが，残存部は，ほぼ平坦で堅くしまっている。西壁の一部は，78B・79号住居跡覆土より，その他の壁はⅣ・V層より成るが，他の遺構との重複により北壁と東壁の一部を消失し，さらに，東壁の大部分は未発掘のため不明である。残存壁は，急な立ち上がりを呈する。

〈周溝〉　西壁下と，北東壁際とそれに直交する位置から周溝が検出された。西壁下のものは幅15～20cm，深さ20～25cm，北東部に位置するものは幅20～40cm，深さ29～46cm，それに直交するものは幅15～35cm，深さ3～15cmを計る。

〈柱穴〉　本住居跡に関連するものとして，12個のピットが検出された。このうちPit1～7を主柱穴とし，主軸線に対称な4対8個(Pit 1・7，Pit 2・6，Pit 3・5，Pit 4・(未検出))を基本とする柱配置と考えられる。また，Pit 8は副柱穴，Pit 9～12は壁柱穴と考えられる。

第114号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規　模	74×65	95×85	66×56	90×70	80×70	66×66	85×75	46×34	18×15	22×20	21×19	43×35
深　さ	33	99	71	61	69	104	29			36	38	39

〈炉〉　住居跡主軸線上の北壁際に位置する。地床炉で，58×31cmの範囲で最大2.5cmの厚さの焼土が確認された。また同軸線上南壁寄りに，110×96cmの範囲で床面が赤変（焼土化）している部分があり，その覆土に多くの炭化物を混入していることから，地床炉の可能性もある。

〈出土遺物〉（第332図）

土器片の総出土量は，1/3箱であるが，床面，床直からの出土は少ない。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木8 b式併行期）と考えられる。

第115号竪穴住居跡と出土遺物（第333・334・396・400・401・409・428図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南部のE・F—16グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。